三重県埋蔵文化財調査報告　99－4

伊賀国府跡（第4次）発掘調査報告

1992・3

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は、平成３年度県営ほ場整備事業（上野北部）に係わる伊賀国府推定地の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査に掛る費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は県農林水産部が負担した。

3．調査は三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センターが担当し、報告書作成は三重県埋蔵文化財センターが担当した。

4．今回は、伊賀国府推定地の範囲を確認するために行った調査である。本書では、過年度のトレンチ調査や面調査で地区が重複することなどから、過去の調査の概要も併せて、柘植川の南部と北部、北部をさらに地区別に分け記述することにする。

5．伊賀国府推定地の調査および遺物整理については、指導員として次の先生方の指導と助言を得た。

八賀　晋　（国立三重大学人文学部）
小笠原　好彦　（国立滋賀大学教育学部）
高橋　誠一　（国立滋賀大学教育学部）
勝山　清次　（国立三重大学人文学部）
山中　敏史　（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）

6．本書で報告した遺構の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

7．本書に使用した遺構表示記号は下記のとおりである。また、遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準としている。方位の座標は座標北を用いた。

ＳＢ：掘立柱建物　ＳＨ：竪穴住居、ＳＤ：溝
ＳＡ：柵、塀　ＳＫ：土坑　Ｐ：ピット
ＳＸ：墓、その他性格不明遺構

8．本書の編集は泉雄二が担当し、柘植川南部を服部久士、北部を泉が執筆した。また、遺物写真の撮影は、泉の他に木製品は天野秀昭が行なった。なお写真図版については、断りのない限り縮尺は１：３である。

9．遺構番号は柘植川の北部と南部でそれぞれ付けた。北部の調査の遺構番号は、岩坂・追越地区を1000番まで、国町を1001番～、前田地区を2001番～とした。

10．本書作成以前に「三重県伊賀国府跡」『日本考古学年報』日本考古学協会掲載原稿などで中間的な報告を行ったが、本報告を正式報告とする。

目　　次

Ⅰ．前言 ……（泉　雄二）…1
　1．調査に至る経緯 ……1
　2．調査体制 ……3
Ⅱ．位置と環境 ……（泉　雄二）…4
Ⅲ．柘植川南部の調査……（服部久士）…8
　1．印代東方地区 ……8
　　（1）遺構
　　（2）遺物
　2．その他の印代地区 ……16
　3．一之宮・千才地区 ……17
　4．小結 ……17
Ⅳ．柘植川北部の調査……（泉　雄二）…18
　1．岩坂地区 ……18
　2．追越地区 ……20
　　（1）弥生時代の遺構
　　（2）古墳時代の遺構
　　（3）飛鳥時代の遺構
　　（4）その他の遺構
　　（5）掘立柱建物について
　　（6）小結
　3．国町地区 ……26
　　（1）古墳時代の遺構
　　（2）奈良時代後期から平安時代初期の遺構
　　（3）平安時代前期の遺構
　　（4）平安時代中期の遺構
　　（5）平安時代後期の遺構
　　（6）時期不明・その他の時期の遺構
　4．前田地区 ……50
　　（1）東北部（Ｅ２）の概要
　　（2）東南部（Ｅ５）の概要
　　（3）中央北（Ｅ３）の概要
　　（4）中央南部（Ｅ６）の概要
　　（5）西部（Ｅ４）の概要
　　（6）小結
　5．遺物 ……55
　　（1）縄文～弥生時代の遺物
　　（2）古墳時代の遺物
　　（3）飛鳥・奈良時代の遺物
　　（4）平安時代初期の遺物
　　（5）平安時代前期の遺物
　　（6）平安時代中期の遺物
　　（7）平安時代後期の遺物
　　（8）建物出土の遺物
　　（9）その他の遺物
Ⅴ．結語 ……（泉　雄二）…100
　1．平安時代の土師器について ……101
　2．政庁域の変遷について……103

図 版 目 次

Ⅰ．前言
第１図　字切り図 …… 2

Ⅱ．位置と環境
第２図　遺跡位置図（1:50,000）…… 5
第３図　遺跡位置図（1:25,000）…… 7

Ⅲ．柘植川南部の調査
第４図　印代東方地区調査区平面図（1:10,000）…… 8
第５図　印代東方地区遺構平面図（1:200）…… 9
第６図　遺物実測図　柘植川南部（１）……11
第７図　遺物実測図　柘植川南部（２）……13
第８図　遺物実測図　柘植川南部（３）……15

Ⅳ．柘植川北部の調査
第９図　柘植川北部調査区位置図（1:4,000）……18
第10図　岩坂地区調査区位置図（1:2,000）……19
第11図　Ｂ4-7調査区遺構配置図（1:200）……19
第12図　追越地区調査区位置図（1:2,000）……20
第13図　ＳＤ13遺物出土状況（1:40）……20
第14図　追越地区遺構平面図（1:200）……21・22
第15図　ＳＤ8遺物出土状況（1:50）……23
第16図　ＳＢ6遺構平面図（1:100）……24
第17図　Ｃ1-14調査区遺構平面図（1:100）……24
第18図　ＳＢ18遺構平面図（1:100）……25
第19図　ＳＢ20遺構平面図（1:100）……25
第20図　国町地区調査区位置図（1:2,000）……26
第21図　正殿、前殿地区遺構平面図（1:100）……29・30
第22図　ＳＤ1010遺物出土状況（1:40）……31
第23図　西脇殿ＳＢ1084･1085遺構平面図（1:100）……33
第24図　西脇殿ＳＢ1090･1095遺構平面図（1:100）……34
第25図　東脇殿ＳＢ1070～1073･1075遺構平面図（1:100）……35
第26図　ＳＡ1052遺構平面図（1:100）……36
第27図　ＳＢ1015・1016遺構平面図（1:100）……37
第28図　ＳＢ1020遺構平面図（1:100）……38
第29図　ＳＢ1105遺構平面図（1:100）……39
第30図　ＳＢ1001･1047･1022遺構平面図（1:100）……40
第31図　Ｄ5-3調査区西部遺構平面図（SA1040)(1:100）……41
第32図　ＳＫ1030遺構平面図（1:40）……42
第33図　Ｄ5-9東調査区南側遺構平面図（1:100）……42
第34図　ＳＢ1093･1094･1100･1102遺構平面図（1:100）……44
第35図　Ｄ5-9西調査区遺構平面図（1:100）……46
第36図　ＳＤ1080遺構平面図（1:50）……47
第37図　前田地区調査区位置図（1:2,000）……50
第38図　前田地区東西・南北断面略図（1:1,000、高さは1:150）……50
第39図　Ｅ２調査区遺構平面図（1:200）……51

第40図　Ｅ５遺構平面図（1:200）……52
第41図　Ｅ３遺構平面図（1:200）……53
第42図　Ｅ６・Ｅ４遺構平面図（1:200）……54
第43図　遺物実測図（１）縄文・弥生時代……55
第44図　遺物実測図（２）古墳時代……56
第45図　遺物実測図（３）飛鳥・奈良時代……57
第46図　遺物実測図（４）平安時代初期～前期……59
第47図　遺物実測図（５）平安時代前期……61
第48図　遺物実測図（６）平安時代前期……63
第49図　遺物実測図（７）平安時代前期……65
第50図　遺物実測図（８）平安時代中期……66
第51図　遺物実測図（９）平安時代中期……68
第52図　遺物実測図（10）平安時代中期……69
第53図　遺物実測図（11）平安時代後期……70
第54図　遺物実測図（12）平安時代後期……71
第55図　遺物実測図（13）掘立柱建物出土遺物……72
第56図　遺物実測図（14）掘立柱建物出土遺物……73
第57図　遺物実測図（15）硯類……74
第58図　硯出土分布図……75
第59図　遺物実測図（16）緑釉陶器ほか……76
第60図　緑釉陶器出土分布図……77
第61図　遺物実測図（17）墨書土器ほか……78
第62図　遺物分布図……79
第63図　遺物実測図（18）土錘……80
第64図　遺物実測図（19）木製品……81
第65図　遺物実測図（20）木製品……82

Ｖ．結語

第66図　国庁域範囲概念図……100
第67図　政庁建物配置図（奈良時代後期～平安時代前期前半）……104
第68図　政庁建物配置図（平安時代前期）……105
第69図　政庁建物配置図（平安時代中期）……105
第70図　政庁建物配置図（平安時代後期）……106
第71図　土師器変遷図……107・108
第72図　黒色土器変遷図……109・110

付図

付図１．国町地区遺構平面図（1:200）

表　目　次

Ⅰ．前言
第１表　調査の経緯 ……1

Ⅱ．柘植川南部の調査
第２表　印代東方地区　遺物・建物一覧表 ……10
第３表　遺物観察表・柘植川南部（１）……12
第４表　遺物観察表・柘植川南部（２）……14
第５表　遺物観察表・柘植川南部（３）……16

Ⅲ．柘植川北部の調査
第６表　追越地区建物規模表 ……25
第７表　国町地区時期別遺構一覧表……26
第８表　国町地区建物規模表 ……49
第９表　ＳＫ1086出土破片土器計数表 ……60
第10表　ＳＫ1086出土土師器法量分布 ……60
第11表　ＳＫ1009出土破片土器計数表 ……62
第12表　ＳＫ1009出土土師器法量分布 ……62
第13表　ＳＫ1035出土破片土器計数表 ……64
第14表　ＳＫ1035出土土師器法量分布 ……64
第15表　ＳＫ1012出土土師器法量分布 ……66
第16表　ＳＫ1012出土破片土器計数表 ……66
第17表　ＳＫ1077出土土師器法量分布 ……67
第18表　ＳＫ1054出土破片土器計数表 ……70
第19表　ＳＫ1054出土土師器法量分布 ……70
第20表　緑釉陶器器種別・産地別一覧表 ……77
第21表　馬歯出土地区一覧表 ……79
第22表　土錘重量分布 ……80
第23表　遺物観察表・柘植川北部（１）……83
第24表　遺物観察表・柘植川北部（２）……84
第25表　遺物観察表・柘植川北部（３）……85
第26表　遺物観察表・柘植川北部（４）……86
第27表　遺物観察表・柘植川北部（５）……87
第28表　遺物観察表・柘植川北部（６）……88
第29表　遺物観察表・柘植川北部（７）……89
第30表　遺物観察表・柘植川北部（８）……90
第31表　遺物観察表・柘植川北部（９）……91
第32表　遺物観察表・柘植川北部（10）……92
第33表　遺物観察表・柘植川北部（11）……93
第34表　遺物観察表・柘植川北部（12）……94
第35表　遺物観察表・柘植川北部（13）……95
第36表　遺物観察表・柘植川北部（14）……96
第37表　遺物観察表・柘植川北部（15）……95
第38表　遺物観察表・柘植川北部（16）……97
第39表　遺物観察表・柘植川北部（17）……99

写　真　目　次

柘植川南部

ＰＬ１	柘植川南部	航空写真（南から）、ＳＢ３（東から）、ＳＢ５(北から)
ＰＬ２	〃	ＳＤ２(東から)、ＳＢ１（西から）、ＳＸ７(西から)、ＳＢ９(北から)
ＰＬ３	〃	遺物

柘植川北部

ＰＬ４	柘植川北部	航空写真（西から）、国町地区　航空写真（北から）
ＰＬ５	国町地区	正殿ＳＢ1055（東から）、 正殿ＳＢ1055・1056・前殿ＳＢ1065・1066（東から）
ＰＬ６	〃	西脇殿ＳＢ1084・1085・ＳＡ1091（北から）、 西脇殿ＳＢ1085・1090（北から）
ＰＬ７	〃	Ｄ５－６調査区東南部（東脇殿）（北から）、 東脇殿ＳＢ1071礎石据付痕(北から)、同柱穴断割(東から)
ＰＬ８	〃	ＳＡ1052（東北から）、(南から)、ＳＤ1010（北から）
ＰＬ９	〃	ＳＢ1105(東から)、ＳＢ1020・1022(東北から)
ＰＬ10	〃	ＳＢ1020・1021（北から）、ＳＢ1015・1016（北から）
ＰＬ11	〃	ＳＢ1001（北から）、ＳＢ1100（東から）、 ＳＢ1093・1094（西から）、ＳＢ1047（北から）
ＰＬ12	〃	Ｄ5－9西調査区（北から）、ＳＤ1079（北から）、Ｄ5－3調査区（西から）、 ＳＤ1080（南から）、ＳＫ1030（西から）、ＳＢ1084柱穴断割（西から）
ＰＬ13	追越地区	航空写真（北から）、ＳＤ４（北から）
	岩坂地区	ＳＢ１（西から）
ＰＬ14	追越地区	ＳＨ９・ＳＢ10～12（北から）、ＳＢ６（北から）、 ＳＤ８（南から）、ＳＤ８遺物出土状況（北から）、矢板出土状況（北から）
ＰＬ15	〃	ＳＤ13（北から）、ＳＤ16（南から）、ＳＢ18（南東から）、 ＳＢ20（南から）、ＳＡ27（北から）
ＰＬ16	前田地区	ＳＢ2001（東から）、ＳＢ2004（北から）、 ＳＢ2015（東から）、ＳＢ2022（東から）
ＰＬ17	遺物	ＳＤ４・８、ＳＨ９
ＰＬ18	〃	ＳＤ８・16、ＳＢ2022、ＳＤ2110
ＰＬ19	〃	ＳＤ1010、ＳＫ1011
ＰＬ20	〃	ＳＫ1086・1009
ＰＬ21	〃	ＳＫ1035・1012
ＰＬ22	〃	ＳＫ1017、整地層、ＳＫ1054
ＰＬ23	〃	ＳＤ1069、ＳＫ1014、掘立柱建物出土遺物
ＰＬ24	〃	円面硯、風字硯
ＰＬ25	〃	猿面硯、緑釉陶器など
ＰＬ26	〃	土馬、馬歯、土製品、石製品など
ＰＬ27	〃	墨書土器
ＰＬ28	〃	木製品（木簡・下駄・曲物）
ＰＬ29	〃	ＳＤ８出土木製品

Ⅰ．前　　言

1．調査に至る経緯

これまで伊賀国府は、柘植川と服部川にはさまれた沖積平野に4町あるいは6町四方の規模で存在が推定されていた。ところが、この地域を対象に県営ほ場整備事業が計画されたため、その取扱いについて関係機関と協議を重ね、昭和63年度から三重県教育委員会が国府跡の有無及び範囲を確認することになった。

昭和63年・平成元年は、柘植川と服部川に挟まれた沖積平野で調査を行った。発掘調査に先立って地名、水掛かり等の予備調査を行い、この成果をもとに国府の範囲を方4町と想定した。発掘調査は予備調査を基に政庁部の建物及び区画する施設（溝）の範囲を確認するため、幅3ｍのトレンチで調査を実施した。

調査の結果、検出した遺構は奈良時代～平安時代のものは少なく、柘植川南部に伊賀国府の存在する可能性は低いことが確認された。また、印代地区で、弥生時代後期を中心とした竪穴住居・土坑・溝・方形周溝墓等を検出し、東西600ｍ、南北200ｍの範囲に弥生時代の集落の広がることが明かとなった。

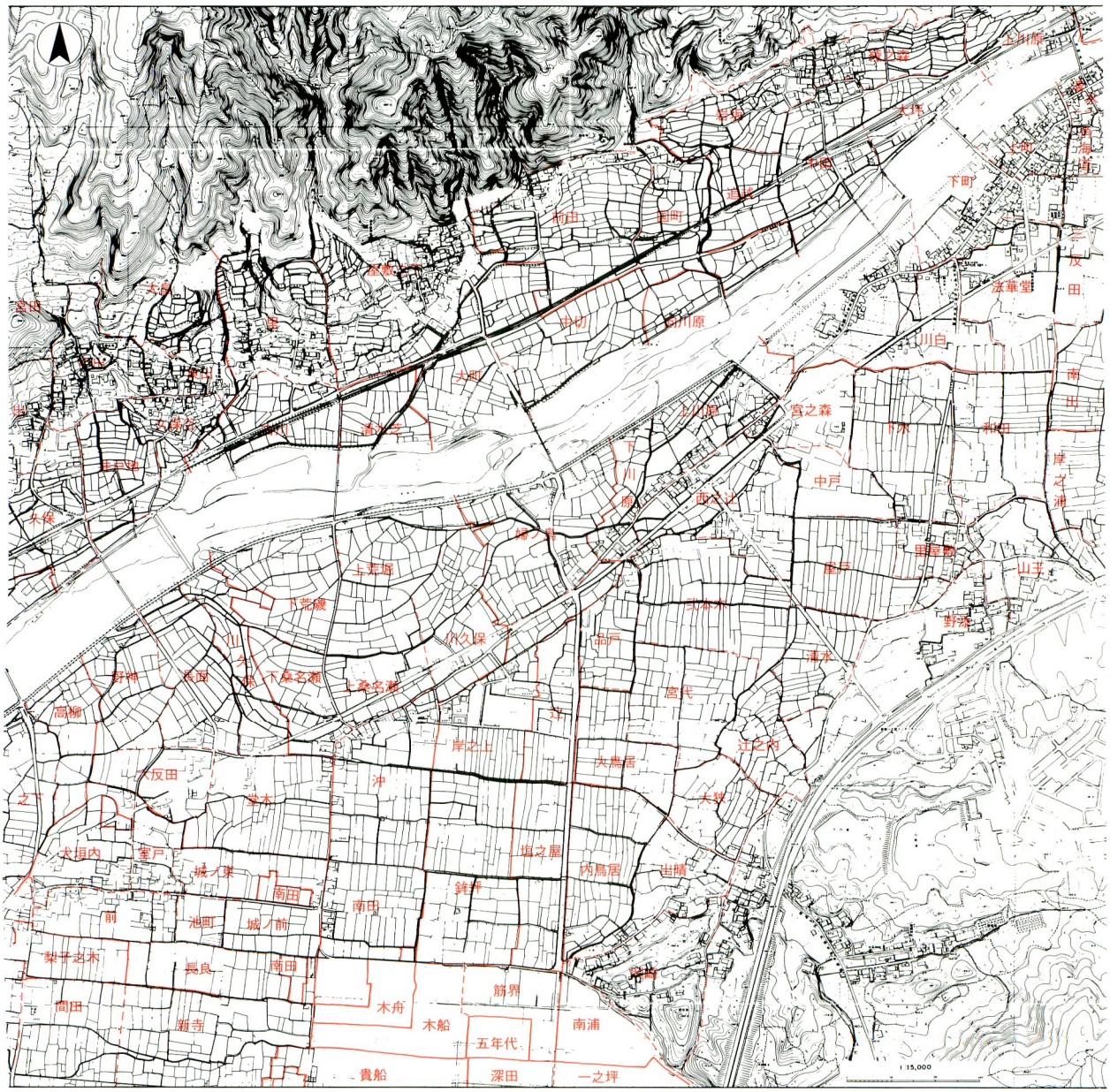
年　月	概　　要
昭54年～	・上野農林事務所に、推定地が事業化される場合の事前協議を要請。
昭62，5	・上野市耕地課と地元との協議→昭和63年度事業化予定。
6	・昭和63年度事業化見通しのため、文化課が農林水産部から執行委任をうけて範囲確認調査を実施し、事業との保存の調和を図る方法で検討。
63，2	・文化課として国府推定地の保存については、県営ほ場整備事業地内発掘調査の一環として事前に範囲確認調査を実施し、事業との保存の調和を図る方法を決定。 ・第1回指導委員会議開催。→予備調査及びその結果による試掘溝の位置決定等の指導。
63，7	・文化課、農村整備課、耕地課、上野農林事務所による協議→計画調査の再確認と協力を依頼。
8	・第2回指導委員会議開催→予備調査の結果報告及び調査地区の設定等の指導。
10	・第1次範囲確認調査開始。～平成元年2月
12	・第3回指導委員会議開催→第1次範囲確認調査の報告及び今後の取扱いの指導。
平元，6	・第4回指導委員会議開催→予備調査の結果報告及び調査地区の設定等の指導。
10	・第2次範囲確認調査開始。～平成2年1月
12	・第5回指導委員会議開催→第2次範囲確認調査結果の報告及び今後の取扱いの指導。 ・第2次範囲確認調査現地説明会開催。
平2，4	・第6回指導委員会議開催→2年間の範囲確認調査結果の総括及び平成2年度調査地区設定と留意点の指導。
7	・伊賀国府跡推定地発掘調査に関する地元説明会開催。
9	・第3次範囲確認調査開始。～平成3年2月
3，1	・埋蔵文化財センター、上野農林事務所、上野北部土地改良区による協議→第3次範囲確認調査の結果報告、今後の調査計画、国府の可能性及びほ場整備とその方法等協議 ・第7回指導委員会議開催→第3次範囲確認調査結果の報告及び今後の計画等の指導。 ・第3次範囲確認調査現地説明会開催。
平3，5	・埋蔵文化財センターと文化振興課で国府跡推定地に関する基本的な考えを調整し、「伊賀国府跡推定地の保存とその取扱いについて」（案）を作成。同年6月、農村整備課、上野農林事務所に提示し、説明。
7	・第8回指導委員会議開催→今までの調査結果の報告・今後の取扱い及び「伊賀国府跡推定地の保存とその取扱いについて」（案）について指導。上野市教育委員会も同席。 ・埋蔵文化財センター、上野農林事務所、上野北部土地改良区による協議→「伊賀国府跡推定地の保存とその取扱いについて」（案）の説明
10	・第4次範囲確認調査開始。～平成4年2月
12	・第9回指導委員会議開催→第4次範囲確認調査結果の報告。国町地区で検出した遺構は政庁部にあたることをほぼ確認するが、範囲については不明な点が多いので今後も範囲を確定するための調査が必要であるとの指導。
平4，1	・第4次範囲確認調査現地説明会開催。

第1表　調査の経緯

平成元年度の調査では、一部柘植川北部の国町地区に調査を移した。幅３ｍのトレンチを設定し調査を実施した結果、奈良・平安時代の遺構が多く検出され、特に径30㎝の柱根が残存する一辺約１ｍの柱掘形が注目された。これにより、国府は柘植川北部の地域に存在する可能性が高いことが判明した。以後、柘植川北部に調査の中心が移ることになった。

平成２年度の調査は、国町地区で確認された建物の規模を明らかにすることと、岩坂・中田・追越地区で東と北の範囲を確認することを目的として調査が行われた。国町地域では、脇殿に相当すると考えられる南北棟を検出した他、国町地区の北と東に遺構が広がることが確認され、特に東の追越地区からは木簡が出土し、注目された。

平成３年度は、国町地区では平成元～２年度の結果をもとに政庁内の建物配置を想定し、正殿や脇殿など政庁範囲の確認を主眼とした一部面調査を、また、西の前田地区では区画する溝などの施設、南では往時の東海道の検出を主として幅２ｍのトレンチ調査を実施した。



第１図　字切り図

2. 調査体制

昭和63年度は三重県教育委員会が、また、平成元年度以降は三重県埋蔵文化財センターが調査主体となって調査を実施した。昭和63年度から平成3年度までの調査体制は以下のとおりである。

発掘調査

昭和63年度（第1次）

調査期間　昭和63年10月1日～平成元年1月13日
調査対象地　柘植川南部・印代、西条
調査担当者　主事　服部　久士・服部　芳人
　　中島　千年・伊藤　裕偉
調査面積　5,000㎡

平成元年度（第2次）

調査期間　平成元年10月2日～12月22日
調査対象地　柘植川南部・一之宮、千才、
　　北部・坂の下
調査担当者　主事　服部　久士
　　三枝　義久
調査面積　2,600㎡

平成2年度（第3次）

調査期間　平成2年9月5日～平成3年2月8日
調査対象地　柘植川北部・坂の下、外山
調査担当者　主事　鈴木　克彦
　　技師　穂積　裕昌
　　研修生　小川　専哉・川戸　達也
　　東山　則幸
調査面積　3,000㎡

平成3年度（第4次）

調査期間　平成3年10月14日～平成4年2月26日
調査対象地　柘植川北部・東条、坂の下、千才
調査担当者　技師　泉　雄二
　　研修生　中浦　基之
調査面積　3,000㎡

遺物整理、室内整理

平成元年度

三重県埋蔵文化財センター管理指導課
　　課長　吉水　康夫
　　主事　河瀬　信幸
　　野田　修久
　　鈴木　克彦

平成2年度

三重県埋蔵文化財センター管理指導課
　　課長　吉水　康夫
　　主事　河瀬　信幸
　　小坂　宣広
　　江尻　健
　　小林　秀

平成3年度

三重県埋蔵文化財センター管理指導課
次長兼管理指導課長　山沢　義貴
　　主事　田村　陽一
　　杉谷　政樹
　　小坂　宣広
　　小林　秀

室内整理員

足立　純子・新井　ゆう子・尾家　恵・柿原　清子・角谷　和子・北山　美奈子・小池　洋子・小林　佳代子・島村　紀久子・杉原　泰子・鈴木　美智子・瀧川　ひとみ・田中　美樹・中村　美智子・中山　豊子・西村　秋子・前村　浩子・松本　春美・森島　公子・脇坂　栄子

指導委員

昭和63年の調査当初から、下記の先生方に調査指導委員をお願いした。各先生方には年2回の指導員会議等で、調査及びその取扱いについて、指導と助言を得た。

八賀　晋（国立三重大学人文学部）
小笠原　好彦（国立滋賀大学教育学部）
高橋　誠一（国立滋賀大学教育学部）
勝山　清次（国立三重大学人文学部）
山中　敏史（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）

Ⅱ. 位置と環境

三重県は律令下の国名でいうと主に伊勢、志摩、伊賀の三国から成り立つ。伊賀国は、三重県の北西部に位置し、天武九（680）年伊勢国から分離した。阿拝、山田、伊賀、名張の四郡からなり、『和妙類抄』には、伊賀国府は阿拝郡に所在し、阿拝郡は、柘植、川合、印代、服部、三田、新居の六郷から成り立つと記されている。現在の上野市北部から東接する阿山町の一部を含む地域で、伊賀盆地北部にあたる。

伊賀国は、北端部に位置する伊賀盆地を中心に発展してきた。木津川、久米川、服部川、柘植川の合流するところで古代から交通の要所として栄えた地域である。特に盆地北部は柘植川が西に流れて木津川と合流し、この河川沿いには奈良時代に東海道が新設され、加太越で東海へ向かう幹線道沿いの地域である。

国府の調査は、伊賀盆地の東北部を流れる柘植川の南部と北部で実施した。柘植川南部の印代・一之宮・千才地区(1)は、その南を服部川に挟まれた南北幅約４㎞の水田地帯である。周辺地区は条里制が残っているのに対し、この地区は条里が乱れているため、国府の有力な候補地であった[1]。なお、この柘植川南部の範囲確認調査の結果、新たに川久保遺跡(2)、印代東方遺跡(3)、長良遺跡(4)、高羽根遺跡(5)、間田遺跡(6)、新寺Ａ遺跡(7)、新寺Ｂ遺跡(8)を確認した。また、柘植川北部の坂之下・外山地区(9)は、北側背後に丘陵が迫り、段丘上面の平坦地は南北幅約200ｍの狭い地域で、これまで国府の存在する地域としては推定されていなかった。

以下、伊賀盆地北部地域について、当遺跡に関係する古代までの遺跡を時代別に記述する。

弥生時代以前

縄文時代の遺物の出土例は少ない。阿山町西之沢の天道遺跡(11)[2]、上野市印代の印代東方遺跡(3)[3]から後期の遺物が出土しているが、明確な遺構の検出例は知られていない。これに対し、盆地中南部では森脇遺跡(33)[4]、北堀池遺跡(32)[5]など北部に比べ出土例、検出例は近年の調査で増加している。

弥生時代の遺跡は、柘植川南部の印代地区の印代東方遺跡(3)[6]や、その南の新寺Ａ遺跡(7)[7]で新たに確認され、この地域には弥生時代後期の拠点となる集落の存在が推定される。柘植川北部では北門遺跡(26)[8]があり、近年の調査で遺跡数は増加しているものの、弥生時代前期にまで遡るものはない。

古墳時代

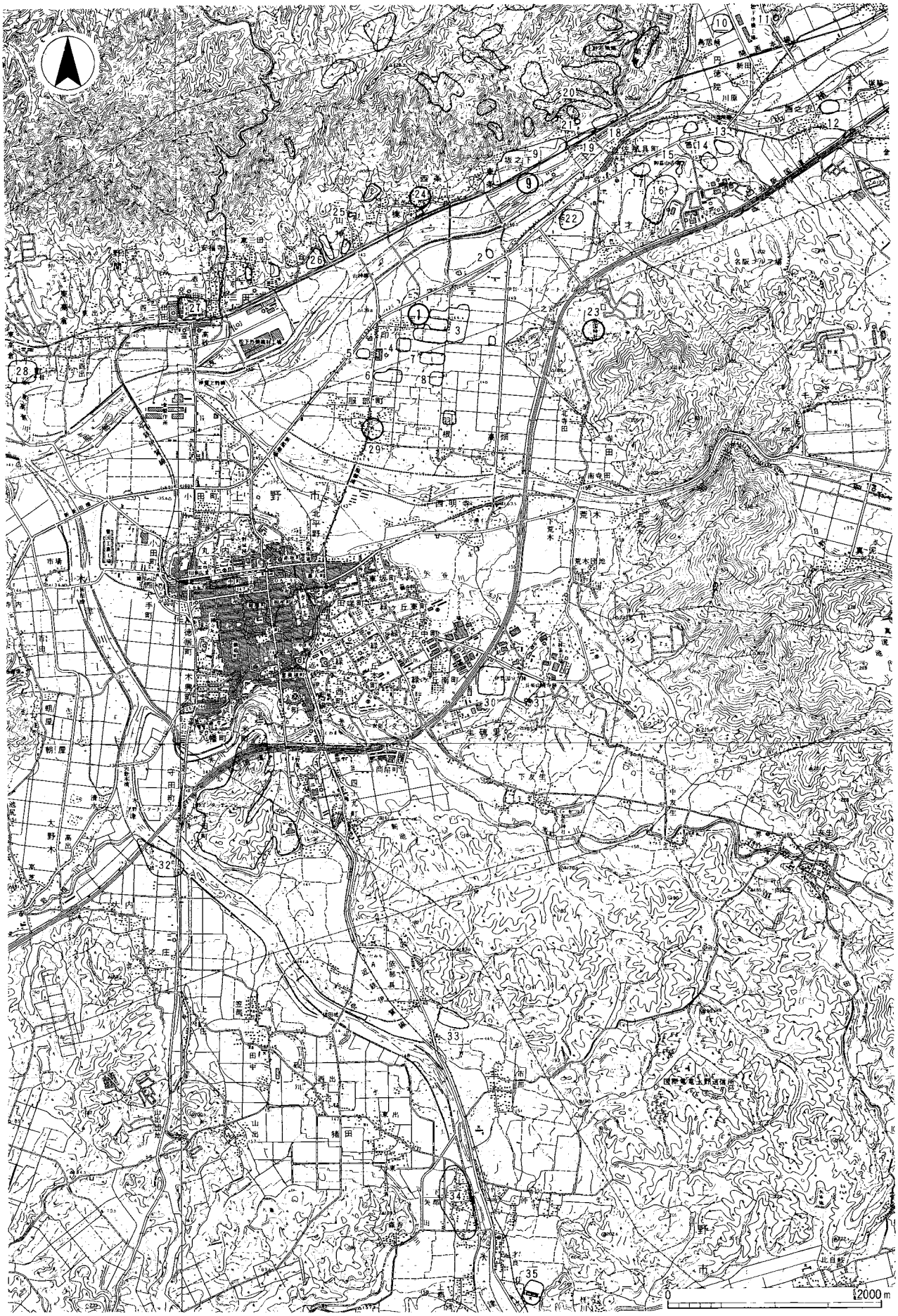
当地域周辺には、古墳時代前期の山神寄建神社古墳(25)[9]、東山古墳(11)[10]、中期の全長188ｍの県下最大規模を誇る御墓山古墳(15)[11]など有力な古墳の存在が知られる。北の丘陵背後には外山古墳群(20)[12]をはじめ、上野市から阿山町まで多くの古墳群[13]があり、４世紀から６世紀にかけての古墳群が存在する。なお、外山古墳群中の勘定塚古墳(21)は、７世紀前半の当地域最後の大型古墳の一つである。

また、これらをささえた経営基盤である集落は、近年の調査で検出例が増加している。阿山町内では北中溝遺跡(10)[14]、天道遺跡(12)[15]、柘植川南部の御墓山古墳周辺では喜春遺跡(16)[16]、宮ノ森遺跡(22)[17]、対岸の柘植川北部では外山大坪遺跡(19)[18]など、弥生時代中後期から継続して営まれ、開発の進む様子が、遺跡の上からも裏付けられる。

飛鳥・奈良時代

日本書紀の壬申の乱の記載では、大海人皇子が吉野から挙兵する際、名張から上野を通り東国に入っている。飛鳥に都が置かれていた頃、これが東国への街道[19]に当たるものであろう。奈良に遷都されると、和銅四(711)年伊賀国阿閇郡新家駅が新設され、街道も変わる。現在の木津川沿いの関西本線のルートで、伊賀国府を通過し、東の加太越で伊勢・東国へと向かう。９世紀平安京に遷都すると東海道は近江国経由に代わり、更に仁和二(886)年鈴鹿越えの東海道（阿須波道）、現国道1号線へと移っていく。名張から東に伊勢へと向かう道は、平安時代の斎王が都に帰京する、斎王の退下の道として知られている。

伊賀国府の所在地は奈良時代までは東海道の主要道に面し、平安時代になると東海道からは離れるが、伊賀から畿内への街道の道筋にあたる。地理的に重要な位置を占めていたことは、遺跡の分布の様子を



第２図　遺跡位置図（1：50,000）

見ても間違いのないことである。

名張から上野にかけての道筋には南から白鳳時代の才良廃寺(35)[20]、伊賀郡家に比定される下郡遺跡(34)[21]、飛鳥時代から平安時代にかけての多数の掘立柱建物や円面硯、斎串、墨書土器などを出土した森脇遺跡(33)[22]などがある他、伊賀国府の南5kmには伊賀国分僧寺(30)[23]と国分尼寺に比定される長楽山廃寺(31)[24]が位置し、伊賀国内の主要な街道であることを示している。木津川沿いには、木津川の北側で西から新家駅に比定される官舎遺跡(28)[25]や、三田廃寺(27)[26]、北門遺跡(26)[27]があるほか、これらの遺跡の周辺で調査の行われていない遺物散布地が多数ある。国府に東接する外山大坪遺跡(19)[28]では、飛鳥・奈良時代の遺構が検出され、その東には綾之森遺跡(18)[29]が広がる。また、伊賀国府の東南、御墓山古墳の西北にある三反田遺跡(17)[30]、東の堂垣内遺跡(14)・大多田遺跡(13)[31]では平成3年度に調査が行われ、三反田遺跡からは平安時代後半～鎌倉時代の掘立柱建物、堂垣内遺跡からは平安～鎌倉時代の掘立柱建物、大多田遺跡からは飛鳥～奈良時代の掘立柱建物が検出された。奈良時代の遺跡分布から東海道は、伊賀国府の西では川の北側を通り、東は川を渡り南を通る可能性が高い。なお、国分寺の西を北に延長する位置には条里の痕跡が見られ、さらに延長する位置に国町地域が存在することから、国分寺と国庁の位置関係は有機的なつながりがあると言える。

式内社には、伊賀国一宮の敢国神社(23)[32]、二宮である小宮神社(24)[33]、三宮である波多岐神社(29)[34]などが周辺に見られる。遺跡・式内社の位置から見ても、当地域周辺は古代の重要な位置を占めていたことは間違いない。

註

1、伊賀国府推定地の研究については以下のものがある。

・福永正三　「秘蔵の国－伊賀路の歴史地理」地理書房、1972.6

・「国府研究の現状(その一)」「国立歴史民俗博物館研究報告第10集共同研究古代の国府の研究」1986.3

・木下良「伊賀国府」「国立歴史民俗博物館研究報告第20集共同研究古代の国府の研究(続)」1989.3

2、「天道遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会、1989.3

柘植川左岸の河岸段丘に位置する。中心は古墳時代後期(6世紀)で、竪穴住居8棟を検出した。ほかに縄文時代後期の深鉢、弥生時代中期の遺物が出土した。

3、堀田隆長「印代東方遺跡群」「平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告第1分冊」、三重県教育委員会、1991.3

4、「森脇遺跡」「三重県埋蔵文化財年報19」三重県教育委員会、1989.3

・「三重県埋蔵文化財年報20」三重県教育委員会、1990.3

・森川常厚　「森脇遺跡(第三次)発掘調査報告」1991.3、三重県教育委員会

5、「北堀遺跡発掘調査報告　第一分冊」三重県教育委員会、1981.3

6、本報告に一部掲載。

7、「新寺遺跡」「三重県埋蔵文化財センター年報1」、三重県埋蔵文化財センター、1990.3。平成元年度立ち会い調査。本報告に一部掲載。

8、「北門遺跡現地説明会資料」上野市教育委員会、1991.6。

弥生時代後期の竪穴住居1棟と奈良時代の掘立柱建物8棟、竪穴住居2棟、井戸2基、平安時代の掘立柱建物7棟を検出し、遺物には　円面硯や、井戸から斎串などが出土した。

9、「東京国立博物館図版目録古墳遺物編（近畿)」東京国立博物館、1988。

三角縁三神二獣鏡、勾玉などが出土している。

10、仁保晋作「阿山町東山古墳の遺構と遺物」「研究紀要第1号」三重県埋蔵文化財センター、1992.3

河合川と柘植川が合流する地点から東方1kmの水口丘陵の先端に位置し、4世紀前半の築造で、伊賀地方では最古の古墳である。墳丘は21.0－17.0mの楕円形を呈する。主体部は割竹型木棺直葬で、中国後漢時代の四獣鏡、鉄剣、鉄斧、銅鏃と高杯、器台(庄内式併行)が出土した。

11、山本雅靖「御墓山古墳の検討」「考古学論集第1集」考古学を学ぶ会、1985.4。

南宮山から北に派生する丘陵末端部に位置する、全長188mの前方後円墳である。三重県最大の規模を有するもので、陪塚2基を伴い、埴輪などから見て、5世紀前半の造営である。

12、三重大学原始古代史部会「鷺棚1号墳測量調査報告」1991.5。

外山地区背後の丘陵の尾根上に位置し、前方後円墳4基、方墳6基を含む30基近くの古墳群である。

また、勘定塚古墳は、外山古墳群の眼下にある丘陵先端部につくられた古墳で、現在は横穴式石室の玄室の一部を残すにすぎない。15m程度に復元でき、7世紀前半の時期と思われる。当該地域の最後の大型古墳の一つと考えられる。

13、「奥弁天4号古墳・源六谷1号古墳」阿山町埋蔵文化財調査報告書第2集、阿山町教育委員会、1989

14、「北中溝遺跡」「三重県埋蔵文化財年報18」三重県教育委員会、1988。

柘植川と河合川の合流する沖積地のほぼ中央に位置する。弥生時代末から古墳時代はじめにかけての遺物と、竪穴住居11棟と、それらを画する大溝を検出した。

15、2と同じ。

16、「喜春遺跡群発掘調査報告－遺構編」、上野市教育委員会・上野市遺跡調査会、1982.9

・山本雅靖「伊賀の古式須恵器とその周辺」「考古学論集第2集」考古学を学ぶ会、1988.4。

南宮山から北に派生し、御墓山古墳に至る丘陵の西斜面に位置する。中世城館、溝の中には布留式と、陶邑TK73併行期の須恵器を含む段階の布留式があり、5世紀前半に造営された御墓山古墳と密接な関係があったと思われる。

なお、奈良時代の川原寺式の軒丸瓦が出土している。

17、「宮ノ森遺跡発掘調査概要」上野市教育委員会、1979

古墳時代の竪穴住居5棟、土坑を検出した。

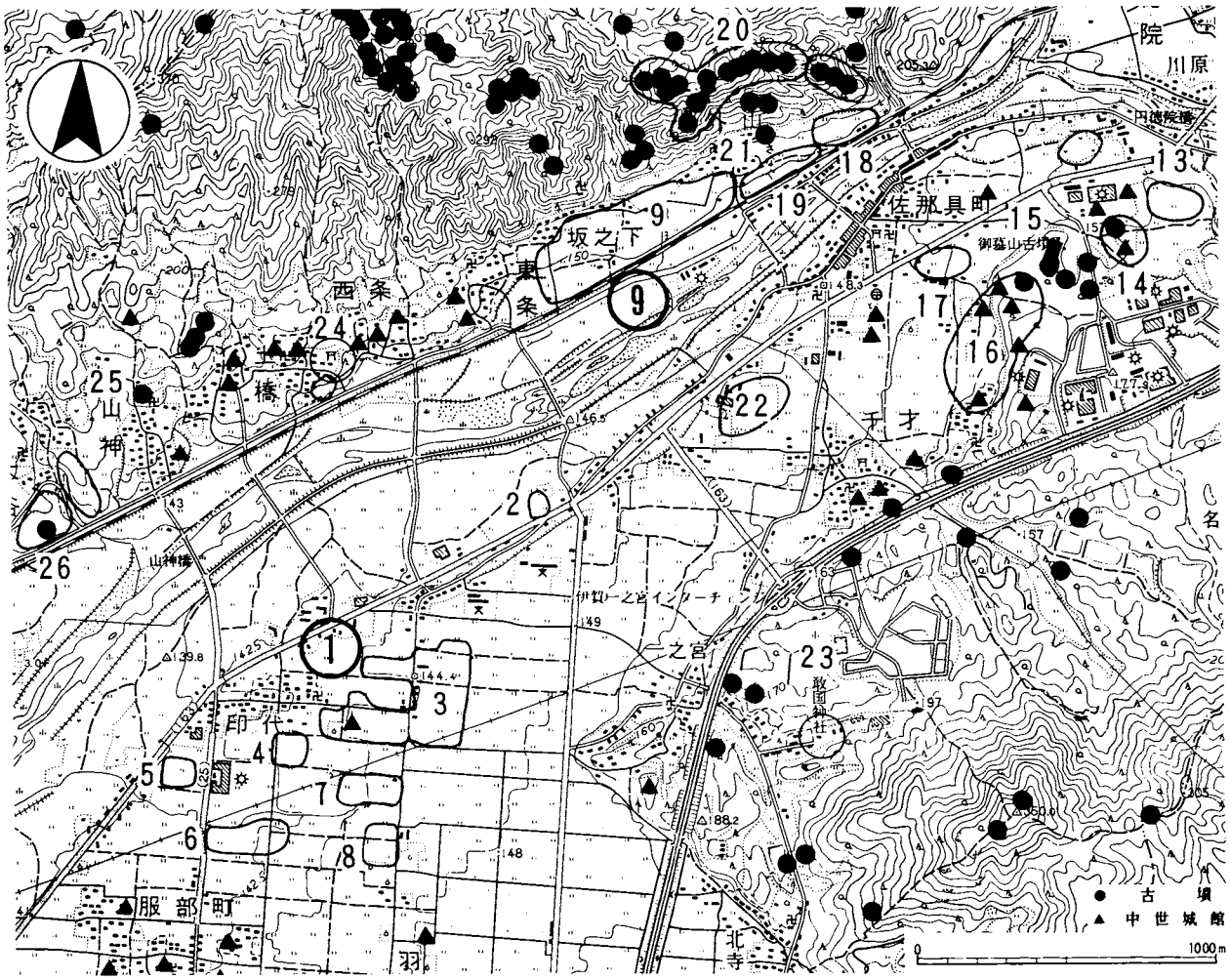
18、川戸達也「外山大坪遺跡」「平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告第1分冊」三重県教育委員会、1992.3。

伊賀国府推定地に東接する遺跡である。古墳時代前期の竪穴住居9棟が検出され、背後に造営された古墳群との関係が注目される。また、規模は不明であるが、7世紀後半の掘立柱建物1棟、奈良時代の竪穴住居4棟や円面硯2点が出土し、伊賀国府との関連の強い遺跡である。

19、街道については以下のものがある。

・藤本利治「伊賀国」藤岡謙二郎編「古代日本の交通路Ⅰ」、大明堂、1978.3

・足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」上田正昭編「探訪古代の道1」法藏館、1988.1



第３図　遺跡位置図（1：25,000）

・足利健亮「平安京から伊勢神宮への古代の道」上田正昭編『探訪古代の道２』法藏館、1988.1

20・財良廃寺『三重県の地名　日本歴史地名大系24』平凡社、1983.5

・「三重県上野市才良遺跡概要」『古代学研究12号』1955。

天武・持統天皇に関係する伊賀国四郡四ケ寺中の伊賀郡の寺である。川原寺式の複弁蓮華文軒丸瓦が出土しているが、遺構については不明。

21・「下郡遺跡発掘調査報告」上野市教育委員会、　1978.3

・「下郡遺跡試掘調査概報」三重県教育委員会、　1979.3

・「下郡遺跡第二次試掘調査概報」三重県教育委員会、1980.3

・「下郡遺跡昭和57・58年度の発掘調査報告」三重県教育委員会、1984.3

22、４と同じ

23、伊賀国分寺、24、長楽山廃寺については、山田猛「伊賀国分寺」「新修国分寺の研究第２巻　畿内と東海道」吉川弘文館、1991.11を参照した。

伊賀国分寺は大正12年国史跡となる。東西約210ｍ、南北約250の周囲に土塁が巡り、中に北から講堂、金堂、中門跡の土壇が残り、金堂と中門には単廊が取り付く。南西には塔と思われる高まりも残る。主要堂塔の推定中軸線はN-4°30'-Eで国分寺の西面を北に延長するとほぼ伊賀国府に到達する。

西明寺遺跡は1980～83年国分寺の周辺での同寺関連資料を得るために行った調査で、寺域北限の築地外面の雨落ち溝などを検出し、寺域は東西720尺、南北800尺に復元される。調査で出土した遺物から、国分寺の造営は奈良時代後半で11世紀には少なくとも周辺雑舎群はその機能を停止しており、10世紀後半から平安時代末期までが衰退期と位置付けられる。

・山本雅靖『西明寺遺跡発掘調査報告　遺構編』上野市教育委員会、1981

・田村蟬之『西明寺遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会、1982

・西森平之『西明寺遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会、1983

長楽山廃寺(国分尼寺)は国分僧寺の東約200ｍに位置し、大正12年長楽山廃寺として国史跡に指定された。築地は南面と西面が二重で北面と東面は一重で存在する。東西500尺、南北540尺程度に復元でき、金堂、講堂の土壇跡が残る。方位は僧寺と異なり、N-7°30'-Eである。

25、「新家駅」『三重県の地名　日本歴史地名大系24』平凡社、1983.5

新家駅推定地は、伊賀国府の西５㎞の位置にある、現在の上野市新居小学校南の官舎遺跡が相当する。木津川の北の微高地上にあり、上官舎、下官舎等の地名も残り、新家駅の推定地とされる。一部試掘調査が行われているが、詳細は不明。

26、石田茂作「三田廃寺」『飛鳥時代寺院址の研究』1961.11。

過去においては礎石も存在していたといわれ、瓦の散布する地域である。調査は行われず、地籍図から石田茂作氏は四天王寺式の南面する伽藍配置を想定し、瓦の中には7世紀後半のものも見られることから、その造営が飛鳥時代に求めることができるとしている。

27、８と同じ

28、18と同じ

29、遺跡台帳には綾之森・六坪遺跡と記載されているが、外山大坪遺跡と一連の遺跡の可能性が高く、註18の報文中では一連のものとして扱っている。

30、「三反田遺跡」「三重県埋蔵文化財センター年報３」、三重県埋蔵文化財センター、1992.3

31、「東の堂垣内・大多田遺跡」「三重県埋蔵文化財センター年報３」、三重県埋蔵文化財センター、1992.3

32、敢国神社『三重県の地名　日本歴史地名大系24』平凡社、1983.5

33、小宮神社『三重県の地名　日本歴史地名大系24』平凡社、1983.5

34、波多岐神社『三重県の地名　日本歴史地名大系24』平凡社、1983.5

Ⅲ．柘植川南部の調査

1．印代東方地区

柘植川左岸の印代地区では、県営ほ場整備事業に先立って昭和63年から範囲確認調査が行われた。昭和63年度は、東西650ｍ、南北400ｍの範囲で井桁状に幅３ｍのトレンチを延長1,700ｍ設定して、合計約5,000㎡を調査した。平成元年度には、前年度の補足の試掘調査を40ヶ所で実施した。また、２年度には、排水路部分の立会い調査を一部で実施した[1)]。

標高145ｍ前後の印代東方地区の基本的層位は、南北で大きく様相が異なる。Ａ～Ｃ区とＥ区北半部は耕作土、床土の下に明灰褐色砂質の旧耕作土や明黄褐色の旧床土が２～３層あり、その下に茶褐色や暗褐色粘質土が１～２層で、灰黄色粘土の地山面となる。地山面までの深さは0.3～0.8ｍである。

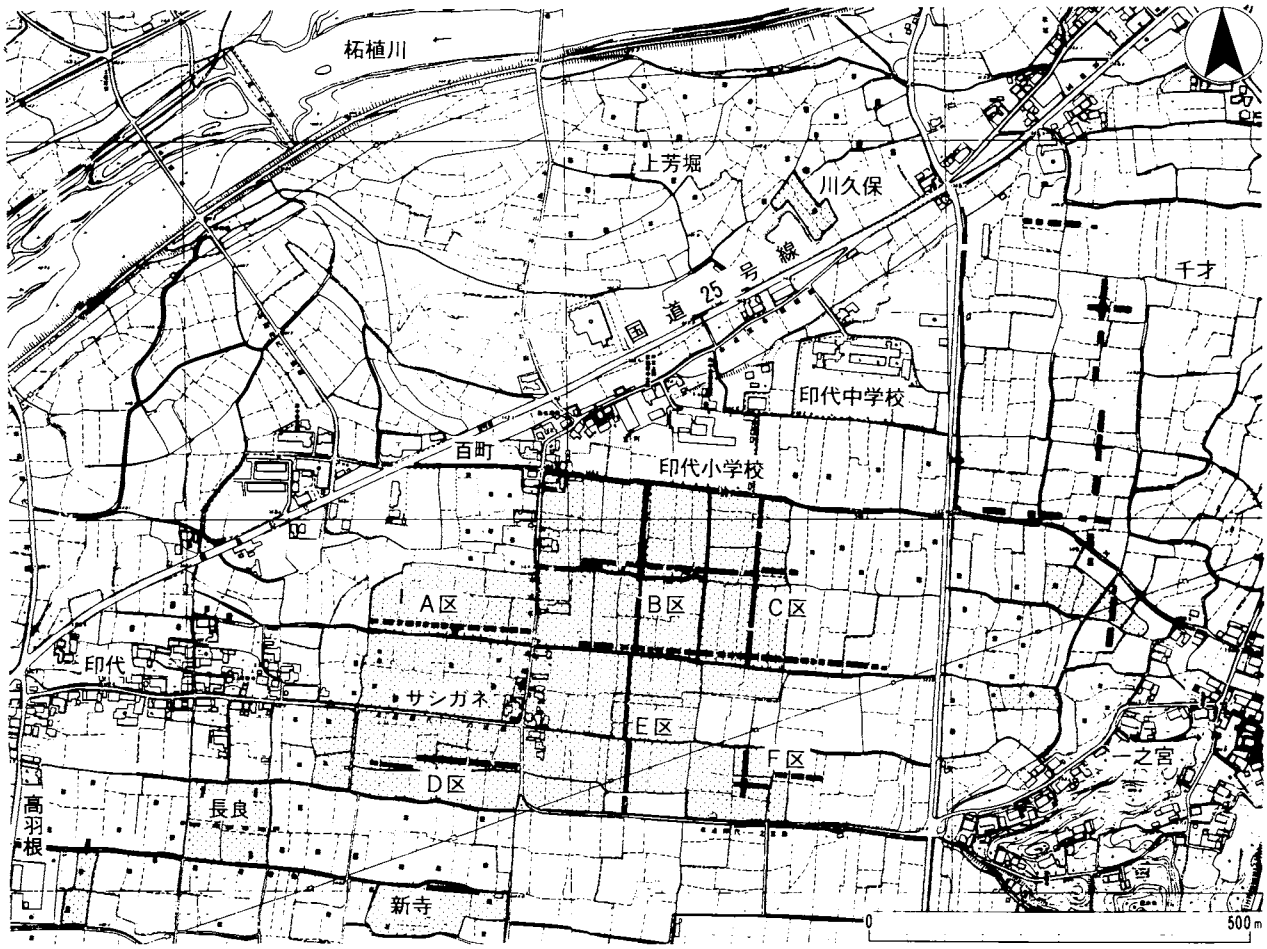
一方、Ｄ・Ｆ区とＥ区南半部は耕作土と床土の下に旧耕作土が１～２層あり、その下が灰褐色砂質土であり、地山は暗褐色砂質土となっている。地山面までの深さは0.2～0.5ｍである。

（１）遺　構

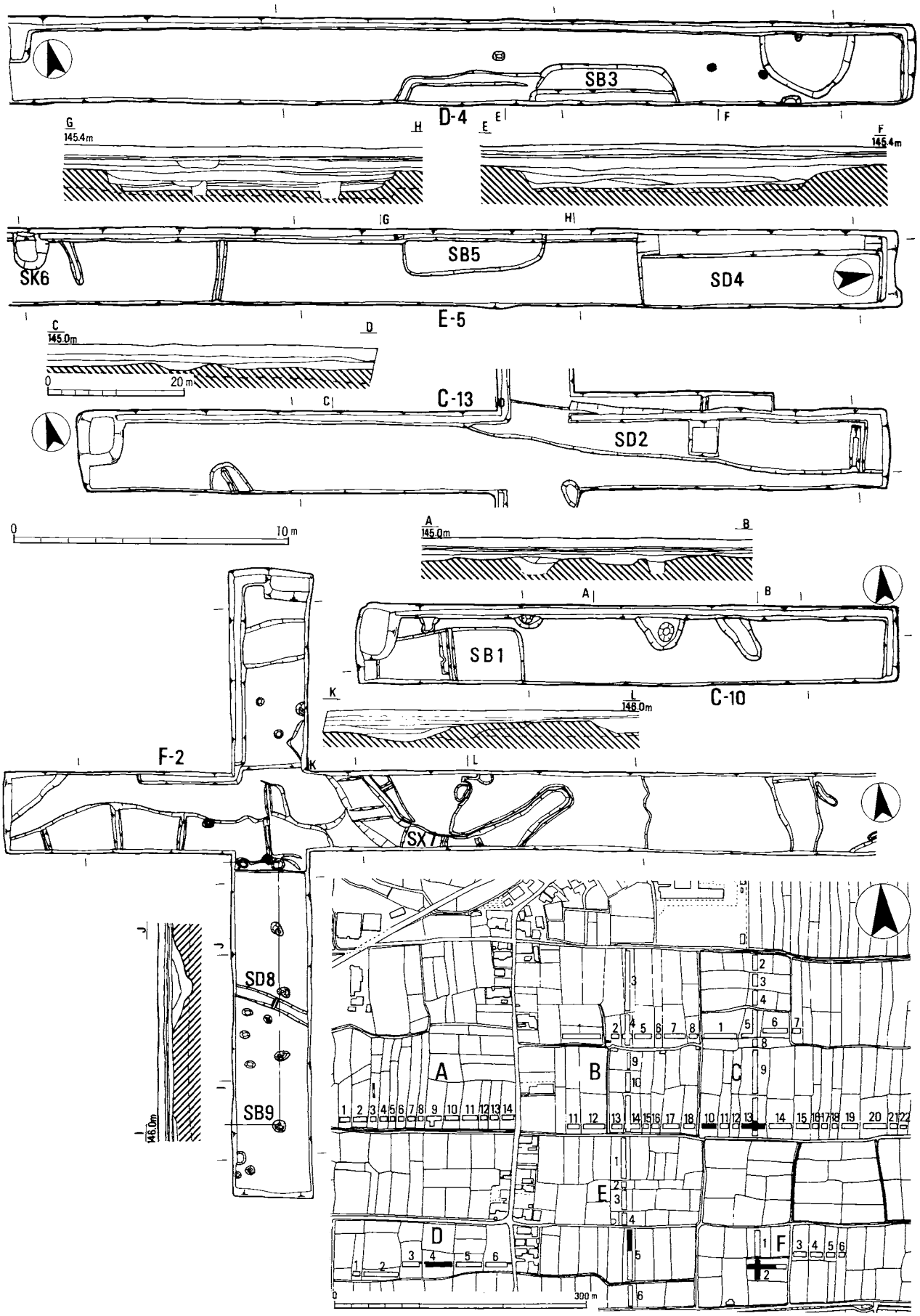
Ａ～Ｃ区は、竪穴住居、土坑、ピット、溝を検出しているが、全体的に非常に希薄である。

Ａ－４・Ｂ－４では水田状遺構を検出したが、プラントオパール調査の結果、イネは検出されず、古墳時代頃の湿地状の窪みの可能性が高い。

Ｃ－９では、抉入木製品（84）が出土した浅い溝がある。埋没時期は、出土遺物から古墳時代と推察される。Ｃ－10で検出したＳＢ１は、出土遺物から弥生時代後期のものと考えられる。また、手焙形土



第４図　印代東方地区調査区平面図（1：10,000）



第５図　印代東方地区遺構平面図（１：200　但し土層断面図は１：100）

図版	遺構		遺物				小字名	図版	遺構		遺物				小字名
トレンチ	弥生～古墳	その他	～古墳	奈・平	中世	その他		トレンチ	弥生～古墳	その他	～古墳	奈・平	中世	その他	
A-1	土坑	溝	○		○		堂木	C-5	溝	土坑			◎		鉾坪
A-2					○		〃	C-6			○		◎	古銭	〃
A-3			○		○		〃	C-7		土坑・ピット	○		○		〃
A-4		水田状遺構			○		〃	C-8							〃
A-5		溝	○	○			〃	C-9	溝	ピット	○		◎	抉入木製品	〃
A-6					○		〃	C-10	竪穴住居		◎		○		〃
A-7			○		○		〃	C-11		土坑・ピット					〃
A-8							〃	C-12							〃
A-9			○		○		〃	C-13	溝	ピット	◎		○		〃
A-10				○	○	サヌカイト	〃	C-14	土坑						〃
A-11			○		◎		〃	C-15		溝	○				〃
A-12		土坑 ピット	○		◎		〃	C-16							〃
A-13			○		○		〃	C-17					○		〃
A-14		ピット	○		○		〃	C-18							〃
B-1		土坑 溝					沖	C-19			○				〃
B-2				○	○		〃	C-20		自然流路					塩之屋
B-3	土坑	溝	○		○		〃	C-21							〃
B-4	土坑・ピット	水田状遺構	○	○	○	土符、石鏃	〃	C-22							〃
B-5		土坑	○		◎	曲物底板	〃	D-1	土坑		◎				城ノ前
B-6		溝	○		○		〃	D-2	竪穴住居	中世ピット	◎	○	○	鉄製紡錘車	〃
B-7		ピット	○	○	○		〃	D-3	土坑 溝		◎		○		〃
B-8		溝			○		〃	D-4	竪穴住居		◎		○		〃
B-9							〃	D-5	土坑		◎				〃
B-10		土坑					〃	D-6	土坑	溝・ピット	◎	○			〃
B-11							〃	E-1		溝・中世ピット	○		○		南田
B-12		ピット			○		〃	E-2			○		○		〃
B-13			○		○		〃	E-3					○		〃
B-14		ピット 溝	○				〃	E-4	溝		○	○	○		〃
B-15		土坑	○				〃	E-5	竪穴住居		◎			砥石	〃
B-16		溝	○				〃	E-6		自然流路	○				〃
B-17		溝	○				〃	F-1		溝	○				鉾坪
B-18	土坑		○				〃	F-2	方形周溝墓	掘立柱建物	◎	○			〃
C-1		中世溝			○	古銭	鉾坪	F-3		溝	○		○		〃
C-2	溝	土坑	○	○	◎	スクレーパー	〃	F-4			○		○		〃
C-3					○		〃	F-5							〃
C-4							〃	F-6			○				〃

◎は多量出土を示す

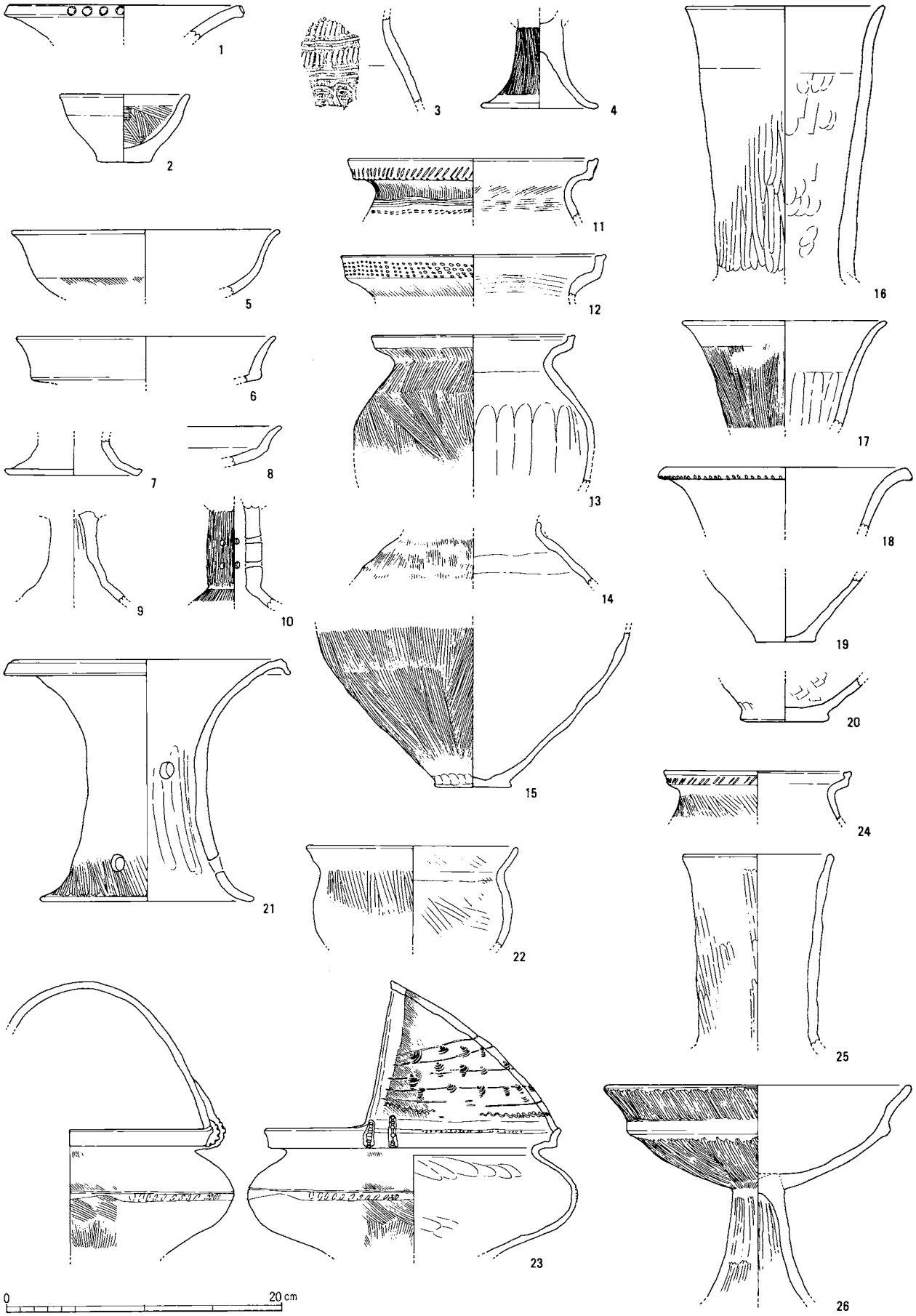
第２表　印代東方地区　遺物・建物一覧表

器の出土したC－13のＳＤ２は幅１ｍで深さ0.5ｍほどの逆台形状の断面を呈する。

Ｄ区では、弥生時代中期の竪穴住居、土坑、溝と中世の柱穴を密に検出した。ＳＢ３は、一辺5.4ｍの隅丸方形の竪穴住居の一部と推察される。出土遺物は、弥生時代中期を含む多量の後期の土器である。Ｄ－3では、柱間2.4ｍの２間分の柱穴をはじめとして、40cm程の円形の掘形をもつ柱穴群を検出したが、全体規模は不明である。

Ｅ区では、Ｅ-5から南側で大溝、土坑や竪穴住居などを検出した。ＳＤ４は、幅９ｍ、深さ１ｍ以上の東西溝である。Ｅ-6にも細砂が厚く堆積した自然流路が東西方向に流れており、両溝の間にＳＢ５やＳＫ６がある。ＳＢ５は、一辺5.2ｍの竪穴住居で、トレンチ西壁に柱穴の断面が観察された。ＳＫ６は、径1.2ｍ、深さ0.6ｍである。出土遺物から、これらの遺構はいずれも弥生時代後期のものである。

Ｆ区では、方形周溝墓や溝、掘立柱建物を検出した。ＳＸ７は調査区外へ延びており、幅1.2ｍ程の溝が方形に巡っているものと推察される。一カ所の繋部が確認でき、周溝からは弥生時代後期の土器が出土している。ＳＤ８は幅1.7ｍ、深さ0.4ｍの浅いＵ字形の溝であり、手焙形土器が出土している。ＳＢ９は梁間４間の南北棟と考えられ、柱間は2.4ｍである。柱掘形は円形で、黒色土器片が出土していることから平安時代の後半と推察される。



第６図　遺物実測図　柘植川南部（１）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
1	17	弥生土器 広口壺	SB1	C-10 SB1	16.6	−	−	内−ヘラミガキ	粗、3mm以下の砂粒を含む	軟	乳灰色	25	口縁部端部外面に円形浮文
2	15	〃 鉢	〃	〃	9.1	3.8	4.9	内−ハケメ	密、小石を含む	良好	淡乳灰色	50	外面に黒斑あり
3	39	〃 壺	〃	〃	−	−	−	外−縄の押圧後、ヘラ描き沈線	密、小石を含む	良好	茶褐色	−	外面黒色
4	16	〃 高杯	〃	〃	−	8.2	−	外−細いミガキ、脚端部横ナデ	密、長石。金雲母含む	良好	淡乳灰色	脚部	
5	41	〃 〃	SB3	D-4 SB3	17.0	−	−	内外−横ナデ	密、金雲母多く含む	良好	乳茶褐色	杯部16	
6	32	〃 〃	〃	〃	18.0	−	−	内外−横ナデ	粗、小石多く含む	良好	乳白色	杯部13	
7	73	〃 〃	〃	〃	−	9.4	−	内外−横ナデ	並、雲母、粗砂若干含む	良好	淡黄褐色	脚部18	黒斑あり
8	67	〃 〃	〃	〃	−	−	−	内外−横ナデ	密	やや軟	淡黄褐色	杯部13	
9	68	〃 〃	〃	〃	−	−	−	裾部外−横ナデ、脚部内面絞り込み痕残る	密	やや軟	淡黄褐色	脚部端欠	磨耗著しい
10	43	〃 〃	〃	〃	−	−	−	脚部外−細いヘラミガキ	密、2mm以下の小石を含む	良好	乳褐色	−	脚部2段5カ所に穿孔
11	62	〃 甕	〃	〃	18.0	−	−	口縁部外−ヘラによる刺突文。頸部以下ハケメ、櫛描横線、刺突文	密、細砂を含む	良好	灰茶色	35	外面煤付着
12	63	〃 〃	〃	〃	19.0	−	−	口縁部外−刺突文、頸−ハケメ	密、細砂、雲母を含む	良好	灰茶色	13	
13	40	〃 〃	〃	〃	14.6			体部外−ハケメ、内−定方向ナデ	密、小石を若干含む	良好	茶褐色	50	
14	65	〃 〃	〃	〃	−	−	−	外−ハケメ	粗、小石を多く含む	軟	淡茶褐色	35	口縁部欠損 磨耗著しい
15	66	〃 〃	〃	〃	−	5.0	−	外−ハケメ、内−ナデ、粘土紐痕残る	粗、小石を多く含む	軟	淡茶褐色	35	磨耗著しい 外面煤付着
16	42	〃 長頸壺	〃	〃	14.2	−	−	頸部外−下半部太いヘラミガキ、内−ナデ	密、金・黒雲母、石英含む	やや軟	乳褐色	50	内面にヘラのあたり
17	72	〃 〃	〃	〃	14.4	−	−	外−ハケメ、内−指圧痕	並、金雲母を含む	やや軟	茶褐色	35	
18	64	〃 広口壺	〃	〃	17.2	−	−	口縁端部−刻み目、頸部−ケズリ	やや粗、小石を多く含む	良好	淡橙褐色	25	
19	45	〃 甕	〃	〃	−	4.2	−	底部−ナデ	やや粗、小石を多く含む	やや軟	茶褐色	50	煤付着
20	44	〃 壺	〃	〃	−	5.4	−	底部−粘土紐痕	密	軟	乳茶褐色	−	内面ヘラのあたり
21	59	〃 器台	〃	〃	19.4	15.2	17.5	裾部外−ナデのちヘラミガキ、内−強い一定方向ナデ	密、金雲母、小石を含む	良好	黄褐色	50	2段穿孔
22	18	〃 甕	SD2	C-13 SD2	15.0	−	−	口縁部内外−横ナデ。体部内−ハケメのちケズリ、外−縦ハケ	粗、2mm以下の小石を含む	軟	乳灰色	25	
23	7	〃 手焙り	〃	〃	−	−	−	外−ハケメのち沈線、扇状文、内−ナデ	粗、小石・雲母等を含む	やや軟	淡茶褐色	70	黒斑あり
24	28	〃 甕	SK6	E-5 SK6	13.4	−	−	口縁部内外−横ナデ、外−刺突文。体部外−縦ハケ	粗、小石・雲母等を含む	良好	茶褐色	50	煤付着、磨耗著しい。
25	160	〃 長頸壺	〃	〃	10.6	−	−	口縁部内外−横ナデ、外−縦方向のヘラミガキ	密、細砂含む	良好	淡黄褐色	頸部のみ	磨耗著しい。
26	30	〃 高杯	〃	〃	21.6	−	−	口縁部内外−横ナデ、外−ヘラミガキ。脚部外−ヘラミガキ、内−絞り目痕。	粗3mm以下の小石を含む	軟	乳褐色	17	磨耗著しい。
27	132	〃 〃	SB3	D-4 SB3	−	−	−	内外−ヘラミガキ	密	良好	淡茶灰色	脚部50	3カ所穿孔
28	134	〃 〃	〃	〃	−	−	−	外−ヘラミガキ、杯部内・脚部内−ハケメ。	密	良好	濃褐色	−	3カ所穿孔
29	75	〃 〃	〃	〃	−	14.8	−	脚部外−縦方向の粗いハケメの後、上半ヘラミガキ。	粗、小石を含む	軟	淡茶灰色	−	3カ所穿孔
30	130	〃 壺	〃	〃	−	2.5	−	体部外−ヘラミガキ、内−上半ナデ、下半ハケメ。	密、小石・雲母、石英含む	良好	濃褐色	75	
31	83	〃 〃	〃	〃	12.2	−	−	外−ヘラミガキ、内−ナデ、指頭痕	粗、小石を含む	並	淡灰茶色	−	
32	76	〃 〃	〃	〃	11.0	−	−	外−ナデ、内−ケズリのちナデ・頸部−ハケメ	密、雲母を含む	並	淡黄褐色	20	磨耗著しい。
33	74	〃 〃	〃	〃	13.2	−	−	口縁部内外−横ナデ。頸部内外−ハケメ。	密、2mm以下の小石を含む	良好	橙褐色	25	
34	150	〃 〃	〃	〃	−	−	−	体部外−櫛描直線文・波状文、内−ナデ。	粗、2mm以下の小石を含む	良好	淡褐色	20	
35	77	〃 〃	〃	〃	18.0	−	−	口縁部外−竹管文、内−粗いハケメ。	粗、小石を多く含む	軟	淡茶褐色	25	

第3表　遺物観察表・柘植川南部（1）

（2）遺　物

出土遺物は縄文時代から中・近世に及び、量はさほど多くない。奈良・平安時代の遺物は極めて少量であり、弥生土器が比較的多い。

縄文時代の遺物には、縄文地を太い沈線によって区画した後期の縄文土器片が数点みられる。

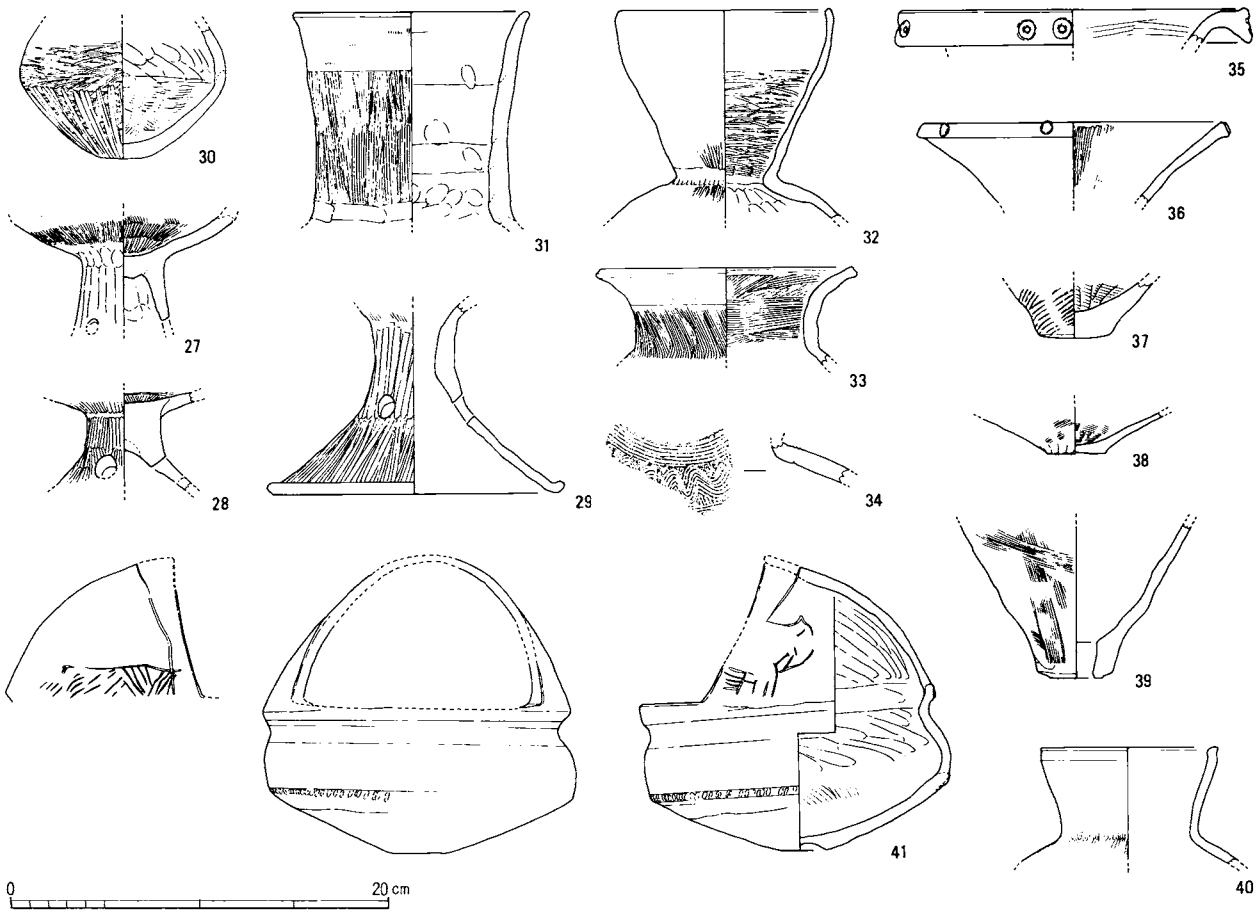
弥生土器は比較的多量に出土している。中期のものも若干含まれるが、後期のものが主流を占める。図示したものは良好な遺構の一括遺物で、器種には長頸壺・短頸壺・甕・高杯・器台や手焙形土器などがある。長頸壺（18・25・31）には、外面ハケメ調整のものとヘラミガキ調整がある。甕は、外面タタキ調整（37）は少なく、ハケメ調整が多い。また、近江型の受口状口縁を呈するもの（11・12・24）もある。高杯は、杯部に稜をもちヘラミガキを施すもの（6・8・26）が多いが、椀形のもの（5）もある。器台（21）は、受部の方が脚部より幅広く、端部に面をもち鼓形を呈する。29は、胴部がしぼみ、脚部が大きく開く。手焙形土器は、2点出土した。23は受口状口縁の鉢に覆部を付けたもので、ハケメ調整の上に、櫛描沈線や扇状文をもつ。41は覆部に線刻がみられ、やや小振りである。体部と覆部が一体に成形され、覆部背面には突帯がめぐらない。

古墳時代以降の遺物については、遺構に伴うものは僅かであり、ほとんどが包含層出土である。これらには、須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器、山茶椀、瓦器、土師質土器、貿易磁器、銅銭、土符、砥石、鉄製紡錘車がある。

須恵器には、5世紀まで遡る把手付椀（42）、6世紀の杯蓋や杯身（43・44）の小片があるほかに、飛鳥～平安時代の杯蓋や杯身（45～52）もあるが、ごく少量で細片に過ぎない。

このほか、灰釉陶器（53・54）や黒色土器（55）、土師器甕（56）などが少量ながら出土している。

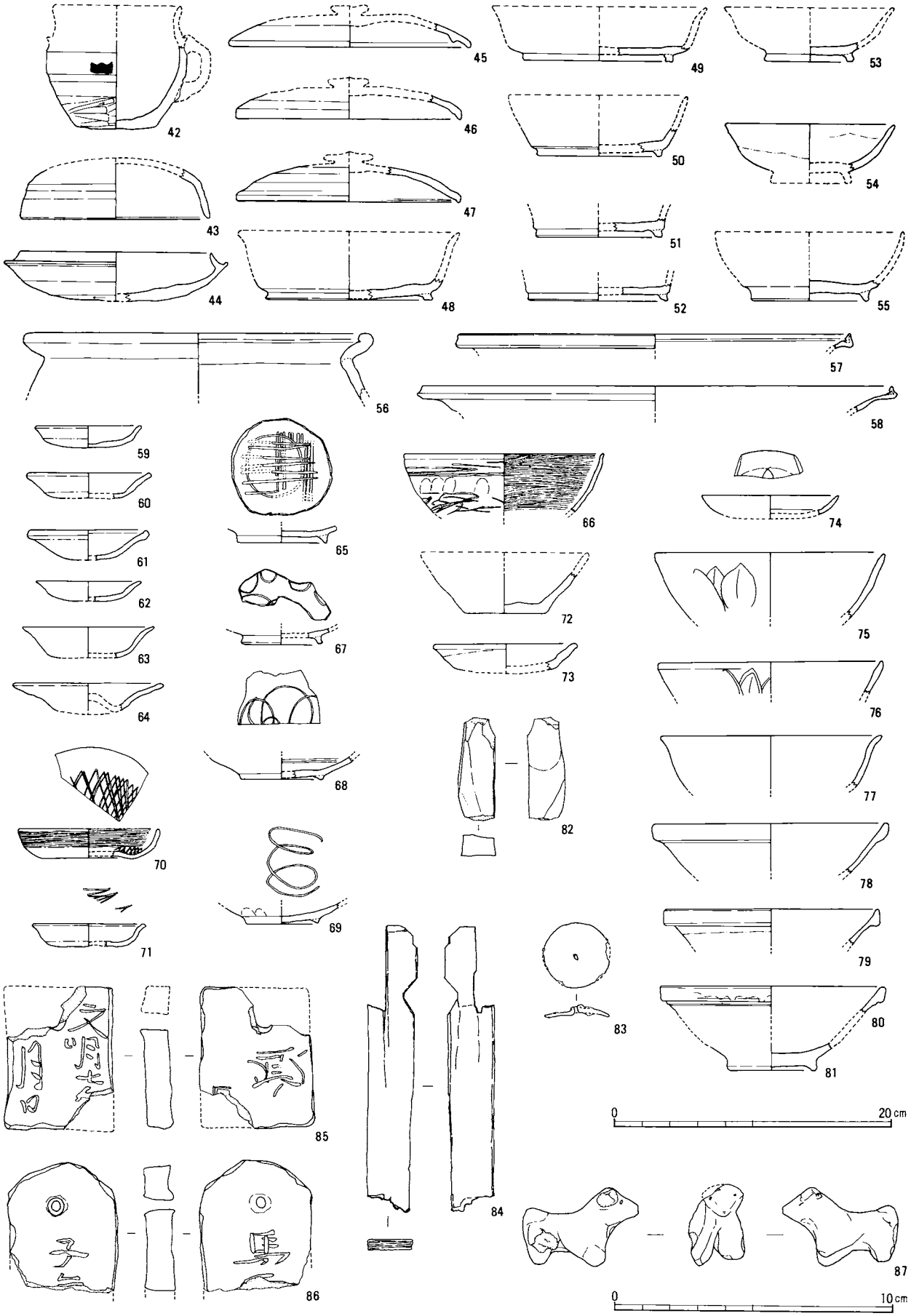
中世の遺物は、量的には弥生時代に次ぐものであるが、磨耗を受けた小片が多い。土師器には鍋（57・58）・皿（59～63）や蓋（64）があるが、量として



第7図　遺物実測図　柘植川南部（2）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
36	133	弥生土器 壺	SB3	D-4 SB3	16.4	−	−	口縁部外−円形浮文、内−ヘラミガキ。	密、小石・金雲母細砂を含む	やや軟	淡褐色	20	器台か
37	135	〃 甕	〃	〃	−	3.8	−	体部外−タタキ目、内−ハケメ。	密、3mm以下の小石を含む	良好	灰褐色	底部	
38	143	〃 〃	〃	〃	−	3.1	−	体部内外−ハケメ。	密、3mm以下の小石を含む	良好	濃茶褐色	底部	外面煤付着
39	79	〃 甑	〃	〃	−	3.0	−	体部外−ハケメ、内−ナデ。	粗、小石多く含む	軟	茶褐色	底部	底部に穿孔、黒斑あり
40	95	〃 壺	SD8	F-2 SD8	9.0	−	−	口縁部内外−横ナデ、体部外−ハケメ。口縁端部−刻目	粗、小石・雲母を多く含む	良好	明褐色	25	磨耗著しい
41	109	〃 手焙り	〃	〃	−	−	−		密、小石・金雲母多く含む	やや軟	淡橙色	75	笠部線刻
42	53	須恵器 椀	−	C-9 包含層	−	6.0	−	内外−ロクロナデ。底部外−ヘラケズリ、体部上半1条（10本）の波状文。	密、1mm以下の細砂を含む	良好	淡青灰色	底部	把手は欠損
43	52	〃 杯蓋	−	C-9 包含層	13.8	−	4.5	口縁部内外・底部内−ロクロナデ。底部外−ロクロケズリの後ロクロナデ。	密、1mm以下の細砂を含む	良好	灰色	10	
44	90	〃 杯身	−	B-4 灰黄粘土層	13.9	−	3.9	口縁部内外、底部内−ロクロナデ、底部外−ロクロケズリ。	密、2mm以下の細砂を含む	やや軟	灰色	25	磨耗著しい
45	58	〃 杯蓋	−	F-3 包含層	17.0	−	−	内外−ロクロナデ。	密、4mmの長石を含む	良好	灰色	8	内面に返り
46	121	〃 〃	−	A-5 包含層	16.0	−	−	口縁部内外−ロクロナデ、天井部外−ロクロケズリ。	粗、細砂を含む	並	淡青灰色	5	
47	1	〃 〃	−	B-7 包含層	16.3	−	−	口縁部内外−ロクロナデ。	密、3mm以下の小石を含む	良好	淡灰色	20	
48	5	〃 杯身	−	E-2 旧耕土	−	11.8	−	底部外−ロクロケズリ、他はロクロナデ。	密	良好	灰色	10	
49	2	〃 〃	−	B-7 包含層	−	10.8	−	底部外−ロクロケズリ、他はロクロナデ。	密、4mm以下の小石を含む	良好	淡灰色	10	
50	4	〃 〃	−	C-13 旧耕土	−	8.9	−	磨耗著しく、調整不明。	密	良好	淡灰色	13	磨耗著しい
51	3	〃 〃	−	B-4 包含層	−	8.9	−	底部外−ロクロケズリ、	密、1mm以下の長石を含む	良好	暗青灰色	13	
52	57	〃 〃	−	B-4 包含層	−	10.1	−	内外−ロクロナデ	やや粗、	良好	灰色	10	
53	6	灰釉陶器 椀	−	A-6 旧耕土	−	6.0	−	ロクロナデ、底部外面中央にヘラの痕跡。	密	やや軟	淡灰白色	底部	内面に淡緑の灰釉
54	112	〃 〃	−	B-2 包含層	12.0	−	−	ロクロナデ。	密	やや軟	淡灰白色	17	口縁部につけ掛け
55	96	黒色土器 〃	−	D-6 土坑	−	8.2	−	底部内外−ナデ。張り付け高台。	密	やや軟	外−淡褐色 内−黒色	底部	底部外面に三又文様のヘラ描き
56	116	土師器 甕	−	C-2 耕土	24.0	−	−	内外−ナデ	粗、小石、雲母を多く含む	やや軟	暗茶褐色	17	
57	118	〃 鍋	−	A-8 包含層	28.0	−	−		やや粗	良好	茶褐色	5	
58	117	〃 〃	−	C-5 包含層	34.0	−	−		密	良好	茶褐色	5	
59	21	〃 皿	−	C-3 包含層	7.6	−	1.6	口縁部−横ナデ、	密	並	乳白色	25	
60	24	〃 〃	−	B-7 包含層	8.8	−	1.8	口縁部−横ナデ、	密	良好	乳褐色	25	
61	103	〃 〃	−	D-2 包含層	8.6	−	2.3	口縁部−ナデ、	密	良好	明橙色	40	
62	45	〃 〃	−	C-2 包含層	7.6	−	1.5	口縁部−横ナデ。	密	良好	淡褐色	25	
63	44	〃 〃	−	C-6 包含層	9.6	−	2.2	口縁部−横ナデ。	密、3mm以下の長石を含む	良好	淡褐色	35	
64	23	〃 蓋	−	B-7 包含層	10.6	−	2.2	口縁部−横ナデ。	小石を含む	やや軟	淡橙褐色	35	
65	54	瓦器 椀	−	C-2 包含層	−	6.4	−	底部内−ヘラミガキ。	1mm以下の細砂を含む	良好	淡灰黒色	底部	内面に格子目文。円形に加工
66	48	〃 〃	−	C-2 包含層	14.5	−	−	内−ヘラミガキ、口縁部外−指圧後粗いヘラミガキ。	密	良好	黒灰色	25	
67	55	〃 〃	−	B-5 包含層	−	5.8	−	底部内−ヘラミガキ。	密	良好	黒色	35	底部に連結輪状文8個以上
68	50	〃 〃	−	C-9 包含層	−	6.0	−	底部内−ヘラミガキ。	密	良好	黒灰色	50	底部に連結輪状文4個以上
69	49	〃 〃	−	C-2 包含層	−	5.5	−	底部内−ヘラミガキ。	密	不良	黒灰色・淡褐色	底部	内部に工字文、低い高台
70	19	〃 小皿	−	A-9 包含層	10.0	−	−	底部内−ヘラミガキ。口縁部内外−ヘラミガキ	並	やや軟	淡黒灰色	25	底部内面に重複したジグザグ文

第4表　遺物観察表・柘植川南部（2）



第８図　遺物実測図　柘植川南部（３）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
71	20	瓦器 小皿	−	C-6 包含層	8.0	−	−	口縁部−横ナデ	並	良好	黒灰色	17	内面にジグザグ文
72	127	山茶碗	−	A-2 包含層	−	5.6	−		密、6mm以下の小石を含む	良好	灰白色	50	
73	113	山皿	−	C-2 包含層	10.0	−	2.2		密	良好	淡灰色	13	口縁部自然釉
74	12	白磁 小皿	−	C-2 包含層	9.8	−	−		密	良好	乳灰色	20	
75	10	青磁 碗	−	B-5 包含層	16.4	−	−	外面蓮花文	密	良好	暗緑褐色	13	
76	120	〃 〃	−	C-1 包含層	16.0	−	−	外面蓮花文	密		暗緑褐色	8	
77	11	〃 〃	−	A-10 旧耕土	15.8	−	−		密	良好	淡青灰色	13	
78	14	白磁 〃	−	C-13 包含層	16.8	−	−	口縁部玉縁	密	良好	乳灰白色	13	
79	94	〃 〃	−	B-4 耕土	15.4	−	−	口縁部玉縁、外面下半部は施釉なし	密	良好	乳緑白色	−	
80	89	〃 〃	−	B-7 包含層	16.0	−	−	口縁部玉縁、内外面薄い施釉	密	良好	乳緑白色	−	
81	115	〃 〃	−	A-4 包含層	−	6.0	−	底部外−ロクロケズリ、内−淡灰色の施釉	密	良好	淡灰白色	底部	
82	124	石製品 砥石	−	E-5 自然流路	長 7.6	幅 2.7	厚 1.6	各面とも使用痕あり					
83	156	鉄製品 紡錘車	−	D-2 土坑	径 4.7	厚 2.0	−					軸部欠損	
84	162	抉木製品	−	C-9 SD	長 21.0	幅 3.3	厚 0.8	抉り状の加工あり。				下半部欠損	
85	9	土製品 土符	−	B-4 包含層	長 5.0	幅 3.8	厚 1.0		4mm以下の小石を含む	やや軟	乳灰色	一部欠損	穿孔1カ所。文明七年銘あり
86	161	〃 〃	−	高羽根試掘 No.25	長 −	幅 3.9	厚 1.1		小石を多く含む	良好	濁赤褐色	下半部欠損	穿孔1カ所。馬、子年銘あり
87	7	〃 土犬	−	一之宮 14EC 耕土	長	幅	厚			良好	淡橙色	一部欠損	

第5表　遺物観察表・柘植川南部（3）

は瓦器椀・皿（65～71）が最も多く各時期のものがある。ほかに山茶椀（72）・山皿（73）も僅かに出土している。青磁（74～77）や白磁（78～81）の碗・皿もあるが、量的にさほど多くない。また、上野市北部を中心に出土する土符（85）が1点ある。表面に「文明七年」の年号があり、1475年にあたる。下半部の一部が欠損しており、裏面には花押と「馬」という文字を確認できる。

この他、鉄製紡錘車（83）は紡茎が欠損しているが、径4.8cmのもので、包含層出土である。

抉入木製品（84）はC－9の溝から出土した。残長21cm、幅3.3cm、厚0.8cmで、共伴遺物から古墳時代の可能性が高く、人形や木簡の可能性は少ないものと考えられる。また、長径57cmの楕円形の曲物の底部が出土している。½ほど欠損しているが、把手をもち、桜皮が4ヶ所に残っている。

2．その他の印代地区

ほ場整備事業に伴う事前の試掘調査を実施した結果、印代南方地区では、長良遺跡、新寺A遺跡・B遺跡、間田遺跡を、また印代西方地区では、高羽根遺跡を、印代北方地区では川久保遺跡を確認することができた。なお、印代集落のすぐ北側でも試掘調査を実施したが、遺構や包含層は確認されなかった。

長良遺跡は100m四方の範囲があり、最も古いものとしては縄文時代晩期の条痕文土器片やサヌカイトの剝片が出土した。遺構に伴うものとしては、土坑から多量の弥生時代後期の土器が出土した。その他、包含層出土遺物として緑釉陶器が1点あるが、平安時代の明確な遺構は検出されなかった。

新寺A・B遺跡は、ともに弥生時代の遺構や遺物が試掘調査によって確認されたもので、新寺A遺跡にかかる排水路部分では立会調査が実施され、弥生時代後期の長頸壺や高杯などの弥生土器が出土し、溝が検出された。

間田遺跡は、試掘調査によって弥生時代の遺構や中世の遺物が確認され、立会調査を実施した[2)]。

高羽根遺跡は印代・服部を通る国道24号線を挟ん

で両側に広がる遺跡である。包含層から「子年」、「馬」の文字が判別できる土符（86）が出土している。また、国道の西側では、古墳時代の土師器が多量に出土している。

川久保遺跡は低位河岸段丘上に分布する遺跡であり、中世の遺物が出土した。遺構は極めて希薄で、浅い箇所から礫層が検出された。川久保遺跡の北方の上荒堀遺跡にも遺物の散布がみられたが、試掘調査の結果、遺構は検出されず、遺物の分布密度も薄く、包含層も確認されなかった。

3．一之宮・千才地区

市道東條・一之宮・西明寺線の東側の水田地帯において、平成元年度に幅３ｍ、総延長800ｍにわたってトレンチ調査を実施した。当地区には灰黄色粘土層が分布しており、近代以降に瓦粘土として盛んに採取されている。遺構は全体に希薄であり、溝などを検出したにすぎない。遺物は古墳時代の須恵器のほか、黒色土器、瓦器、土師質土器や中世陶器などであり、奈良・平安時代の遺物は僅かであり、包含層からは土製犬（87）が出土している。

また、先述の市道東側の細長く延びる畑地にトレンチを入れたところ、幅0.5ｍ、深さ0.4ｍ程の断面台形の溝を南北方向に検出した。溝からは小片であるが土師器が出土しており、古代条里あるいは古道に伴う側溝の可能性もある。ちなみに、北方の延長線上には、柘植川北岸に国町遺跡が、南方の延長線上の服部川南岸には伊賀国分寺跡が所在している。

4．小　　結

これまで、印代地区周辺に伊賀国府が置かれていたとする説が有力であった。今回の調査により、その想定地の歴史的環境をほぼ解明することができた。

まず、印代東方遺跡では、弥生時代の遺構と中世の遺構が主で、平安時代後期の遺構を僅かに検出したに留まる。全体的に遺構は希薄であり、弥生時代になって微高地に集落が形成され、その後水田として開発が進んだことを窺わせる。

また、古代の遺物も極端に少なく、仮に中世の水田開発によって削平されたとしても全くといっていいほど痕跡が見当たらない。古代官衙を彷彿させるには遺物の質、量とも余りにも貧弱である。

印代の南、西、北においても上記と同様な様相が見られる。長良・新寺遺跡などでも弥生時代の遺構や遺物が確認されているが、奈良・平安時代の国府を想定させる遺構・遺物は皆無に等しい。高羽根遺跡でも奈良・平安時代の遺物は見当たらない。川久保遺跡のある一段低い地点は、旧河川の流路であったことが地形的に読み取れ、氾濫原の一部に中世以降の生活の跡が僅かに残されているに過ぎない。

一之宮・千才地区では、整然と条里制地割が展開しており、遺構・遺物が希薄な点から古代の比較的早い段階から水田開発が行われていた可能性が高く印代地区と同様に古代官衙の痕跡は見当たらない。

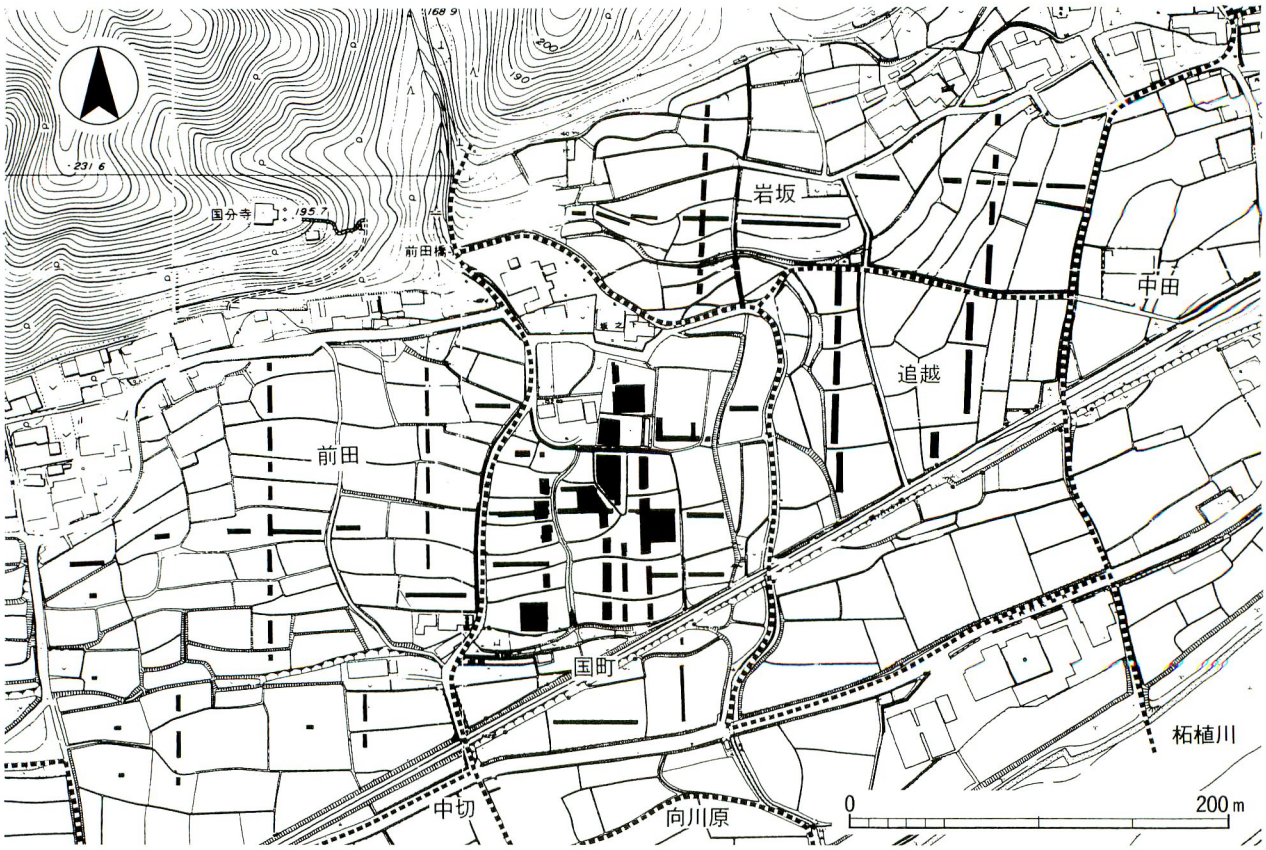
以上の点から、柘植川南部の印代・一之宮・千才地区に古代官衙が造営された可能性は皆無に等しい。今回の発掘調査が国府位置の確認という性格をもったものであり、調査範囲や調査地点からみても、これまで想定されていた柘植川南部の印代周辺の地域には、伊賀国府跡は所在しないとの結論を下さざるを得ない。

註　1）『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告第１分冊』三重県埋蔵文化財センター、1991.3
　　2）　同　上

Ⅳ．柘植川北部の調査

柘植川北部の調査は、大字外山（小字－中田・岩坂・追越）、坂之下（小字－国町・前田ほか）で実施した。川の北部は標高145ｍ前後の平野部と、その北に比高約５ｍの段丘が見られ、遺構を検出したのは、段丘上の平地である。平地は南北幅約200ｍあり、西側の大字東条では丘陵が張り出すために途切れ、東側は大坪遺跡へと連なる。畦畔の方向は、西の前田・国町地区ではほぼ東西方向であるに対し、東では現地形と同じ東南方向の畦畔となっている。

調査地区表示は、小字別（第９図）に東から中田＝Ａ地区、岩坂＝Ｂ地区、追越＝Ｃ地区、国町＝Ｄ地区、前田＝Ｅ地区とし、その地区毎に大きく水田・畑が区画される範囲で中地区（各字別調査地区の中の……で囲まれた地区）、さらに個別の水田・畑単位に数字（小地区）を与えて地区表示とした。このうち中田（Ａ地区）は試掘調査を行ったが、遺構はほとんど検出されていない。以下、地区別に遺構を、遺物についてはまとめて時期別に記述する。



第９図　柘植川北部調査区位置図（1：4,000）

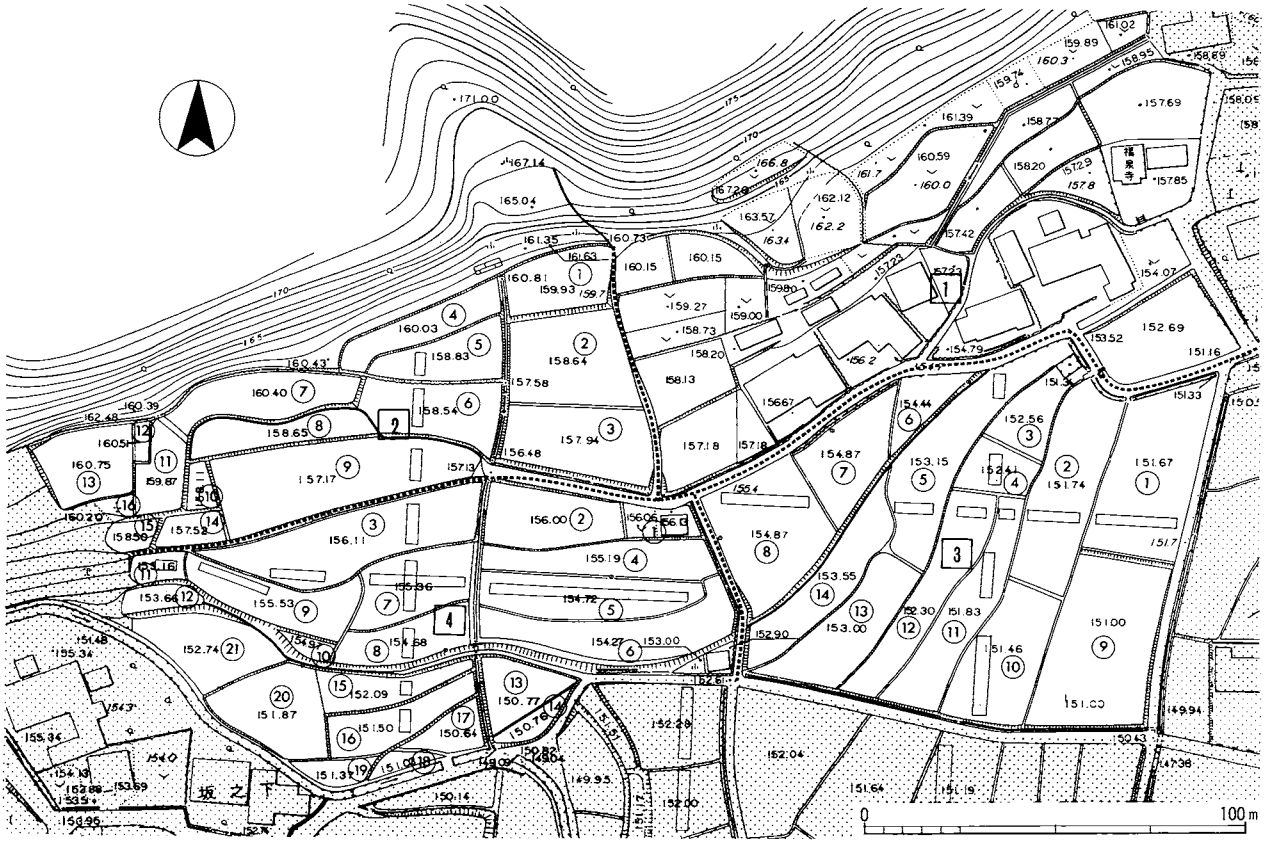
１．岩坂地区

岩坂地区（Ｂ地区）は国町地区の北に位置し、北側には丘陵が迫る。北端の水田の標高は約160ｍ、南は約150ｍとかなりの標高差がある。地区表示は第10図のとおりで、東のＢ３地区と西のＢ２・４地区に十文字にトレンチをいれて調査を実施した。

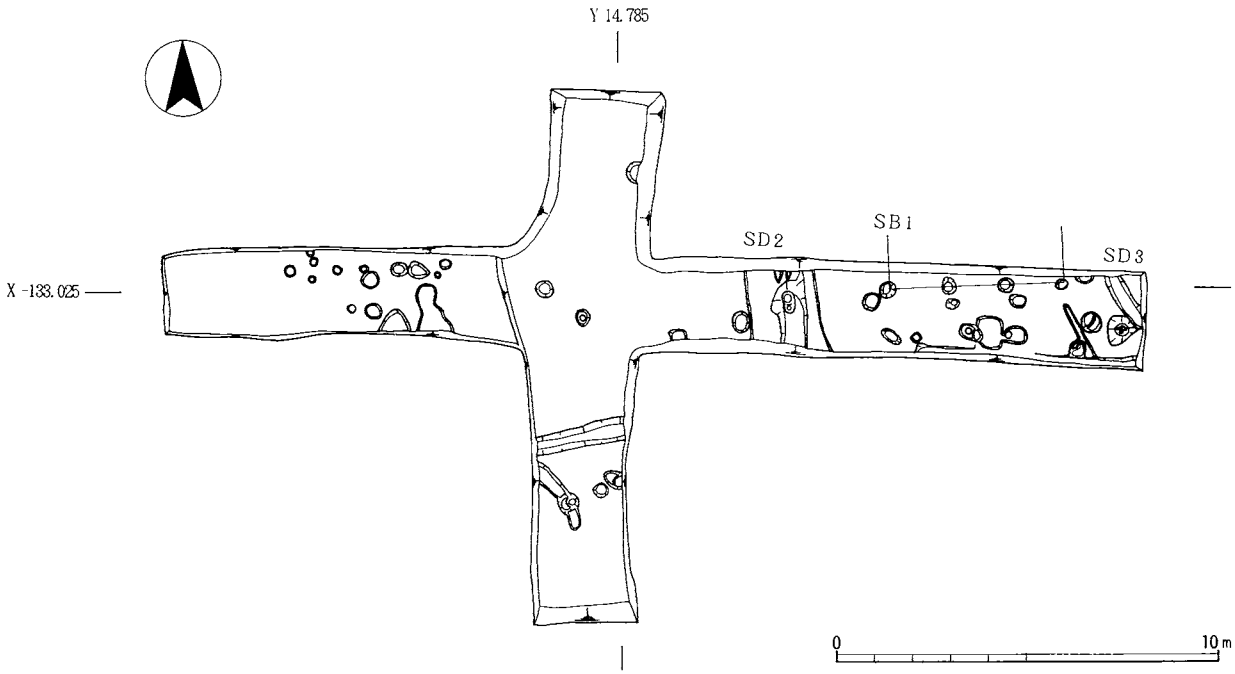
遺構は、北側のＢ２地区と東側のＢ３地区では確認していない。西側のＢ４地区は遺構面までの深さは１ｍで、Ｂ４－４地区のトレンチ西部で土坑・柱穴、Ｂ4-7地区では柱穴・溝等を検出した。Ｂ４－７地区の掘立柱建物ＳＢ１は、東西２間、柱掘形は径0.3ｍの円形を呈する。棟方向はE－０°－Nで、時期は不明である。その他、ＳＤ２・３などの混入の可能性が高い弥生時代の遺物を少量出土する溝を検出した。遺物は、縄文時代と弥生時代～古墳時代初頭

にかけてのものを少量、古墳時代～平安時代にかけてのものを多く出土した。ＳＤ３からは弥生時代後期の甕（７）、Ｂ４－４調査区西部の包含層から６～７世紀と思われる土師器の甕（48）やＢ４－７調査区の包含層から円面硯（442）が出土した。

岩坂地区の内、遺構を確認したのはＢ４－４からＢ４－７にかけての地域である。この地域は後で述べる国町地区の北に隣接し、遺構が少なく地形的には条件が良くないが、円面硯の出土などから国庁に附属する施設の存在も類推される地域である。



第10図　岩坂地区調査区位置図（1：2,000）



第11図　Ｂ４－７調査区遺構配置図（1：200）

2．追越地区

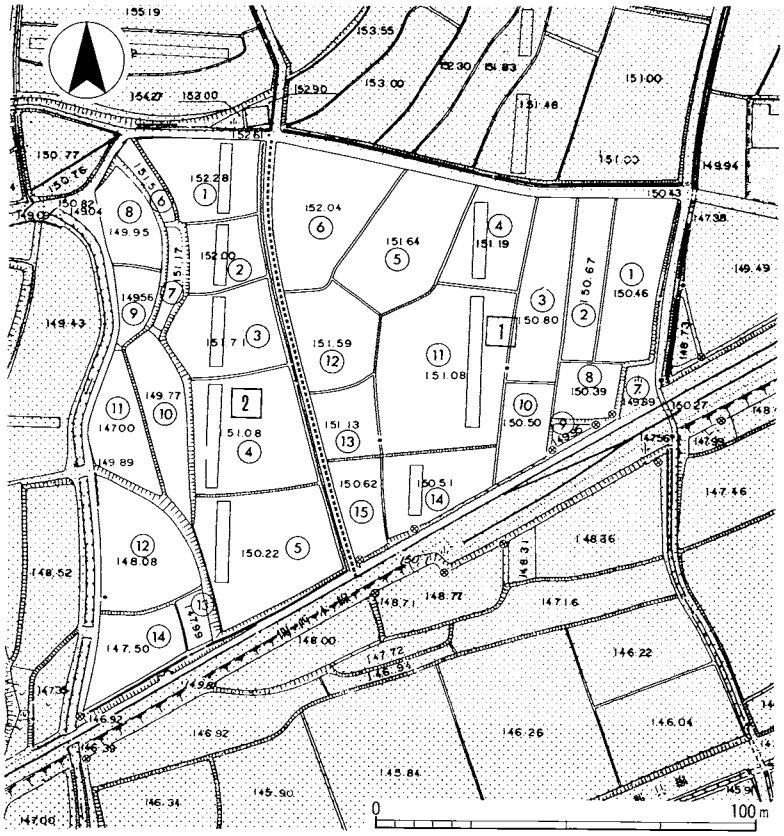
追越地区（Ｃ地区）は国町地区東の国町川を挟んだ地区で、北は岩坂地区である。北側水田の標高は152ｍ、段丘縁辺部の標高は約150ｍと、東南に向かってなだらかに傾斜する。地区表示は第12図の通りである。

平成２年度にＣ１地区とＣ２地区に幅３ｍの南北トレンチを約100ｍの間隔で設定し、調査を実施した。基本層位は北側では耕土、床土のみで、南側では瓦器を含む包含層が若干認められる。遺構検出面までの深さは概ね0.3～0.8ｍほどで、それぞれの水田の北側では浅く南側が深くなっている。

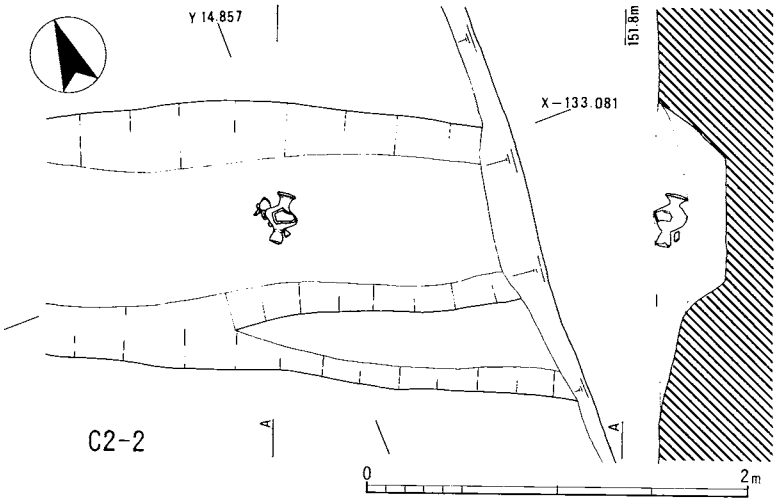
検出した遺構は、弥生時代中期から鎌倉時代までのものがあり、北側の岩坂地区に近い所では遺構密度が薄く、南の河岸段丘縁辺部にいくほど多くなる。

遺物は、縄文時代から鎌倉時代までのものがあるが、古墳時代の遺物が最も多く出土した。

なお、掘立柱建物の柱穴からは５世紀後半の須恵器などが多く出土し、時期判断を困難にしているため、掘立柱建物については一括して記述する。



第12図　追越地区調査区位置図（１：2,000）



第13図　ＳＤ13遺物出土状況（1：40）

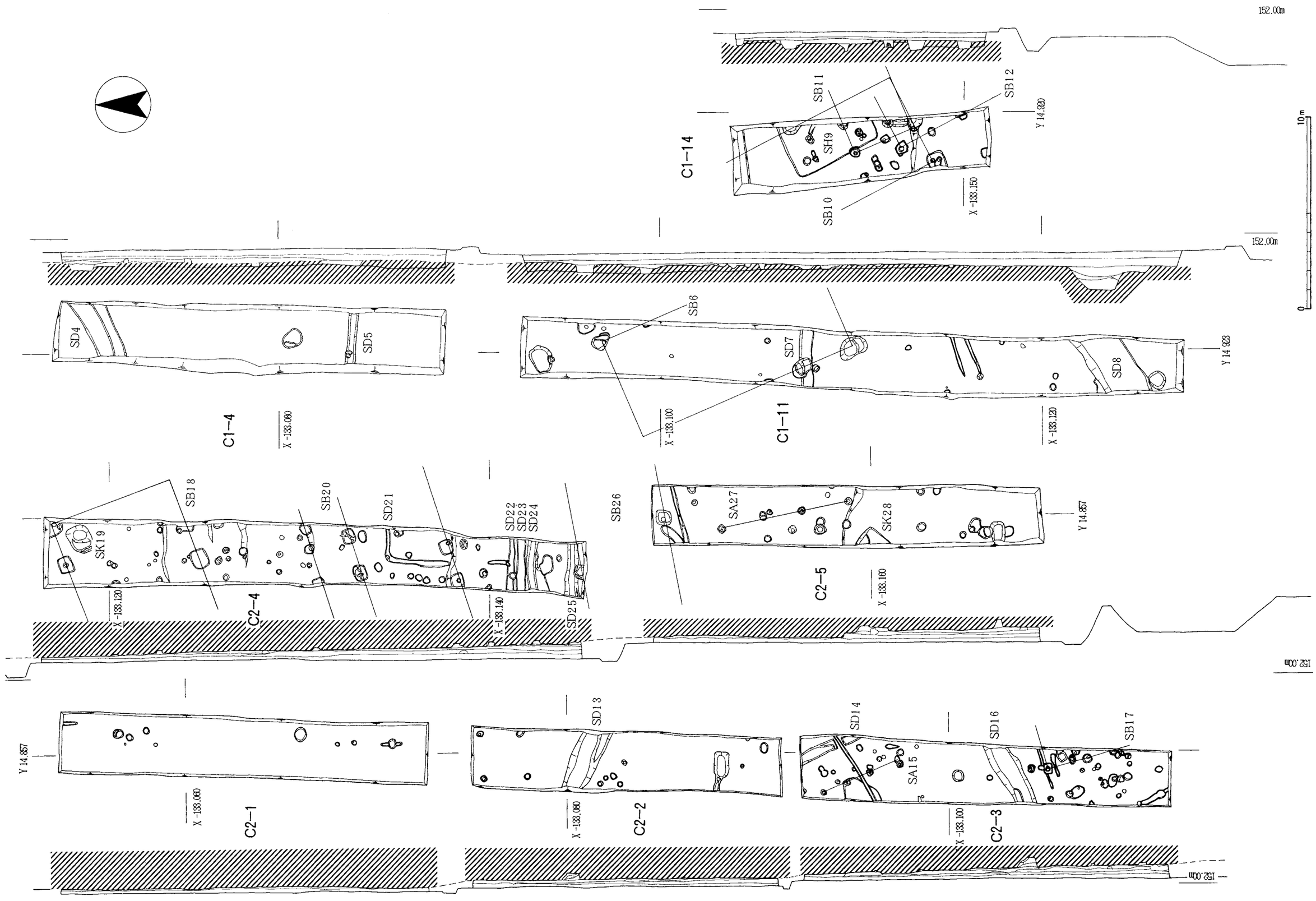
（１）弥生時代の遺構

西のＣ２－２調査区で検出したＳＤ13（第13図）があるのみである。幅1.4ｍ、深さ0.4ｍの規模で、東南の方向に流れる。弥生時代中期のほぼ完形の台付細頸壺（４）と、甕（５）の破片が若干出土している。溝の延長部にあたる東のトレンチで検出していないため、方形周溝墓の可能性が強い。

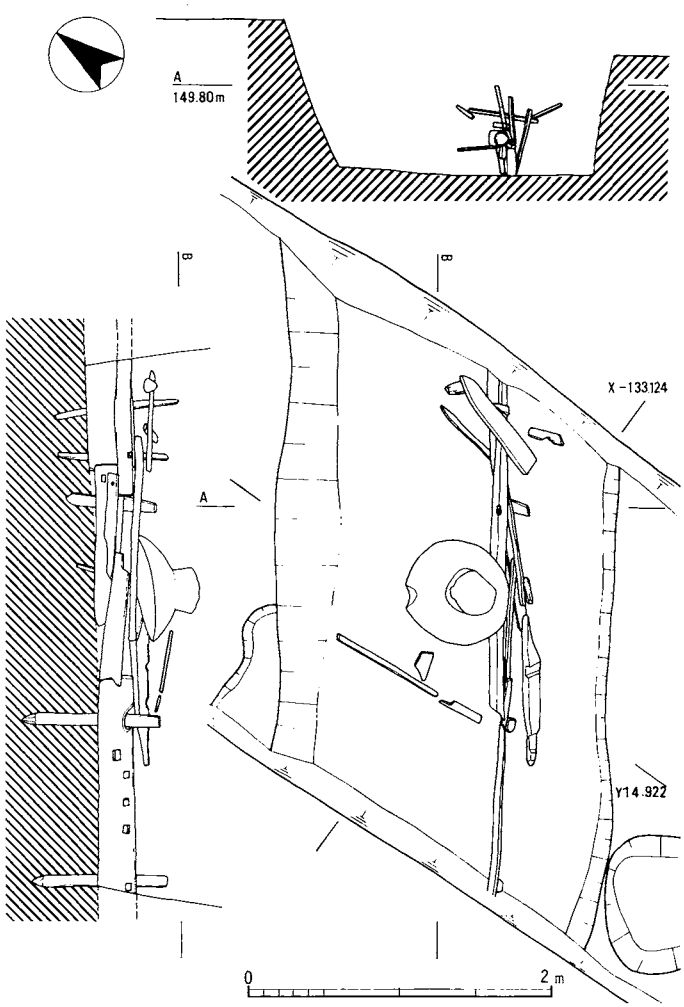
（２）古墳時代の遺構

ＳＨ９（第17図）　東のＣ１－14調査区にあり、方形を呈し、西半分を検出した。方位はN－27°－W、南北辺3.7ｍ、深さ0.2ｍの規模である。竈・周溝などは検出していないが、各隅から約0.2ｍ離れた位置で直径0.4ｍ、深さ0.2ｍの支柱穴を二つ検出した。出土した遺物は、土師器杯（８・９）・甕（10）のほか、須恵器杯の破片が少量あるだけである。須恵器からＴＫ23～47号型式[1]と思われる。

ＳＤ８（第15図）　Ｃ１－11調査区南側にあり、幅2.3ｍ、深さ1.0ｍの規模の溝で、西南の方向に流れる。溝底のやや南側に建築部材を転用して、先を



第14図　追越地区遺構平面図（1：200）



第15図　ＳＤ８遺物出土状況（１：50）

尖らせた矢板を打ち込み、板材を矢板の北側に土留め（551～557）として並べている。堆積の状況から、素掘りの溝を改修して使用したものと思われる。遺物には、土師器（18～23）、須恵器（24～30）や、衣笠状木製品（558）などがある。

（３）飛鳥時代の遺構

溝が３条ある。追越地区内を区画する溝の可能性があり、溝と掘立柱建物とは方位が近似し、関連を窺うことができる。

ＳＤ４　Ｃ１－４調査区北で検出した、幅1.0ｍ、深さ0.2ｍの溝である。埋土からは木簡（538～543）のほか、子持勾玉（524）が１点出土している。南に幅0.5ｍ、深さ0.1ｍの溝が重複する位置にあるが、遺物はなく別の遺構か堆積の差かは判断し難い。ＳＤ４を西に延長する位置にはＳＤ16が見られ、同一の溝になる可能性が強く、方位はE－26°－Nに復原できる。子持勾玉は他からの混入品と思われる。

ＳＤ14　Ｃ２－３調査区の東北部にある幅0.6ｍ、深さ0.3ｍの南北溝である。溝の方位はN－20°－W前後で、掘立柱建物の方向と近似する。遺物は少なく、北のＣ２－２調査区では確認していない。

ＳＤ16　ＳＤ14の南にある、幅1.2ｍ、深さ0.6ｍの東西溝である。出土した遺物（35～39）から見ると、７世紀前半には埋没している。

（４）その他の遺構

ＳＤ７　Ｃ１－11調査区中央にある、幅0.6ｍ、深さ0.2ｍの東西溝で、遺物は出土していない。掘立柱建物ＳＢ６より古い。

ＳＫ19　土師器、瓦器が出土している。瓦器は山田編年のⅢ－１期で13世紀にあたる[2]。

ＳＤ21～25　出土した遺物は少ないが、ＳＫ19同様13世紀代の範疇に入るものである。

ＳＫ28　Ｃ２－５調査区中央西壁にあり、南北1.8ｍ、東西は調査区外に延びるため、１ｍ以上の三角形を呈する。竪穴住居のコーナー部分の可能性もある。土師器、須恵器が少量出土した。

（５）掘立柱建物について

Ｃ１－11調査区では、１棟検出した。

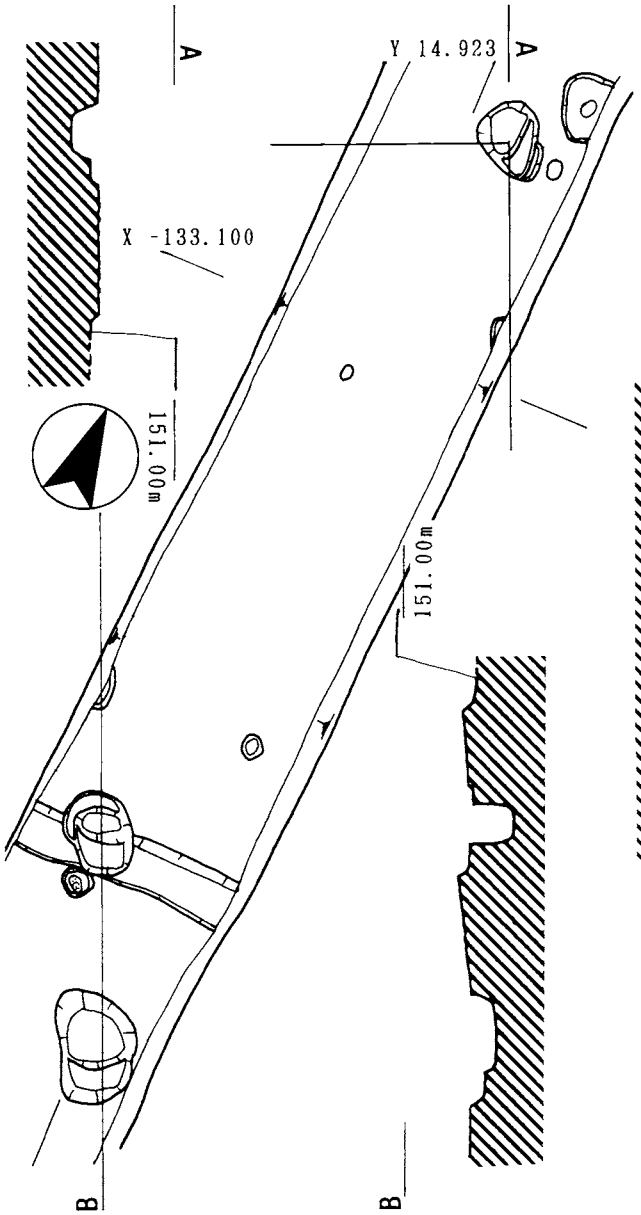
ＳＢ６（第16図）　梁行２間、桁行５間以上に復元できる南北棟である。柱掘形は同一柱掘形内の北側が深く２棟重複する様相を呈するため、同一場所での建て替えの可能性がある。ＳＤ7より新しい。

Ｃ１－14調査区では、３棟（第17図）検出した。

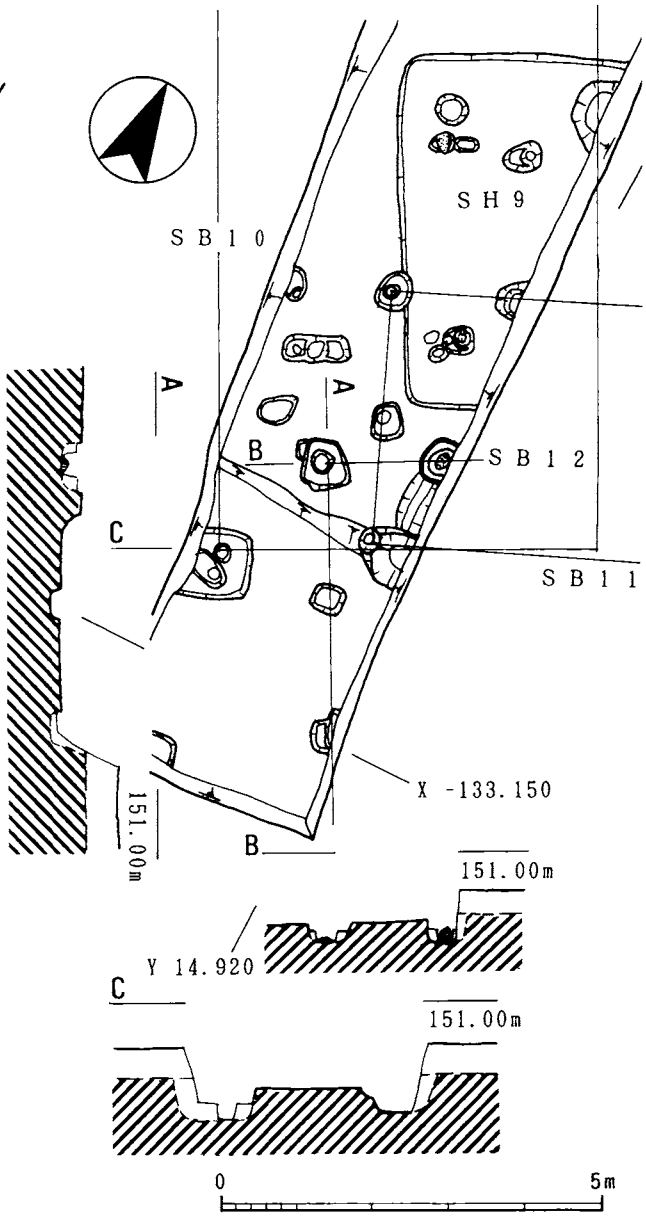
ＳＢ10　トレンチ南の両壁際とＳＨ９と重複する位置で検出した。東西２間、南北２間以上で、柱掘形は、径0.7ｍ、深さ0.4ｍの方形を呈する。

ＳＢ11　梁行２間、桁行１間以上の東西棟である。北側柱は竪穴住居ＳＨ９と南隅柱はＳＢ10と重複しており、共にＳＢ11が新しい。柱掘形は径0.5ｍ、深さ0.2～0.4ｍの円形を呈する。

ＳＢ12　南北２間、東西２間以上の規模で、棟方向は不明である。北側柱列には、径約20cm程度の残りの悪い柱根が残存する。柱掘形の大きさは、北側柱列のものが一辺0.5ｍ、深さ0.4ｍの方形を呈するのに対し、妻柱は一辺0.4ｍとやや小さい。南側柱は、東壁付近で一部を検出したのみである。



第16図　ＳＢ６遺構平面図（1：100）



第17図　Ｃ１－14調査区遺構平面図（1：100）

Ｃ２－４調査区では、２棟検出した。

ＳＢ18（第18図）　トレンチ北側で、東西方向に並ぶ柱掘形を２列検出した。南北間の距離からみて、南北３間、東西は３間以上である。

ＳＢ20（第19図）　ＳＢ18の南にあり、南北３間、東西２間以上の東西棟で、北側に廂を持つ。柱掘形は廂が径約0.5ｍ、深さ0.3ｍであるのに対し、桁行の柱掘形は一辺約0.8ｍ、深さ0.4ｍと大きい。北桁柱列西柱穴から、馬歯（ＰＬ26）が出土した。

Ｃ２－３調査区では、１棟と柱列１条を検出した。

ＳＢ17　トレンチ南東部で検出した、南北２間以上の建物である。柱掘形は、北側から0.4×0.6ｍの隅丸方形と径約0.5ｍの円形の二つの柱穴で、深さはいずれも0.3ｍ程である。

ＳＡ15　南北３間で、柱掘形は径0.3ｍ、深さ0.3ｍの円形を呈する。

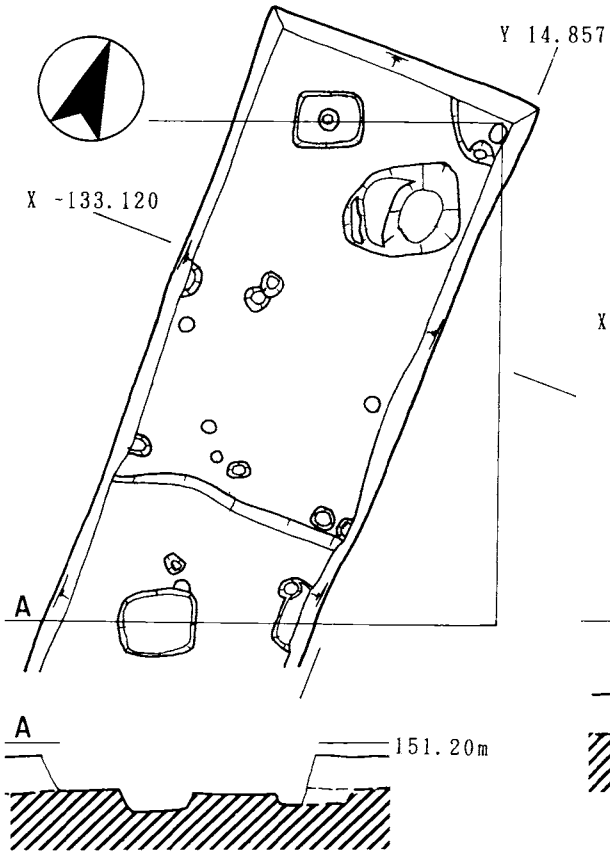
Ｃ２－５調査区では、１棟と柱列１条を検出した。

ＳＢ26　調査区北端の一辺0.8ｍ、深さ0.15ｍの方形を呈する柱穴と、北側のＣ２－４調査区南端のほぼ同規模の柱穴で想定した建物である。

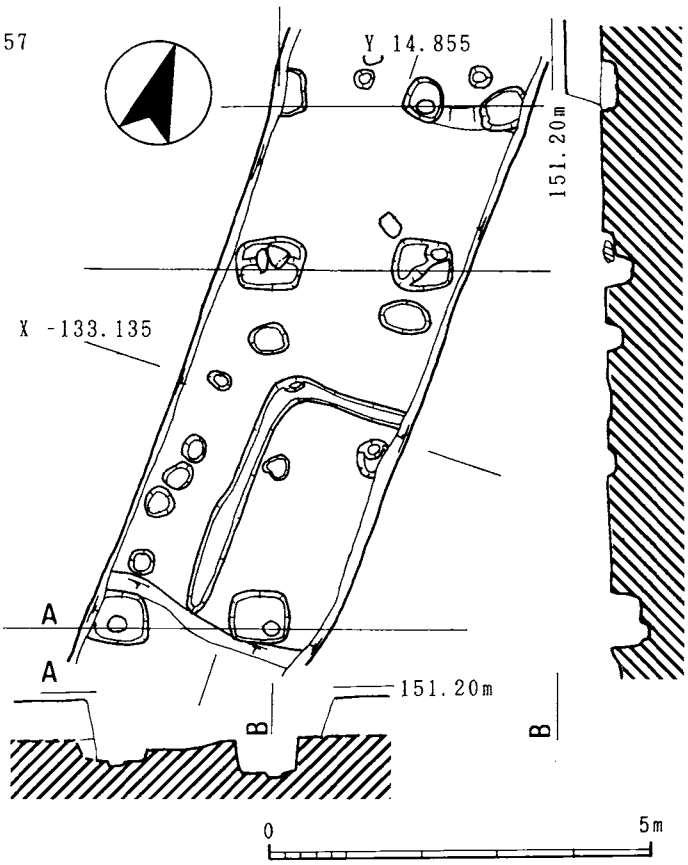
ＳＡ27　３間分検出した。柱掘形は径0.4ｍ、深さ0.2～0.3ｍの円形で、建物になる可能性も残る。

（６）小結

掘立柱建物の時期は、上限として５世紀後半のＳＨ９より新しいＳＢ10・11でその一端が窺え、奈良・



第18図　ＳＢ18遺構平面図（1：100）



第19図　ＳＢ20遺構平面図（1：100）

遺構番号	規　模	棟方向	桁 行(m)	梁 行(m)	柱間寸法（m）		時　期	備　考
					桁　行	梁　行		
SB 6	(5) × 2	N23°W		5.4	2.4	2.7		2棟重複か
SB 10	(2) × 2	N27°W		5.0	－	2.5		SH9より新
SB 11	(1) × 2	E23°N		3.4	1.7	1.7		SB10より新
SB 12	(1) × 2	E28°N		3.6	1.6	1.8		
SB 17	×(2)	N16°W			－	2.2		
SB 18	(3) × 3	E20°N		6.6	2.2	2.2		
SB 20	(2) × 3	E18°N		6.9	2.1	(2.4)		廂柱間2.1m
SB 26	(1) × 2	E12°N		4.6	－	(2.3)		
SA 15	3	N23°W		4.2		1.4		
SA 27	3	N12°W		6.9		2.3		

第６表　追越地区建物規模表

平安時代の遺物が柱穴より出土しないこと、同時期の遺構も調査区にほとんど見られないこと、方位の近似するＳＤ16が７世紀前半に埋没していることなどから、下限の一端を類推することができる。ＳＤ８から出土した建築部材などから、５世紀後半に周辺に掘立柱建物が存在したことは間違いないが、建物の時期を断定することは出来なかった。ここでは建物の時期は、５世紀後半から７世紀前半と幅広く考えておく。

追越地区の調査はトレンチ調査のため不明な点が多いが、古墳時代の竪穴住居を中心とする集落と掘立柱建物、方位を同じくする溝、木簡の出土など奈良時代以前の大規模な集落が存在することが明かとなった。竪穴住居は東の外山大坪遺跡などでも同様に検出しており、背後に造営された古墳群や御墓山古墳との関係が、掘立柱建物については、時期・規模など不明な点が多いが、国府の成立した基盤との関係で注目される地域である。

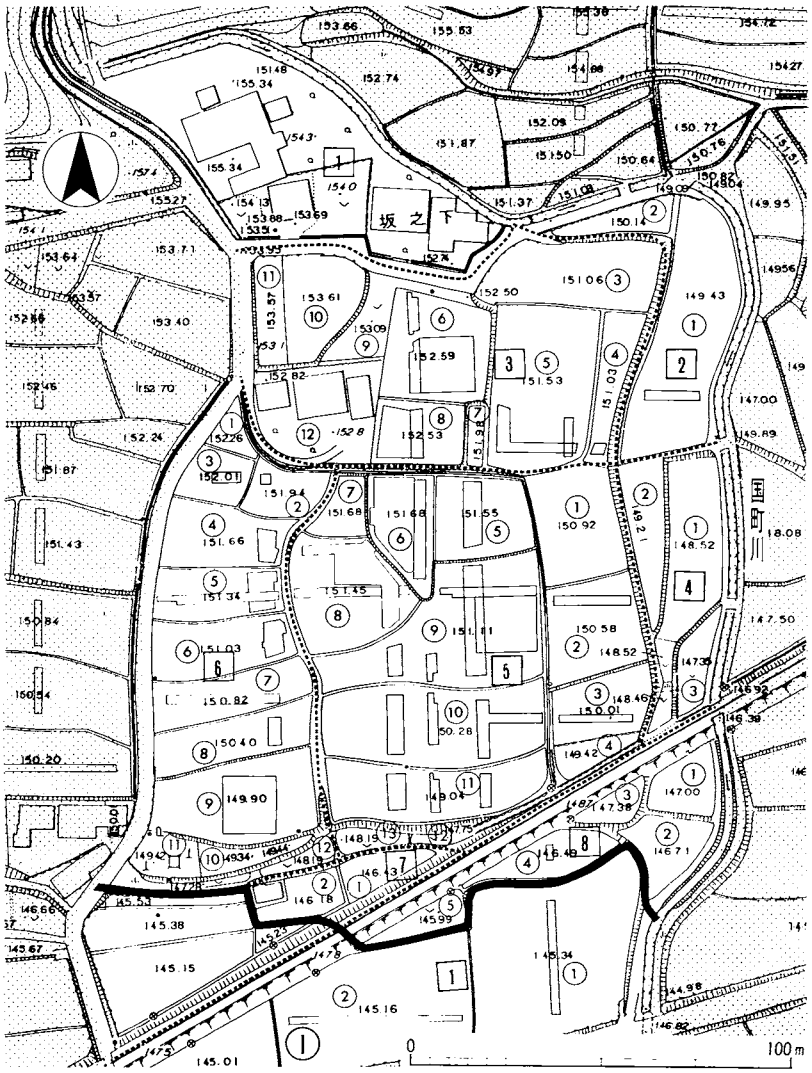
註１　田辺昭三『陶邑古窯址』平安学園考古クラブ　1966
　２　山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中世土器の基礎研究Ⅱ』中世土器研究会　1986

3．国町地区

丘陵背後から流れ出る国町川が、あたかも人為的に付け替えたような様相を呈して逆L字状に国町地区の西を巡る。平成元年度（調査面積約570m²）と2年度の調査（同約650m²）で、脇殿と考えられてた南北棟2棟が検出されている。今回の調査は、中軸線上に位置する正殿、南門等の施設を検出すること、脇殿の規模を明らかにすることを目標とし、1,700m²を調査した。南の水田部分については、南北と東西のトレンチを設定したが、遺構は確認できず、遺物も出土していない。

現地形は、国町地区北のD3－5地区は標高151.5mで、その西は一段高くなっており標高約153.6～152.6mである。D5－6地区は標高151m、台地南端では149mと柘植川に向かってなだらかに傾斜し、台地下の水田は標高145m程である。

遺構面までの深さは、それぞれの水田の北側で0.3m、南側では0.7～0.8mと深くなる。基本的な土層は、水田の北側では大半が耕土と床土のみであるが、南側には包含層が堆積する。



第20図　国町地区調査区位置図（1：2,000）

時期		掘立柱建物（政庁域） 正殿	前殿	西脇	東脇		（政庁域外）	土坑	溝
古墳							SA1025	1003	1043・1104
奈良後期～平安初期		1056	1065	1084 1085	1075 1070	SA1052 SA1091	1001・1002・1015・1020	1034 1011	1010・1053・1087・1098・1099
平安前期	前半	⋮	⋮	⋮	⋮		1021・1105・SA1040	1008・1076・1086	1028・1087・1088
	後半	1055	1066	1095	1073		1016・1047	1009・1018・1019・1023 1030・1033・1035・1046	1029・1031・1032
	不明						1102		1024
平安中期		1060		1090	1071	P1074 P1078	1022・1100 P1026	1006・1007・1012・1017 1051・1067・1068・1077・1083	1005・1038・1050・1069・1080・1081・1082・1092
平安後期		1062 1059			1072	(SD1063)		1013・1014・1054・1057 1061・1064・1101	1044・1045・1103
鎌倉									1039・1041・1042・1048・1049
不明		SA1058		1096 1097		SA1089	1037・1093・1094		1079

第7表　国町地区時期別遺構一覧表

検出した主な遺構は、5世紀後半のものを若干検出した以外は、奈良時代後半から瓦器出現前後の平安時代後期のものが中心である。以下、古墳時代、奈良時代後半から平安時代初期（8世紀末から9世紀初め）、平安時代前期（9世紀）、平安時代中期（10世紀）、平安時代後期（10世紀末～11世紀）の時期に分け、建物については政庁域内と政庁域外（外郭）の建物に分けて既述する。なお、遺構について主要なものは本文中に記載したが、その他のものについては付図の国町地区遺構平面図（1：200）を、また、建物規模などについては、第8表（P49）を参照されたい。

（1）古墳時代の遺構

古墳時代の遺構・遺物は、北の岩坂地区から続くD3地区と東南部のD5－3地区で主に検出した。遺物から見て、5世紀後半から6世紀初頭にかけての時期が中心である。

SA1025（第32図）　D5－9東調査区の南側にある、北東から南西方向に延びる柱列である。東のD5－2、西のD5－9西調査区の柱列延長上でも柱穴が多数あり、国町地区を横断する柱列の可能性も残る。柱穴は径0.6m程度の円形で、ここでは8間分を確認した。遺物はほとんど出土していないが、柱列の方向が国町地区で検出した他の建物と異なり、古墳時代の溝や追越地区の建物の方向に近いことから、追越地区の建物同様に、5世紀後半から7世紀までと幅広く時期を考えておく。

SK1003　D3－6地区の平成2年度調査区の西南にあり、南北5.5m、東西は2m以上、深さ0.2mの方形を呈する土坑である。平面形態から見て、竪穴住居になる可能性もある。

土師器椀（42・43）、甕（44・45）が出土しているが、明確な時期は判断し難い。6世紀代に入るものかと思われる。

SD1043（第31図）　D5－3地区の東西トレンチで検出した。幅1.1～1.3m、深さ0.5mの東北から西南の方向に流れる斜行溝である。

埋土から土師器椀（11・12）・高杯（13）・甕（15～17）、須恵器杯（14）・甕等が少量出土している。須恵器は、5世紀後半のTK23号型式に比定できる。

SD1104（第29図）D6－9調査区の東南にあり、幅0.8～1.5mの斜行溝である。SB1105より古く、一部を断ち割り、深さ0.3mであることを確認した。建物より古く、奈良時代以前の遺構と言えるが、遺物が出土していないために時期は断定できない。

（2）奈良時代から平安時代初期の遺構

遺物の中には奈良時代に属するものが一部見られるが、遺構から出土したものが少なく初現の時期を確定することが困難である。奈良時代の前半の遺物はほとんど出土していないため、奈良時代前半まで遡る可能性は低いものと考えられる。この時期の建物から出土する遺物のうち時期の明確なものには、8世紀末から9世紀初頭にかけての平安時代初期のもので、建物自体は平安時代前期前半まで一部存続する可能性がある。

平成3年度の調査は、平成元年度で検出したSB1085と2年度で検出したSB1020を東西の両脇殿と当初考え、その中軸線上、特にD5－8地区では正殿、前殿、後殿のいずれかの建物が検出できるように、広めの調査区を設定して調査を開始した。D5－8北側とD5－6西側で約3m間隔に並ぶ柱列を多数検出したが、更に調査区の西側に延びるため、D5－8北側で調査区を一部西に拡張して建物の規模を確認することとした。この結果（第21図）、柱間がほぼ3m等間の正殿に相当する建物を4棟以上、前殿2棟を検出した。後殿に該当する建物は、なかったものと思われる。建物は一部のみを確認したものが多く、後述する脇殿の建物にしても、全体が判明したものはない。そのため、今後の調査で遺構の把握が出来るよう、柱穴の断ち割り等はできるだけ避けた。

政庁域の建物

正殿SB1056、前殿SB1065、西脇殿SB1084・1085、東脇殿SB1070・1075、掘立柱塀SA1052・1091がある。

SB1056（第21図）SB1056は、D5－8調査区北側のSB1055の柱穴立割りを2ケ所で行った際、その断面の下層で確認した。D5－6調査区の東北隅の柱穴は、当初SB1055の北廂部分の東から2番目と考えていたが、SB1055北廂部分の東隅柱穴と

思われるものは浅く、柱穴と断定するには至らなかったため、断面下層で確認したＳＢ1056の東北隅の柱穴と考えた。

ＳＢ1055とほぼ重複する位置であるため、東西５間、南北についてはＤ５－６調査区とＤ５－８調査区の柱穴間の距離が約９ｍあることから、南側に廂のつく５間×３間の建物が想定できる。

ＳＢ1065（第21図）　Ｄ５－８調査区の西南側にある、東西３間以上、南北２間の東西棟である。柱筋は北のＳＢ1055・1056に揃う。柱掘形は一辺1.2ｍの方形で、調査区西の北側柱を立割り、深さ0.7ｍであることと、後述するＳＢ1062・1066より古いことを確認した。埋土は、黄褐色土である。前殿に相当する建物で中軸線が正殿と同一と考えるならば、桁行３間、梁行２間の規模に復原することができる。

ＳＢ1085（第23図）　Ｄ６－５・６－６調査区で検出した４間×２間の南北棟で、西脇殿に相当する。柱掘形はＤ６－５調査区のものは一辺0.8～1.0ｍ、Ｄ６－６調査区では一辺1.0～1.2ｍの方形を呈し、深さは約0.6ｍの規模である。柱根は、西側柱列の北側（559）や北から３・４番目、南妻柱等に残っていた。ＳＢ1090より古く、南西隅柱から土師器椀（398）、須恵器杯（402）、南妻柱の柱痕跡上面で土師器杯(399・400)、黒色土器椀（401）などの遺物が出土した。

ＳＢ1084（第23図）　ＳＢ1085の北に位置し、棟方向はＳＢ1085と揃える。西南隅の柱穴はＳＢ1085の西北隅の柱穴から２間目の位置にあたり、当初はＳＢ1085が北に更に延びるものと考えていた。しかし、その間の柱想定位置では、平面精査および立割を行ったが柱穴は検出できなかったため、ＳＢ1085とは別の建物と判断せざる得なかった。２間×２間の規模として復原したが、妻柱の未確認など問題の残る建物である。西北の柱掘形は東西1.6ｍ、南北1.3ｍの隅丸方形で、深さは0.8ｍである。この柱穴内には径42～47㎝、残存高約80㎝の柱根（560）が残っており、土師器（395・396）、須恵器（397）等の遺物が出土した。

ＳＢ1070（第25図）　ＳＢ1070の位置するＤ５－８調査区の東南は、東脇殿の推定位置にあたる。ここは４棟以上の建物が重複していることや、建物として復元していない柱根の残る柱穴もあることなど、東脇殿を考える上で問題の多い地区である。最も古い建物と考えられるＳＢ1070は、西側柱列を３間分検出した。西脇殿のＳＢ1085と対象位置にあるが、調査区内では、北妻柱及び西北隅柱は確認していない。北から３番目の柱掘形埋土から完形の土師器椀６個体（384～389）が集中して出土したほか、北から４番目の柱穴からは土師器椀（390・391）・皿（392）が出土した。

ＳＢ1075（第25図）　ＳＢ1070の北に想定した建物で、西のＳＢ1084に対応するものである。Ｄ５－６調査区の南端とＤ５－８調査区南端で検出したもので、柱掘形は一辺0.8～1.0ｍの方形を呈する。

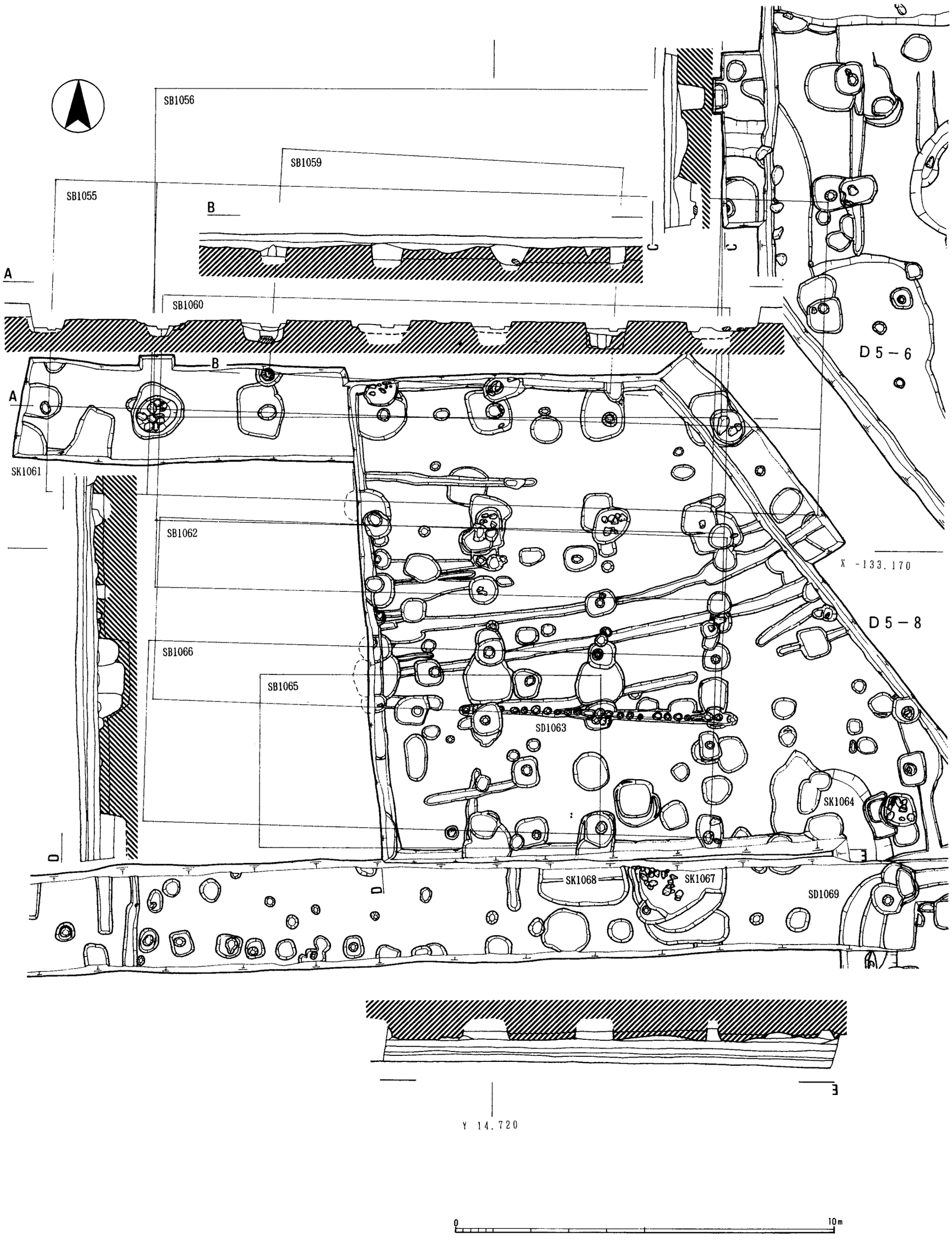
ＳＡ1052（第26図）　Ｄ５－６調査区の北側で、東西３間分を検出した。柱掘形は一辺0.8ｍの方形で、東の柱穴を立割り、深さ0.5ｍであることを確認した。平成元年度の南北トレンチでは、東壁に沿って南北にほぼ等間隔に並ぶ柱穴を多数検出しており、北端のものは塀東北隅の柱穴にあたるものと思われる。この位置で東西方向の塀がＬ字状に南に折れ曲がる可能性が高い。塀東端から東１間目の柱想定位置では、柱穴を確認していない。

ＳＡ1091（第23図）　Ｄ６－５調査区にある南北３間以上の掘立柱塀である。柱掘形はばらつきがあるが、一辺0.5～0.8ｍ、深さ0.5ｍの方形を呈する。平安時代前期の遺構と重複しており、掘立柱塀ＳＡ1091→南北溝ＳＤ1088→土坑ＳＫ1086の順であることを確認した。この南北塀の位置は東に推定される南北塀ＳＡ1052と正殿を挟んでほぼ対象位置に当たり、政庁を囲む塀の可能性が高いものである。

外郭の建物

政庁域の北側でＳＢ1001・1002、西側でＳＢ1015・1020がある。

ＳＢ1001（第30図）　平成元年度のＤ３－６南北トレンチで検出した、西に延びる南北３間の東西棟である。北側の柱掘形は一辺0.7ｍと他の一辺１ｍと比較して小形であること、北側の柱間が狭いことから北側に廂を持つものと考えた。なお、南に１間の廂がつく可能性もあるが、柱掘形が不定型のためここでは廂とはしていない。埋土から出土した遺物の大半は５世紀後半のものであるが、底部ヘラ削り・内面に暗文の残る土師器皿などの細片が数片出土し



第21図　正殿、前殿地区遺構平面図（1：100）レベル高：152m

ている。

ＳＢ1002　平成２年度のＤ３－６調査区の東北部で検出したもので、南北２間、東西は調査区東に延びる１間以上の東西棟である。柱掘形は径0.5ｍの円形で、深さ0.4ｍである。遺物は出土していないが、南に位置する南北棟ＳＢ1015の西側柱と柱筋を揃えるため、当該期とした。

ＳＢ1020（第28図）　Ｄ５－９調査区にある平成元年度、平成２年度の調査で一部確認し、当初は東脇殿と想定した建物である。平成３年度の調査で、桁行５間×梁行３間の南北棟であることを確認した。柱掘形は一辺1.5ｍ、深さ約１ｍと柱掘形の規模としては、当遺跡では最大級のものである。

北側柱列東から２番目の柱穴内では、径約0.2ｍの外側の木質部分のみが残る柱根を検出した。柱根は、残存長約0.2ｍほどの小さなものである。柱痕跡がずれることやその大きさなどから、ＳＢ1020の柱根とは考え難く、他の建物が重複していると思われるが確認することは出来なかった。

ＳＢ1015（第27図）　Ｄ５－５調査区にある、桁行５間×梁行３間の南北棟である。棟方向は、南にあるＳＢ1020と西側柱列を揃える。柱掘形は一辺0.6ｍの方形で、深さは0.5～0.7ｍの規模である。西南隅の柱穴には径0.3ｍの柱根が残っていたが、他の柱穴のものは腐って粘土質状となっていた。柱掘形埋土から、９世紀初めに比定できる土師器杯（393）・椀（394）が出土した。

その他の遺構

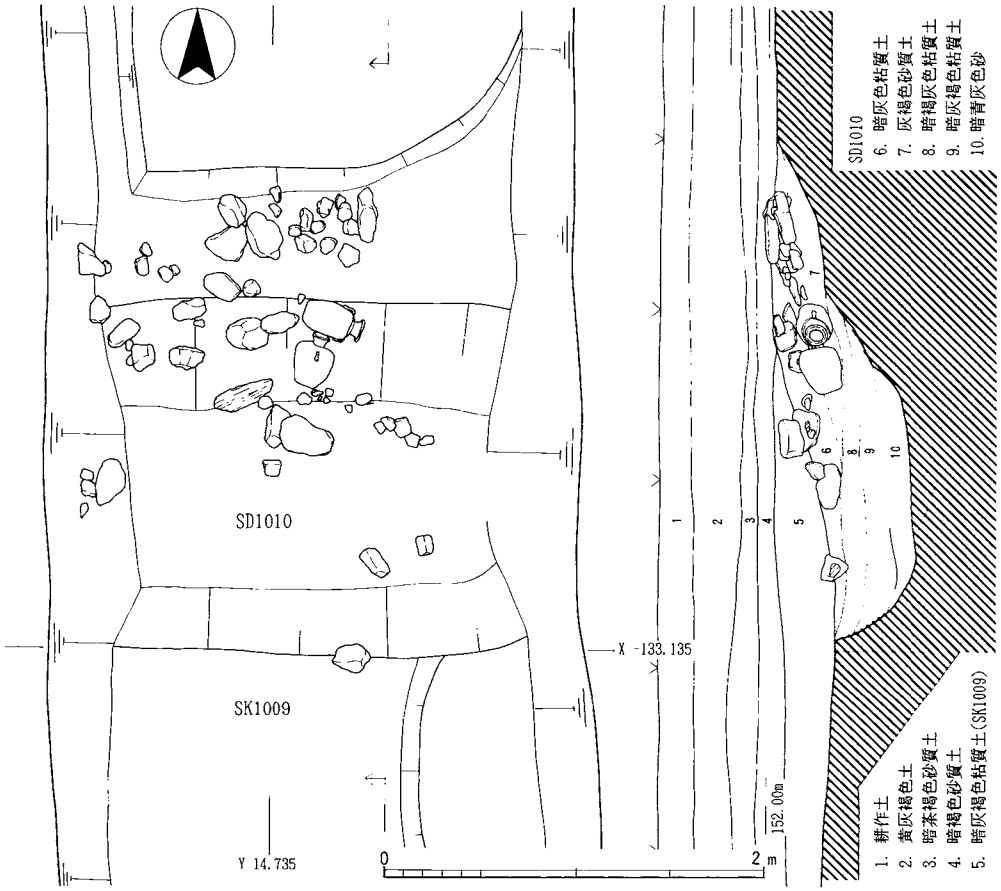
ＳＤ1010（第22図）　Ｄ３－８調査区で検出した。上面での幅は約３ｍ、なだらかに落ちて途中から約２ｍとなり、深さは約0.7ｍで、溝の南半部は時期の新しいＳＫ1009と重複する。遺物は、土師器（49～53）、須恵器長頸壺（56・57）・横瓶（54）・鉢（55）などが出土した。この内、須恵器長頸壺（56・57）はほぼ完形で、調査区東側の平成元年度の調査で、埋土上層から拳大の礫と共に出土した。

現地形を見ると、Ｄ３－８調査区の東と南は約１ｍ以上の比高差があり、溝底面の標高151.3ｍは、東のＤ３－５調査区の遺構検出面に相当する。そのため、東の延長上で検出したＳＤ1004は、規模的には類似するものの深さは数cmに満たないもので、遺物もなく、同一の溝かは断定できない。

ＳＤ1053（第26図）

Ｄ５－６調査区のＳＡ1052の南１ｍにある幅1.2～2.0ｍ、深さ0.5ｍの東西溝である。東端は途切れ、西は調査区外に延びる。方向から、北にある掘立柱塀ＳＡ1052に伴うものものとも考えられるが、南北方向の塀に伴う溝は確認していない。土師器・須恵器が少量出土した。

ＳＤ1087（第23図）



第22図　ＳＤ1010遺物出土状況（1:40）

Ｄ６－５調査区の西壁際で検出した、幅0.6ｍ以上で、深さ0.1ｍの南北溝である。方向は北で西に２°振れる。遺物ははほとんど出土していないが、平安時代前期の土坑ＳＫ1086より古い。

ＳＤ1098（第24図）　Ｄ６－６調査区の南にある、幅1.0ｍ、深さ0.15ｍの東西溝で、ＳＢ1090・1095より古い。方向は東で南に約３°振れる。遺物は、外面にヘラミガキ・内面に螺旋状暗文の残る土師器杯や須恵器杯などが少量出土した。

ＳＤ1099（第24図）　Ｄ６－６調査区からＤ６－５調査区で検出した、幅0.5ｍ、深さ0.2ｍの小規模な南北溝である。遺物は出土していないが、ＳＢ1085より古い。検出した範囲がＳＢ1085の西側柱列とほぼ同じ範囲であるため、当該期の西脇殿に伴う溝の可能性もある。

ＳＫ1011　Ｄ３－８調査区の南に位置し、ＳＫ1009を完掘して検出した。幅2.2ｍ、長さは4.5ｍ以上の規模で、西の調査区外に延びる。埋土中には木片が多く混入しているため、溝の可能性も残る。遺物は、土師器（59～70）、須恵器（72・73）の他、黒色土器（71）の細片が３片、須恵器甕の体部片を利用した転用硯（457）が出土した。

ＳＫ1034（第33図）　Ｄ５－９東調査区南側で検出した、幅0.6ｍ、長さ1.0ｍ、深さ0.2ｍの小規模な土坑である。遺物は少ないが、円面硯（438）が出土している。

（３）平安時代前期の遺構

この時期の遺構と思われるものが最も多い。出土した遺物から、９世紀前半の猿投窯黒笹14号窯期と後半の黒笹90号窯期の遺構に別れる。建物については９世紀前半・後半に分けることが困難なために一括し、その他の遺構については時期別に既述する。

政庁域の建物

正殿ＳＢ1055、前殿ＳＢ1066、西脇殿ＳＢ1095、東脇殿ＳＢ1073がある。

ＳＢ1055（第21図）　Ｄ５－６・５－８調査区にある、桁行７間、梁行３間の東西棟で、西・南・東の三面は廂部分になると考えられる。柱間は母屋部分が３ｍであるのに対し、廂は2.7ｍである。柱掘形は母屋部分が一辺1.2ｍの方形で、深さは0.2～0.3ｍであり、廂部分はやや小形で一辺0.8ｍの方形を呈する。掘形埋土はいずれも黄褐色土である。正殿ＳＢ1056より新しく、ＳＢ1060より古い。

ＳＢ1066（第21図）　Ｄ５－８調査区南側にある前殿ＳＢ1065より新しく、東西３間以上、南北２間の東西棟である。ＳＢ1065と同様に考えるならば、桁行５間×梁行２間の東西棟に復原できる。柱掘形は一辺0.7ｍの方形で、深さは0.5ｍである。

ＳＢ1073（第25図）　Ｄ５－８調査区東南の東脇殿にあたる礎石建物ＳＢ1071と、重複する位置にある。ＳＢ1071のすべての礎石据え付けの根石の下（３ヶ所）で柱根が腐ったためか、空洞が平面で確認できた。そのうち１ヶ所で立割りを行い、径0.35ｍの柱根が残存することを確認した（ＰＬ７下）。柱掘形は一辺1.0ｍの方形で、深さは0.6ｍの規模である。礎石建物と重複する位置にあるため、柱を上面で切断して礎石に建て替えたことが推察される。遺物はほとんど出土していない。

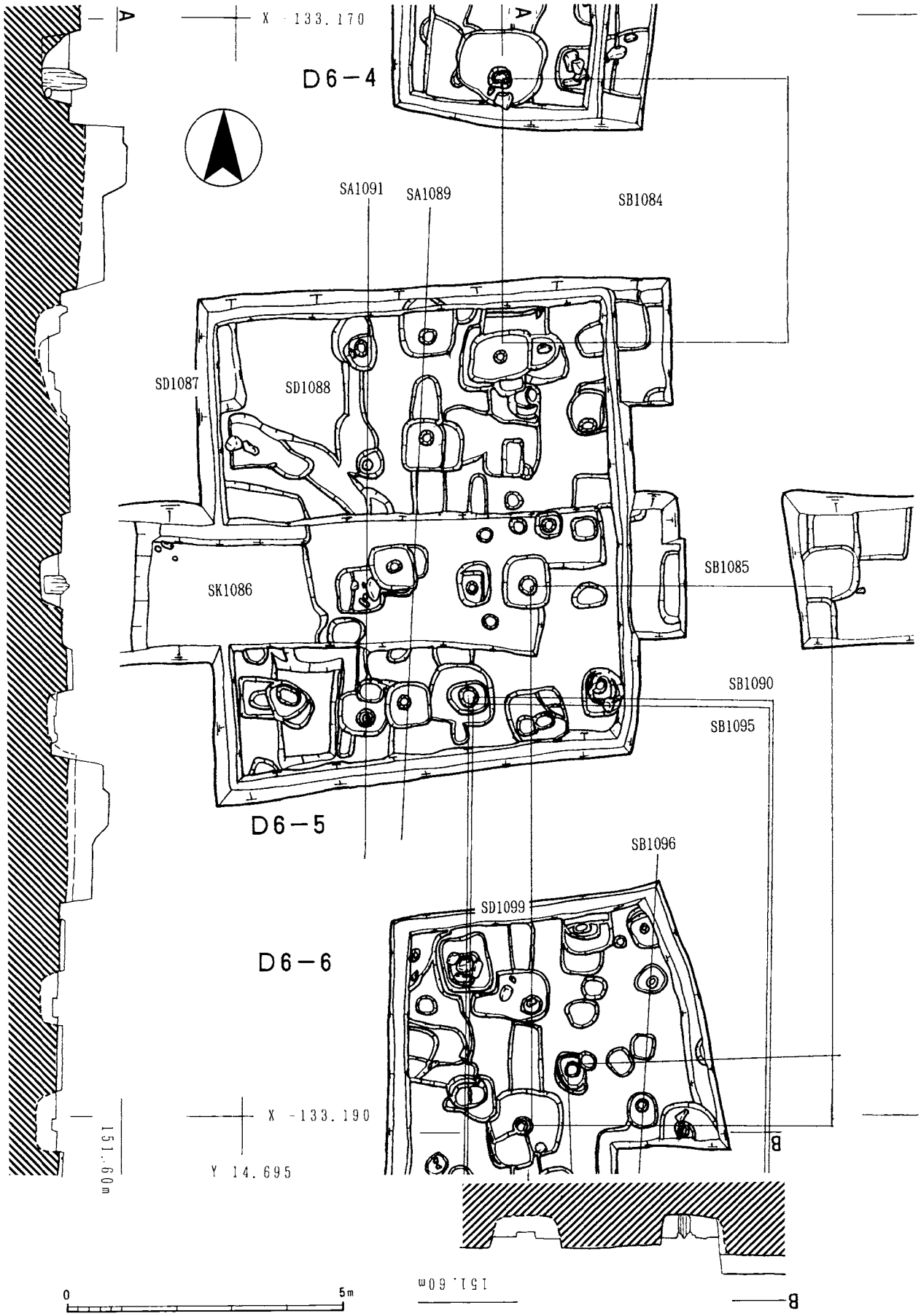
ＳＢ1095（第24図）　Ｄ６－５・６－６の西脇殿ＳＢ1090の下で確認した。ＳＢ1073と同様に礎石の根石の下にあるもので、ＳＢ1090のすべての掘方の下で確認した。柱掘形は一辺0.7ｍの方形で、深さは立割りを行っていないために不明である。遺物は出土していない。

外郭の建物

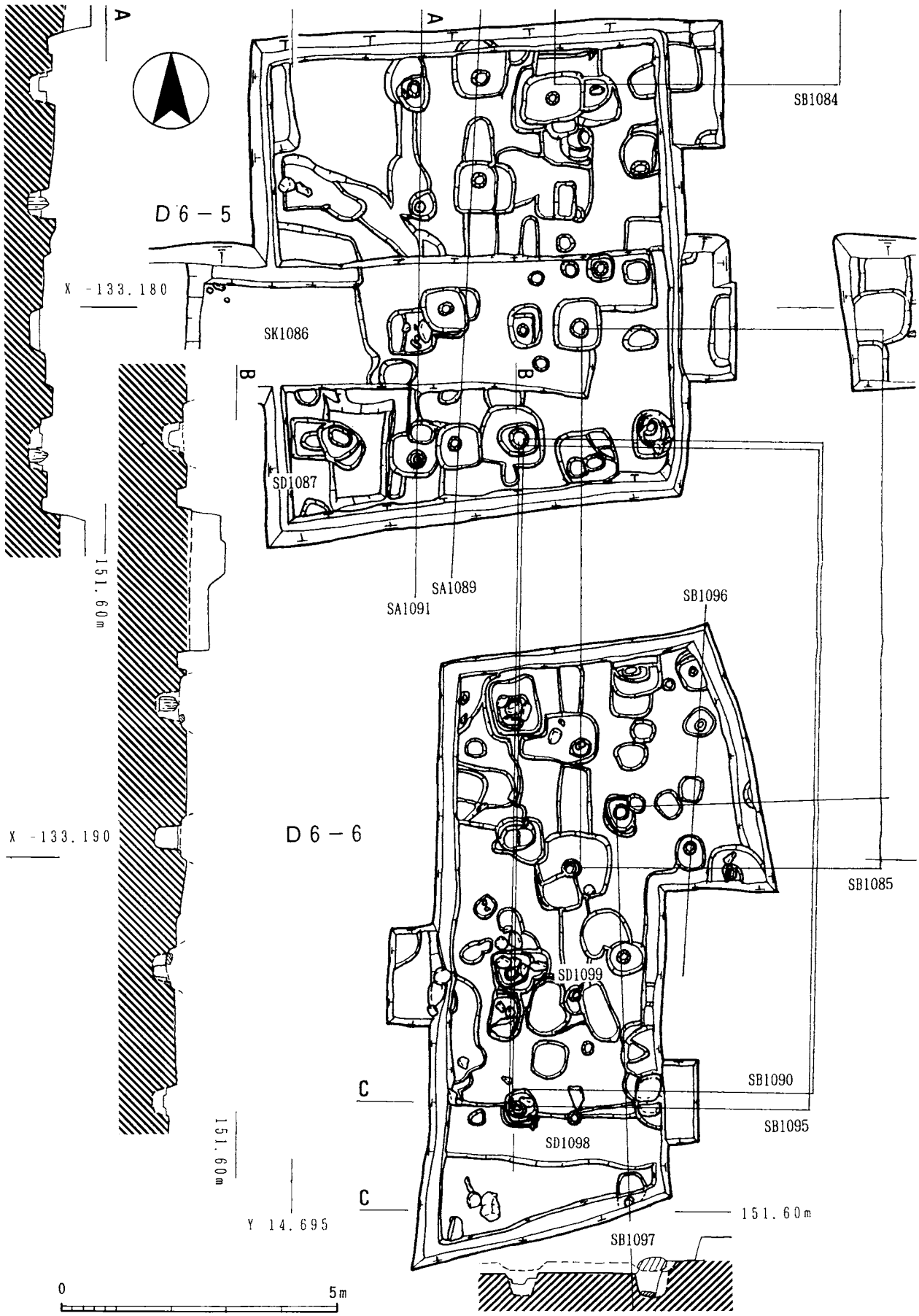
政庁域の東側でＳＢ1016・1021、西側でＳＢ1102、ＳＡ1040、東南側でＳＢ1047、西南側でＳＢ1105がある。

ＳＢ1016（第27図）　Ｄ５－５調査区東にある。南北３間の東に延びる建物で、南妻柱を確認しているため３間×２間の南北棟の可能性が強い。柱掘形は径0.5～0.8ｍの隅丸方形で、深さは0.3～0.5ｍである。西北隅の柱穴には残りの悪い柱根が残存する。柱掘形から９世紀後半の灰釉陶器の小片が出土した。

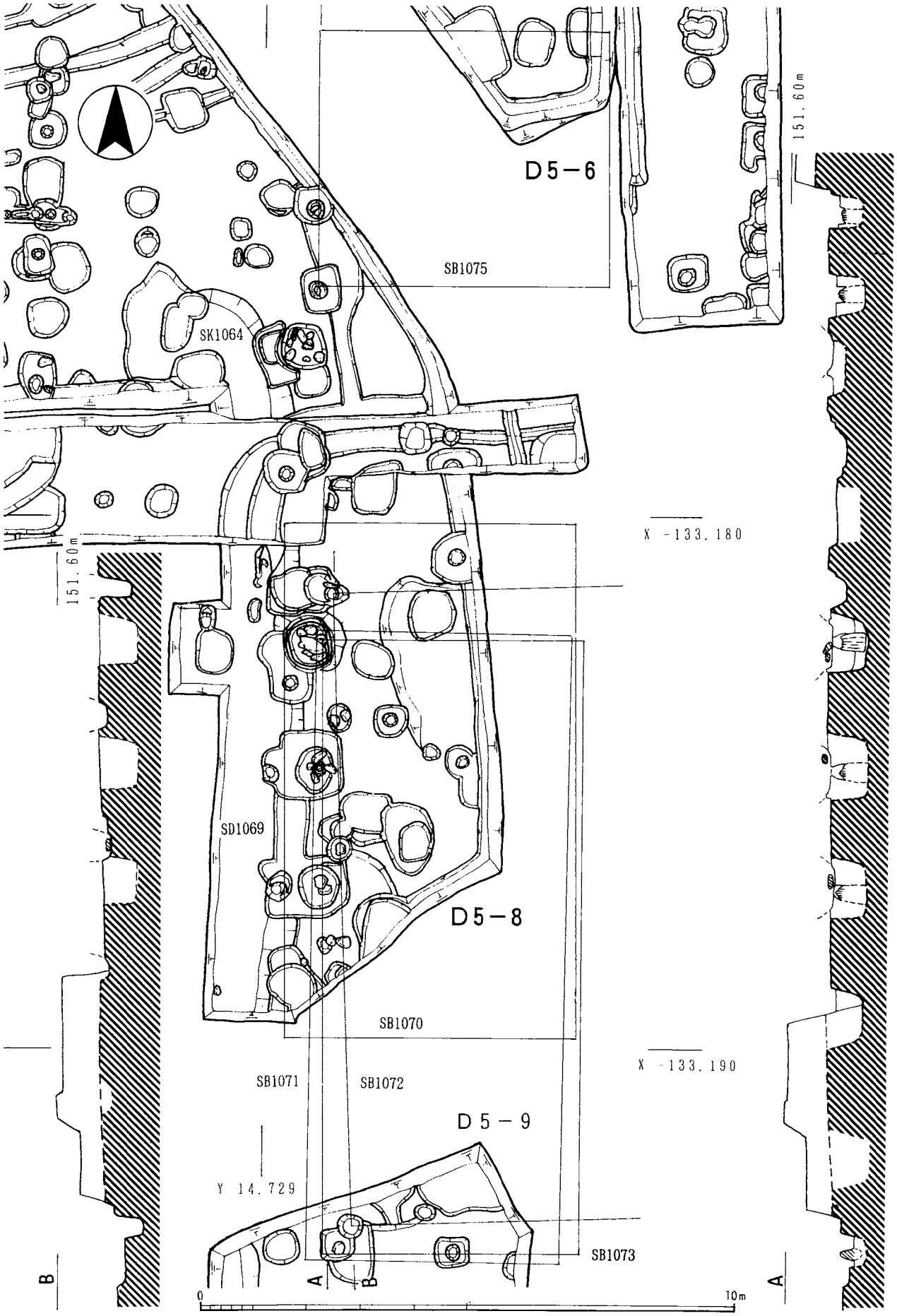
ＳＢ1021（第28図）Ｄ５－９東調査区のＳＢ1020と重複し、重複関係は、ＳＢ1020→ＳＢ1021→ＳＫ1018である。柱掘形は、一辺0.6～0.8ｍの方形を呈する。北側柱列が位置する平成元年の東西トレンチでは、柱穴を確認していない。建物は検出した柱位置から考えると、南に廂のつく３間×２間以上の東西棟と思われる。



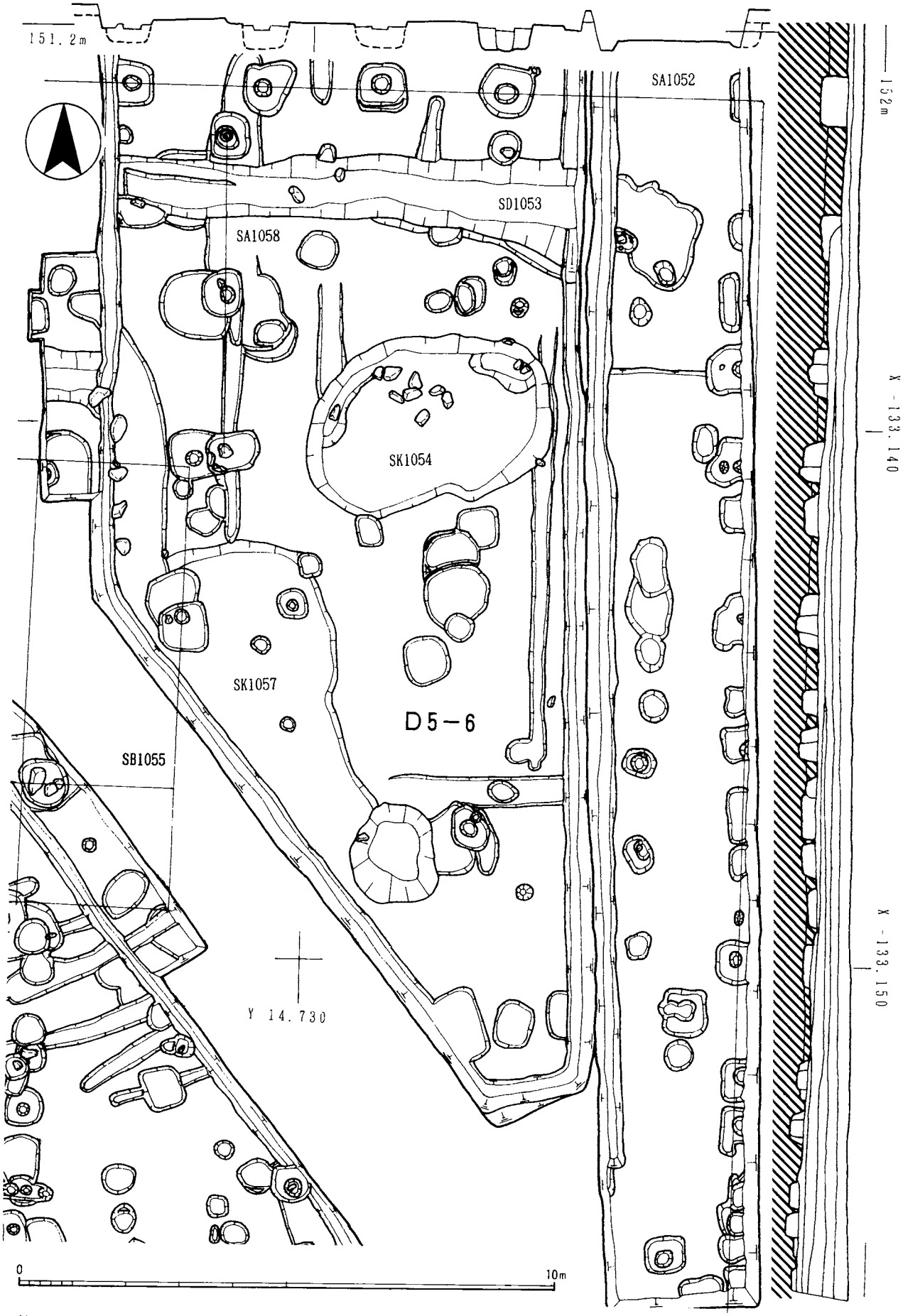
第23図　西脇殿ＳＢ1084・1085遺構平面図（1：100）



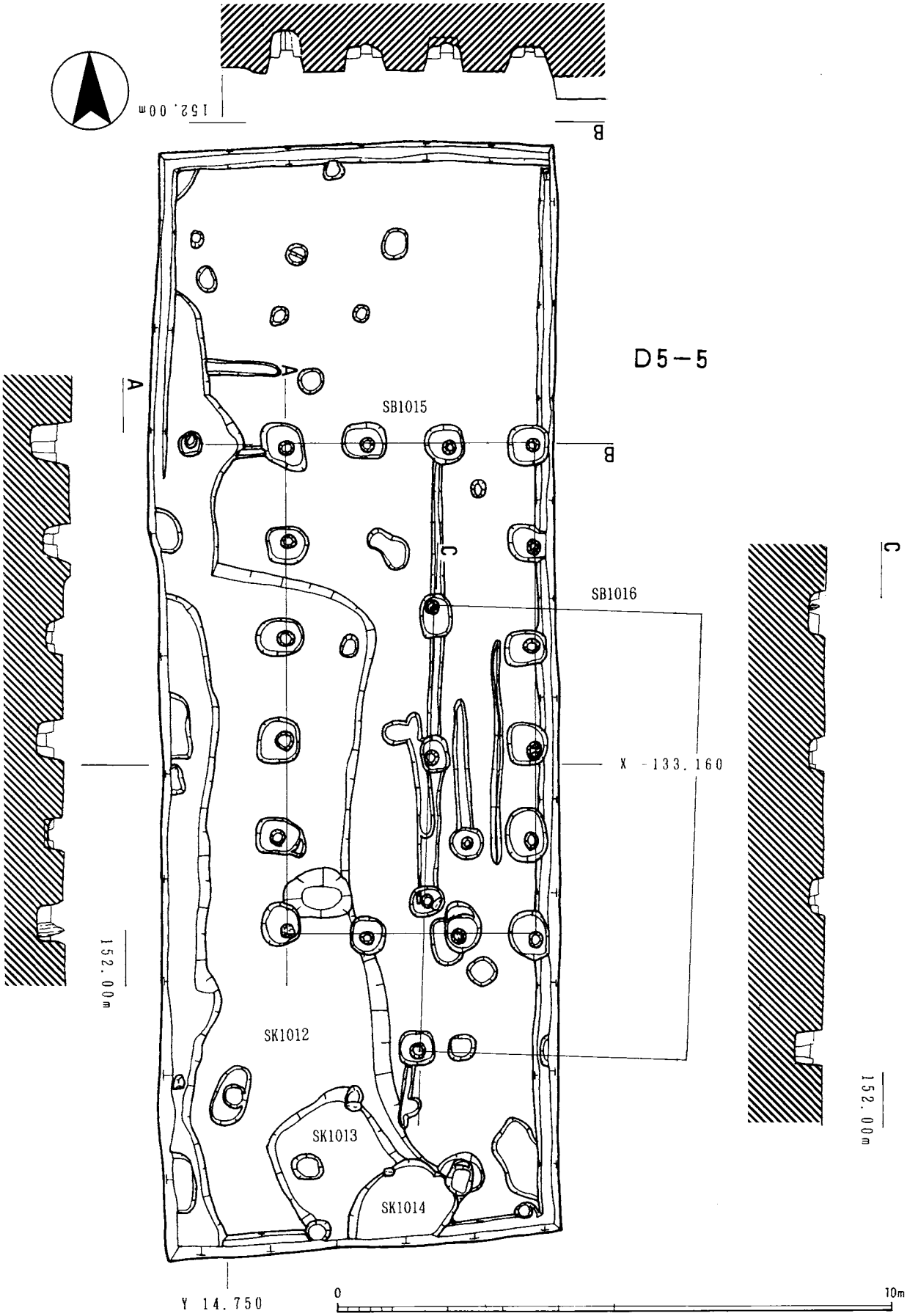
第24図　西脇殿ＳＢ1090・1095遺構平面図（1：100）



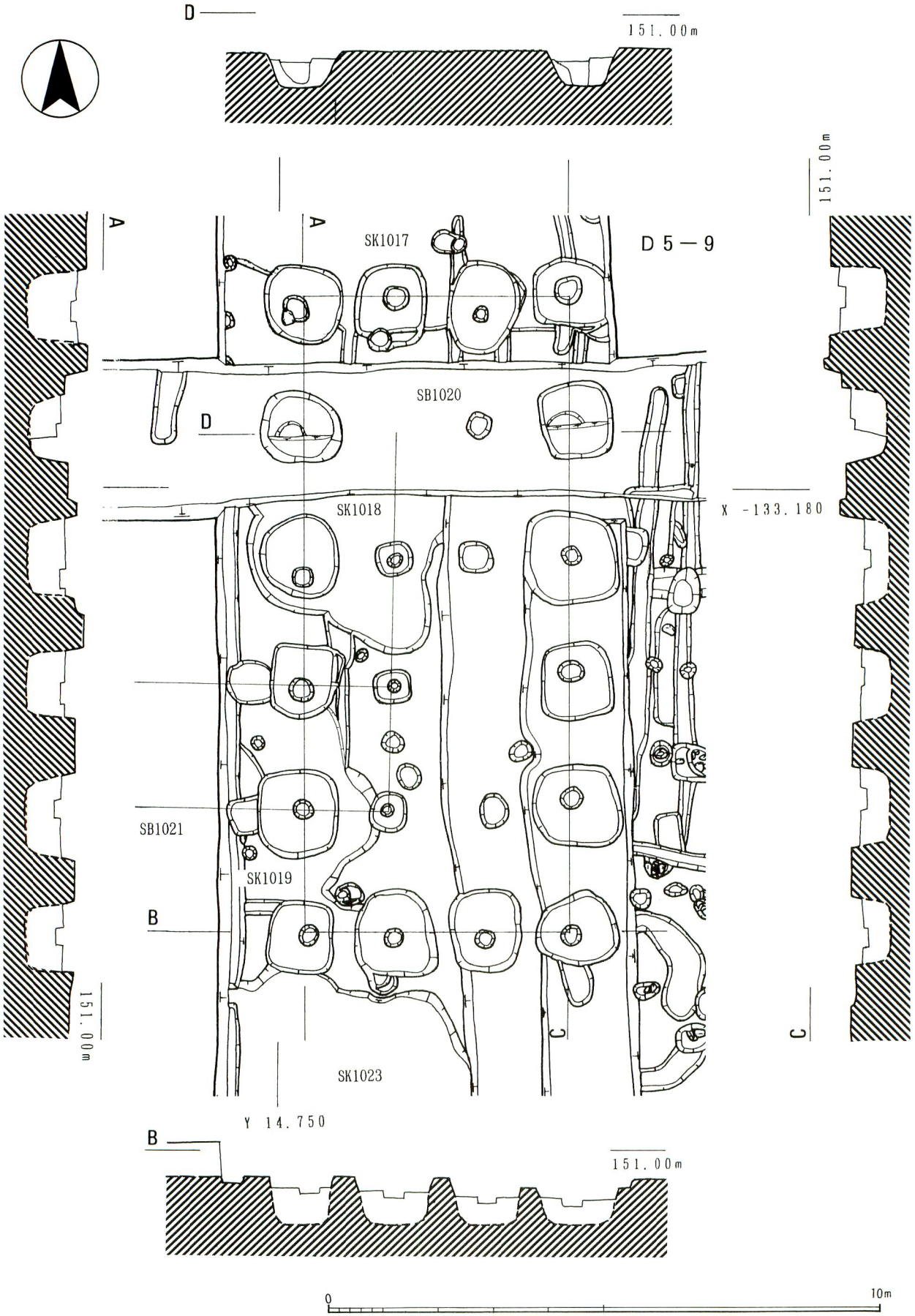
第25図　東脇殿ＳＢ1070～1073・1075遺構平面図（1：100）



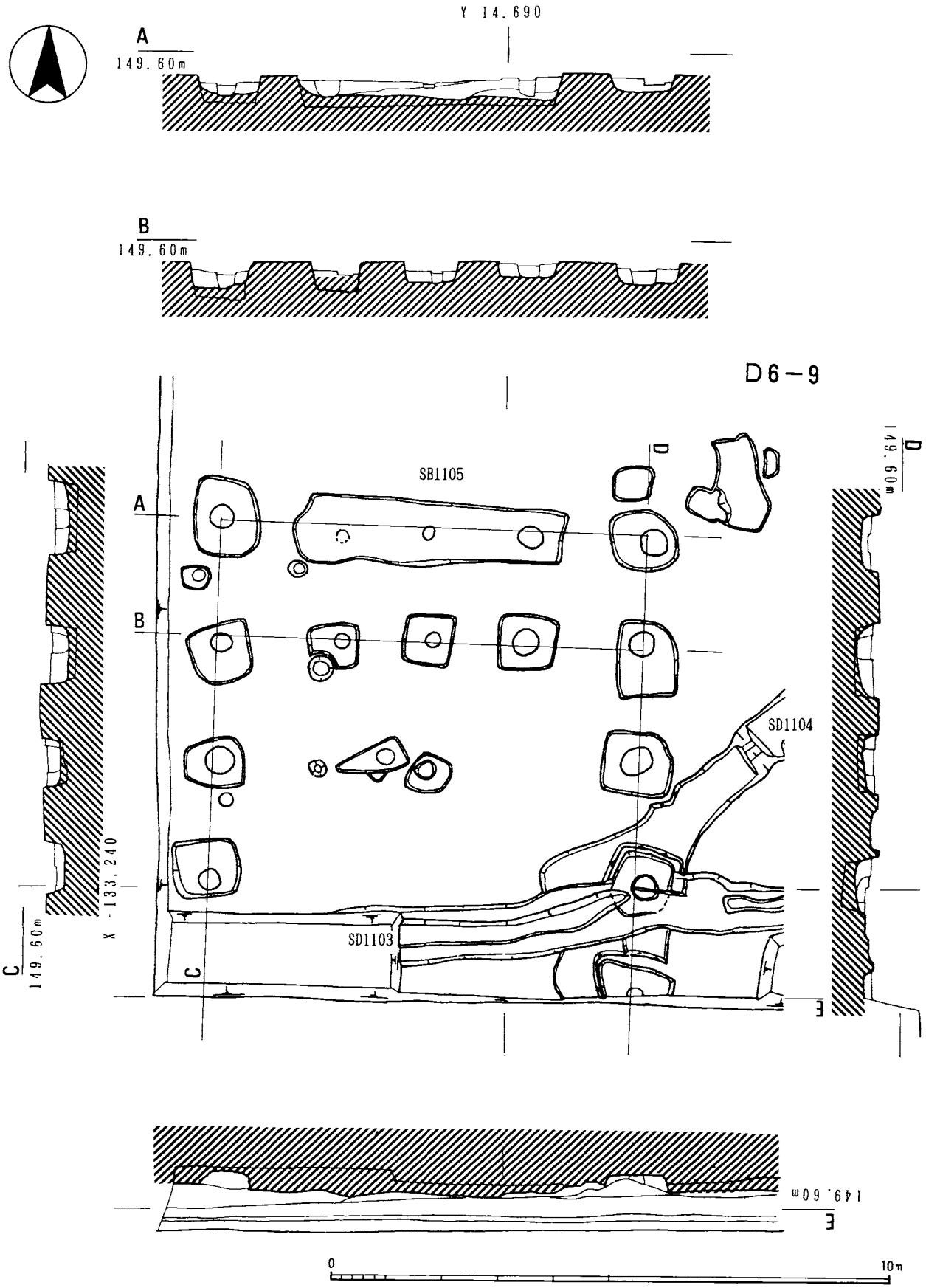
第26図　ＳＡ1052遺構平面図（1：100）



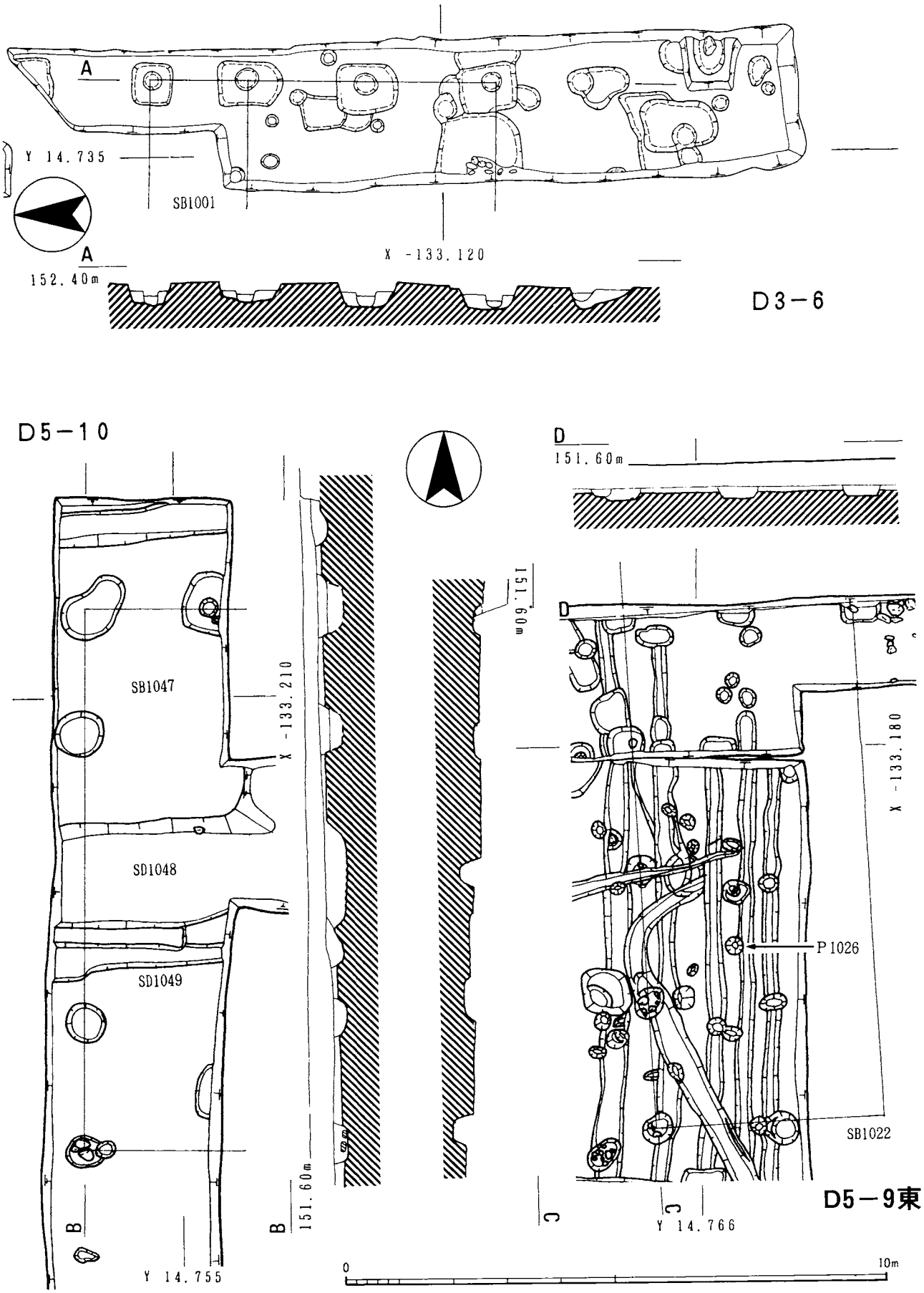
第27図　ＳＢ1015・1016遺構平面図（1：100）



第28図　ＳＢ1020遺構平面図（1：100）



第29図　ＳＢ1105遺構平面図（1：100）



第30図　ＳＢ1001・1047・1022遺構平面図（1：100）

出土した遺物はわずかであり、9世紀後半の土坑ＳＫ1018より古いために9世紀前半とした。

ＳＢ1047（第30図）　Ｄ５－10東調査区で検出した。鎌倉時代の溝に壊されているが、４間×２間の南北棟と考えられる。掘形埋土から猿投窯黒笹90号窯期の灰釉陶器皿の小片が出土した。

ＳＢ1105（第29図）　平成２年度のＤ６－９調査区で検出した、北廂を持つ東西４間×南北５間以上の建物である。北廂柱掘形は両端が単独で、中の３ケの柱掘形は共有するいわゆる溝持ちの柱掘形である。東西４間、南北５間以上であるため、南北棟と考えられる。総柱建物とは考え難く、束柱と思われる柱を１ケ検出したが他にはなく、建物構造については不明である。遺物はほとんど出土していないが、棟方向がほぼ真北で、奈良時代後期から平安時代前期の建物と同じであることから当該期とした。東側柱列北から５番目の柱穴は、ＳＤ1104より新しく平安時代後期のＳＤ1103より古い。西側柱列の北から５番目の柱穴は、調査区南壁の断面でのみ確認した。

ＳＢ1102（第34図）　Ｄ６－７調査区の中央にあり、東側柱は南北両壁際、西側柱は南壁際で検出した。東側柱の柱間から、南北柱間は３ｍと復原される。柱掘形は径0.6ｍの円形で、深さは断ち割っていないが0.3ｍ以上である。東北と西南には径約0.3ｍの柱根が残る。遺物はほとんどなく、時期については断定できないが、棟方向から平安前期とした。

ＳＡ1040（第31図）　Ｄ５－３調査区西端にある柱穴である。柱掘形は、一辺0.9ｍの方形で、深さ0.4ｍである。埋土から、猿投窯黒笹14号窯期の灰釉陶器片、黒色土器、製塩土器の小片や馬歯１点を出土した。柱穴から西５ｍのＤ５－10調査区では確認していないため、塀の可能性が高いものである。

その他の遺構

Ａ）９世紀前半の遺構

ＳＫ1008　Ｄ３－８調査区に位置し、ＳＫ1009より古い。幅1.4ｍ、長さ約６ｍの不定形を呈する。土師器杯（103・104）・皿（105・106）と少量の須恵器のほか、馬歯が１点出土した。

ＳＫ1086（第23図）　Ｄ６－５調査区東側で平成元年度と３年度の調査で検出した土坑で、東西4.7ｍ、南北4.6ｍ、深さ0.2ｍの円形を呈する。埋土は炭化物を含む。南北溝ＳＤ1088・1087より新しい。

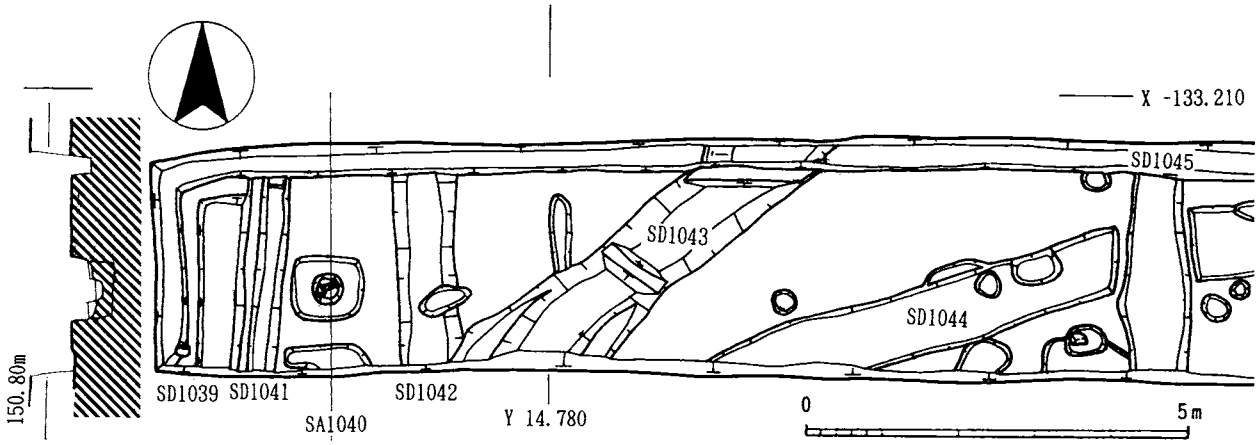
遺物は土師器（83～98）が中心で、須恵器、黒色土器（99・100）、猿投窯黒笹14号窯期の灰釉陶器（101・102）が少量と、円面硯（441・446）や黒色土器風字硯の破片と思われるもの（451）も出土した。

ＳＤ1028（第33図）　Ｄ５－９東調査区の南にある、幅1.95ｍ、深さ0.35ｍの東西溝であるが、西７ｍにある南北トレンチでは確認していない。少量の土師器（74～77）、須恵器（78～80）のほか、猿投窯黒笹14号窯期と思われる灰釉陶器椀の小片（81）と瓶（82）が出土した。ＳＫ1030より古い。

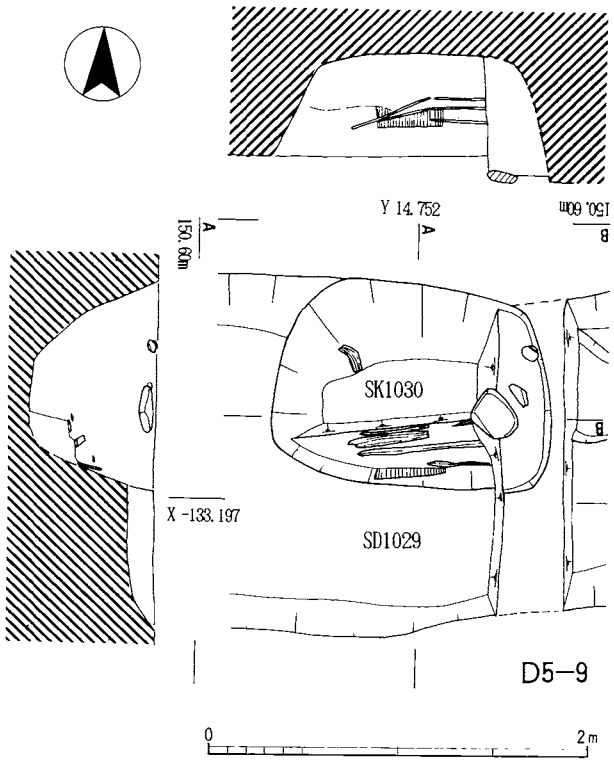
ＳＤ1088（第23図）　Ｄ６－５調査区で検出した幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1ｍの南北溝で、方向は北で東に約３°振れる。土師器、須恵器を少量出土した。切合関係は、ＳＡ1091→ＳＤ1088→ＳＫ1086である。

Ｂ）９世紀後半の遺構

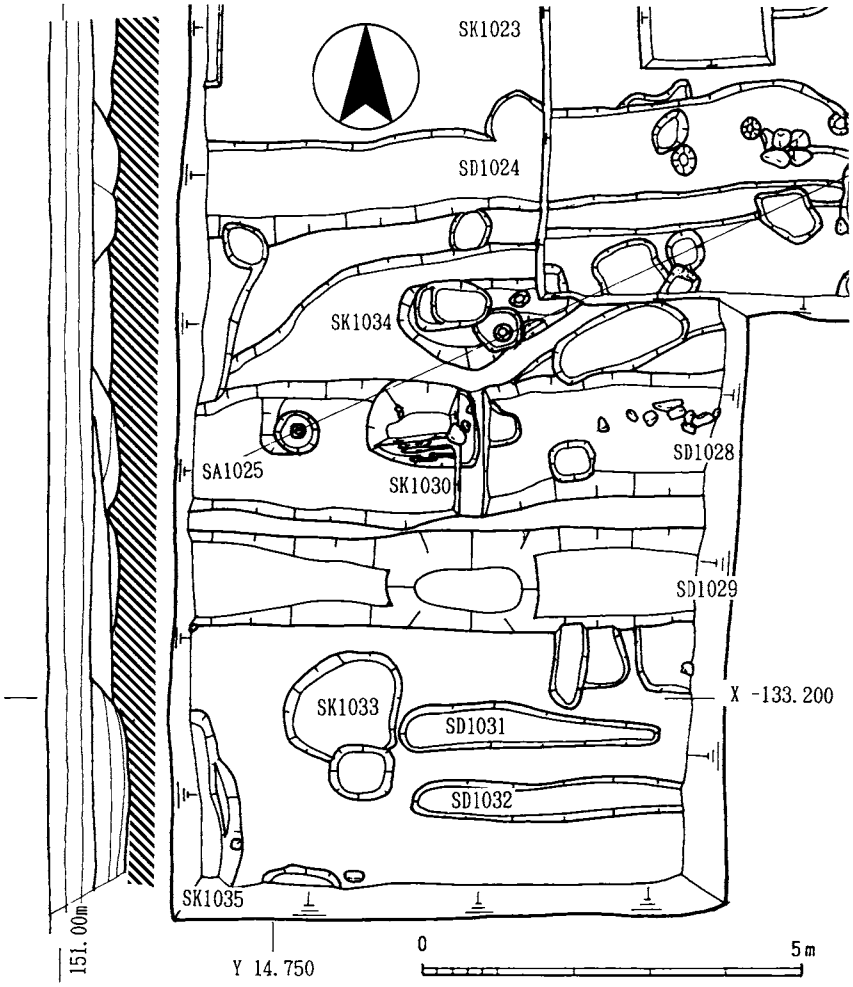
ＳＫ1009（第22図）　Ｄ３－８調査区の南にあり、西・東・南は調査区外に延びるため規模は不明である。深さは、約0.2ｍである。北側ではＳＤ1010と一



第31図　Ｄ５－３調査区西部遺構平面図（ＳＡ1040)(1：100)



第32図　ＳＫ1030遺構平面図（1：40）



第33図　Ｄ５－９東調査区南側遺構平面図（1：100）

部重複し、切り合いはＳＫ1009が新しい。

埋土中に炭化物を多く含み、遺物はコンテナで４箱ある。土師器（107～126）、黒色土器、須恵器（127～133）、灰釉陶器（134・135）、製塩土器の小片のほか、灰釉陶器風字硯（454）が出土した。

ＳＫ1018（第28図）　Ｄ５－９東調査区で検出した、東西3.5ｍ、北半分は平成元年度の東西トレンチで切られているために南北３ｍ以上、深さ0.2ｍの楕円形を呈する。ＳＢ1020・1021より新しい。土師器（181～185）、須恵器、黒色土器が少量出土した。

ＳＫ1019・1023（第28図）　ＳＫ1018の南に位置し、西の調査区の外に延びる重複する二つの土坑で、深さ0.2ｍの不定形を呈する。重複関係はＳＫ1019→1023で、いずれもＳＢ1020より新しい。

ＳＫ1019からは、土師器、須恵器が僅かに、ＳＫ1023からは、土師器（186～194）、須恵器（197）、黒色土器（195）、緑釉陶器（474・479）、灰釉陶器（196）などがコンテナで２箱のほか、黒色土器風字硯（452・453）が出土した。遺物から見てこれらの土坑は、ほぼ同時代のものと考えられる。

ＳＫ1030（第32図）　Ｄ５－９東調査区の南にある、東西1.42ｍ、南北1.1ｍ、深さ0.64ｍの隅丸方形を呈する土坑である。

遺物は少ないが、上面で口縁部の欠けた緑釉陶器唾壺（486）の他、土師器皿（139）・杯（140）、黒色土器杯（141）が出土した。

土坑壁面に沿って、縦方向の板材の痕跡が一部に残っているため、木製容器が据え付けられていた可能性もある。内側上部でも、東西方向に木目の残る板材の痕跡が一部残存している。調査時点で水が湧き出ていたことを考え合わせると、井戸の機能を有する遺構の可能性もある。ＳＤ1028より新しい。

ＳＫ1033（第33図）　ＳＫ1030の南にある、径1.5ｍ、深さ0.1ｍの楕円形を呈する土坑である。遺物は、

土師器杯(198)・皿(199)・鉢(202)、ロクロ成形土師器椀(200・201)、黒色土器椀(203)等を出土した。

ＳＫ1035(第33図)　Ｄ５－９東調査区の西南隅で検出したもので、東西0.5ｍ以上、南北2.3ｍ以上、深さ0.4ｍ、西と南は調査区外に延びるために規模は不明である。

埋土は炭化物を多く含んでおり、遺物はコンテナで３箱出土した。土師器(142～166)が大半で、他に黒色土器(167～178)、須恵器(179)、緑釉陶器(465・470・476・477)、灰釉陶器(180)、黒色土器の風字硯(449)などが出土した。

ＳＫ1046　Ｄ５－３調査区の東端で検出し、東と南は調査区外に延び、北側は撹乱やＳＤ1044によって壊されているため、規模は不明である。深さは0.1ｍである。土師器、黒色土器、土錘などをコンテナで１箱出土した。

ＳＤ1029(第33図)　Ｄ５－９東調査区の南にある、幅1.3ｍの東西溝で、東西共調査区外に延びるが、西の南北トレンチでは検出していない。深さは0.1ｍほどで、中央はやや深く0.3ｍである。遺物は、土師器(136)、須恵器(137)のほか、黒色土器片がわずかに出土した。

ＳＤ1031・1032(第33図)　これらはＳＤ1029の南に位置する、幅0.5ｍ、深さ0.1ｍの東西溝で、長さ３～４ｍにわたり検出した。

ＳＤ1032からは、緑釉陶器とともにロクロ成形土師器椀(138)が出土し、９世紀後半に比定できる。

ＳＤ1031はＳＫ1033より新しく、出土した遺物は少ないが、同様な時期が考えられる。

この周辺では、ＳＤ1028・1029など東西溝を多数検出している。西側のＤ５－８調査区では検出していないため、この間に政庁の東を画する南北溝が位置し、これに取り付く可能性が高い。

（４）平安時代中期の遺構

政庁域の建物

ＳＢ1060・1071・1090がある。

ＳＢ1060(第21図)　Ｄ５－８調査区の北にあり、５間×３間と推定される東西棟で、正殿に相当する建物である。柱掘形は浅く不定形を呈し、人頭大の礫が多くみられることから、礎石の据付痕の可能性が高い。礎石の抜き取りに伴うと思われる、10世紀末の遺物も一部混入している。

ＳＢ1071(第25図)Ｄ５－８調査区の東南にある、東脇殿に相当する建物である。西側柱列のみで、妻柱は検出していない。柱掘形は浅く不定形を呈し、人頭大の礫が見られ、礎石建物の据付痕と思われる。東側柱列北から２番目の柱掘形から406、３番目から403～405・407の土師器が出土した。

ＳＢ1090(第24図)　Ｄ６－５・６－６調査区で検出した南北棟で、西脇殿に相当する。西側柱列、南北両妻柱を検出した。柱掘形は浅く、人頭大の石が混入している状況から見て、ＳＢ1071同様に礎石建物と考えた。埋土は炭化物を含み、土師器(419～436)、黒色土器Ｂ類椀(431)等の遺物を少量出土した。

外郭の建物

政庁域の東側にＳＢ1022、西側にＳＢ1100がある。

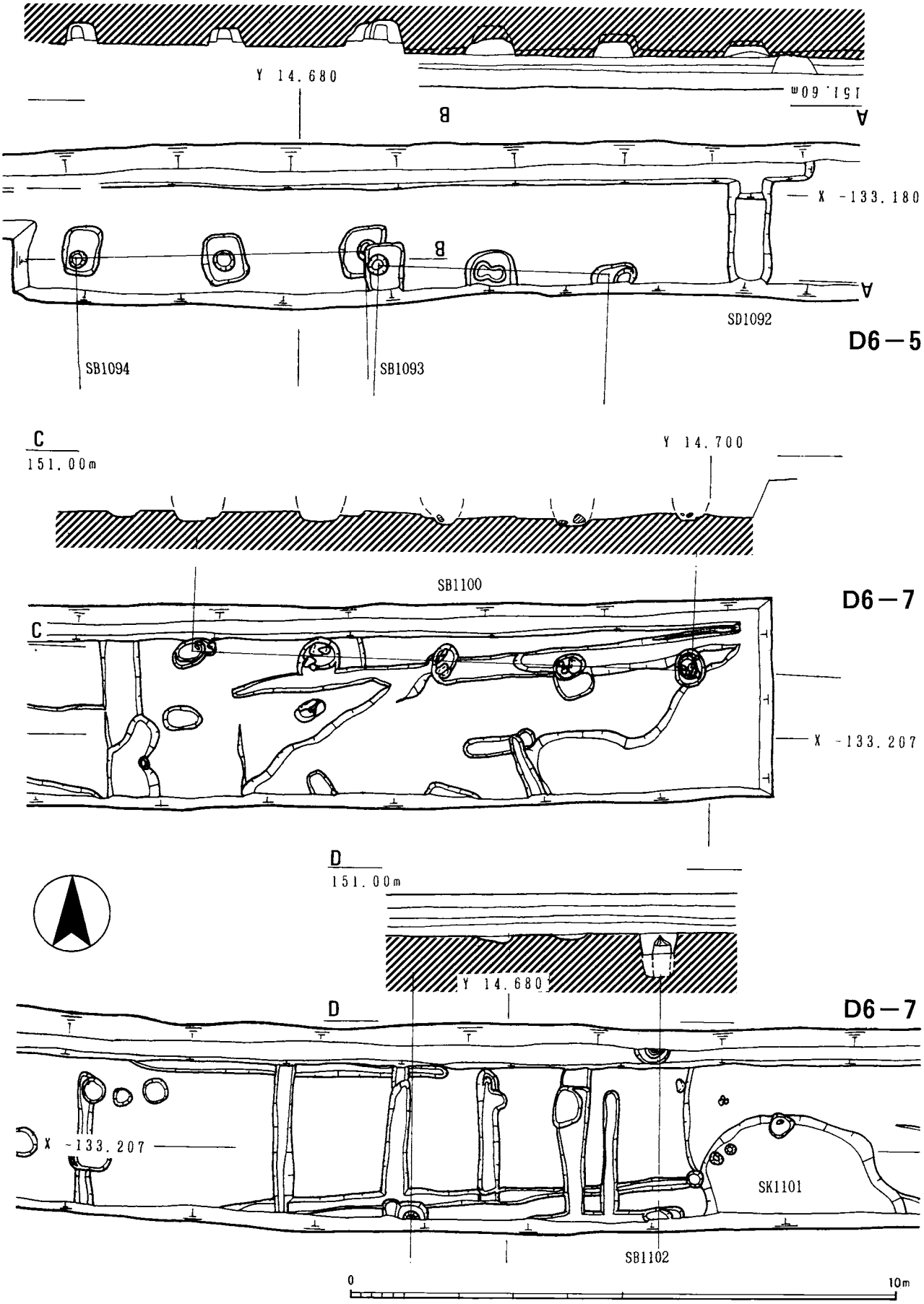
ＳＢ1022(第30図)　Ｄ５－９東調査区の平成元年、２年度の調査で検出した、南北棟である。柱掘形は径0.3ｍの円形で、深さは0.4ｍとやや小型である。出土した遺物から、10世紀後半の建物と考えられる。他の建物方向が北で東に振れるのに対し、ＳＢ1022は北で西に振れる。

ＳＢ1100(第34図)　Ｄ６－７調査区東側で、北壁に沿った位置で４間検出した。柱掘形は径0.6ｍの円形で、深さは0.2ｍと浅く、0.2ｍ程度の礫を多く混入していた。埋土から10世紀前半の遺物が出土した。掘立柱塀の可能性も残るものの、北側のＤ６－５調査区で柱穴を確認していないため、ここでは掘立柱建物としておく。

その他の遺構

Ｐ1026(第30図)　平成２年度のＤ５－９東調査区の東北部で検出した柱穴で、径0.3ｍ、深さ0.1ｍの円形を呈する。柱穴内中央部で、下から黒色土器椀(417)、土師器杯(415)、黒色土器椀(418)、黒色土器甕(416)の順で遺物が出土した。

Ｐ1074(第35図)　Ｄ５－９西調査区の中央にある、径0.5ｍ、深さ0.2ｍの柱穴である。建物としてはまとまらなかった。後述する整地層を除去して検出した。柱痕跡内から、完形の土師器皿(408～410)、黒色土器椀(411・412)が出土し、建物廃絶後に土



第34図　ＳＢ1093・1094・1100・1102遺構平面図（1：100）

器を埋納した状況を呈する。他に柱穴検出時に包含層として取り上げた黒色土器小椀が１点あるため、３対ずつ埋めた可能性もある。

Ｐ1078（第35図）　Ｄ５－９西調査区にある径約１ｍ、深さ0.2ｍの柱穴である。建物としてはまとまらなかった。後述する整地層を除去して検出し、ＳＫ1077より新しい。ロクロ成形土師器椀（413）、土師器椀（414）などが出土した。

ＳＫ1006・1007　この２基の土坑は、Ｄ３－４調査区に位置し、重複関係はＳＫ1006→1007である。規模は、いずれも調査区外に延びるために不明である。

ＳＫ1006は深さ0.5ｍで、遺物をコンテナで１箱出土した。遺物の大半は６世紀代のものであるが、10世紀前半の土師器小皿、黒色土器、緑釉陶器椀などを少量出土した。

ＳＫ1007は深さ0.2ｍと浅く、土師器と須恵器が少量出土した。ＳＫ1006同様、10世紀代の遺構と思われる。

ＳＫ1012（第27図）　Ｄ５－５調査区西部にあり、規模は調査区外の西と南に延び、東西４ｍ以上、南北12.5ｍ以上である。深さ0.2ｍで、西端は一段深くなり0.4ｍである。９世紀後半から10世紀前半の遺物が混在し、幾つかの遺構が重複している可能性もある。

遺物はコンテナで４箱あり、土師器（204～221）と黒色土器（222～228）が大半で、灰釉陶器（229～231）、緑釉陶器（467・472）、須恵器猿面硯（455）等を少量出土した。重複関係は、ＳＫ1012→1013→1014である。

ＳＫ1017（第28図）　Ｄ５－９東調査区の北端で検出した、南北5.0ｍ、東西6.0ｍ、深さ0.1ｍの不定形を呈する土坑で、ＳＢ1020より新しい。遺物はコンテナに１箱で、土師器（269～281）、須恵器、黒色土器（282～286）、緑釉陶器（488）等がある。土師器小皿等があることから10世紀でも中頃以降のものと思われる。ＳＢ1020の柱掘形と重複する位置付近で平安前期の特色を残す土師器皿（281）、黒色土器鉢（286）、土師器杯（277～280）が出土しているため、別の遺構の重複している可能性もある。

ＳＫ1051　Ｄ５－11東調査区の東南隅で検出した。深さ0.2ｍで、調査区外に延びるため規模は不明である。遺物は、土師器、黒色土器Ａ・Ｂ類の小片が出土しており、10世紀前半頃の遺構と思われる。

ＳＫ1067（第21図）　平成元年度Ｄ５－８東西トレンチの中央北側で検出したもので、東西2.5ｍ、深さは0.2ｍの円形を呈する。遺物には10世紀代の土師器、黒色土器を少量出土したほか、近江産の緑釉陶器の小片が１点ある。

ＳＫ1068（第21図）平成元年度のＤ５－８東西トレンチの中央北側で検出したもので、東西2.2ｍ、深さは0.1ｍの円形を呈する。

ＳＫ1077（第35図）　Ｄ５－９西調査区の東西溝ＳＤ1069と南半が重複し、東西1.7ｍ、南北約３ｍ、深さ0.1ｍ程の方形を呈すると思われる。遺物は、10世紀中頃の土師器（247～255）、黒色土器（256～260）の他、緑釉陶器椀の小片も出土した。

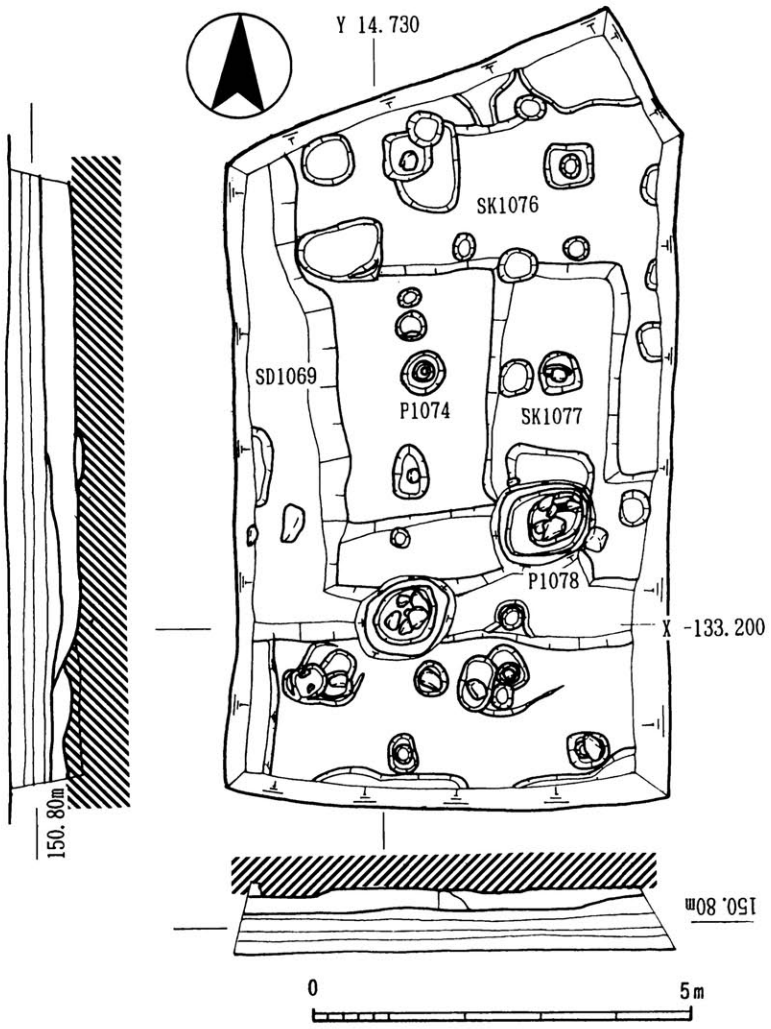
ＳＫ1083　Ｄ５－11西調査区の東北隅で検出した。調査区外に延びるために規模は不明であるが、２ｍ以上の円形を呈するものと思われる。深さは0.15ｍである。遺物は、10世紀代の土師器杯、黒色土器椀などを出土した。

ＳＤ1005　Ｄ３－５調査区西半で検出した、幅1.6ｍ、深さ0.1ｍの南北溝である。遺物は少なく、９世紀代の土師器皿や10世紀前半の土師器杯の小片がある。南側の水田では畦畔が溝の延長とほぼ同位置で見られるため、当初は外郭を画する東西溝ＳＤ1010がこの位置で南に折れ曲がる可能性が強いものと考えた。しかし、南に延長上に位置する平成元年度、２年度のＤ５－９東調査区の東端では確認されていないために性格は不明である。

ＳＤ1038　平成元年度のＤ５－２調査区の東で検出した、幅1.1ｍ、深さ0.2ｍの南北溝である。緑釉陶器椀（483）が出土した。

Ｄ５－２調査区の東側は約２ｍの標高差で、国町川に沿って幅約20ｍの水田が見られ、国庁の東の範囲を画する施設が想定できる地区である。この溝の延長を確認するため、南のＤ５－３地区で調査区を設けたが、東側では撹乱及びＳＫ1046のために溝の続きは確認することは出来なかった。

ＳＤ1050　Ｄ５－11東調査区で検出した、幅1.5ｍ、深さ0.4ｍの東西溝である。土師器皿（289）・椀（287・288）、黒色土器Ａ類椀（290）と黒色土器Ｂ類椀、緑



第35図　Ｄ５－９西調査区遺構平面図（1：100）

釉陶器椀の小片が出土した。

西８ｍに位置するＤ５－11中央南北トレンチでも幅3.5ｍ、深さ0.5ｍの東西溝があるが、更に西のＤ５－11西調査区では検出していない。

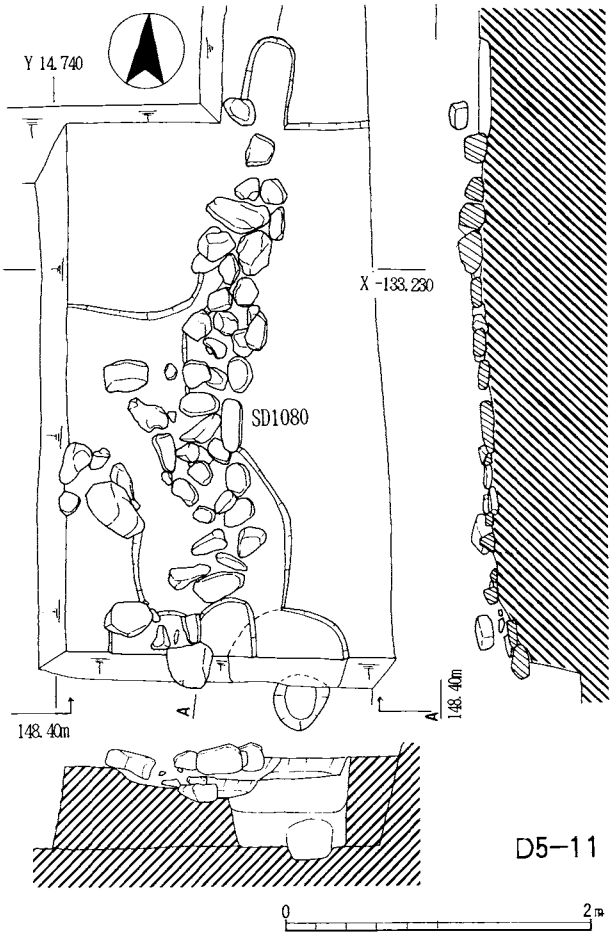
ＳＤ1069・整地層（第35図）　ＳＤ1069はＤ５－８東南部からＤ５－９西調査区にかけて検出した溝である。Ｄ５－８東南部ではＬ字状に検出し、北側の東西方向の部分では幅0.4ｍ、南北方向の部分では西肩が調査区の外に延びるために幅は2.5ｍ以上になる。南に向かう程深くなり、Ｄ５－８南端では0.5ｍである。南のＤ５－９西調査区では西壁近くで検出したが、さらに南には延びず東へと向かう。東西方向のものは、上面での幅は2.2ｍで、途中より幅は0.8ｍとなり一段深くなる。深さは0.4ｍほどである。Ｄ５－９中央の南北トレンチでは一段深くなる溝の続きは認められるが、Ｄ５－９東調査区では検出していない。このため、東脇殿の建物の周囲を巡る排水溝の可能性がある。遺物は、土師器（368～377）、黒色土器（378）などがある。北側から出土した遺物には11世紀のものが一部見られるため、場所により埋没年代が異なるものと思われる。

南のＤ５－９の西調査区では、遺構検出時に南端と北端では地山面を検出し、この間は土器を多量に含んでいるために土坑として下げた。前述したＳＤ1069はこの土坑として下げた後で検出した。この土坑は、溝が完全に埋没しないうちに埋め立てた整地層と言う性格と思われる。遺物はコンテナで５箱出土し、主なものには土師器（292～313）、黒色土器（314～325）がある。また、Ｄ５－９西調査区の南では、柱穴が東西方向に並んでおり、柵の様な施設の存在も窺わせているが、ここでは指摘だけにとどめておく。

ＳＤ1080（第36図）　Ｄ５－11中央にある平成元年度の南北トレンチで検出した。北側の幅は0.6ｍ、深さ0.2ｍの南北溝である。南側は他の遺構と重複しているため、遺構面上面では明確に確認していない。拳大の礫が南北に連なるため、溝内に礫を詰めた暗渠排水と思われる。礫に混じり、10世紀前半の黒色土器Ａ類椀が出土した。また、溝の南側下で一辺0.8ｍ、深さ0.9ｍの方形を呈する柱穴を確認しており、周辺に建物の建つ可能性も残る。

ＳＤ1081　Ｄ５－10西調査区にある、幅4.4ｍ、深さ0.4ｍの東西溝で、埋土は木片を含む砂質土である。９世紀後半（233～237）から10世紀前半（232）の遺物のほか、黒色土器Ｂ類椀（246）、ロクロ成形土師器杯（238）などを出土した。東の調査区では検出していない。ＳＤ1082より新しい。

ＳＤ1082　ＳＤ1081の東側から南に延びる溝で、東は調査区外に延びるため幅は1.4ｍ以上、深さは0.4ｍである。埋土は粘質土である。平面精査ではＳＤ1081の方が新しく別の遺構としたが、一連の溝の可能性も残る。10世紀前半の土師器（261～265）、黒色



第36図　ＳＤ1080遺構平面図（1：50）

土器（266～268）を出土した。

ＳＤ1092（第34図）　Ｄ６－５・６－７調査区で検出した、幅0.7ｍ、深さ0.2ｍの南北溝である。両調査区は南北に約23ｍ離れているが、方向から見て同一の溝と思われる。溝の方位は北で西に３度振れる。北の延長上のＤ６－３、南の延長上のＤ６－９では検出してないため、途中で折れ曲がるものと思われる。10世紀前半の土師器、黒色土器を少量出土した。

（５）平安時代後期の遺構

政庁域の建物

ＳＢ1059・1062・1072がある。外郭の建物については不明である。

ＳＢ1059（第21図）　Ｄ５－８調査区北端で検出した建物で、南側柱列を３間検出した。これまで正殿が建てられている位置である。柱間は３ｍ等間で、更に西の柱想定位置を一部拡張したが柱は検出していない。柱掘形は径0.6ｍの円形で、西端のものには柱根が残る。ＳＢ1060より新しく、遺物の中には瓦器の細片が見られる。

ＳＢ1062（第21図）　南北２間、東西３間以上の東西棟である。ＳＢ1060より新しい。

ＳＢ1072（第25図）　Ｄ５－８東南部からＤ５－９西調査区に位置する南北棟である。西側柱列５間分を確認しただけで、南北両妻柱は不明である。柱掘形は径0.5ｍ、深さ0.3ｍの円形を呈する。ＳＢ1070より新しい。

その他の遺構

ＳＤ1063（第21図）　ＳＢ1062の南側柱と重複し、埋土は炭化物を多く含む。幅0.3ｍ、深さ0.1ｍの浅い東西溝である。方位は、西で南に３度振れる。ＳＢ1062より新しく、ＳＢ1062の柱穴の東から２間目でいったん途切れ、さらに西に続く。溝底には、径0.1ｍの浅い穴をほぼ等間隔で多数検出した。瓦器小片、土師器小皿を出土し、11世紀後半には埋没する。垣根のような正殿の前方を目隠しする施設と思われ、方位から見てＳＢ1059に伴う可能性が高いものである。

ＳＫ1013（第27図）　Ｄ５－５調査区南端にあり、幅は東西2.1ｍ、南方をＳＫ1014に壊されているため南北2.5ｍ以上で深さ0.2ｍの隅丸方形を呈する。土師器（383）、須恵器、黒色土器を少量出土した。遺物から11世紀前半に比定できる。

ＳＫ1014（第27図）　南は調査区外に延び、径1.5～2.0ｍ、深さ0.3ｍの楕円形を呈するものと思われる。ＳＫ1013より新しい。土師器皿（379・380）、須恵器片、黒色土器（381・382）が少量出土し、11世紀前半に比定できる。

ＳＫ1054（第26図）　Ｄ５－６調査区中央にある、東西4.5ｍ、南北3.5ｍ、深さ0.2ｍの楕円形を呈する土坑である。人頭大の礫が多く含まれており、遺物はコンテナ３箱で、土師器（326～352）、黒色土器（354～358）の他、瓦器（353）が１点出土した。

ＳＫ1057（第26図）　Ｄ５－６調査区西南で検出した深さ0.15ｍ、規模は調査区西南外に延びるために不明である。遺物は、11世紀前半の土師器杯、小皿、ロクロ成形土師器の杯・小皿などが少量出土した。

ＳＫ1061（第21図）　Ｄ５－８調査区の西北隅にある、深さ0.2ｍ、調査区外に延びるため規模は不明である。遺物は、土師器小皿・杯、須恵器、黒色土器椀、ロクロ成形土師器等を出土した。

ＳＫ1064（第21図）　Ｄ５－８調査区にある、東西3.1ｍ、南北約３ｍ、深さ0.1ｍの不定形を呈する土坑である。埋土は炭化物を多量に含んでおり、遺物には土師器杯（365）・皿（359～364・366）、黒色土器Ａ類椀の底部（367）などを出土した。

ＳＫ1101（第34図）　Ｄ６－７調査区中央で検出した、東西3.7ｍ、南北は南に延びるため1.8ｍ以上、深さ0.2ｍの円形を呈する土坑である。土師器の小皿を中心に、ロクロ成形土師器小皿、黒色土器などが出土し、10世紀末から11世紀前半に比定できる。

ＳＤ1044（第31図）　Ｄ５－３調査区西半にある、幅0.9ｍ、深さ0.2ｍの斜行溝である。土師器小皿、黒色土器椀、緑釉陶器皿などを少量出土した。11世紀前半に比定できる。

ＳＤ1045（第31図）　Ｄ５－３調査区中央にある、幅0.9ｍ、深さ0.15ｍの南北溝である。方位はほぼ真北で、北方のＤ５－２調査区では確認していない。遺物は10世紀末から11世紀前半の土師器小皿、黒色土器Ａ・Ｂ類椀、ロクロ成形土師器小皿などを少量出土した。ＳＤ1044、ＳＫ1046より新しい。

ＳＤ1103（第29図）平成２年度調査のＤ６－９調査区南で検出した、幅1.0ｍ、深さ0.1ｍの東西溝である。ＳＢ1105、ＳＤ1104より新しく、遺物は少ないが平安時代後期のものと思われる。

（６）時期不明・その他の時期の遺構

Ａ）時期不明の遺構

政庁内の建物

ＳＡ1058（第26図）　Ｄ５－６調査区の北西にある、南北２間の塀である。正殿のＳＢ1055より新しく、柱掘形は一辺0.6～0.8ｍ、深さ0.4ｍの方形を呈する。残りの悪い径0.2ｍほどの柱根が残る。柱間は3.0ｍで正殿の柱間と似ており、西に延びる建物の可能性もあるが、ここでは掘立柱塀としておく。出土した遺物はないため、時期はＳＢ1055の平安時代前期以降としか判断できない。

外郭の建物

ＳＢ1097（第24図）　Ｄ６－６調査区の東で検出し、柱掘形は径0.5ｍ、深さ約0.4ｍの円形を呈する。ＳＢ1090・1095より古く、南端で検出した柱穴には残りの悪い径0.15ｍの柱が残る。

ＳＢ1096（第24図）Ｄ６－６調査区の東で検出し、柱掘形は一辺0.6ｍ、深さ0.2ｍ以上の隅丸方形を呈する。

ＳＢ1037　平成元年度Ｄ５－２調査区中央の南北両壁際で検出した。柱掘形は一辺0.7ｍ、深さ0.2ｍの方形を呈する。遺物はほとんど出土していない。

ＳＢ1093（第34図）　平成元年度のＤ６－５調査区の西で、東西２間分検出した。南北棟になるものと思われる。柱掘形は一辺0.7～0.8ｍの方形で、深さは西端のものが0.6ｍ、東側のものは0.3ｍと浅い。このため南北棟と考えているが、隅柱は深いことを考えると東西棟になる可能性もある。柱掘形はＳＢ1094と一部重複し、ＳＢ1093が新しい。

ＳＢ1094（第34図）　ＳＢ1093より古いもので、東西２間分検出した。柱掘形は一辺0.7～0.8ｍの方形で、深さは0.4ｍである。棟方向は他の多くのものとは異なり、西で北に振れるものである。

ＳＤ1079　平成元年度のＤ５－９中央南北トレンチで確認した深さ0.1ｍの溝で、北の幅は1.0ｍ、南に行くにしたがい細くなり、南端では0.2ｍとなる。出土した遺物はほとんどなく、時期は不明である。位置的には政庁の東を画する南北溝に当たるものの、南のＤ５－10中央トレンチでは確認していない。

Ｂ）その他の時期の遺構

ＳＤ1048・1049（第30図）　ＳＤ1048は、Ｄ５－10東調査区で検出した、幅1.8ｍ、深さ0.3ｍの東西溝で、弧を描き西のトレンチに続く。遺物は、土師器、須恵器、黒色土器Ｂ類の小片、青磁（498）等を少量出土した。南にあるＳＤ1049は、幅0.6ｍ、深さ0.3ｍで、東ではＳＤ1048と重複する。ＳＤ1048より新しく瓦器の小片を出土した。鎌倉時代に属する。

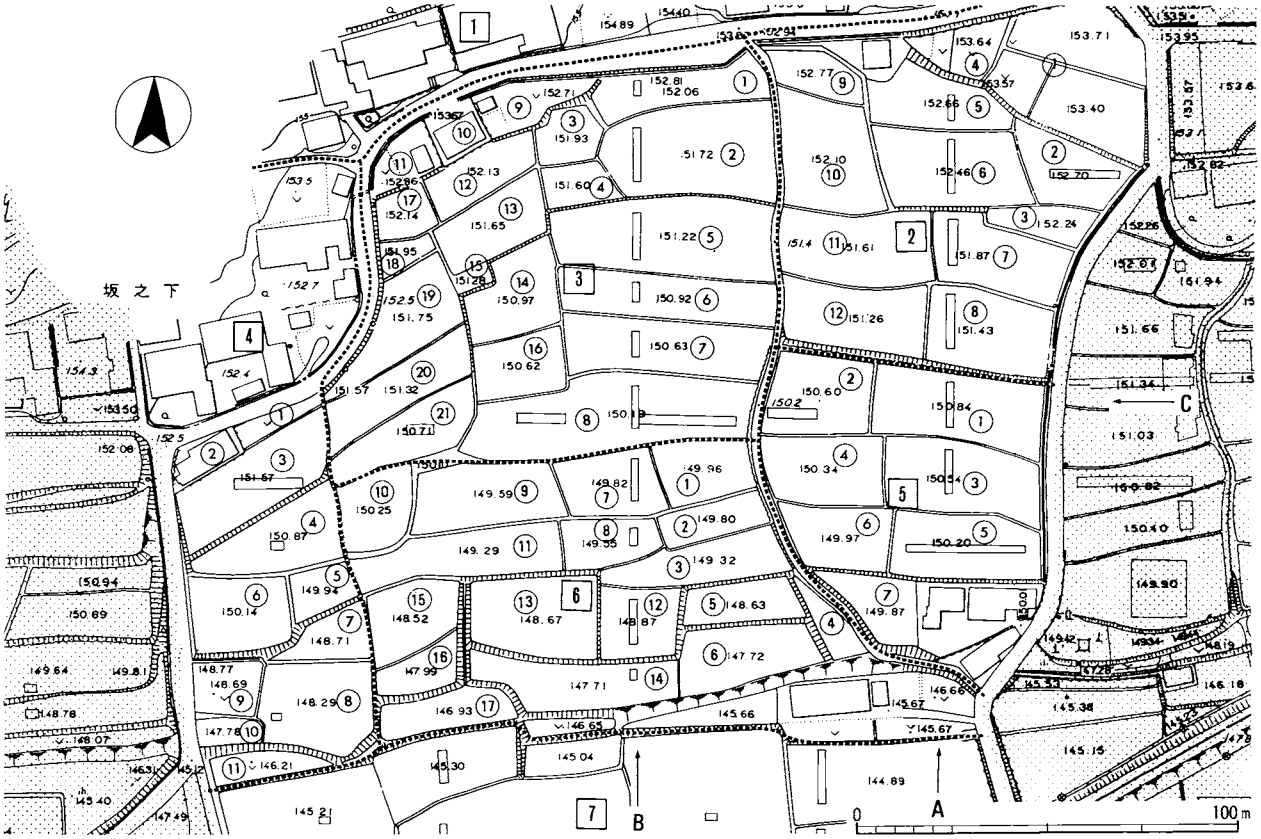
ＳＤ1039（第31図）　Ｄ５－３調査区の西端にある南北溝で、調査区の外に延びる。規模は幅1.3ｍ以上、深さ0.4ｍで、瓦器の破片を少量出土しており、鎌倉時代以降の溝である。

ＳＤ1041・1042（第31図）　Ｄ５－３調査区の西端にある南北溝である。ＳＤ1041は幅0.4ｍ、深さ0.2ｍ、ＳＤ1042は幅0.8ｍ、深さ0.1ｍの規模である。土師器、須恵器の細片が出土しただけで、時期を断定することは出来ない。現代の畦畔に沿うため、新しいものかも知れない。

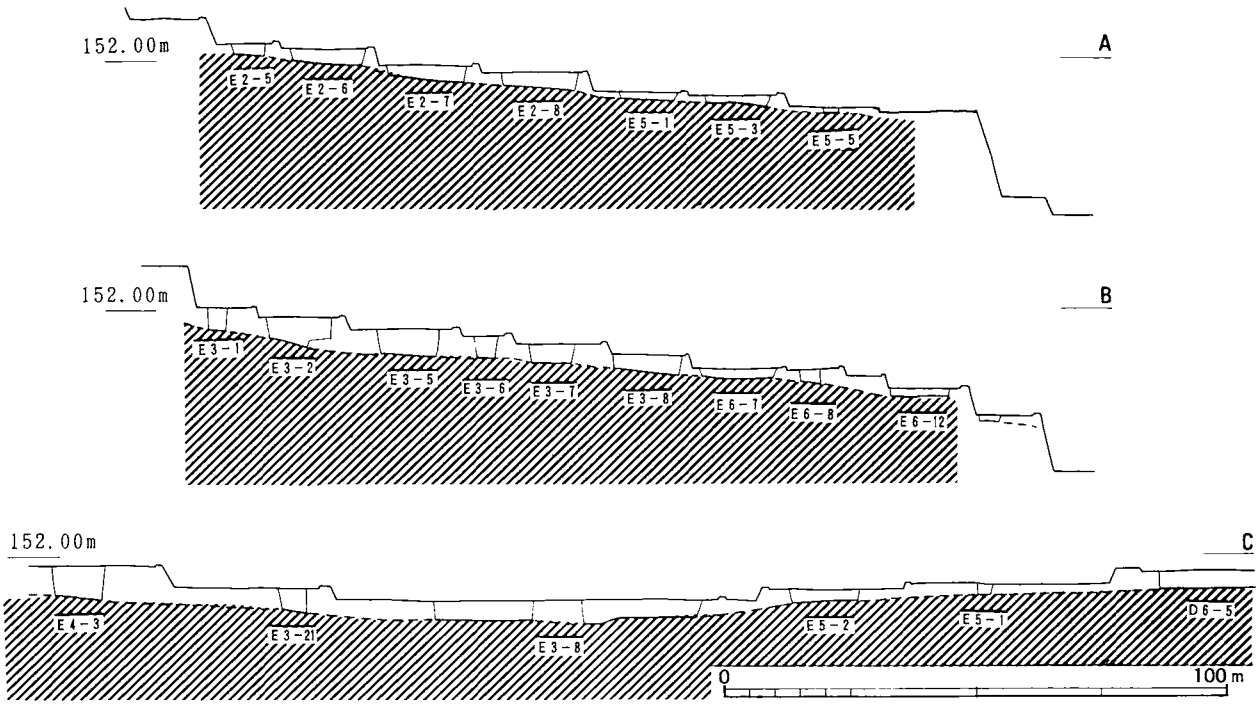
建物番号	規　模	棟方向	桁 行（m）	梁行(m)	柱間寸法（m）		時　期	備　考
					桁　行	梁行		
SA1025		E20° N					奈良以前	8間以上
SB1001	－ × 3	N1° E	－	6.1	－	2.3	8末～9C前	北廂柱間1.5m
1002	－ × 2	N0° E		4.2	2.1	2.1	8末～9C前	
1015	5 × 3	N0° E	8.9	4.5	2.25	1.5	8末～9C前	SK1012より古い
1020	5 × 3	N0° E	11.5	4.8	2.3	1.6	8末～9C前	SB1021より古い
1056	(5) × (3)	N0° E	－	－	(3.0)	(3.0)	8末～9C前	SB1055より古い
1065	(3) × 2	E0° S	－	4.6	3.0	2.3	8末～9C前	SB1066より古い
1070	(4) × (2)	N0° E	－	－	2.4	－	8末～9C前	SB1071.1073より古い
1075	(2) × (2)	N0° E	－	－	－	－	8末～9C前	
1084	2 × (2)	N0° E	－	－	2.4	－	8末～9C前	
1085	4 × 2	N0° E	9.8	5.4	2.45	2.7	8末～9C前	SB1090より古い
SA1052		N1° E		東西2.3m、南北2.4mか			8末～9C前	東西5間、南北9間以上
1091		N1° E			2.3		8末～9C前	南北3間以上、
1021	(3) × (2)	N1° E	－	－	2.3	2.3	9C前半	南廂。SK1018より古い
1105	(5) × 4	N1° E	－	7.6	2.2	1.9	9C前半	北廂柱間2.1m
SB1016	3 × (2)	N2° E	8.1	－	2.7	2.4	9C後半	
1047	4 × (2)	N1° E	10.0	－	2.5	2.3	9C後半	
1055	7 × 3	N1° E	20.4	8.7	3.0	3.0	9C後半	三面廂柱間2.7m
1066	(4) × 2	E1° S	－	4.8	3.0	2.4	9C後半	SB1065より新しい
1073	(5) × 2	N0° E	－	－	2.3	－	9C後半	SB1071より古い
1095	5 × (2)	N1° E	12.0	－	2.4	2.7	9C後半	SB1090より古い
SB1102	(2) × 2	N1° E	－	4.6	3.0	－	9C	
SA1040		N0° E			－		9C	
SB1022	3 × 2	N3° W	9.6	4.2	2.4	2.1	10C後半	
1060	5 × (2)	N1° E	15.0	－	3.0	3.0	10C	礎石建物
1071	(5) × (2)	N1° E	11.8	－	2.37	－	10C	礎石建物
1090	5 × (2)	N1° E	11.8	－	2.37	2.7	10C	礎石建物
1100	4 × －	E2° S	9.2	－	2.3		10C	塀の可能性あり
SB1059	3 × －	N3° E	15.0	－	3.0	－	11C	
1072	5 × (2)	N1° W	12.0	－	2.4	－	11C	
1062	(4) × 2	E2° S	－	4.8	3.0	2.4	11C	SD1063より古い
SB1037	(2) × 2	N2° E	－	3.8	2.1	1.9	不明	
1093	－ × 2	N1° E	－	4.2		2.1	不明	SB1094より新しい
1094	－ × 2	N2° W	－	5.4	－	2.7	不明	
1096	(2) × －	N3° E	－	－	2.25	－	不明	
1097	(3) × (2)	N1° W	－	－	2.4	2.4	不明	
SA1058		N1° E			3.0		不明	2間、SB1055より新しい
1089		N3° E			2.3		不明	3間以上

第８表　国町地区建物規模表

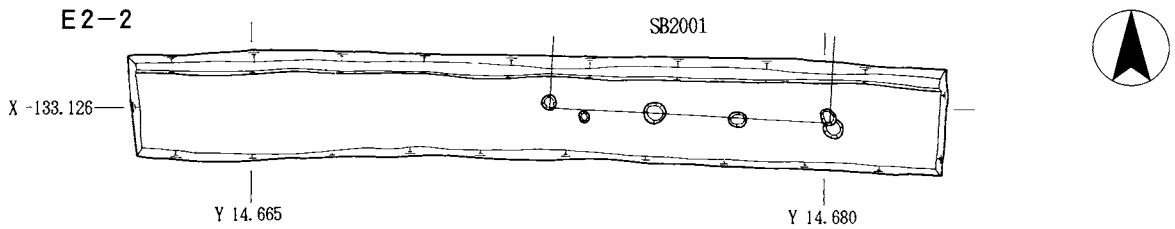
4. 前田地区



第37図　前田地区調査区位置図（1：2,000）



第38図　前田地区東西・南北断面略図（1：1,500、高さは1：150）



前田地区の地区表示は、第37図のとおりである。当地区の北・西北側には丘陵がせまり、南は約４～５ｍの比高を持つ段丘上面の南北約180ｍほどの平坦地である。平成２年度はＥ５－２・Ｅ３－８・Ｅ３－21・Ｅ４－３地区に幅３ｍの東西トレンチ（面積200㎡）を、平成３年度には中央と東部に幅３ｍの主に南北トレンチ（面積660㎡）を設定し、調査を実施した。当地区の調査は、調査期間との関係から主に遺構の広がりの確認に重点を置き、国庁の範囲（区画溝）を確認することとした。なお、段丘下の水田にも古道の確認を目的とし、幅２ｍの南北トレンチを設定したが、遺構・遺物は確認できなかった。

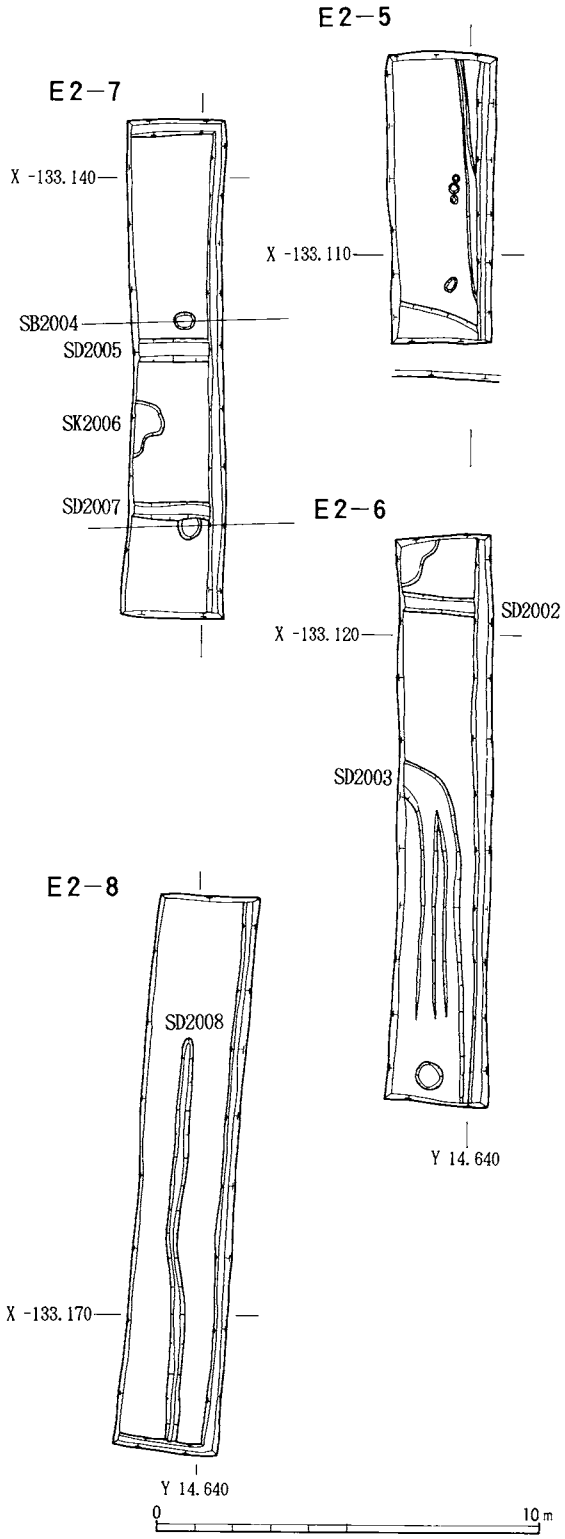
現地形の標高は、北端で152ｍ、南の段丘周縁部で150ｍ前後である。東西方向（第38図）で見れば、東の国町地区に隣接する地域と西端がやや高く、中央部が低い地形である。遺構検出面までの深さは、北側が約0.5～0.6ｍと深く、南側は0.4ｍ程と浅い。

（１）東北部（Ｅ２）の概要（第39図）

Ｅ２－２は東西21ｍの調査区で、遺構検出面までの深さは約0.5ｍである。トレンチ東部で掘立柱建物ＳＢ2001を検出した。ＳＢ2001の柱掘形は、径0.3～0.5ｍ、深さ0.1～0.2ｍの円形で、３間分検出した。柱間は西のみが2.7ｍで、ほかは2.3ｍである。棟方向はE－３°－Sで、東西棟になるものと思われる。柱掘形から出土した遺物の内には黒色土器の細片が見られることから、平安時代中期以降のものである。

Ｅ２－５は南北８ｍの調査区で、遺構面までの深さは北側が0.5ｍ、南側が0.65ｍである。東壁近くで幅0.2ｍ、深さ0.1ｍの南北溝、南端で深さ0.15ｍの調査区外に延びる土坑や径0.3ｍ程度の柱穴を二つ確認している。これらから出土する遺物は土師器のみであり、おおむね11世紀代に比定できる。

Ｅ２－６は南北18ｍの調査区で、遺構面までの深さは北端で0.5ｍ、南端で0.7ｍである。北端でＳＤ



第39図　Ｅ２調査区遺構平面図（1：200）

2002、南半部ではＳＤ2003や柱穴を検出した。ＳＤ2002は幅0.4ｍ、深さ0.1ｍの規模である。方向はＥ－３°－Ｎの東西溝で、11世紀の遺物を少量出土した。ＳＤ2003中央から南西のものは当初は土坑として全体を下げ、その下で中央で西に向かう幅0.4～0.5ｍ、深さ0.2ｍの溝を２本確認した。出土した遺物から11世紀代の遺構である。南端の柱穴は溝の底で確認したもので、径0.6ｍ、深さ0.15ｍの円形を呈する。建物の柱穴と思われるが、南の調査区まで７ｍ以上あるため、規模は不明である。

Ｅ２－７は南北13ｍの調査区で、遺構面までの深さは北端で0.3ｍ、南端で0.9ｍである。調査区中央で掘立柱建物ＳＢ2004、東西溝ＳＤ2005・2007、土坑ＳＫ2006を検出した。ＳＢ2004の柱掘形は径0.5ｍ、深さ0.1ｍの円形で、建物方向はＮ－２°－Ｗである。柱間距離は5.4ｍ程あるため、梁間2間の東西棟と思われる。後述するＳＤ2007より古いが、遺物がないために時期は断定できない。北側のＳＤ2005は幅0.6ｍ、深さ0.1ｍ、南側のＳＤ2007は幅0.5ｍ、深さ0.1ｍである。ＳＤ2007からは、11世紀代の土師器が少量出土した。溝の方向はいずれもほぼ東西方向であり、同時期のものと思われる。土坑ＳＫ2006は、南北1.5ｍ、東西0.7ｍ以上、深さ0.07ｍの不定形なもので、10世紀代の遺物が少量出土した。

Ｅ２－８は南北15ｍの調査区で、遺構面までの深さは、北端では0.5ｍ、南端で0.7ｍである。幅0.3ｍ、深さ0.05ｍの南北溝ＳＤ2008を検出した。方向はほぼＮ－２°－Ｅで、遺物は11世紀代のものを少量出土した。

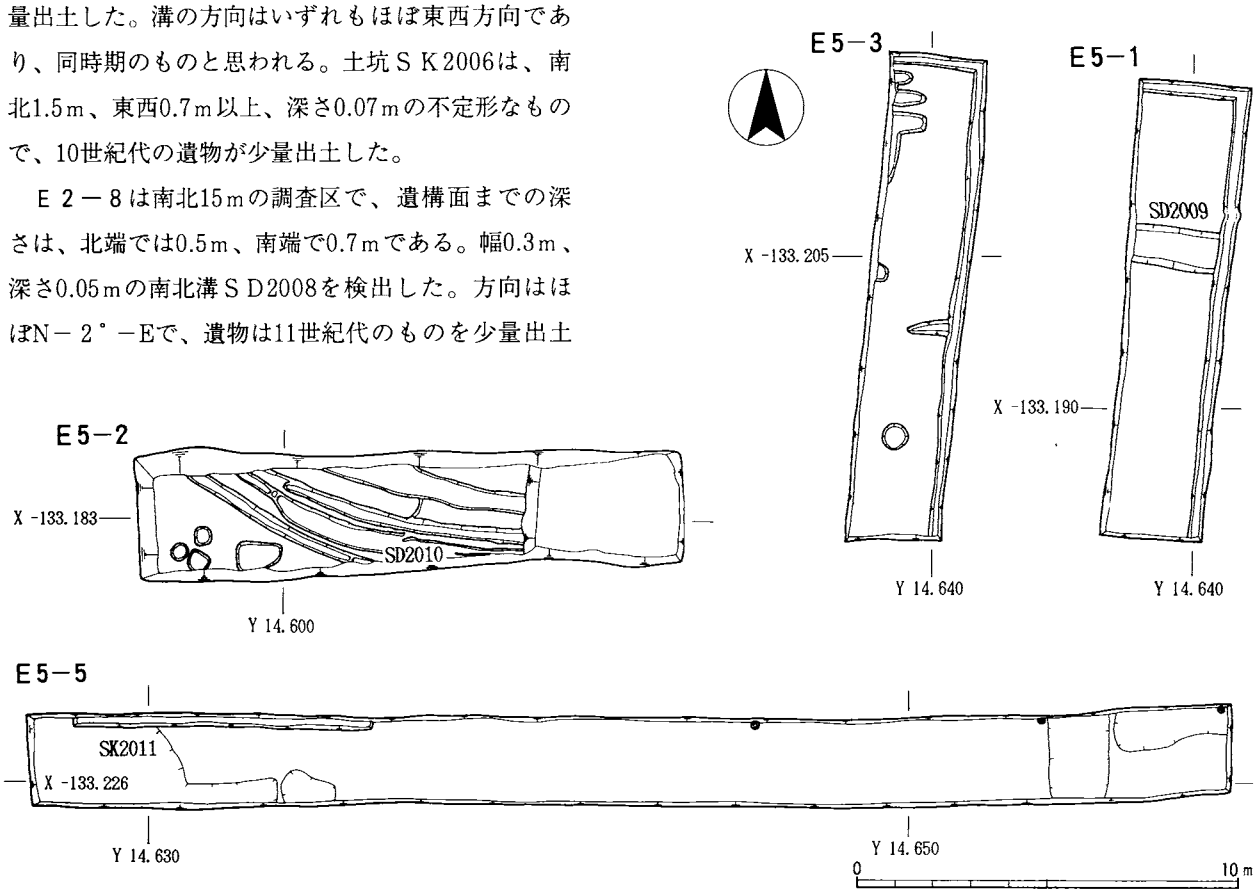
（２）東南部（Ｅ５）の概要（第40図）

Ｅ５－１は南北12ｍの調査区で、遺構面までの深さは0.5ｍである。遺構は、幅1.1ｍ、深さ0.1ｍの東西溝ＳＤ2009がある。方向はＥ－６°－Ｓで、遺物はほとんど出土していないために時期は不明である。

Ｅ５－３は南北13ｍの調査区で、遺構面までの深さは北端で0.6ｍ、南端で0.8ｍである。土坑や小溝などがあるが、遺物もなく、時期は不明である。

Ｅ５－５は東西32ｍの調査区で、遺構面までの深さは0.5ｍ程で、調査区西端で土坑ＳＫ2011を検出したが、遺構検出のみにとどめた。遺構検出時に緑釉陶器片や10世紀代の遺物を出土した。

Ｅ５－２は東西15ｍの調査区で、遺構面までの深さは0.5ｍ程である。弧状に走る東西溝を２条検出した。南側のＳＤ2010は上面は幅1.5ｍで、下方では３本に分かれていた。出土した遺物は鎌倉時代のものと、奈良時代まで遡るもの（39～41）があり、すべての溝が鎌倉時代とするには問題が残る。



第40図　Ｅ５調査区遺構平面図（1：200）

（３）中央北（Ｅ３）の概要（第41図）

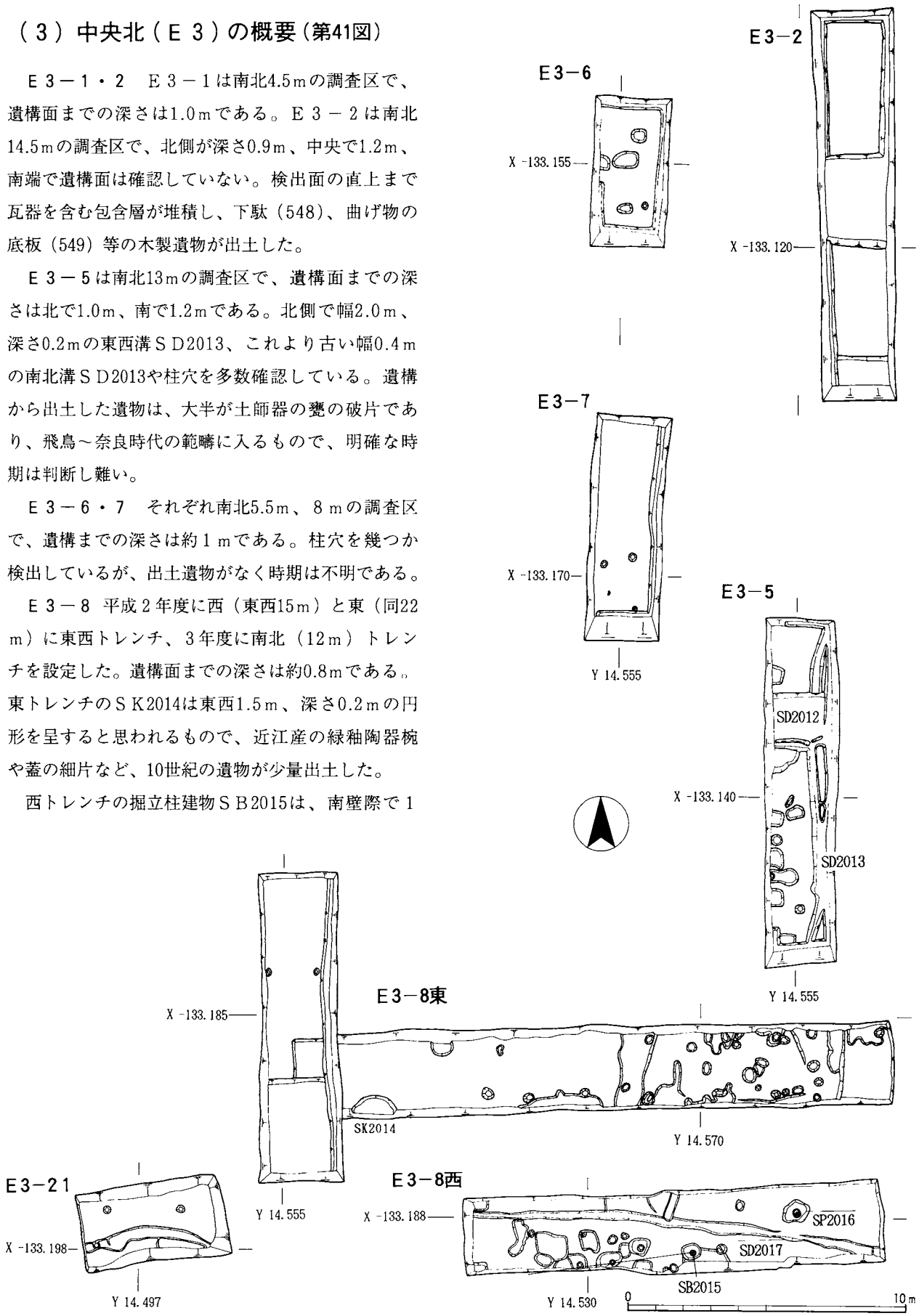
Ｅ３－１・２　Ｅ３－１は南北4.5ｍの調査区で、遺構面までの深さは1.0ｍである。Ｅ３－２は南北14.5ｍの調査区で、北側が深さ0.9ｍ、中央で1.2ｍ、南端で遺構面は確認していない。検出面の直上まで瓦器を含む包含層が堆積し、下駄（548）、曲げ物の底板（549）等の木製遺物が出土した。

Ｅ３－５は南北13ｍの調査区で、遺構面までの深さは北で1.0ｍ、南で1.2ｍである。北側で幅2.0ｍ、深さ0.2ｍの東西溝ＳＤ2013、これより古い幅0.4ｍの南北溝ＳＤ2013や柱穴を多数確認している。遺構から出土した遺物は、大半が土師器の甕の破片であり、飛鳥～奈良時代の範疇に入るもので、明確な時期は判断し難い。

Ｅ３－６・７　それぞれ南北5.5ｍ、８ｍの調査区で、遺構までの深さは約１ｍである。柱穴を幾つか検出しているが、出土遺物がなく時期は不明である。

Ｅ３－８　平成２年度に西（東西15ｍ）と東（同22ｍ）に東西トレンチ、３年度に南北（12ｍ）トレンチを設定した。遺構面までの深さは約0.8ｍである。東トレンチのＳＫ2014は東西1.5ｍ、深さ0.2ｍの円形を呈すると思われるもので、近江産の緑釉陶器椀や蓋の細片など、10世紀の遺物が少量出土した。

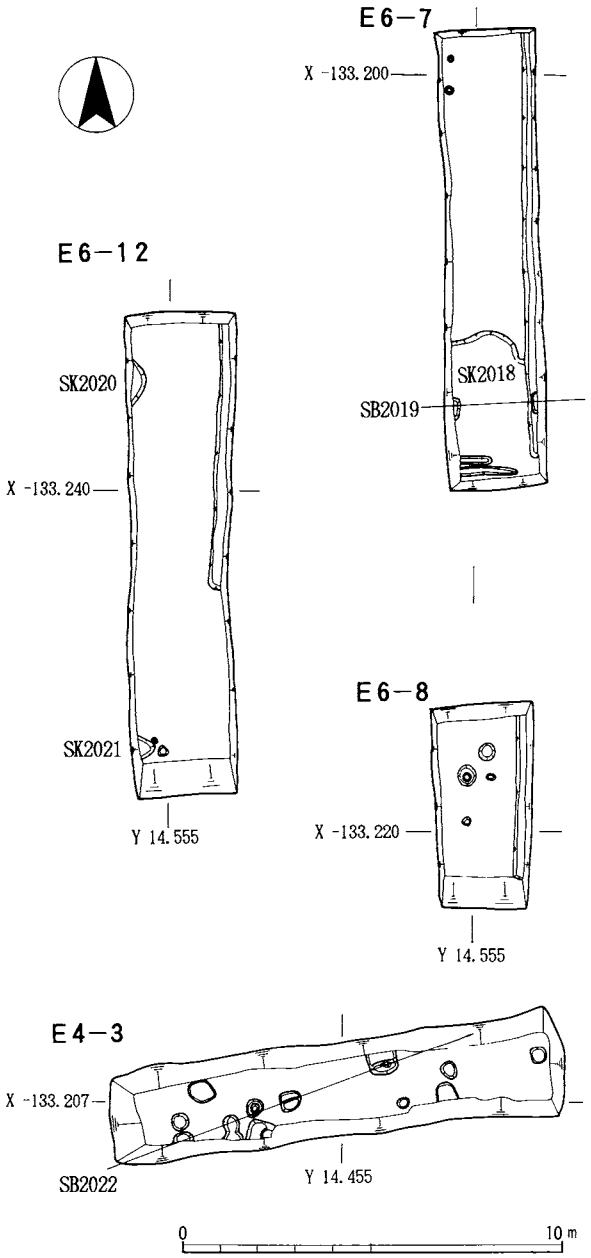
西トレンチの掘立柱建物ＳＢ2015は、南壁際で１



第41図　Ｅ３調査区遺構平面図（1：200）

間分検出した。柱掘形は円形を呈し、径・深さともに約0.6ｍで、柱間は3.0ｍ、棟方向はＥ－８°－Ｗである。西側柱穴内には径0.2ｍ、東側は曳航用の穴が穿たれた0.25ｍの柱根（559）が残る。黒色土器片が出土し、10世紀に比定できる。ほかに東端でも柱根の残る柱穴ＳＰ2016を検出している。東西溝ＳＤ2017は、おおよそ10～11世紀代のものである。

Ｅ３－21は東西５ｍの調査区で、Ｅ３－８から西に30ｍほどの位置にある。遺構面までの深さは１ｍである。東西溝と柱穴を確認しているが、遺物が出土していないために時期は不明である。



第42図　Ｅ６・Ｅ４調査区遺構平面図（1：200）

（４）中央南部（Ｅ６）の概要（第42図）

Ｅ６－７は南北12ｍの調査区で、深さは約0.7ｍである。南側で土坑ＳＫ2018と、土坑下の東西両壁際で掘立柱建物ＳＢ2019を検出した。柱間は約2.3ｍ、棟方向はＷ－３°－Ｎである。遺物が出土していないために時期は不明である。

Ｅ６－８は南北5.5ｍの調査区で、深さ0.6ｍ。径0.4ｍ程の柱穴を検出しており、その内の一基からは10世紀後半～11世紀前半の土師器を少量出土した。

Ｅ６－12は南北11ｍの調査区で、深さ0.5ｍである。北のＳＫ2020は奈良～平安時代の土師器甕片、南のＳＫ2021からは11世紀後半の土師器や瓦器の細片が出土した。更に南のＥ６－14にもトレンチを入れたが、0.4ｍ程で地山となり、遺構は検出できなかった。

（５）西部（Ｅ４）の概要（第42図）

Ｅ４－３は東西12ｍの調査区で、深さ1.1ｍである。掘立柱建物ＳＢ2022や柱穴を多数検出した。

掘立柱建物ＳＢ2022は東西２間分検出しただけで、規模は不明である。柱掘形は径0.5ｍの方形で深さ0.4ｍ、棟方向はＷ－21°－Ｎである。７世紀後半の須恵器杯蓋（36）、土師器甕（37・38）を出土した。

（６）小結

前田地区東部は、現地形でみると東の国町地区に連なる地域である。ここでは遺構密度は薄いものの掘立柱建物や溝、土坑等を検出しており、平安時代中期以降の遺構が広がることが明かとなった。建物や溝の性格については不明な点が多いが、隣接する国町地区の国庁域の範囲に入る可能性が高いものと思われる。

中央部は地形的に谷部に当たるもので、北側は11～12世紀代の包含層が厚く堆積し、中央から南で10～11世紀の遺構を検出している。緑釉陶器もＥ３－８で多量に出土しており、国庁の周縁部にあたる地域であろう。中央部でも西は遺構が少ないが、調査区の数が少ないために断定は出来ない。

西部で検出した遺構は７世紀後半のもので、国町地区で確認されている平安時代の遺構は確認されていない。平安時代の国庁域の範囲には入らないものの、注目される地域である。

5. 遺　物

（1）縄文～弥生時代の遺物

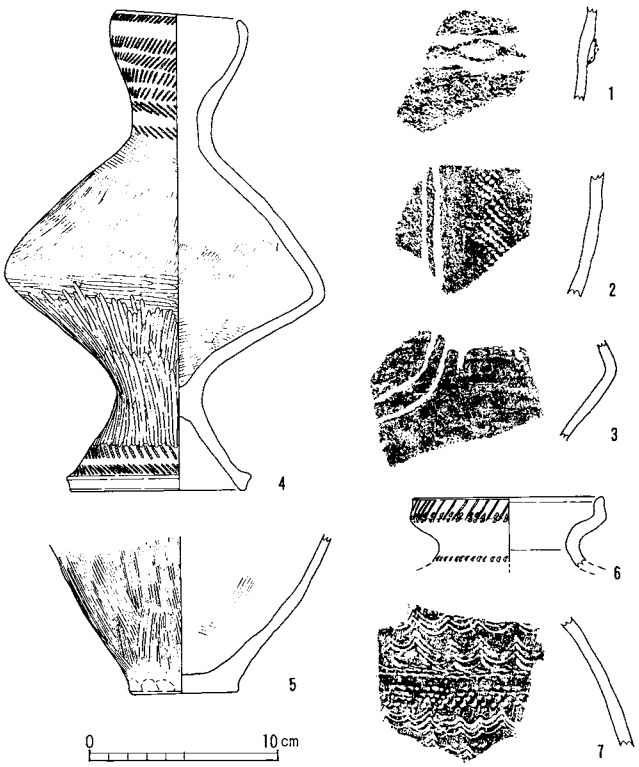
縄文時代の遺物は、4点と非常に数が少ない。すべて追越地区からの出土だが、当該期の遺構も確認されておらず、他からの混入品である。縄文土器で最も古いものは、ＳＤ８から出土した後期の鉢（3）である。晩期の鉢（1）は貼付凸帯を持つ。同様なものがＳＤ３から１点出土している。２は縄文が残り、縦方向に張り付け凸帯を持つ。

弥生時代の遺物には、方形周溝墓と思われるＳＤ13から中期の台付細頸壺（4）と甕の底部（5）が出土した。その他、包含層から後期の甕（6）、壺の体部（7）などがあるが、数は少ない。

（2）古墳時代の遺物

ＳＨ９出土土器（第44図）　丸底で口縁部を外反させる小形の鉢（8）や口縁部が内湾する鉢（9）、甕（10）がある。

ＳＤ1043出土土器（第44図）　土師器には、体部が丸く口縁部が外反する鉢（11・12）、平坦な杯下半から直線的に開く口縁を有する高杯（13）や体部が丸くなる小形の甕（15～17）がある。



第43図　遺物実測図（１）縄文・弥生時代

須恵器杯身(14)は口縁部の立ち上がりが長く、ロクロケズリは浅いものの、やや偏平な底部を持つことから、５世紀後半の陶邑窯ＴＫ23号型式に比定できる。

ＳＤ8出土土器（第44図）　土師器には、平底で器壁が厚い鉢（18）、口縁部を欠くがやや丸みをもつ口縁部になると思われる高杯（19）がある。甕にはいわゆる複合口縁をもつもの（20）、丸底で口縁部をやや外半させて端部を丸く納めるもの（21・22）、口縁部外面に面を持つ大形のもの（23）がある。23は下層出土である。

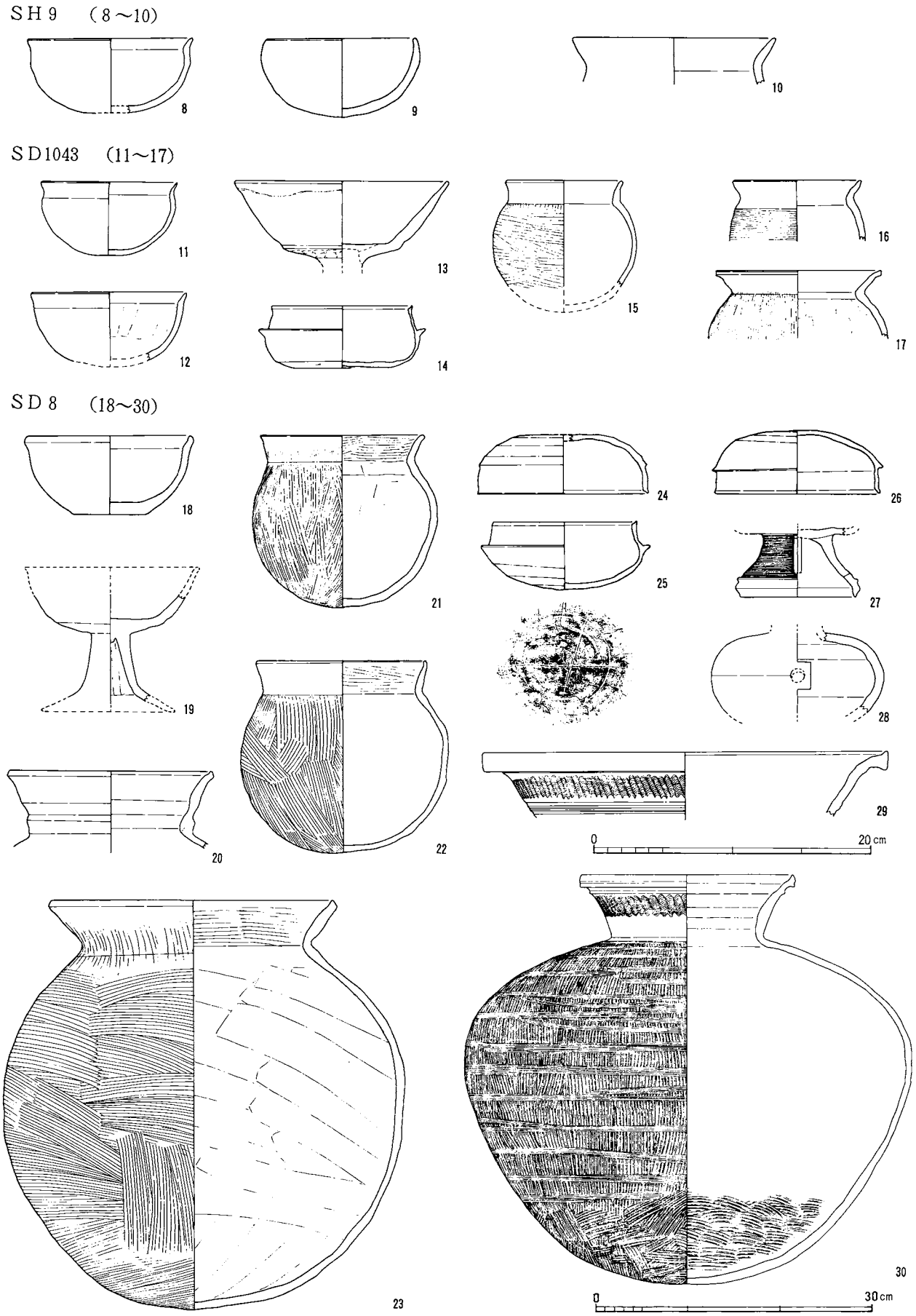
須恵器のうち、杯蓋（24）や杯身（25）はロクロケズリが深くＴＫ23号型式に比定されるが、ＳＤ1043出土の須恵器と比較するとやや後出の様相を呈する。杯蓋（26）はロクロケズリの範囲が狭く、ＴＫ47号型式に比定される。また、小形の瓶（28）は体部外面が無文で断面はセピア色を呈し、ＴＫ208号型式まで遡る可能性もある。甕（30）は下層出土である。

土師器は鉢（18）・高杯（19）がＳＤ1043のものと比較しても新しい様相を呈する。下層から出土した土師器甕（23）は、口縁端部が肥厚しないが布留式の甕の系譜を引くと思われ、上層から出土した甕（21･22）とは大小の違いというより時期差があると思われる。

ＳＤ16出土遺物（45図）　高杯の脚（32）は短脚一段透かしで、土師質のものである。

須恵器杯身（34）・杯蓋（33）はＴＫ209号型式のもので、７世紀初頭に比定される。短頸壺（35）は体部に対して口縁部が長く直立し、体部下半はヘラケズリで調整されており、６世紀代まで遡る可能性が高い。

ＳＫ1002出土遺物（第45図）　土師器杯（42･43）は、甕の底部下半を作った後に上方縁部をヨコナデして口縁としたもので、内面には刷毛目が一部に残る。甕（45）は外上方に向かって延びる口縁部を持つもので、類似する甕に包含層出土の48があり、周辺から６世紀代の須恵器が出土していることなどから、ＳＫ1002も６世紀まで遡る可能性が高い。

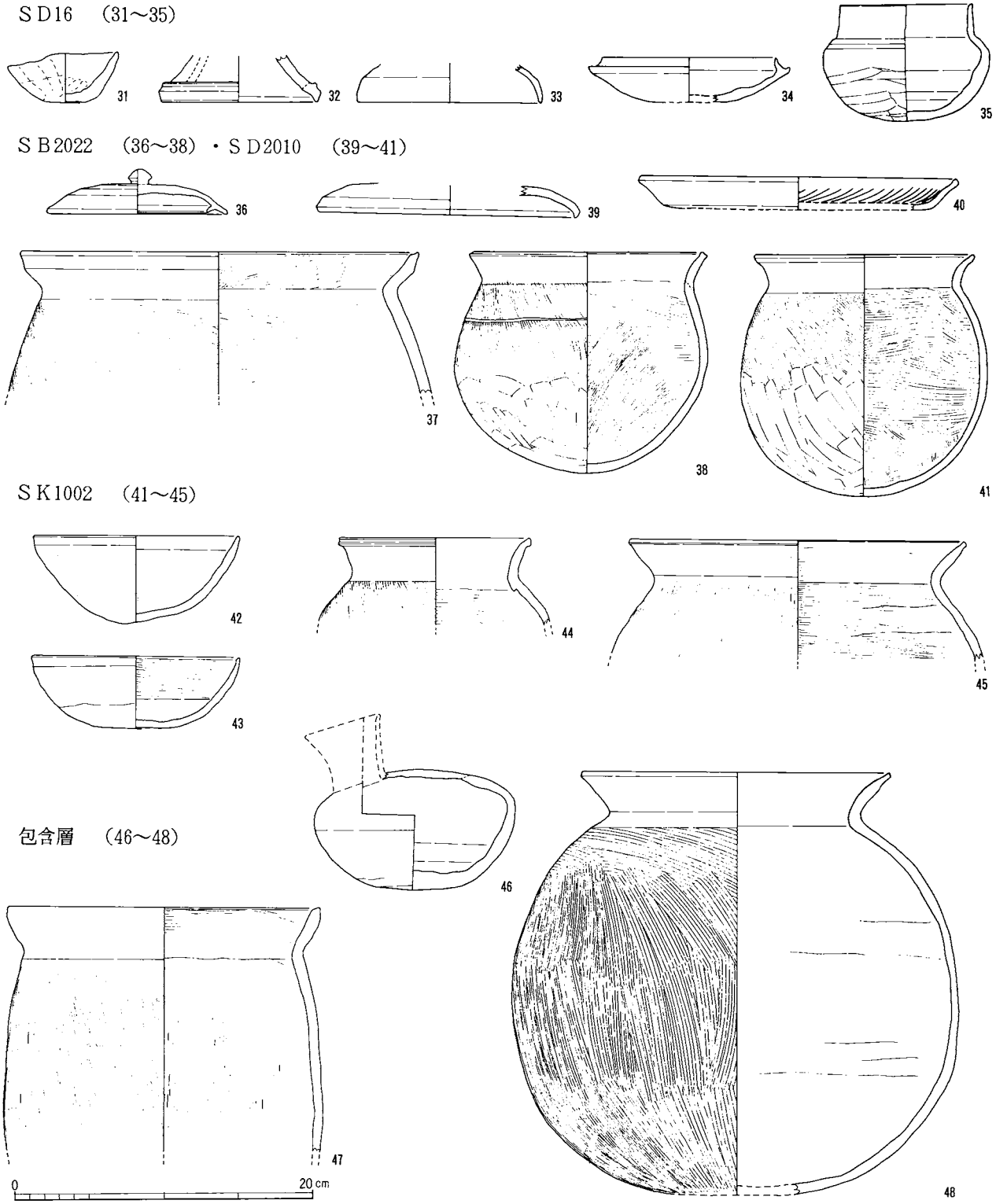


第44図　遺物実測図（２）古墳時代（30は１：６）

（３）飛鳥・奈良時代の遺物

ＳＢ2022出土遺物（第45図）　須恵器杯蓋（36）は、内面に返りの残る飛鳥第3型式のものである。土師器甕（38）は体部下半へラケズリを行う、いわゆる近江型の甕で、体部上半に一条沈線が巡る。口縁部が受口状になる大形の甕（37）も38と同様に近江型の甕であり、７世紀後半に比定できる。

ＳＤ2010出土遺物（第45図）　８世紀前半の須恵器杯蓋（39）、土師器皿（40）があるほか、土師器甕（41）は体部下半をヘラケズリする近江型の甕で、体部は球形に近い。



第45図　遺物実測図（３）飛鳥・奈良時代

（４）平安時代初期の遺物

平安時代の遺物は、多種多量に出土している。まず遺構毎に土師器・須恵器などの土器類について記述し、硯、緑釉陶器、墨書土器などについては、その他の遺物としてまとめて説明する。なお、小形器種の名称は、原則的に奈良国立文化財研究所の用例に準ずる[2]。

ＳＤ1010出土土器（第46図）

遺物量が少なく、総破片点数は約200片ほどである。土師器杯ＡⅡ(49･50)・皿ＡⅡ(51･52)・皿Ｂ(53)、須恵器横瓶(54)・鉢(55)・壺(56･57)などがある。

土師器杯ＡⅡはｅ手法で、口縁端部をつまみ上げる。端部内面の沈線がＳＫ1011出土の杯と比較してもより強く残り、古い様相を示す。皿はｅ手法で、口縁端部は丸く収めるもの(51)、肥厚するもの(52)がある。52の底部内面には螺旋状暗文、口縁部外面には粗くヘラミガキを施す。53は高台を張り付けたナデの痕跡が一部に認められるため、皿Ｂとした。口縁部は短く外反し、端部は丸く収め、底部外面はナデのみのｅ手法である。

須恵器鉢(55)は平底で、口縁部が内湾しながら立ちあがり、端部は内傾する面を持つ、いわゆる鉄鉢である。外面は6回に分けヘラミガキを施す。54は外反する口縁部で横瓶の可能性が高い。壺は双耳の例が2点ある。いずれも平底で卵形の体部に外上方に広がる口縁部を持つ。56は口縁端部をつまみ上げて外傾する面を持つ。粘土板を貼付けて面取りを行った後に穿孔する双耳を持つ。57は口縁部が外反し、口縁端部は折り曲げて外側に面を持つ。粘土紐を張り付けた双耳を持つ。

土師器盤Ｂ(58)は、口縁部が外湾気味に開き、端部は丸く収める。外面には横方向のヘラミガキを施す。平成元年度調査で出土したもので、出土位置からＳＤ1010ないしはＳＫ1009の可能性が高い。この器種の出土はあまりなく、遺構は確定できないが、平安時代初期～前期に属するものである。

ＳＫ1011出土土器（第46図）

土師器には、杯ＡⅠ(64)・杯ＡⅡ(59～62)・皿ＡⅠ(67･68)・皿ＡⅡ(63･65･66)・椀Ｂ(69)・甕(70)があり、そのほか黒色土器杯Ａ(71)、須恵器皿(72)・壺(73)が出土した。破片総数は、土師器片222(杯等191、高杯等３、甕28)、黒色土器杯片3、須恵器片25(杯等10、壺８、甕７)の250片と少なく、法量の平均を出すには至っていない。

土師器杯はすべてｅ手法で、やや平底気味の底部で、口縁部は内湾しながら延びる。杯ＡⅠ(64)は、口縁端部を丸く収める。杯ＡⅡは、内傾する面を持つもの(59)と、つまみ上げるもの(60・61)、丸く収めるもの(62)など、口縁端部の形態は様々である。ＡⅡの底部外面には、乾燥前に板の上に置いたためか、木目の残るものも見られる。皿ＡⅠには、口縁部が外反しながら短く延びて端部は丸く収めるもの(67)、内湾しながら延びて内面で肥厚するもの(68)がある。底部外面はヘラケズリを行い、67の底部内面には螺旋状暗文が2段以上残る。68は器高が深く、口縁端部が肥厚することなど、奈良時代の様相を残す。皿ＡⅡの形態は皿ＡⅠと同じ特徴を持つが、ヘラミガキは施してない。底部外面はｅ手法である。63は皿ＡⅡとしてあるが、口縁部は底部から直線的に開き、底部外面はロクロケズリの後ナデを行ったロクロ成形土師器の可能性もある。甕(70)は、口縁部が外側に延びて端部は丸く収める。

黒色土器杯(71)はＡ類の底部の小片で、外面は横方向のヘラケズリの後ヘラミガキを施す。器壁は厚く胎土も良く、ＳＫ1086出土の黒色土器杯(100)と胎土が類似する。

須恵器皿(72)は、平底で口縁部が短く立ち上がるもので、他に粘土紐を貼付けて双耳とする壺(73)や杯Ｂの小片がある。

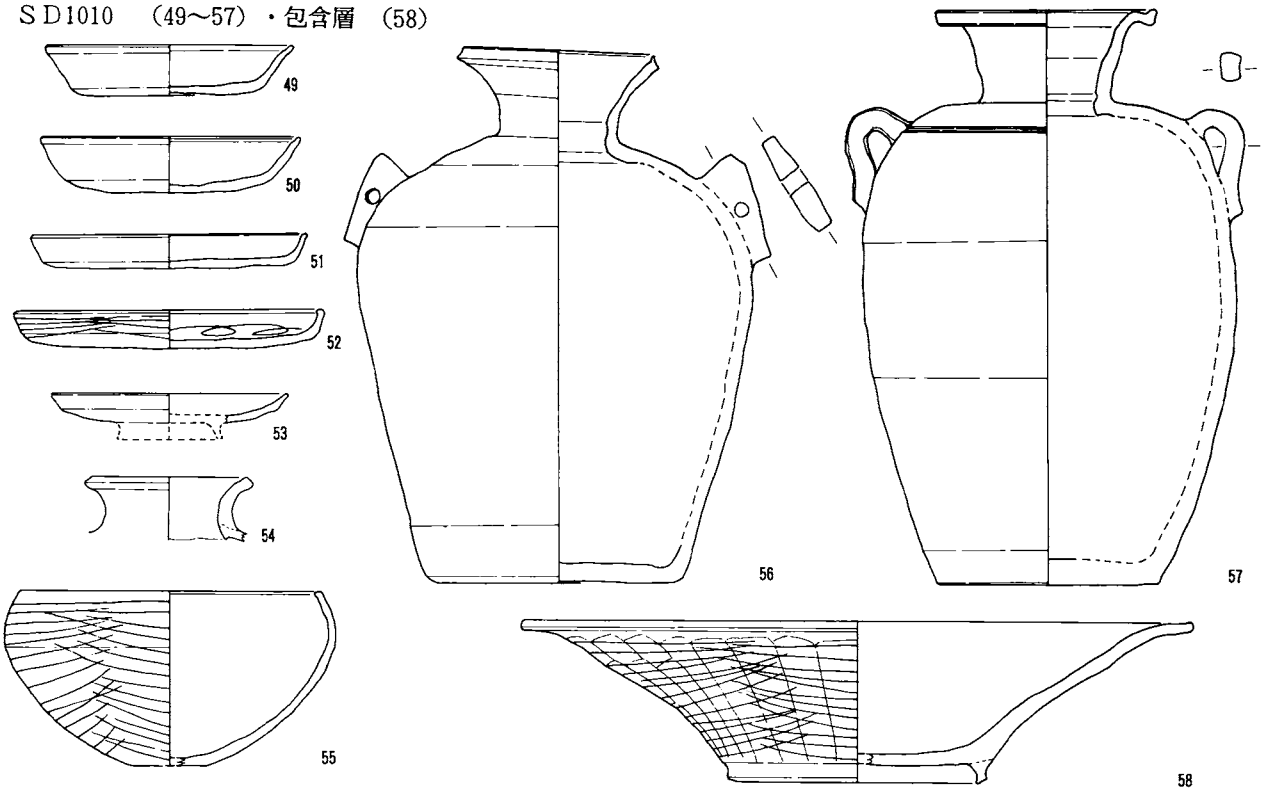
（５）平安時代前期の遺物

ＳＤ1028出土土器（第46図）

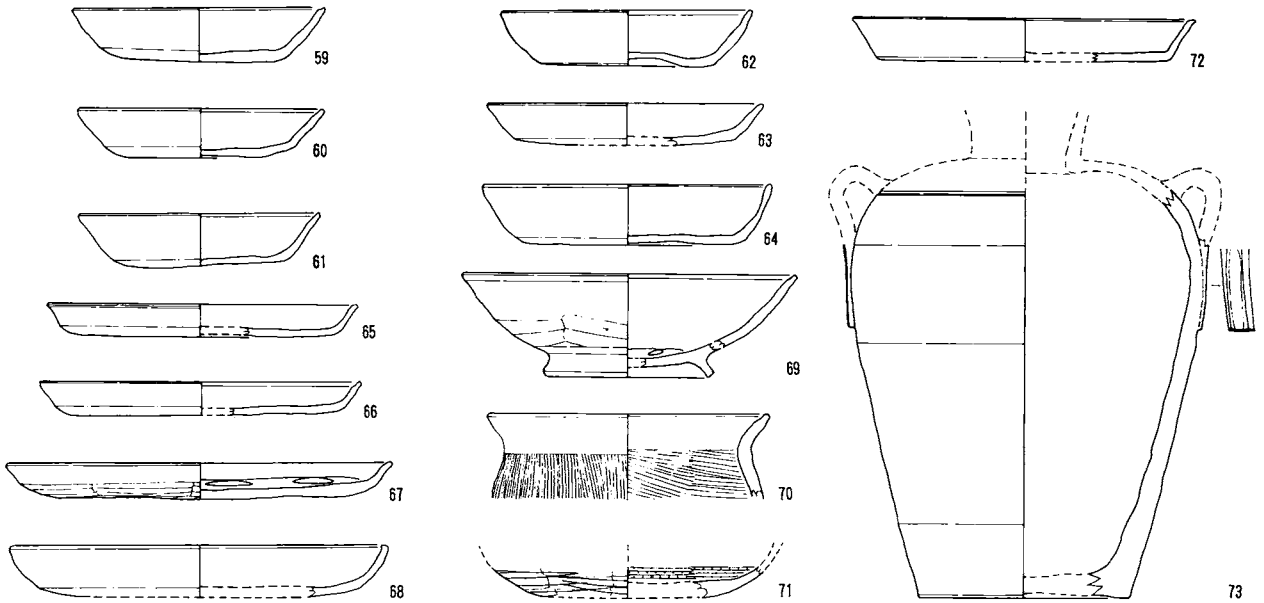
土師器には、杯ＡⅡ(74)・皿Ｂ・椀Ｂ・ロクロ成形土師器杯のほか、高杯の小片がある。皿Ｂ(75)は内湾する口縁部で、端部は丸く収める。形態的には、灰釉陶器の皿に近い。椀Ｂ(76)は、口縁部外面下半を斜め方向にヘラケズリを行い、口縁部内面に螺旋状暗文を1段施す。高台を貼付けたヨコナデの痕跡が残る。ロクロ成形土師器杯(77)は平底の底部で、内湾しながら外上方に延びる口縁部を持つ。

須恵器には、杯Ｂ(78)・皿(79)のほか、外上方に

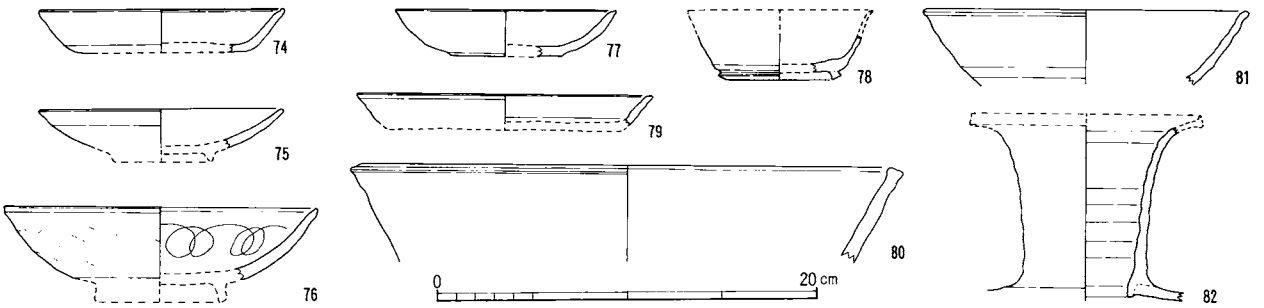
ＳＤ1010　(49～57)・包含層　(58)



ＳＫ1011　(59～73)



ＳＤ1028　(74～82)



第46図　遺物実測図（４）平安時代初期～前期

直線的に延びる口縁部を持つ盤(80)などがある。

灰釉陶器は、椀・広口壺がある。椀(81)は内面に厚い釉を掛け、口縁部外面下半はロクロケズリを行うもので、黒笹14号窯期に比定できる。

この他図示は出来ないが、口縁部外面ヘラケズリの黒色土器A類の細片が2片ある。

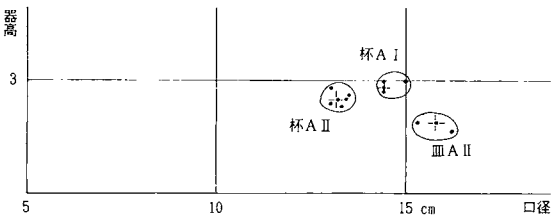
ＳＫ1086出土土器　(第47図)

平成元年度と3年度の調査で検出したが、第9表の破片計数表は平成3年度のみのものである。

土師器には、杯ＡⅠ・ＡⅡ・皿ＡⅡ・椀Ｂがある。杯ＡⅠ(89～92)・ＡⅡ(83～88)ともにｅ手法で、口縁端部はつまみ上げるものが多い。底部外面に木目の痕跡が残るものもある。皿ＡⅡ(95～97)は、口縁部が短く外反し、端部は丸く収める。椀Ｂ(93・94)

器種	器　形	破片数	比　率（％）	
土師器	杯・皿・椀	950	97.0	
	高杯・盤・鉢	11	1.1	
	甕・鍋	17	1.7	
	その他	1	0.1	
	不明			
	小計	979		94.7
黒色土器	杯・皿・椀	18	94.7	
	甕	1	5.3	
	その他			
	不明			
	小計	19	100	1.8
須恵器	杯・皿・椀	16	53.3	
	壺・瓶	4	13.3	
	鉢			
	甕・大形鉢	8	26.7	
	その他	2	6.7	
	不明			
	小計	30	100	2.9
緑釉陶器	杯・皿・椀	4		
	壺・瓶	2		
	その他			
	不明			
	小計	6		0.6
灰釉陶器	杯・皿・椀			
	壺・瓶			
	その他			
	不明			
	小計			
輸入陶磁器	杯・皿・椀			
	壺・瓶			
	その他			
	不明			
	小計			
その他				
	小計			
総数		1034		

第９表　SK1086出土破片土器計数表



第10表　SK1086出土土師器法量分布

は内面の暗文はなく、口縁部外面上半はヨコナデを施す。外面下半はＳＫ1011の椀Ｂと異なり、ｅ手法である。盤(98)は、口縁部が直線的に外上方に開く。

黒色土器はいずれもＡ類で、杯Ａ(100)はやや丸底気味で、口縁部は内湾する。外面は口縁部直下までヘラケズリを行い、口縁部外面上半と内面にヘラミガキを施す。皿(99)は、口縁部が外反し、端部は丸く収め、口縁部内外面には、ヘラミガキを施す。これら杯・皿の器壁は厚いが胎土は良く、丁寧に調整が行われている。内面の暗文は、確認できなかった。風字硯(451)は平底の底部で、口縁部は内湾しながら外上方に延び、縁端部上面はヘラケズリにより面を作る。平面の形態から、風字硯の海部先端部にあたるものと思われる。底部外面はヘラケズリの後、底部は同一方向、縁部外面は現状では2回に分け横方向にヘラミガキを施す。

灰釉陶器椀(102)は口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部は外反して丸く収める。口縁部外面下半はロクロケズリで、角高台を持つ。釉は内面のみで、黒笹14号窯期のものである。壺(101)は、口縁部が上方に向かって外反し、端部はつまみ上げて外側に面を持つ。体部下半はロクロケズリで、無花果型の体部になると思われる。

この他、須恵器円面硯の脚の小片(441)や、海から脚にかけての破片(446)が出土している。

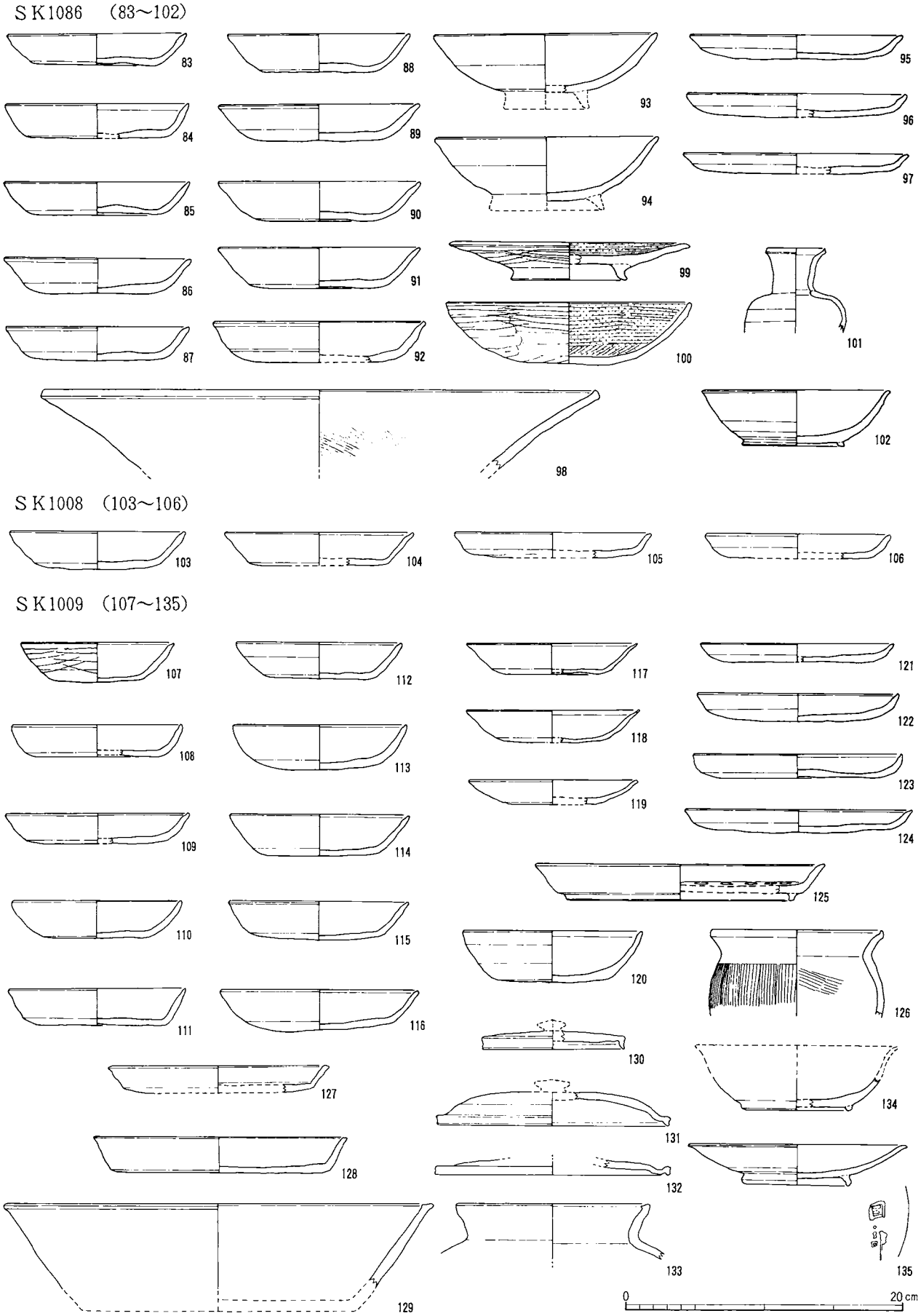
ＳＫ1008出土土器　(第47図)

出土量は少なく、土師器杯ＡⅡ(103・104)、皿ＡⅡ(105・106)の他、須恵器杯、皿、甕の小片があるだけである。土師器皿の法量は、後述する平安時代前期後半のＳＫ1035に近いものである。

ＳＫ1009出土土器　(第47図)

遺物には、土師器・ロクロ成形土師器、須恵器、緑釉陶器などがある。土師器杯ＡⅡなどに時期幅が見られ、前期前半から後半にかけての年代が与えられる。この土坑の下面にある前期前半のＳＫ1011の遺物が、一部混入していると思われる。

土師器椀ＡⅡ(107)の口縁部は、内湾しながら外上方に延び、端部はつまみ上げて内傾する面を持つ。口縁部外面には、粗いヘラミガキを施す。杯は口縁端部をつまみ上げるもので、ＡⅠ(116)・ＡⅡ(108～115)がある。ＡⅡの中には器壁が薄く、口縁端部が



第47図　遺物実測図（５）平安時代前期

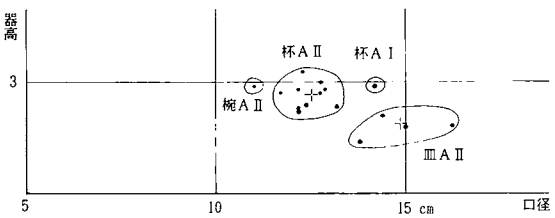
外反する117・118があり、形態的には後出のものである。皿はすべてｅ手法で、ヘラミガキはなくＡⅠ(124)・ＡⅡ(121～123)に分かれる。皿Ｂ(125)は口縁部が外反し、端部は丸く収める。底部内面に螺旋状暗文が1段残る。甕(126)は口縁部が外反し、端部をつまみ上げて内側に肥厚する。

須恵器杯蓋(130～132)は、天井部が丸いもの(130)、平らなもの(131)などがあり、130は口径からみて壺の蓋になると思われる。131の内面は摩滅しており転用硯として使用されている。この他、皿(127・128)・鉢(129)・短頸壺(133)がある。

緑釉陶器は京都産のみで、図示できたのは椀(469)だけである。口縁部内外面に横方向にヘラミガキを施す、軟質のものである。

器種	器形	破片数	比率（%）	
土師器	杯・皿・椀	933	75.8	
	高杯・盤・鉢	31	2.5	
	甕・鍋	259	21.1	
	その他	7	0.6	
	不明			
	小計	1230	100	80.5
黒色土器	杯・皿・椀	31		
	甕			
	その他			
	不明			
	小計	31		2.0
須恵器	杯・皿・椀	158	60.7	
	壺・瓶	18	6.9	
	鉢	1	0.4	
	甕・大形鉢	79	30.4	
	その他	3	1.2	
	不明	1	0.4	
	小計	260	100	17.0
緑釉陶器	杯・皿・椀			
	壺・瓶			
	その他			
	不明			
	小計			
灰釉陶器	杯・皿・椀	6		
	壺・瓶			
	その他			
	不明			
	小計	6		0.4
輸入陶磁器	杯・皿・椀			
	壺・瓶			
	その他			
	不明			
	小計			
その他	製塩土器	1		
	小計	1		0.1
総数		1528		

第11表　SK1009出土破片土器計数表



第12表　SK1009出土土師器法量分布

ＳＤ1029出土土器　(第48図)

遺物は少量で、土師器杯ＡⅡ(136)・甕・高杯の小片、須恵器杯蓋(137)、黒色土器Ａ類椀の小片があるだけである。

ＳＤ1032出土土器　(第48図)

土師器杯や須恵器杯の小片、京都産緑釉陶器の小片の他、ロクロ成形土師器椀(138)が出土した。

ＳＫ1030出土土器　(第48図)

土師器には、皿ＡⅡ(139)・椀Ａ(140)がある。椀Ａは丸底の底部で、口縁部は外上方に開く。底部には粘土紐の痕跡が残る。

黒色土器杯Ａ(141)は、底部と口縁部が接合はしないが、同一個体と思われるものである。やや丸底気味の底部で、口縁部は外上方に開く。底部外面と口縁外面直下までヘラケズリを施す。内面にはヘラミガキのみで、暗文は施さない。

緑釉陶器唾壺(486)は口縁部を欠くが、体部の最大径が下半にある無花果型のものである。口縁部と体部の接合は、体部上端を外に折り曲げ頸部の稜を作り、その内側に口縁部を接合する。底部外面はロクロケズリで、高台を貼り付ける。薄緑色の釉で、猿投窯のものと思われる。

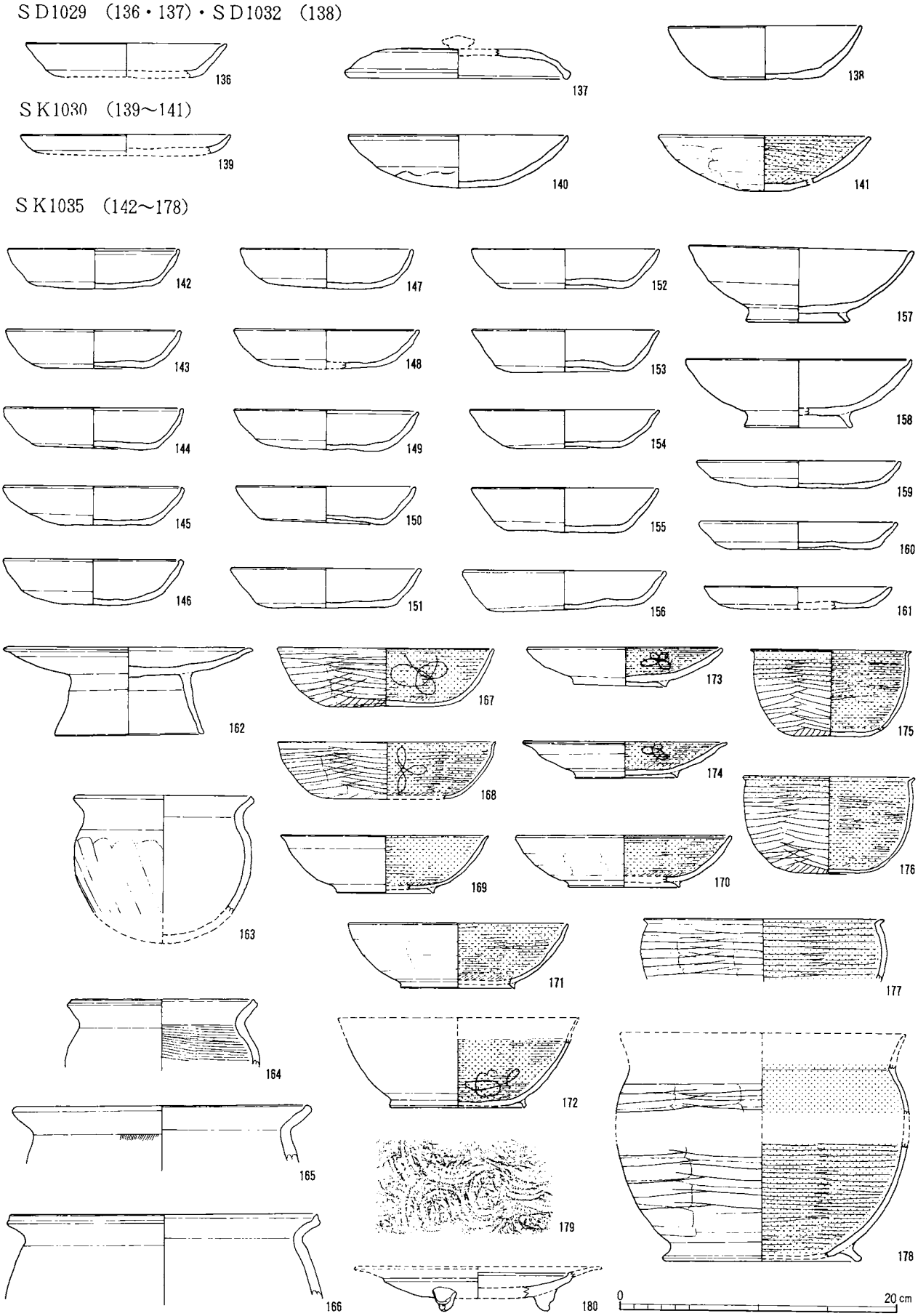
ＳＫ1035出土土器　(第48図)

遺物は多量に出土しており、良好な9世紀後半の資料である。

土師器には、杯ＡⅠ・ＡⅡ・椀Ｂ・皿ＡⅡ・甕の他にロクロ成形土師器がある。杯ＡⅠ(156)・ＡⅡ(142～155)は、口縁端部をつまみ上げるものが多い。皿ＡⅡ(159～161)は、口縁部が内湾し、端部をつまみ上げる。椀Ｂ(157・158)は、口縁端部がつまみ上げられて、外面はｅ手法である。この他、高杯の小片も出土している。甕は大きさから小形(163・164)と中形のもの(165・166)に分かれる。小形のものは、球形の体部に口縁部は短く外反し、端部はつまみ上げて外側に面を持つ。中形の口縁部の形態は小形のものと類似するが、体部の形は不明である。

ロクロ成形土師器皿(162)は、皿部は短く外反する口縁部で、端部は丸く収める。高台は、外下方に長く直線的に延びる。

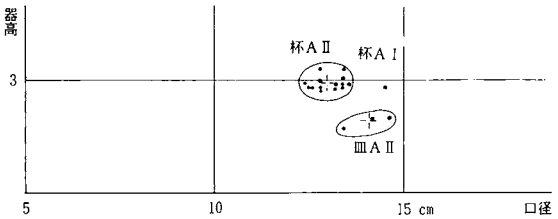
黒色土器は器種が豊富で、杯Ａ・椀Ｂ・皿Ｂ・鉢の他に風字硯がある。杯Ａ(167・168)は、口縁部が内



第48図　遺物実測図（6）平安時代前期

器種	器　　形	破片数	比　率（%）	
土師器	杯・皿・椀	652	94.9	
	高杯・盤・鉢	12	1.7	
	甕・鍋	23	3.3	
	その他	1		
	不明			
	小計	688	99.9	78.0
黒色土器	杯・皿・椀	144	92.9	
	甕	9	5.8	
	その他	2	1.3	
	不明			
	小計	155	100	17.6
須恵器	杯・皿・椀	8	38.1	
	壺・瓶	4	19.0	
	鉢			
	甕・大形鉢	8	38.1	
	その他	1	4.8	
	不明			
	小計	21	100	2.4
緑釉陶器	杯・皿・椀	15		
	壺・瓶			
	その他			
	不明			
	小計	15		1.7
灰釉陶器	杯・皿・椀	3		
	壺・瓶			
	その他			
	不明			
	小計	3		0.3
輸入陶磁器	杯・皿・椀			
	壺・瓶			
	その他			
	不明			
	小計			
その他				
	小計			
総数		882		

第13表　SK1035出土破片土器計数表



第14表　SK1035出土土師器法量分布

湾して端部を外側につまみ上げる。端部内面に沈線が1条巡り、口縁部内面には暗文を施す。口縁端部外面直下までヘラケズリを行い、口縁部外面にはヘラミガキを施す。器壁の薄い丁寧な作りの土器である。椀は大きさにより、AⅠとAⅡに分かれる。共に口縁部外面には、ヘラミガキを施さない。AⅠ(172)は、口径17～18cm程度になり、口縁部内面に暗文が残る。AⅡ(169～171)には、口縁端部がつまみ上げられ、端部内面に沈線が1条巡るもの(169･170)、口縁部外面下半に横方向にヘラケズリを施すもの(170･171)がある。断面三角形の高台が付き、内面の暗文は見られない。皿は口縁部が内湾しながら外上方に開き、端部はつまみ上げるもの(173)と外反して丸く収めるもの(174)がある。e手法で、内面にはヘラミガキと暗文を施す。鉢Aは口縁部が短く外に折れ曲がり、大きさから二つに分かれる。小形のもの(175･176)は、器壁が薄く丁寧な作りで、体部上半までヘラケズリを行い、底部内外面は同一方向、体部内外面には横方向のヘラミガキを施す。中形のもの(177)も同様な調整であるが、器壁が小形のものより厚く、ヘラミガキもやや粗雑である。鉢B(178)は高台の付く丸い体部で、口縁部は長く外反すると思われる。体部外面は横方向のヘラケズリの後に幅2mm程の粗いヘラミガキを、内面はヨコナデで底部に近い所はヘラケズリの後に粗いヘラミガキを施す大形の鉢である。風字硯(449)は陸部の破片である。丸く面取りした脚が付き、内面縁には沈線が1条巡る。陸部内面のヘラミガキは横方向にヘラミガキをした後、縁に沿ってヘラミガキを施す。外面のヘラミガキも内面と同様である。

緑釉陶器はすべてが京都産で、椀(465･470)・皿(476･477)がある。稜を持つ477以外は軟質で、口縁端部は外反する。高台には、蛇目高台(465)と輪高台(476)がある。

灰釉陶器には椀・皿があるが、図示できたのは三足皿(180)のみである。内面の釉の特徴から黒笹14号窯期と推定される。黒笹90号窯期の椀の小片も出土している。

須恵器甕(179)は、器壁の厚さが約1cmの大形の甕の体部片である。内面のタタキはいわゆる車輪文で、図では内面の拓本のみを表示した。

ＳＫ1018出土土器　(第49図)

土師器杯AⅡ(181･182)・ⅢAⅠ(184)・AⅡ(183)・甕(185)がある他、黒色土器杯A・椀B、須恵器杯蓋・壺の小片がある。土師器ⅢAⅠの底部外面はヘラケズリを施すものである。

ＳＫ1023出土土器　(第49図)

土師器杯AⅠ・AⅡ・椀AⅡ・ⅢAⅠ・AⅡ・杯蓋・甕、黒色土器、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器皿、須恵器甕の他、土錘(531)がある。SK1035と同時期の9世紀後半のものと思われる。

土師器杯AⅡ(186･188･189)のうち186は、器壁が薄い。椀AⅡ(187)は、やや丸底気味の底部で、口縁部は外上方に内湾しながら延び、端部は外側につまみ上げる。口縁端部の下まで横方向にヘラケズリを

施す。皿はｅ手法で、口縁部は短く外反し、端部は丸く収める。口径の大きさにより、ＡⅠ(193)・ＡⅡ(192)に分かれる。杯蓋(191)は丸くほぼ直立するつまみを持ち、ヘラミガキは施していない。

黒色土器Ａ類椀(195)は、内湾しながら外上方に開く口縁部で、端部は丸く収める。口縁部外面は、端部直下までヘラケズリを行う。器壁は厚いが、内外面にヘラミガキを施す丁寧な作りである。他に黒色土器Ｂ類の風字硯(452･453)がある。

緑釉陶器椀(474)は、口縁部の途中に稜をもつ稜椀である。外反する口縁端部外面の直下には凹線が巡る。高台は削出の輪高台で、口縁部内面は横方向、底部内面は同一方向のヘラミガキを施す。釉は底部外面以外に薄く掛かる。京都の小塩窯のものである。皿(479)は内湾する口縁部で、端部は外反する。猿投窯のものである。

灰釉陶器皿(196)は底部の破片で、灰釉は刷毛塗りである。

須恵器甕(197)は外反する口縁部で、端部は内側に肥厚し、内傾する面を持つ大形の甕である。

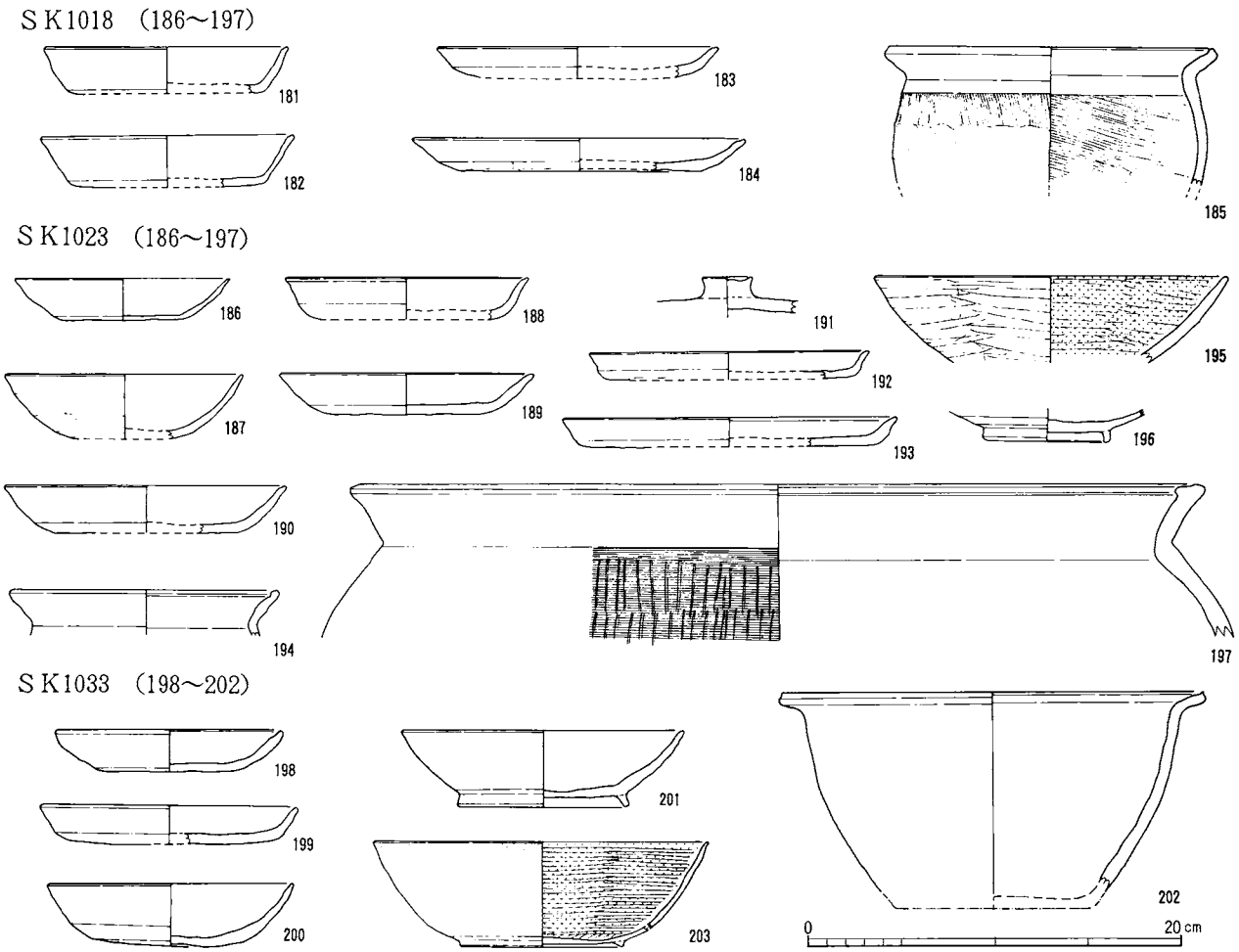
ＳＫ1033出土土器　(第49図)

土師器杯ＡⅡ・皿、ロクロ成形土師器椀Ａ・椀Ｂ・鉢がある。

土師器杯ＡⅡ(198)は、口縁端部をつまみ上げる。皿ＡⅡ(199)は口径に対して器高が高い。

ロクロ成形土師器椀Ａ(200)の底部外面は、ロクロケズリの後にナデを施す。内湾する口縁部で、端部は丸く収める。椀Ｂ(201)は、高台が付く。底部外面はナデが施してあるため、ヘラ切りかどうかは不明である。鉢(202)は内湾する体部を持ち、平底になると思われる。口縁部は短く外反し、端部はつまみ上げて外傾する面を持つ。体部の横方向のナデからみると、ロクロ土師器の可能性が高い。

黒色土器椀ＡⅠ(203)は、口縁端部を外側につまみ上げる。内面にはヘラミガキを施すが、暗文は施していない。



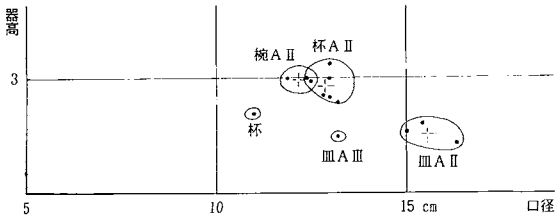
第49図　遺物実測図（７）平安時代前期

（６）平安時代中期の遺物

ＳＫ1012出土土器　（第50図）

遺物には、灰釉陶器黒笹90号窯期でも新しいものも一部含まれるが、土師器杯・皿などに古い様相が見られ、9世紀後半から10世紀代初頭の遺物が混在していると思われる。須恵器円面硯(447)の脚の小片、猿面硯(455)も出土した。

土師器杯ＡⅡ(208～213)は、ＳＫ1035のものと形態、法量が類似する。204は口径、器高共に小さなもので、杯Ａでも小形である。皿はＡⅡ(215～217)の他、口径の小さな皿(214)はＡⅢとするべきものかもしれない。短く外反する口縁部を持ち、端部は丸く収めるもの(215)以外はつまみ上げる。椀ＡⅡ(205～207)はｅ手法で、やや丸底気味の底部に内湾する口縁部で、端部は外側につまみ上げられる。椀Ｂ(218)は口縁部下半へラケズリを施し、内面のヘラミガキは摩滅が激しく不明である。甕は小形のもの(219)と大形のもの(220)がある。口縁部は内湾し、端部はつ

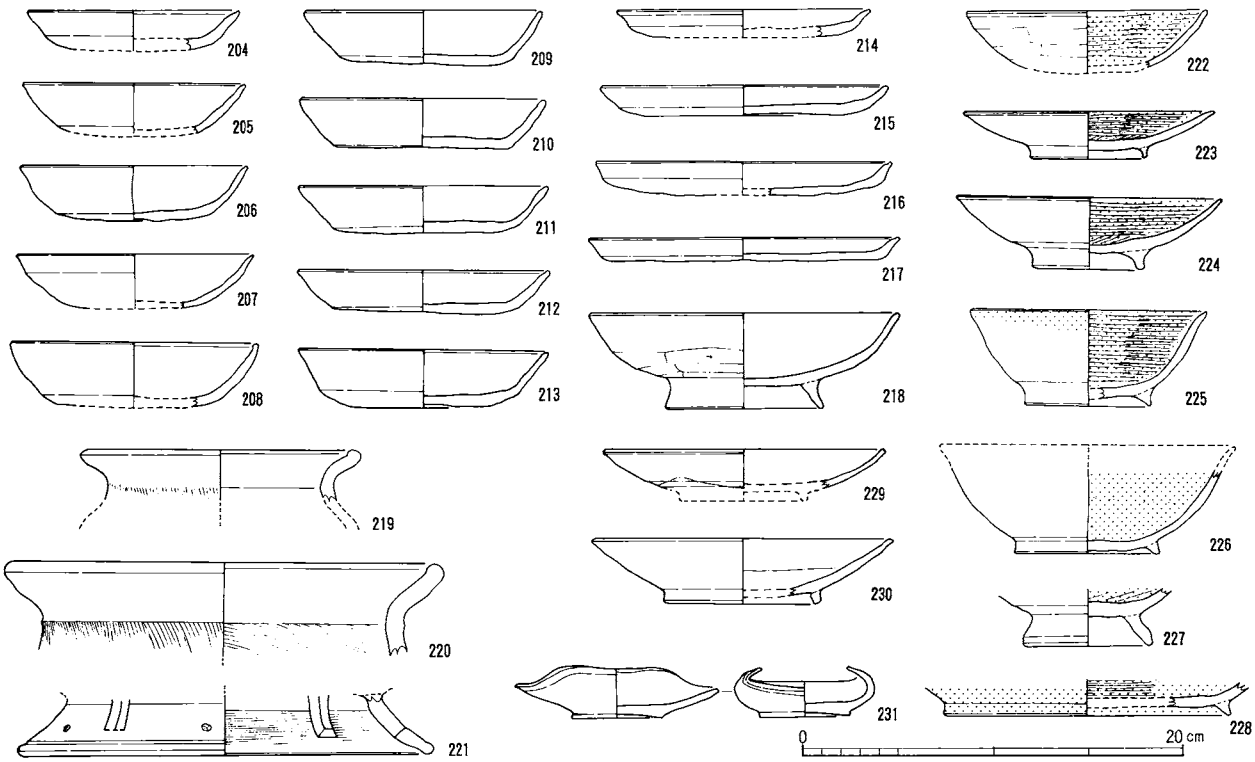


第15表　SK1012出土土師器法量分布

器種	器　形	破片数	比　率（%）	
土師器	杯・皿・椀	1142	89.6	
	高杯・盤・鉢	20	1.6	
	甕・鍋	96	7.6	
	その他	15	1.1	
	不明	1	0.1	
	小計	1274	100	84.1
黒色土器	杯・皿・椀	110	94.8	
	甕	5	4.3	
	その他			
	不明	1	0.9	
	小計	116		7.7
須恵器	杯・皿・椀	37		
	壺・瓶	8		
	鉢			
	甕・大形鉢	44		
	その他			
	不明			
	小計	89		5.9
緑釉陶器	杯・皿・椀	17		
	壺・瓶			
	その他			
	不明			
	小計	17		1.1
灰釉陶器	杯・皿・椀	14		
	壺・瓶			
	その他			
	不明			
	小計	14		0.9
輸入陶磁器	杯・皿・椀			
	壺・瓶			
	その他			
	不明			
	小計			
その他	製塩土器	3		
	フイゴ	1		
	小計	4		0.3
総数		1514		

第16表　SK1012出土破片土器計数表

ＳＫ1012　(204～278)



第50図　遺物実測図（８）平安時代中期

まみ上げて内側に肥厚する。大形のものは体部が垂直になっているため、長胴甕の可能性がある。221は長方形の透かしが残り、外面の透かし間には棒により刺突を1ヶ所施す。上面には接合の剝離痕が残り、類例は少ないが盤の高台になると思われる。胎土が良く、混入した可能性が高い。

黒色土器は、B類(228)が1点ある他はA類である。杯A(222)は器壁が椀Aに比べて薄く、口縁部外面直下までヘラケズリを施す。内面はヘラミガキのみで、暗文は施さない。椀AⅠ(226)はやや粗雑な作りで、残りが悪いため内面のヘラミガキについては不明である。椀AⅢ(225)は口径に対して器高の深いもので、器壁は厚く、外面の調整はe手法である。内面はヘラミガキのみである。皿は口縁部が外上方に直線的に延び、端部は外反して丸く収めるもの(223)、内湾する口縁部で器高が深いもの(224)がある。いずれも内面は、幅2㎜程のヘラミガキを施し、高台は断面方形で低い。227はA類椀の底部である。内面は板状工具によるナデ調整で、高台が高く、これまでの黒色土器の中では類例が見られない。時期的に新しい11世紀のSK1054の黒色土器(358)と、高台の形態が類似するため、黒色土器椀Bの高台とする。黒色土器鉢(228)は黒色土器B類で、内面にはヘラミガキを密に施す丁寧な作りのものである。高台径が広いため、鉢の高台とした。

緑釉陶器は、京都産のものが中心であるが、近江産と思われる椀の小片も1点ある。椀(467)は残存する口縁部に輪花と思われるものが1ヶ所残っている。口縁部下半はロクロケズリで、底部はロクロケズリの平高台で、外面に4ヶ所のトチン痕が残る。

灰釉陶器皿(229)は灰釉が付掛けで、皿(230)は刷毛塗りである。耳皿(231)は底部糸切りである。

SD1081出土土器　(第51図)

土師器杯AⅠ(236・237)・AⅡ(234・235)は、口縁端部をつまみ上げる。杯AⅡでも232・233は、内湾する口縁部で、端部は外反する。232は器壁が他の杯と比べて薄い。皿は小形で、口縁部を短くつまみ上げる241は、前代からの系譜を引くものである。これに対し、丸底の底部で口縁部が外に折り曲げられ、端部を上につまみ上げる240は、これまでにない器形で、京都系の土師器皿の影響が窺える。239は丸底の底部に外上方に開く口縁部で、端部は丸く収める。後出する椀杯の器形に近い。この他、口縁部が長く外に広がる皿の高台(242)がある。

ロクロ成形土師器椀(238)は、内湾しながら立ち上がる口縁部を持ち口縁端部は外反する。底部はヘラ切りである。

黒色土器は、A類の椀AⅡ(245)とB類の椀(246)がある。245は内面ヘラミガキのみ、246は内面端部に沈線が一条巡り、内面にヘラミガキと暗文を施す。

SK1077出土土器　(第51図)

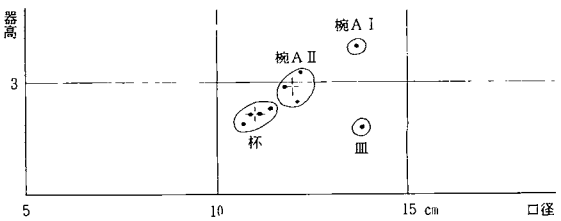
土師器杯AⅡ(247～250)は、口径11㎝前後、器高2～2.5㎝と小形化する。やや丸底の底部で、口縁部は外に開き外反する。口径13㎝前後、平底で口縁部が直線的に外上方に開く杯は消滅する。内面ナデ調整のもの以外、刷毛目の残るもの(247)がある。椀AⅡ(251～253)は、やや丸底の底部で口縁部が外反し端部は丸く収める。底部外面はe手法である。他に口径が大きく、外上方に長く延びる口縁部を持つAⅠ(254)もある。皿(255)は丸底気味で、口縁部は外反し、端部はつまみ上げられる。平底で口縁部が短く外反する、平安時代前期の皿は消滅する。

黒色土器はA類で、椀AⅠ(259)・AⅡ(256～258)の他、大形の椀(260)もある。椀AⅠは外面ヘラケズリの後にヘラミガキを施し、椀AⅠ・AⅡ共に内面はヘラミガキのみである。260は内湾しながら立ち上がる口縁部で、端部を外側につまみ上げる。内面は黒色化のみと思われる。

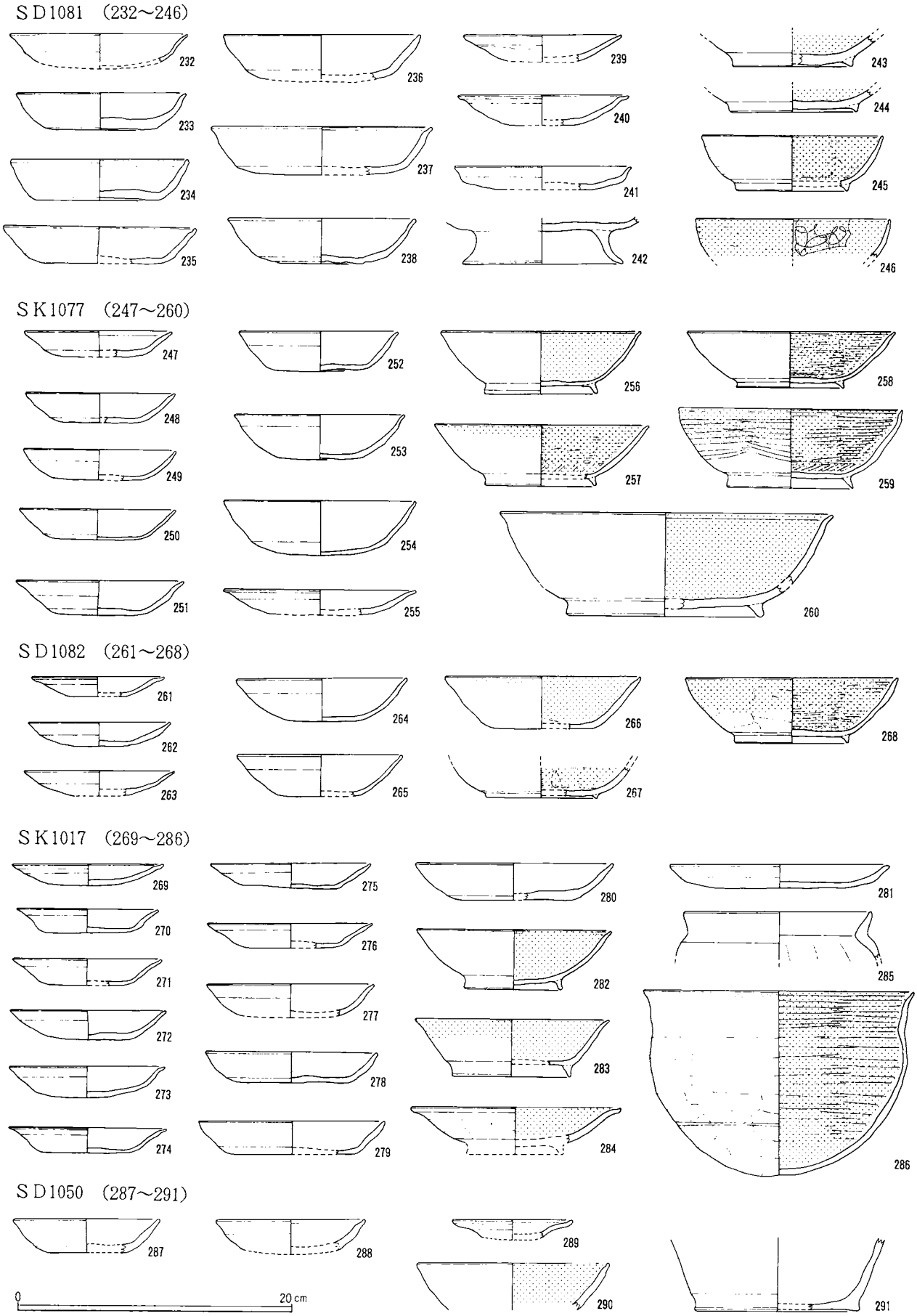
SD1082出土土器　(第51図)

皿(261～263)は外反する口縁部で、端部はつまみ上げられる。椀AⅡ(264・265)は、丸底気味の底部に口縁部は外反しながら立ちあがる。

黒色土器杯A(266)の内面底部には、板状工具痕跡が残り、ヘラミガキは施されない。椀AⅡ(268)は口縁部が外反してつまみ上げられ、三角高台を持つ。



第17表　SK1077出土土師器法量分布



第51図　遺物実測図（９）平安時代中期

ＳＫ1017出土土器　(第51図)

土師器には器壁が厚く、平底気味の杯ＡⅡ(278～280)・椀ＡⅡ(277)・皿ＡⅡ(281)など古い様相の器種が見られるが、中心は器壁が薄くやや丸底気味の杯である。土師器杯(270～276)は口径が11cm前後で、丸底気味の底部で口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は外側につまみ上げる。

黒色土器椀は、丸底で内湾する口縁部のもの(282)、平底で直線的に外上方に開くもの(283)がある。283は内面黒色化のみで、暗文は施されない。鉢(286)は半球形の体部から立ち上がる長い口縁部で、端部は外側につまみ上げる。体部内面は板状工具によるヨコナデの後に、粗いヘラミガキを施す。甕(285)は内湾する口縁部を持ち、内面は黒色化のみである。

ＳＤ1050出土土器　(第51図)

土師器椀ＡⅡ(287・288)・皿(289)、黒色土器椀(290)の他、灰釉陶器瓶の体部片(291)がある。

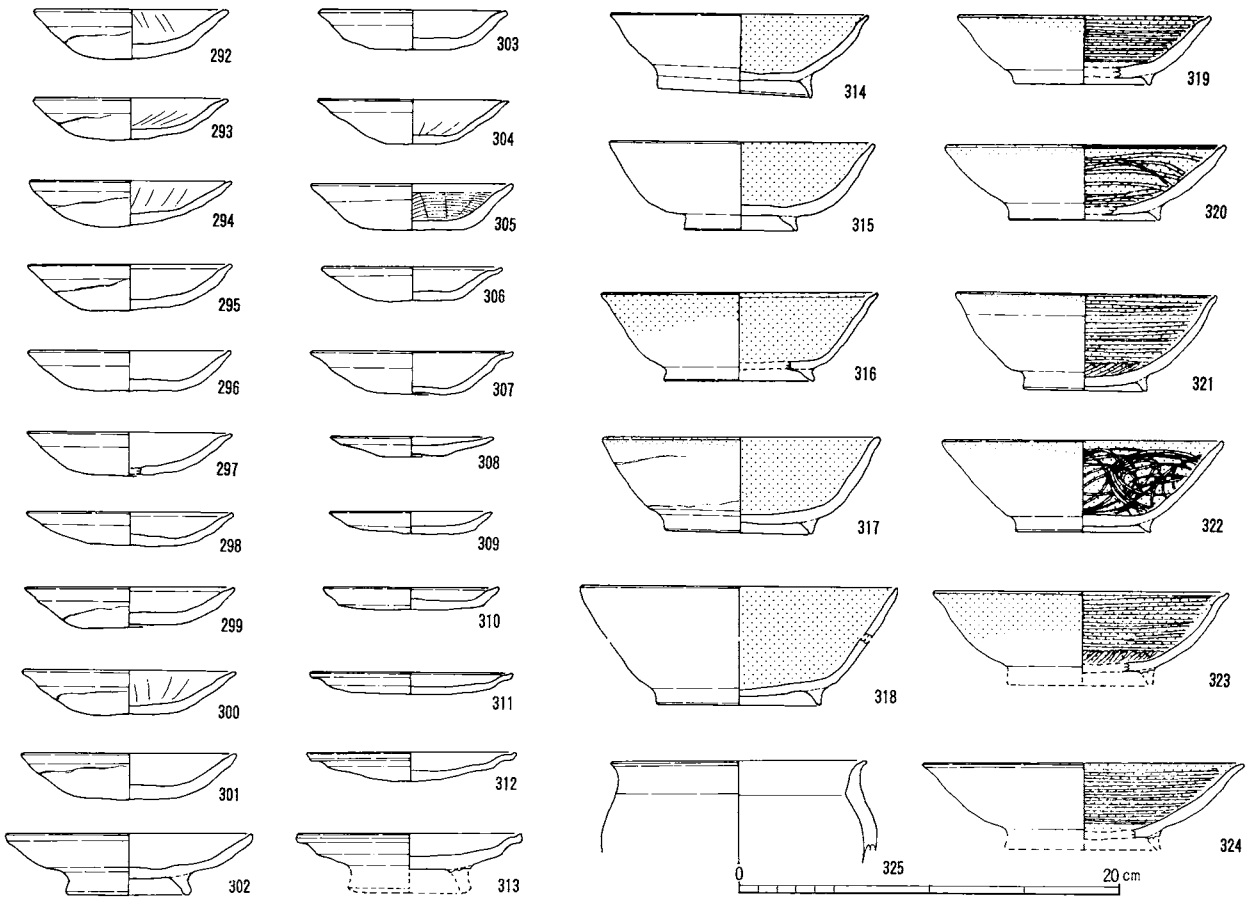
皿は底部から外反する口縁部で、端部は折り曲げられ、口径が10cm以下の小形のものである。

整地層出土土器　(第52図)

土師器は、椀Ａ・杯Ａや皿の区別は困難となる。口径10～11cm、高さ2～2.5cmほどのものが中心である。口径や口縁部の形態は様々であるが、ここでは分類は行わない。口縁端部を外側につまみ上げるもの(306・307)は、椀ＡⅡを意識したものであろうか。器壁は厚いものが大半で、薄いものは少ない。高台の付く302もある。皿(311・312)は口縁部を外側におり曲げて端部をつまみ上げる、いわゆる京都系の「て」字口縁の皿である。口径はいずれも10.8cm、器高1.2cm・1.6cmと、平安京のⅢ新型式の皿Ａの法量に近い。この皿に高台を付けた313もある。310は口縁部が短く外反し、同様な形態の皿にはロクロ成形土師器皿(309)がある。

黒色土器は、椀ＡⅠ(318)・ＡⅡ(314～317・319～324)がある。ＡⅡのうち、314～317には内面のヘラミガキが施されていない。高台の径が小さく、黒色土器椀Ｂ類の形態を模倣したと思われる315もある。内面のヘラミガキは、幅や間隔が広くなり、粗雑化

整地層　(292～325)



第52図　遺物実測図（10）平安時代中期

する。口縁部内面に沿って円弧を描くようにヘラミガキを施すもの(322)や、一筆書きのようなもの(321)もある。大半は器壁が厚く粗雑なものである。

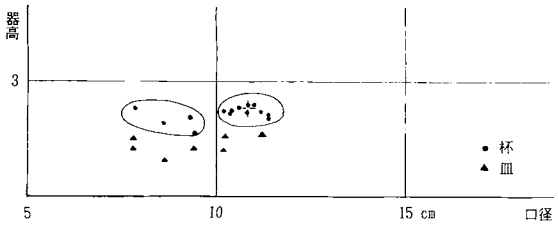
（７）平安時代後期の遺物

ＳＫ1054出土土器　（第53図）

土師器は杯・皿が中心で、新たに杯Ｎが出現する。

杯(326～335・339・340)は口径10～11cmが中心で、口径10cm以下のもの(326～329)もある。皿は「て」字口縁を持つもの(338・341～344)と横に開く口縁部を持つもの(336・337)があり、横に開くものは大小の種類がある。「て」字口縁を持つ皿は口径約8～10cmと大きさにばらつきがあり、小さなものは口縁端部のあまいものである。345は平な底部で口縁端部を折り曲げる皿で、高台の付くものである。

杯Ｎ(348～350)は口径が大きく、口縁部に強いヨ

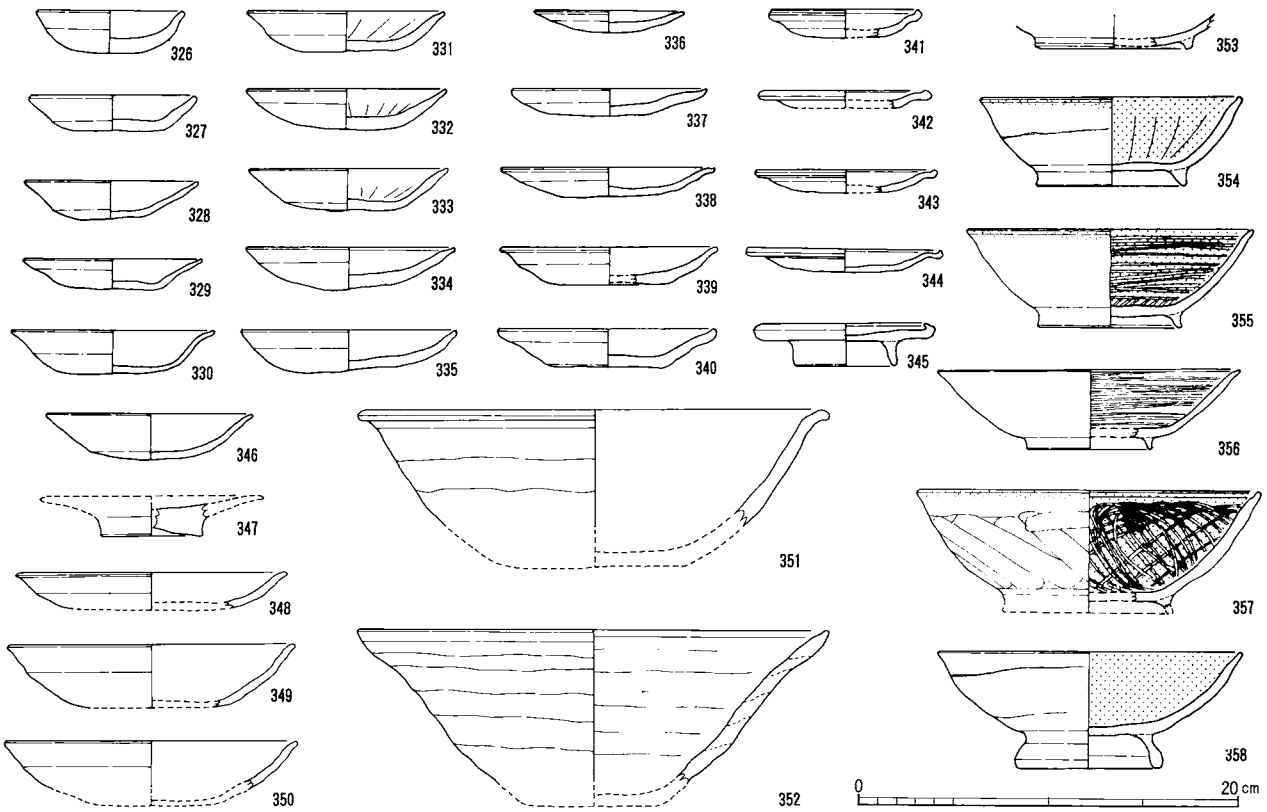


第18表　SK1054出土土師器法量分布

器種	器　　形	破片数	比　率（％）	
土師器	杯・皿・椀	709	91.8	
	高杯・盤・鉢	34	4.4	
	甕・鍋	29	3.8	
	その他			
	不明			
	小計	772	100	77.2
黒色土器	杯・皿・椀	195		
	甕			
	その他			
	不明			
	小計	195		19.5
須恵器	杯・皿・椀	3	11.1	
	壺・瓶	7	25.9	
	鉢			
	甕・大形鉢	16	59.3	
	その他	1	3.7	
	不明			
	小計	27	100	2.7
緑釉陶器	杯・皿・椀	2		
	壺・瓶			
	その他			
	不明			
	小計	2		0.2
灰釉陶器	杯・皿・椀			
	壺・瓶	3		
	その他			
	不明			
	小計	3		0.3
輸入陶磁器	杯・皿・椀			
	壺・瓶			
	その他			
	不明			
	小計			
その他	瓦器	1		0.1
	小計			
総数		1000		
		1000		

第19表　SK1054出土破片土器計数表

ＳＫ1054　(326～358)



第53図　遺物実測図（11）平安時代後期

コナデが見られる。器高に違いがあるが個体数が少ないため、器種の細分はここでは行わない。鉢(351・352)は、外面に粘土紐の痕跡が残る粗雑な作りである。他からの出土数は少ない。

ロクロ成形土師器杯(346)は、口縁端部が外反し、器壁は薄く、底部はヘラ切り調整である。ロクロ成形土師器の中には、347のように底部が円柱状になるものもある。

黒色土器は器壁が厚く、作りの悪いものが多く、外面に粘土紐の痕跡が残るものもある。内面にヘラミガキを施さないもの(354)や、口縁部内側に円弧を重複させてヘラミガキを施すもの(357)、高台の径が小さくて深い高台を持ち、内湾する口縁部で端部が外反するもの(358)がある。

瓦器椀(353)は、1点出土しただけである。器壁は摩耗しているためにヘラミガキは不明である。

ＳＫ1064出土土器　(第54図)

土師器皿(359～363)は、口縁部がつまみ上げられるもの(362)と、外反して端部を折り曲げる「て」字皿(359～361)がある。「て」字皿は口径が8.8～9.8cmと小形である。皿Ｂ(366)は大形で口縁部が横方向にヨコナデされる。杯Ｎ(365)は、やや丸底気味の底部で、口縁部は2回強くヨコナデする。

ロクロ成形土師器皿(364)は、円柱状の高台を持つ。口縁部は内湾しながら横に開き、端部は丸く収める。底部外面はヘラ切りかと思われる。

黒色土器椀(367)はＡ類で、高台の剝離した椀の底部である。内面はヘラで性格不明の線が刻まれる。

ＳＤ1069出土土器　(第54図)

図示したものは、北側のＤ5－8調査区から出土したもので、整地層出土遺物より後出のものである。土師器皿は、内湾しながら延びる口縁部で端部は外側にナデられるもの(368)や口径9cm程の「て」字皿(369・370)がある。杯Ｎは器高の浅いもの(376)と深いもの(375)がある。

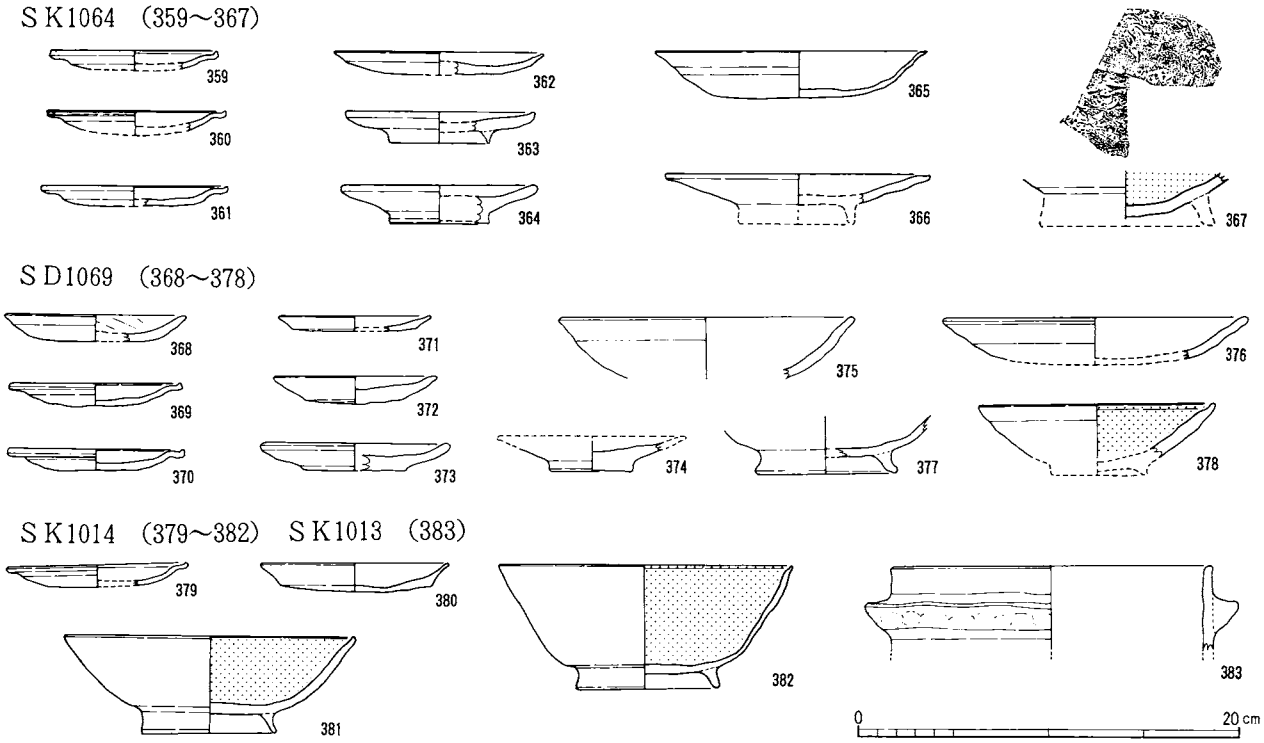
ロクロ成形土師器皿は口径約9～10cmと小形で、様々な形態がある。口縁部が短く外反するもの(371)、内湾しながら端部を丸く収めるもの(373)と端部が外側にナデられるもの(372)がある。底部はヘラ切りが明瞭に残るもの(372)、平底でロクロケズリかと思われるもの(371)、糸切痕の残る円柱状のもの(374)がある。

黒色土器椀(378)は小形のもので、内面は黒色化のみでヘラミガキは施していない。

ＳＫ1014出土土器　(第54図)

土師器皿(379)は、口径の小さな「て」字皿である。

ロクロ成形土師器皿(380)は、口縁部が短く外反し、



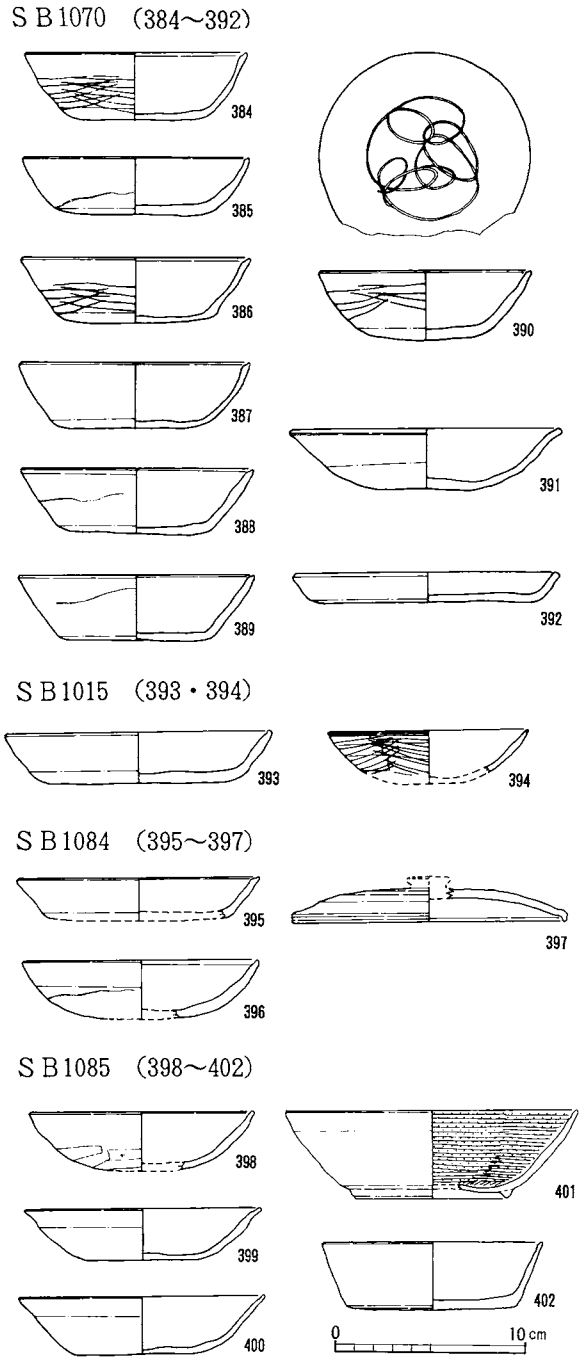
第54図　遺物実測図（12）平安時代後期

底部外面ヘラ切りである。

黒色土器はA類のみで、381は口縁端部がつまみ上げられ、内面は黒色化のみである。382は底部から屈曲して外上方に口縁部が延び、端部は外反して端部内面に沈線が1条巡る。内面のヘラミガキは不明である。

ＳＫ1013出土土器　（第54図）

土師器鍋(383)は、円筒状の体部に鍔が張り付けられるものである。



第55図　遺物実測図（13）掘立柱建物出土遺物

（８）建物出土の土器

ＳＢ1070出土土器　（第55図）

土師器椀Ａ(384～390)は平底で、口縁部は外上方に延び、端部は内傾する面を持つ。ｅ手法。384～389は同一柱掘形より出土したもので、埋納された可能性も考えられる。384・386は口縁部外面に粗くヘラミガキが、390には底部内面に螺旋状暗文、口縁部外面に粗くヘラミガキを施す。これらは平安京のＩ期中の椀ＡⅡに類似し[3]、8世紀末から9世紀初頭と推定される。椀(391)はやや丸底気味の底部で、口縁部は外反するもので、あまり類例がない。皿ＡⅡ(392)は、口縁部が外上方に延びて端部は丸く収める。ＳＤ1010の51に近いものである。

ＳＢ1015出土土器　（第55図）

土師器杯Ａ(393)はやや平底の底部に外上方に延びる口縁部を持ち、端部は内傾する面を持つ。形態的には、ＳＫ1086等の平安時代前期前半のものに近い。椀Ａ(394)の外面は口縁端部直下までヘラケズリを行い、外面にヘラミガキを施す。伊賀国府での出土は他になく、他からの搬入品の可能性が高く、平安京Ｉ期中頃の土器と類似する。

ＳＢ1084出土土器　（第55図）

土師器杯(395)は平底で、口縁部は外上方に延び、端部は内傾する面を持つ。椀Ａ(396)はやや丸底気味の底部で、口縁部は内湾し、端部はつまみ上げる。外面はｅ手法である。

須恵器杯蓋(397)は口縁端部を折り曲げ、外側に面を持つものである。

ＳＢ1085出土土器　（第55図）

土師器椀Ａ(398～400)は、口縁端部が外反するもので、398は底部外面にヘラケズリを行う。平安時代前期後半の椀に類似する。黒色土器椀ＡⅡ(401)は内湾する口縁部で、端部はつまみ上げる。黒色土器Ａ類で、内面ヘラミガキが施される。

須恵器杯(402)は平底で、口縁部が直線的に延び、端部は丸く収める。底部外面に「國廚」の墨書が薄く残る。

ＳＢ1071出土土器　（第56図）

土師器杯(405)は、内湾しながら延びる口縁部で、端部は外反しつまみ上げられる。形態的には椀とす

るべきかも知れないが、椀・杯の差が無くなっていく時期のものである。406は外反しながら延びる口縁部で、端部は内側につまみ上げられる。整地層出土の杯と比較してより古い様相を残す。皿(403・404)は、口径8cmと小形である。椀B(407)は内湾する口縁部で、端部は外反する。

P1074出土土器　(第56図)

土師器杯(408～410)は小形で、口径10cm前後、器高2.0cm前後である。408・409は、SK1077の247と内面の調整、器形が類似する。

黒色土器椀(411・412)は、口径10cm、器高4cm前後の小形で、口縁部は内湾して端部はつまみ上げる。端部内面に沈線が1条巡り、内面にヘラミガキを施す。

この柱穴の上面を整地層が覆っていたため、これより古いものであるが、時期的にはそう隔たりはないと思われる。

P1078出土土器　(第56図)

土師器椀Bが2個体あり、413は平底で口縁部が外反し丸く収められ、底部はヘラ切りと思われる。414は内湾しながら延びる口縁部で、端部は内傾する面を持ち、高台も内傾する面を持つ。

P1026出土土器　(第56図)

土師器杯AⅡ(415)は器壁が薄く、口縁部は外反し、つまみ上げる。

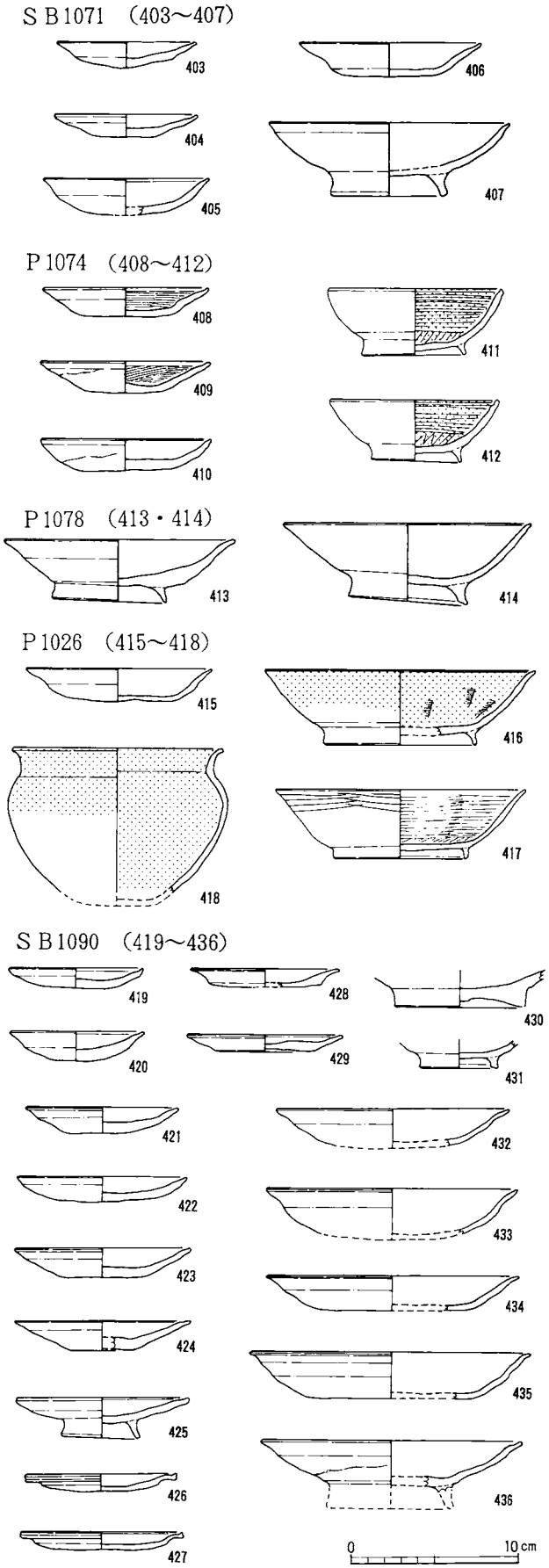
黒色土器椀(416・417)は、内湾しながら外上方に延びる口縁部で、端部は外反する。417は口縁部外面上半と内面ヘラミガキ、416は内面板ナデのみである。内面は火を受けたため黒色化していない。甕(418)は外反する口縁部で、端部は丸く収める。体部下半には、煤が付着している。

SB1090出土土器　(第56図)

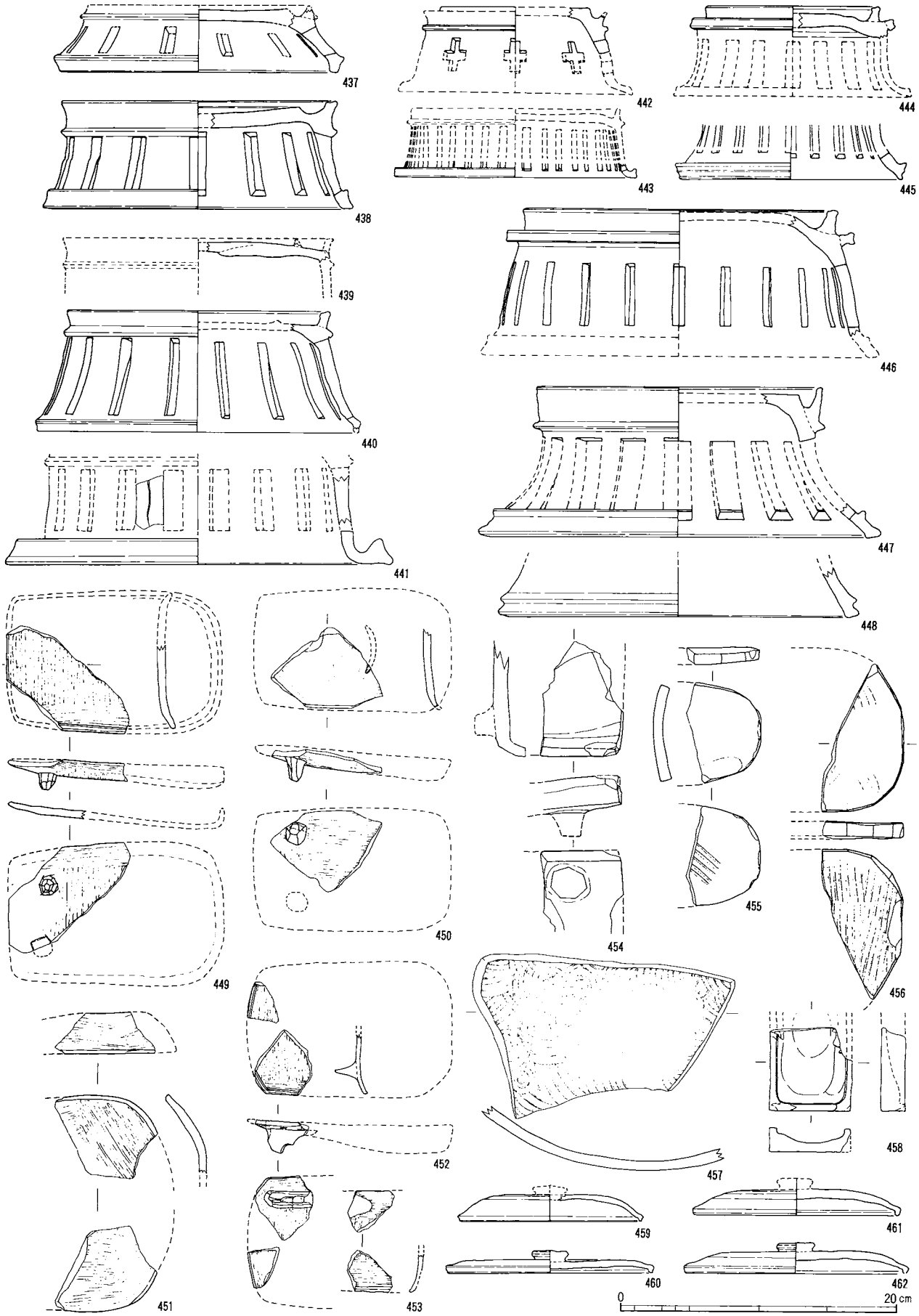
土師器には皿・杯N・椀、ロクロ成形土師器皿・椀などの他、黒色土器B類椀の底部(431)がある。

土師器皿(421～424)は10cm前後の小形で、高台の付くもの(425)や口径8cmのもの(420)もある。426・427は「て」字皿で、口径は9cmと9.6cmと小形で整地層出土のものより後出である。432・433は杯Nで、口縁部が外反して端部をつまみ上げる高台の付く大形の杯(436)もある。

ロクロ成形土師器は、皿(428・429)・椀(430)がある。皿は平底で口縁部が短く外反する。



第56図　遺物実測図(14)　掘立柱建物出土遺物



第57図　遺物実測図（15）硯類

（９）その他の遺物

円面硯　平成元年度から3年度まで円面硯の出土数は15個体で、このうち図示できたのは12個体である。岩坂地区から１個体(442)、前田地区から２個体(439)の他は、国町地区からである。前田地区のものはかなり摩滅しており、他からの混入品と思われる。

硯部の形態は、海と陸の境界が明確なもの(437・438・442・447)や丸くなるもの(446)、平坦な硯部に堤が巡ると推定されるもの(439・440)など様々である。脚の透かしの形態は、442の十字形を除き、判明するものは全て方形の透かしである。441は透かしと透かしの間をヘラで刻む破片が１片出土しているが、全体に刻まれているかは不明である。

出土状況は、447のように同一個体6片が約60ｍの範囲に、また440、441、446なども数十ｍ離れた位置で同一個体片が出土するなど、廃棄あるいは整地に伴って広範囲に散乱した状況を示す。(第58図)

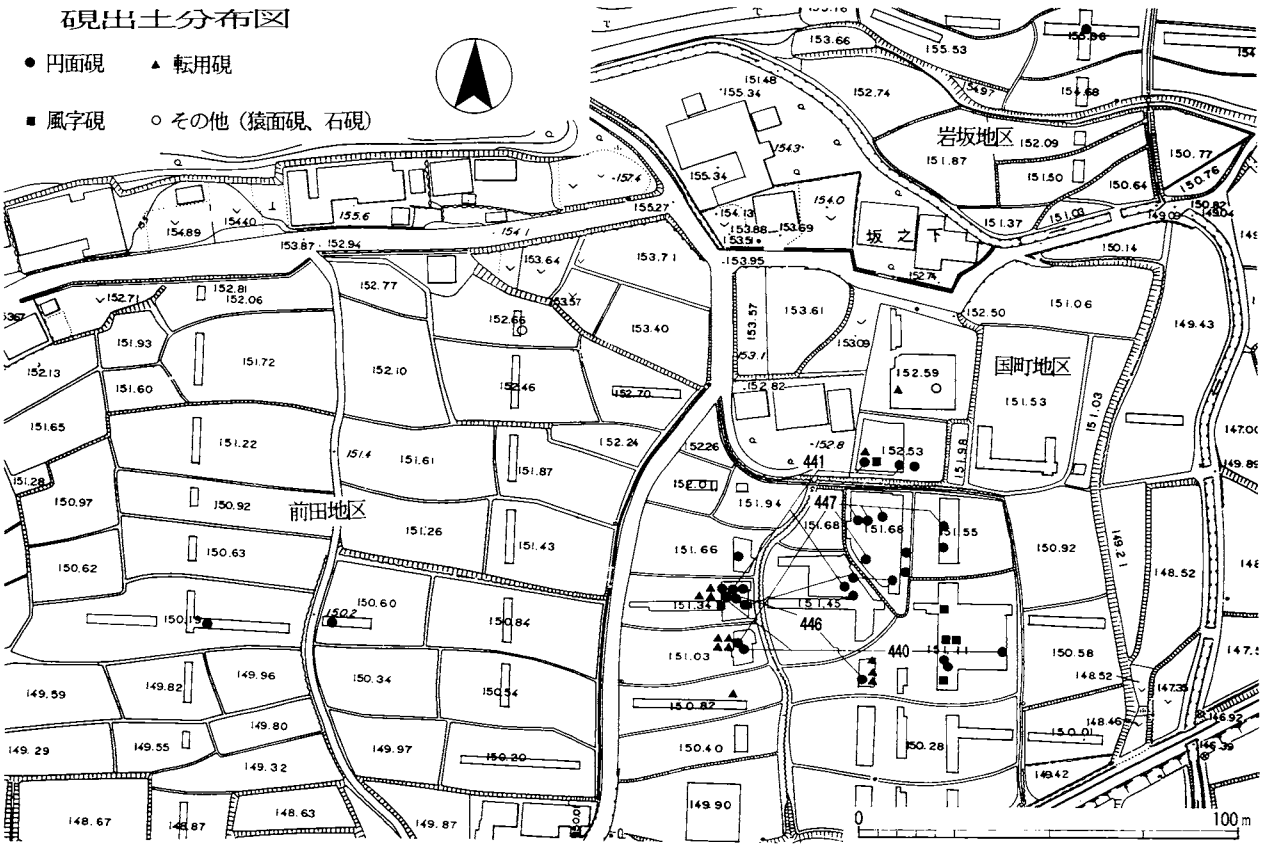
風字硯　灰釉陶器製と黒色土器製の２種類がある。灰釉陶器製品(454)は後端と左縁端をヘラで成形し、底部には七角形に面取りした左脚の剝離痕が残る。

黒色土器製品は５点ある。450は円柱状の脚を持ち、内面には三日月状の堤かと思われる痕跡が一部残る。同様な形態の脚を持つものに449があり、内面縁に沈線が巡る。452・453は内面縁に沈線が巡る。452の右の脚は、板状の脚をヘラで成形している。453は452と成形はよく似ているが、右脚の剝離痕と思われるものが残っているため、別個体とした。

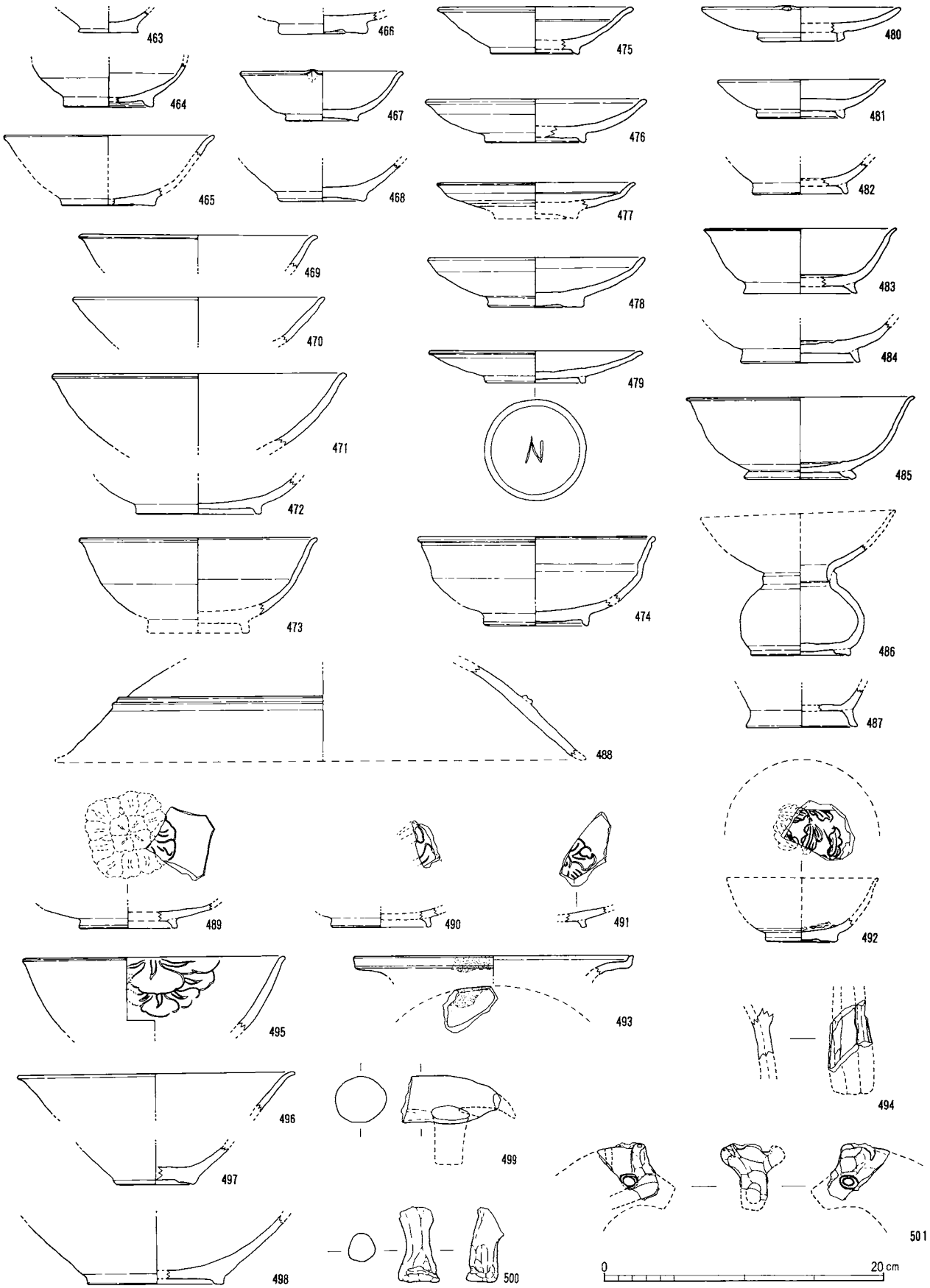
猿面硯　前田地区(456)と国町地区(455)で各1点出土した。焼成前に面取りを行なっている。456の内面は使用のために摩滅しているのに対し、455の内面に使用痕は認められない。

転用硯　457は須恵器甕の体部片で、内面の一部が硯として使用したため摩滅する。面取りの痕跡は認められない。他に須恵器の杯蓋を利用したもの(459～462)が、10点近く判明している。西脇殿相当地域で多く見られ、中には内面に朱が残るもの(459)がある。いずれも内面が摩滅しているために転用硯と判明するもので、全てを抽出できている訳ではない。

石硯　Ｄ３－６地区包含層から458の1点が出土した。前半部は欠損しているが、かなり使い込まれている。



第58図　硯出土分布図（線で結ばれるものは同一固体）



第59図　遺物実測図（16）緑釉陶器ほか

緑釉陶器　出土総点数は382片で、個体数としては309点である。岩坂地区から１点出土した他は、前田・国町地区からの出土である。

器種別、産地別の一覧は第20表の通りである。前田地区はＥ３－８調査区に集中し、産地別では近江産の比率が高い。国町地区では政庁域の北・東・南部に隣接する地域で多く出土した。

器種は、杯・皿類などの小形食器類が大半で、壺(486・487)などは少ない。特殊な器形には488・494がある。488は内面横方向にヘラミガキを施し、外面に凸帯が巡るもので蓋になると思われる。494は水注の取手である。取手は粘土紐を縦方向に3本張り合わせ、体部に張り付ける。体部外面、取手に黄色の厚い釉を施すもので、胎土等を見ても国産かどうか判断がつかない。

椀	224	58.6
皿	107	28.0
蓋	2	0.5
鉢	6	1.6
壺	8	2.1
不明	35	9.2
計	382	100%

地区	国町地区		前田地区	
猿投	35	10.4	3	6.8
京都	155	45.8	6	13.6
美濃	33	9.8	3	6.8
近江	103	30.5	31	70.5
不明	12	3.5	1	2.3
計	338	100%	44	100%

第20表　緑釉陶器器種別・産地別一覧表（点数は破片数）

陰刻花文陶器は５点あるが、図示できたものは４点(489～492)で、この他、前田地区から透かしのある蓋の小片が１点出土した。492は底部ロクロケズリの京都産で、内面に草文が巡る。他は猿投窯のものである。

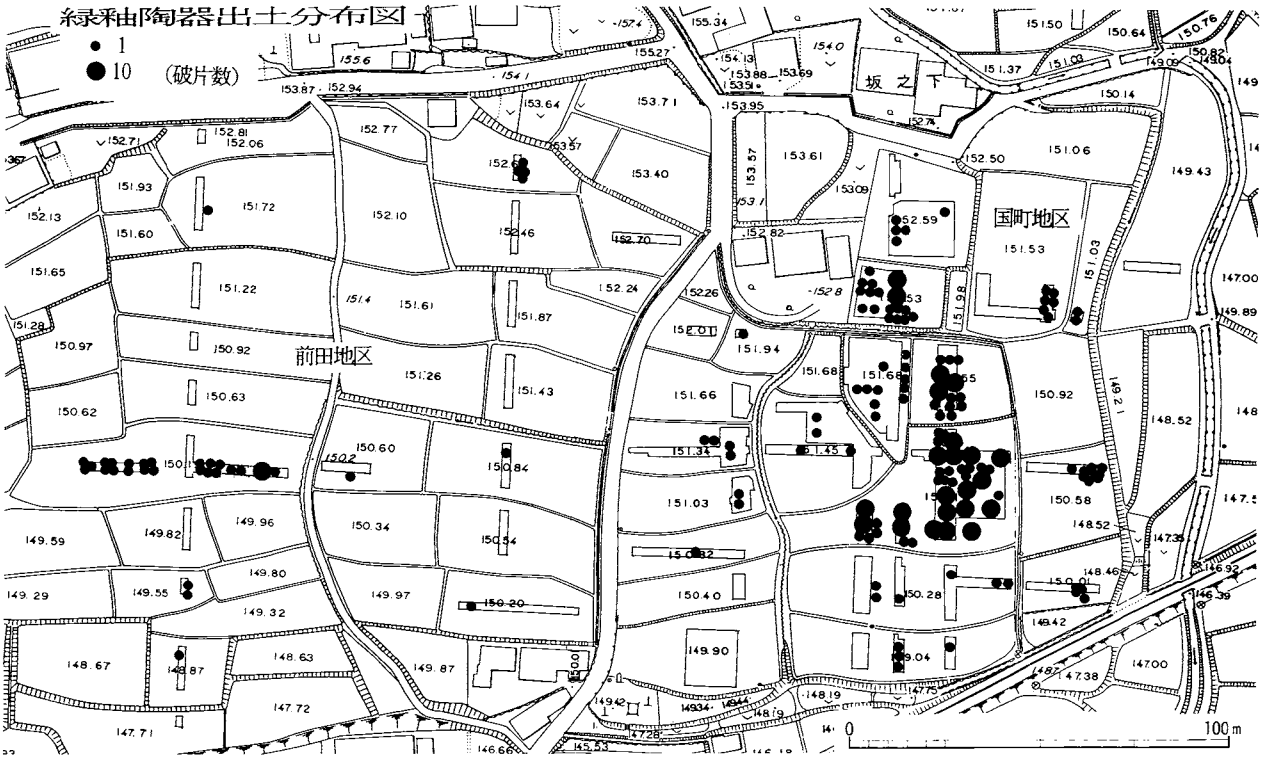
二彩陶器　国町地区のＤ５－８調査区から、壷の口縁部の破片(493)が出土した。内面は釉薬が剝離しているが、外面には濃緑と淡緑の釉が残る。小片であるが、二彩陶器の可能性が高いものである。

灰釉陶器　陰刻花文の施される椀(495)は、文様から猿投窯黒笹90号窯期のものである。

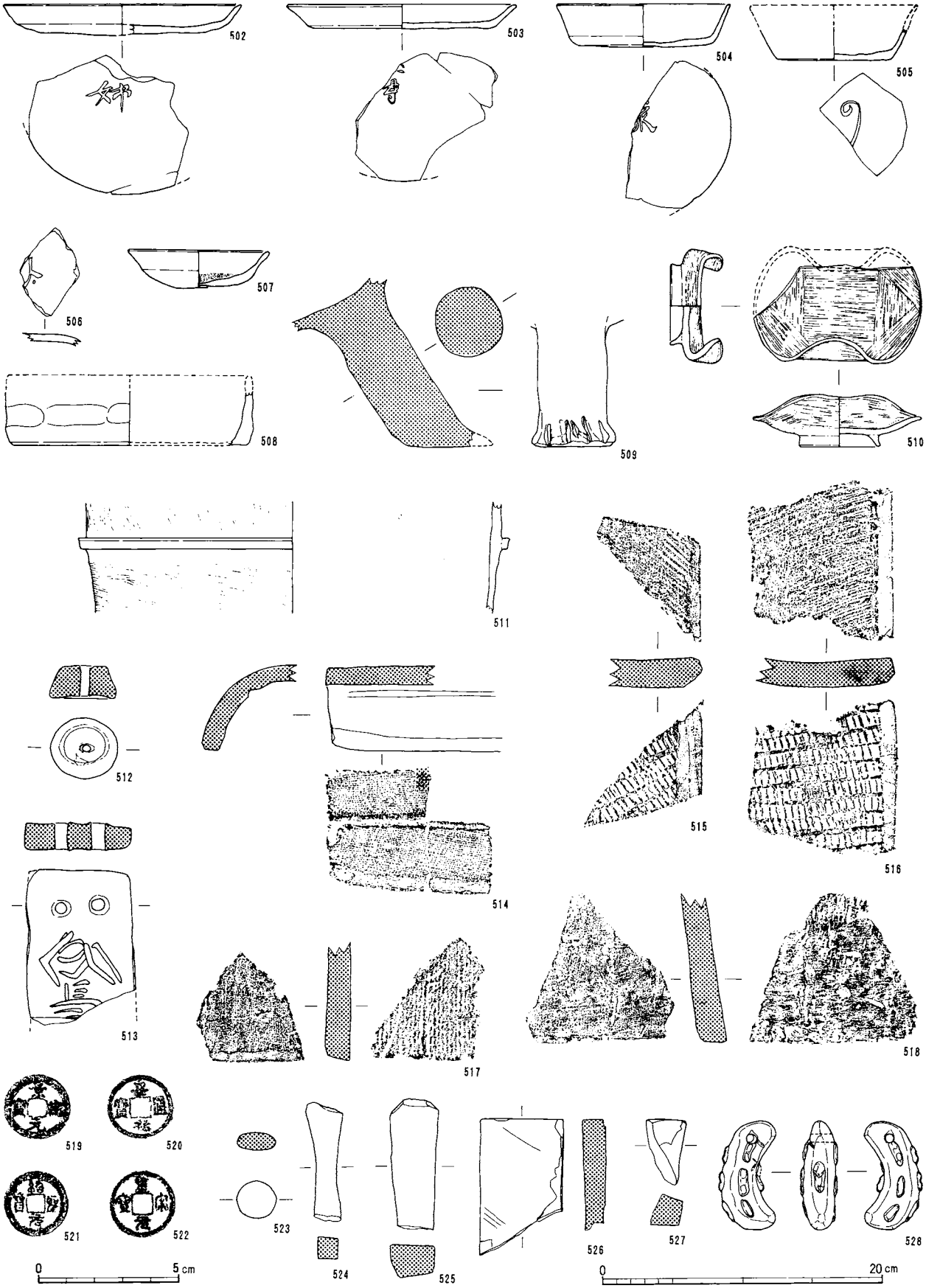
青磁　496・497はＤ3－8調査区の包含層から出土した、同一個体の可能性の高いものである。498はＳＤ1048から出土し、鎌倉時代のものと思われる。

土馬　499は裸馬の胴下半部と思われるもので、後脚を張り付けたと思われる窪みが２ヶ所残り、尾の下の胴部をヘラで刺突している。500は脚部になると思われる。

陶馬　501は陶馬の頭部片と考えられる。顔は竹管によって左右の目を表現し、その上に突起をつくり耳を表現する。耳の先端や首筋には棒状のもので刺突している。内部は中空かと思われるが、小片のために全体像は不明である。



第60図　緑釉陶器出土分布図



第61図　遺物実測図（17）墨書土器ほか（513・519～523は１：２）

馬歯　馬歯の出土は、第21表のとおりである。1例以外は上顎臼歯である。平安時代前期のＳＢ1090、ＳＡ1040など、柱穴からの出土例も目立つ。追越地区のＳＢ20の柱穴内では、左上顎臼歯と切歯(ＰＬ26)がまとまって出土した。

墨書土器　国町地区の遺構出土のものには、ＳＡ1052の土師器皿(503)や、9世紀後半のＳＫ1009の灰釉陶器皿(135)がある。503は底部外面に「□寺」、135は口縁部外面に二文字書かれているが、残りが悪い。「目□」か。包含層出土には、土師器皿(502)の底部外面の「姉」がある。また、ＳＢ1085出土402の底部の墨書は赤外線写真の結果、「國廚」あるいは「國府」と判読でき(ＰＬ27)、当遺跡が国庁と関係することを示す資料である。

前田地区出土には、須恵器杯底部外面に「泉」と書かれた504や、文字か記号か不明の505がある。

地　区	遺　構	出土位置	部　　位
国町地区	SK1008	D3-8 Q16 SK4	左下臼歯1（完形）
〃		D5-6 G16 包含層	左上臼歯1（細片）
〃	SA1040	D5-3 S28 Pit 5	左上臼歯1（細片）
〃		D5-9 P18 包含層	右上臼歯1
〃　〃		D5-9 P18 包含層	左上臼歯1
〃	SB1090	D6-5 K8 Pit 3	右上臼歯1（細片）
追越地区	SB20	C2-4 5 SK1	左上臼歯3・切歯4

第21表　馬歯出土地区一覧表

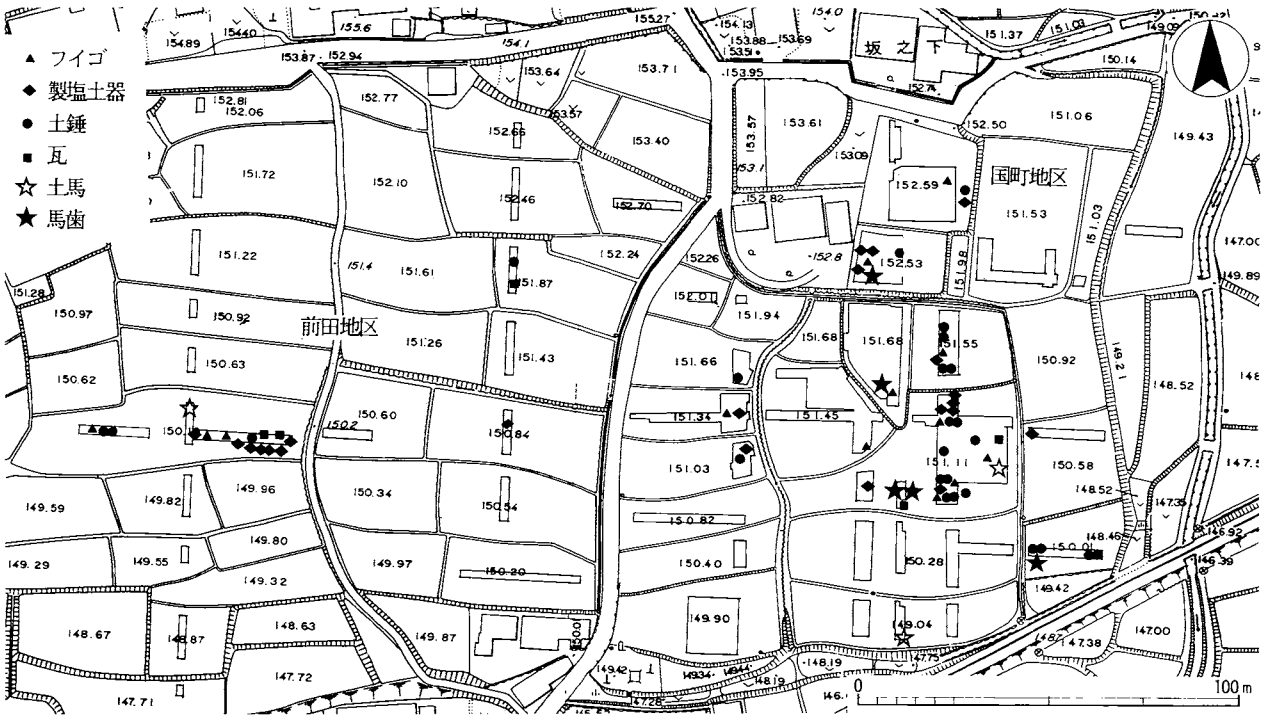
漆容器　漆の付着する土師器片が、国町地区から数点出土している。大半は小形供膳具の破片と思われ、最も残りの良い杯(507)は、内面にヘラで漆をこねた痕跡(ＰＬ26)が明確に残り、パレットとして使用したものである。平安時代前期。

製塩土器　国町地区から約20点、前田地区から約10点出土した。図示できるものは508のみである。志摩式の製塩土器で、平安時代前期のものである。

土符　土符は、15世紀から16世紀にかけて伊賀盆地北部で多く確認されている。513は国町地区Ｄ５－９の包含層から出土したもので、幅3.8cm、長さ5.5cm、厚さ0.9cmで、上面に２ケ所穴を穿つ。表面には墨書が施されているが、判読できない。裏面にはヘラにより花押と文字(馬)が書かれる。

円筒埴輪　511は埴質のもので、背後の古墳群からの流れ込みの可能性が高い。

瓦　柘植川北部の調査で出土した瓦は、10片にも満たないものである。追越地区の平瓦２片(515・516)、国町地区の平瓦２片(517)、前田地区の丸瓦２片(514)、平瓦１片(518)などがあり、おそらく奈良時代に入るものであろう。建物を葺く量としては不足しており、建物が瓦葺きであることに対しては否定的である。



第62図　遺物分布図

フイゴの羽口　国町地区から11片、前田地区から3片出土した。平安時代のＳＢ1020、ＳＫ1012などから出土しているが、いずれも小片である。量的には少なく遺構としては確認できなかったが、周辺に鍛冶工房の存在を想定することができる。

土錘　前田地区から4点、国町地区から19点出土した。遺構から出土するものが少なく、時期的な変遷は不明である。完形およびほぼ完形なものの長さと重さは、第22表のとおりである。

紡錘車　国町地区Ｄ３－６調査区の包含層から土製のもの(512)が、１点出土した。当地区の包含層出土の６世紀の遺物と同様の時期のものかと思われる。

その他　509は土師器鍋の脚で、先端をヘラで刻み獣脚として表現する。510はＤ５－５調査区の包含層から出土した黒色土器の耳皿である。内外面は丁寧にヘラミガキを施す。

石製品

523は碁石状の形を呈するもので、材質は石英である。他に砥石(524～527)などもある。

528は追越地区のＳＤ４から出土した子持勾玉である。側面と背面に３個、腹面に１個の勾玉を付ける。長さ7.9cm、幅2.7cm、厚さ2.2cmと比較的大形のものである。

金属製品

追越地区Ｃ11の包含層から貨幣４点(519～522)が出土した。初鋳年については観察表を参照されたい。

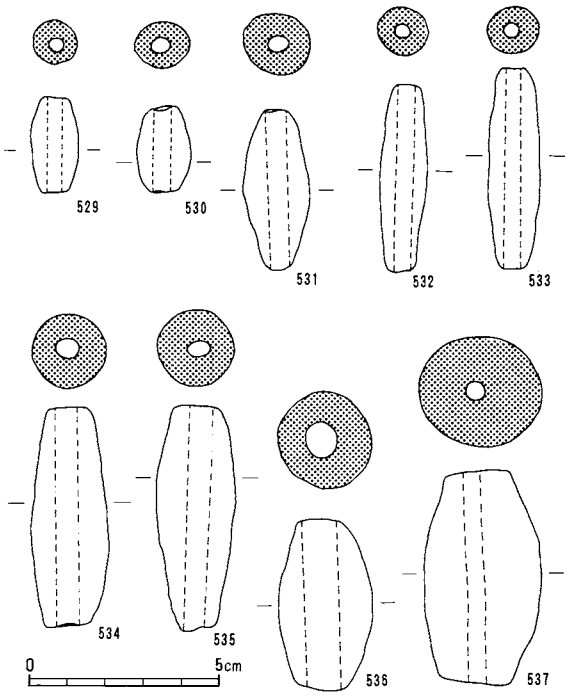
木製品

木製品は地下水位が高いためか残りが良く、追越地区のＳＤ4・8や前田地区の包含層から出土している。これ以外にも掘立柱建物の柱根が多く残っていたが、取り上げを行ったものは少ない。

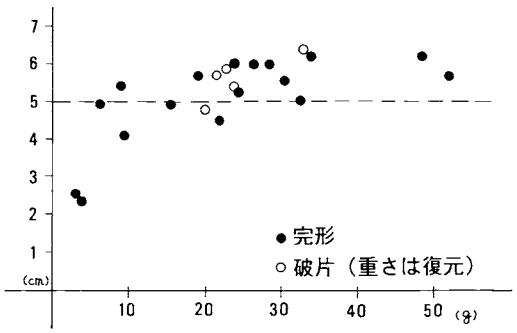
ＳＤ４からは、上端に切り込みを入れた荷札木簡が約10点出土した。長さが約14cmの小形なもの(538～540)と16cmのもの(544・545)の2種類に分けられる。541・543は下を欠損し、542は上半分が削られているが、幅から見て小形の製品に入る。546・547は幅が広く、木簡になるかは不明である。これらのうち、538には「黒□丈」あるいは「黒□升」、539は「重丈□」と判読できる可能性がある。

ＳＤ８から出土した木製品には、550～558がある。550は桁材で、柱のほぞ穴と垂木を結ぶための穴が残る。柱間の寸法は、ほぞ穴から推定すると1.4ｍとなる。転用のため、厚さは薄くなっている。551～553は先端を尖らして杭としたものだが、553にはほぞ穴が残り、建築部材の転用品である。555～557にもほぞ穴が残るため、柱材の転用かと思われる。558は、上面が平でなく凹凸が著しいため、臼ではなく衣笠状木製品としたものである。内側を二段にくり貫く。

柱材には、下部に曳航用の穴が残るＳＢ2015のもの(559)の他、560はＳＢ1075の最も大きな柱材である。その他、13世紀の瓦器と共に出土したものには、548の下駄と549の曲物の底板がある。下駄には、前歯の下に補強材を鉄釘で打ち込んだ痕跡が残る。



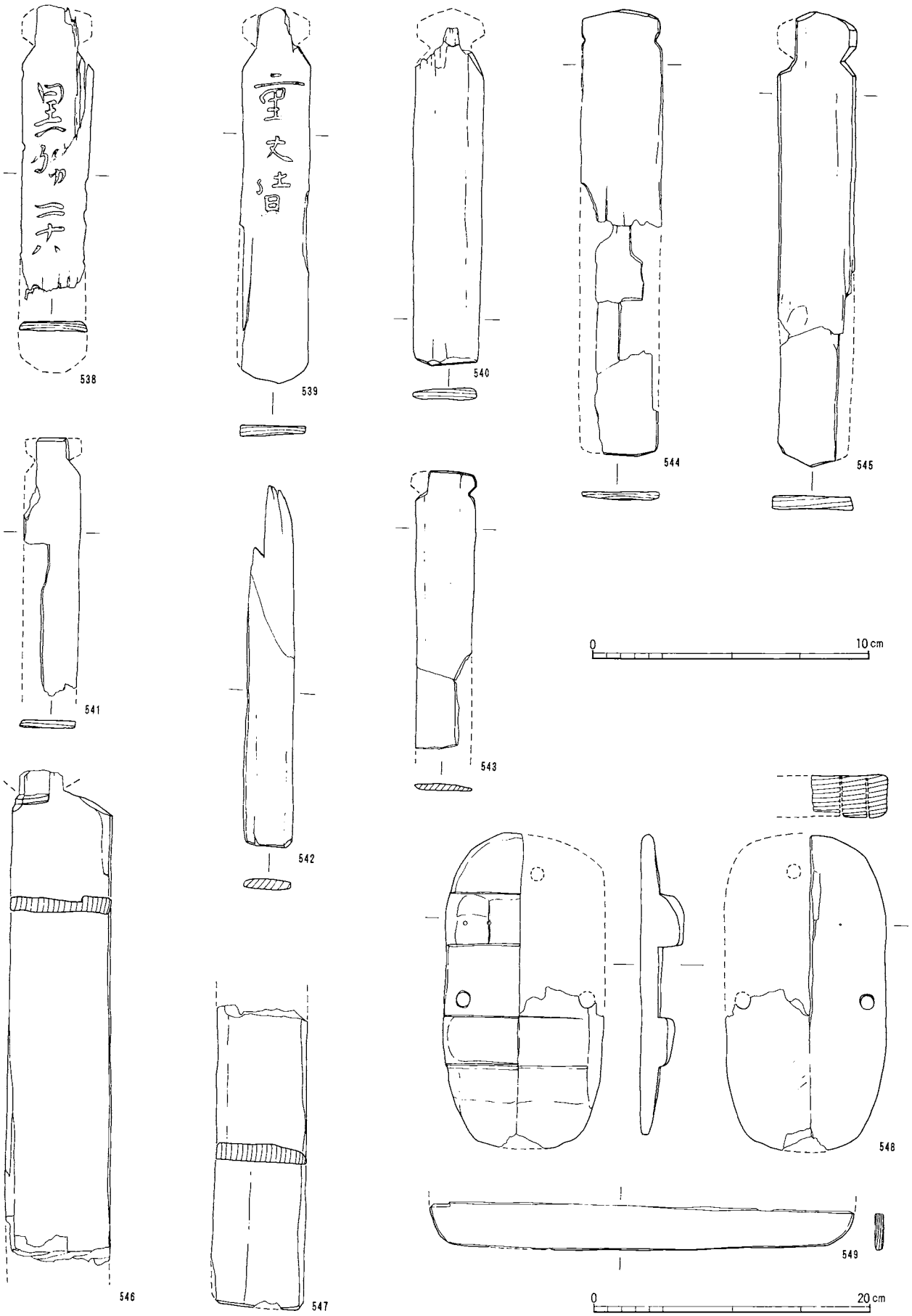
第63図　遺物実測図（18）土錘



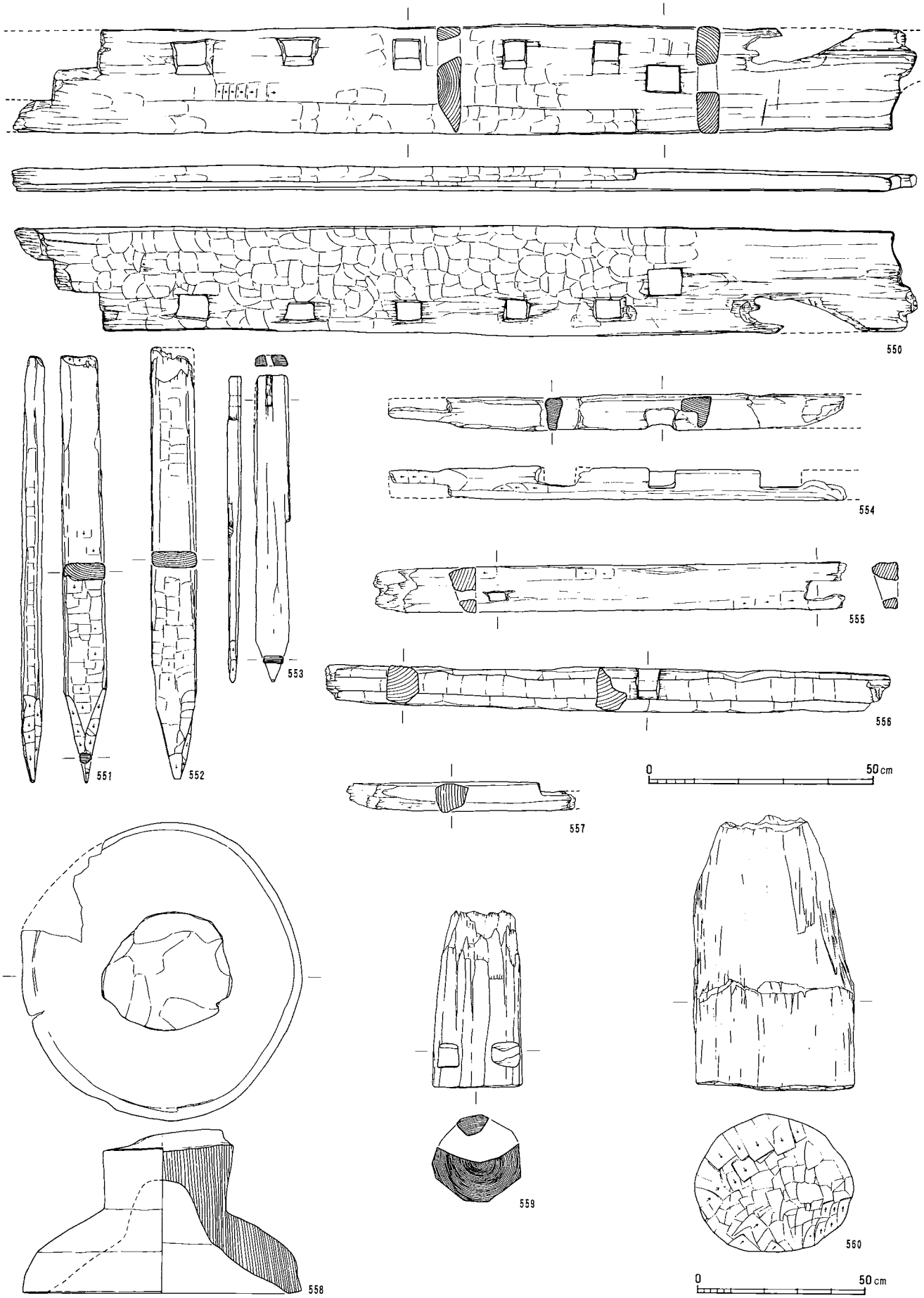
第22表　土錘重量分布

註

1、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所　1978
2、『平城宮発掘調査報告Ⅸ』奈良国立文化財研究所　1978
3、「平安京右京三条三坊」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1990



第64図　遺物実測図（19）木製品（538～547は１：２　548・549は１：４）



第65図　遺物実測図（20）木製品（550～558は１：12　559・560は１：16）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
1	105-02	縄文土器 鉢		C1-11 包含層	−		−	内外−ナデ。張り付け凸帯	粗（1〜2mmの砂粒多く含む）	良	浅黄橙色	−	
2	104-04	〃 〃	SD8	C1-11-8 SD3	−		−		粗(3mmの砂粒含む)	〃	灰褐色	−	
3	105-04	〃 〃	〃	〃	−		−	内外−貝殻条痕。	粗（1〜4mmの砂粒多く含む）	〃	黒褐色	−	
4	101-01	弥生土器 台付細頸壷	SD13	C2-2-2 SD1	6.4	9.0	25.2	口縁部内外−横ナデ。体部外下半〜脚部外−ヘラミガキ。口縁・脚外面刺突文。	良(3mm以下の砂粒含む)	〃	灰白色	ほぼ完形	
5	101-02	弥生土器 甕	〃	〃		5.6		内外−縦ハケ	良（1〜2mmの砂粒含む）	〃	にぶい橙色	30	
6	113-01	〃 甕		B4-7 包含層	9.8		−	口縁部内外−横ナデ。口縁部外・頸部−刺突文	〃	〃	灰白色	15	
7	113-02	〃 壷	SD3	B4-7 C-7	−		−	外−波状文と刺突文交互に施す。	〃	〃	灰白色	−	
8	108-04	土師器 鉢	SH9	C1-14-1 SB-1北	11.9		5.4	口縁部内外−横ナデ。体部内外−ナデ。	良（1mm弱の砂粒少し含む）	〃	淡黄橙色	25	
9	109-01	〃 鉢	〃	〃	10.5		5.7	〃	良（1mm弱の砂粒多く含む）	〃	にぶい橙色	ほぼ完形	
10	109-02	〃 甕	〃	C1-14-2 SB-1南	14.4			口縁部内外−横ナデ。	良（1mm弱の砂粒多く含む）	〃	にぶい黄橙色	30	
11	258-03	〃 鉢	SD1043	D5-3 S28 SD3	11.3			口縁部内外−横ナデ。体部内−板ナデ。外−ナデ。	良（1〜2mmの砂粒含む）	〃	浅黄橙色	17	
12	258-01	〃 〃	〃	〃	9.8		5.3	口縁部内外−横ナデ。体部内外−ナデ。	〃	〃	黄橙色	13	
13	258-02	〃 高杯	〃	〃	15.4			口縁部内外−横ナデ。底部内−ナデ、外−オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	50	
14	258-07	須恵器 杯身	〃	D5-3 R29 SD1	10.2		4.5	口縁部内外−ロクロナデ。底部外−ロクロケズリ。	〃	〃	暗青灰色	口5 底25	
15	258-05	土師器 甕	〃	D5-3 S28 SD3	8.4			口縁部内外−横ナデ。体部内−ナデ、外−縦方向のハケメの後、横方向のハケメ。	〃	〃	にぶい橙色	17	
16	258-04	〃 〃	〃	〃	9.2			〃	〃	〃	にぶい橙色	25	
17	258-06	〃 〃	〃	〃	11.9			口縁部内外−横ナデ。体部内−板ナデ、外−縦方向のハケメ。	〃	〃	にぶい橙色	50	
18	103-03	〃 鉢	SD8	C1-11-8 SD3	11.8		5.7	口縁部内外−横ナデ。体部内外−ナデ。	1mmの砂粒多く含む	〃	明黄褐色	30	
19	105-01	〃 高杯	〃	〃	−	−	−	杯部内外−ナデ。脚部内−ヘラケズリ、外−ナデ。	良（1〜2mmの砂粒含む）	〃	橙色	−	
20	103-04	〃 甕	〃	〃	14.7		−	口縁部内外−横ナデ。体部内外−ナデ。	〃	〃	浅黄橙色	口縁部完形	
21	102-01	〃 〃	〃	〃	11.6		12.5	口縁部内外−横ナデ。体部内−板ナデ、外−縦ハケ（11本/2cm）。	〃	〃	褐灰色	口縁70	黒斑あり
22	102-02	〃 〃	〃	〃	12.1		14.0	口縁部内外−横ナデ。体部内−ナデ、外−横ハケ（8から9本/2cm）。	〃	〃	灰白色	ほぼ完形	黒斑あり
23	106-01	〃 〃	〃	〃	20.2		30.0	口縁部内外−横ナデ。体部内−板ナデ、外−縦ハケ（4本/1cm）の後横ナデ。	〃	〃	にぶい黄橙色	ほぼ完形	
24	104-01	須恵器 杯蓋	〃	〃	12.3		4.3	口縁部内外−ロクロナデ。底部内−ロクロナデ、外−ロクロケズリ（R）。	〃	〃	灰色	15	
25	103-02	〃 杯身	〃	〃	10.2		5.1	口縁部内外−ロクロナデ。底部内−ロクロナデ、外−ロクロケズリ（R）。	〃	〃	灰色	完形	底部外面ヘラ記号（＋）あり
26	103-01	〃 杯蓋	〃	〃	11.8		4.6	口縁部内外−ロクロナデ。体部内−ロクロナデ、外−ロクロケズリ（R）。	〃	〃	灰色	95	
27	104-03	〃 高杯	〃	〃		8.2		脚部外−ロクロナデのあとカキメ、内−ロクロナデ。	〃	〃	灰白色	25	四方透かし
28	104-02	〃 甕	〃	〃				体部内外−ロクロナデ。	〃	〃	灰白色	15	
29	104-05	〃 器台	〃	〃	29.0		−	口縁部内外−ロクロナデ。外面に波状文（単位12本）1条の下に凹線2本めぐる。	〃	〃	青灰色	8	内面自然釉
30	107-01	〃 甕	〃	〃	22.6		45.0	口縁部外面に波状文（単位14本）1条。体部外−タタキ後カキメ、内−タタキ後ナデ。	〃	〃	青灰色	口40 体60	
31	110-03	てぐすね土器	SD16	C2-3-3 SD2	7.2		3.3	内外−指オサエ。	〃	〃	にぶい黄橙色	50	
32	110-05	土師器 高杯	〃	〃	−	10.2	−	脚部内外−ロクロナデ。	〃	〃	浅黄橙色	20	透かしの痕跡残るが、幅、長さ不明。3方透かしか
33	110-02	須恵器 杯蓋	〃	〃	12.2		−	口縁部内外−ロクロナデ。	〃	〃	灰白色	15	
34	110-04	〃 杯身	〃	〃	11.5		3.0	内外−ロクロナデ	〃	〃	灰白色	5	
35	110-01	〃 短頸壷	〃	〃	8.6		7.8	内外−ロクロナデ。底部外−ヘラケズリ。	〃	〃	灰白色	50	

第23表　遺物観察表（1）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
36	115-02	須恵器 杯蓋	SB2022	E4-3 PIT2	12.0		3.0	口縁部内外－ロクロナデ。天井外－ロクロケズリ、内－ナデ。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	灰色	18	天井部外面自然釉かかる
37	115-01	土師器 甕	〃	〃	26.6			口縁部内外－横ナデ。体部内外－ハケメ(5本/1cm)。	粗(2mmの砂粒含む)	〃	浅黄橙色	13	
38	114-01	〃 〃	〃	〃	15.2		14.9	口縁部内外－横ナデ。体部内－ハケメ、外－ハケ(7本/1cm)の後下半ヘラケズリ。	良(1～2mmの砂粒含む)	〃	灰白色	80	黒斑あり、体部中央上に1条凹線めぐる。
39	117-02	須恵器 杯蓋	SD2010	E-5-2 SD1	17.0		－	内外－ロクロナデ。	〃	〃	灰色	18	
40	117-03	土師器 皿	〃	〃	21.0		－	口縁部内外－横ナデ。底部外－ヘラケズリ。	〃	〃	橙色	5	口縁内面に放射条暗文1条
41	117-01	〃 甕	〃	〃	14.4		16.2	口縁部内外－横ナデ。体部内－ハケメ(6本/1cm)、外－ハケメ(7本/1cm)の後下半ヘラケズリ。	良(1～2mmの砂粒多く含む)	〃	橙色	35	外面煤付着
42	257-04	土師器 杯	SK1002	D3-6 A4 PIT3	13.6		5.9	口縁部内外－横ナデ。体部内－横方向のハケメの後ナデ。外－縦方向のハケメの後ナデ。	良(1～2mmの砂粒含む)	〃	橙色	完形	
43	257-03	〃 〃	〃	〃	13.8		4.9	口縁部内外－横ナデ。体部～底部内－横方向のハケメの後底はナデ。外－ナデ。	良(2mmの砂粒含む)	〃	橙色	50	
44	257-02	〃 甕	〃	D3-6 A5 タテアナ	12.6			口縁部内外－横ナデ。体部内－横方向のハケメ、外－縦方向のハケメ。	良(1～2mmの砂粒少し含む)	〃	橙色	80	
45	257-01	〃 〃	〃	〃	22.0			口縁部内外－横ナデ。体部内－横方向のハケメ、外－縦方向のハケメの後横ナデ。	〃	〃	橙色	35	
46	114-02	須恵器 平瓶	包含層	E-4-3	－		－	体部内外－ロクロナデ。底部外－ロクロケズリ。	〃	〃	灰白色	体部90	
47	116-01	土師器 甕	〃	〃	20.8		－	口縁部内外－横ナデ。体部内外－縦ハケ(6－7本/1cm)。	良(1～2mmの砂粒多く含む)	〃	灰白色	18	
48	112-01	〃 〃	〃	B4-5	20.4		28.7	口縁部内外－横ナデ。体部内－ナデ、外－ハケメ(9本/2cm)。	〃	〃	浅黄橙色	口100 体80	
49	227-02	〃 杯	SD1010	D3-8 P17 SD1	13.0		2.6	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	淡橙色	ほぼ完形	
50	227-03	〃 〃	〃	〃	13.6		3.0	〃	やや粗(1～2mmの砂粒多く含む)	〃	淡橙色	ほぼ完形	
51	15-01	〃 皿	〃	D3-8 L11 SD1	14.5		1.8	〃	良(1～2mmの砂粒含む)	〃	淡橙色	50	
52	24-10	〃 〃	〃	〃	15.8		2.1	〃 。底部内－螺旋状暗文1条。口縁部外－ヘラミガキ。	〃	〃	淡橙色	完形	
53	227-10	〃 〃	〃	D3-8 P17 SD1	11.4		－	口縁部内外－横ナデ。底部外－ナデ。張り付けナデの痕跡一部残る。	〃	〃	浅黄橙色	20	
54	227-11	須恵器 横瓶	〃	〃 P16 SD1	8.2		－	口縁部内外－ロクロナデ。	〃	〃	青灰色	25	
55	227-01	〃 鉢	〃	D3-8 P17 SD1	15.8		9.3	口縁部内外－ロクロナデ。底部内－ナデ。体部外ロクロケズリの後ヘラミガキ。	〃	〃	淡灰色	40	外面のミガキ、残存部分では3回に分け、全体では6回程度か
56	35-01	〃 壺	〃	D3-8 L11 SD1	9.8	12.8	28.3	口縁部・体部内外面－ロクロナデ。底部内外－ナデ。	〃	〃	灰白色	ほぼ完形	粘土板による把手2ケ
57	34-01	〃 〃	〃	〃	11.4	11.4	30.3	〃 肩部に沈線1条	〃	〃	灰白色	完形	粘土紐による把手2ケ
58	40-67	土師器 盤	包含層	D3-8 L11 暗褐層	35.2	13.0	8.6	口縁部内外－横ナデ。体部外－縦方向のヘラケズリの後ヘラミガキ。底部内外－ナデ。	〃	〃	浅黄橙色	25	
59	229-01	〃 杯	SK1011	D3-8 R16 SD1	13.2		2.9	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	橙色	60	
60	229-04	〃 〃	〃	〃	12.8		2.6	〃	〃	〃	淡橙色	60	
61	228-08	〃 〃	〃	〃	12.8		2.9	〃	〃	〃	橙色	70	
62	229-05	〃 〃	〃	〃	13.0		2.9	〃	〃	〃	淡橙色	80	
63	229-02	〃 皿	〃	〃	14.4		2.2	〃	〃	〃	淡茶褐色	20	
64	229-09	〃 杯	〃	〃	15.0		3.3	〃	〃	〃	淡橙色	25	
65	229-07	〃 皿	〃	〃	16.2		1.8	〃	〃	〃	淡橙色	15	
66	228-09	〃 〃	〃	〃	16.8		1.8	〃	〃	〃	橙色	70	
67	228-10	〃 〃	〃	〃	20.1		2.0	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ・螺旋状暗文2段以上、外－ヘラケズリ。	〃	〃	橙色	90	
68	229-08	〃 〃	〃	〃	19.4		2.8	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	淡茶褐色	15	
69	229-03	〃 椀	〃	〃	17.4	8.5	5.5	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ・螺旋状暗文2条、外－ヘラケズリ。	〃	〃	淡橙色	20	張りつけ高台 口縁部内面の暗文不明
70	250-02	〃 甕	〃	〃	14.4		－	口縁部内外－横ナデ。底部内外－ハケメ(7本/1cm)。	〃	〃	灰白色	10	

第24表　遺物観察表・柘植川北部（2）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
71	250-03	黒色土器 杯	SK1011	D3-8 R16 SD1	−		−	底部内−ヘラミガキ、外−ヘラケズリの後ヘラミガキ。	密(砂粒ほとんど含まない)	良	灰白色	10	黒色土器A類
72	229-06	須恵器 皿	〃	〃	17.8		2.3	口縁部内外−ロクロナデ。底部内−ロクロナデ、外−ロクロケズリの後ロクロナデ。	良(1〜2mmの砂粒含む)	〃	灰白色	15	
73	250-01	〃 壷	〃	〃	−	11.0	−	体部内外−ロクロナデ。底部外−ナデ。	〃	〃	青灰色	体部25	粘土紐による把手
74	262-07	土師器 杯	SD1028	D5-9 021 SD1	12.8		2.3	口縁部内外−横ナデ。底部外面−ナデ。肩部沈線1条。	〃	〃	灰白色	16	
75	262-10	〃 皿	〃	〃 〃	12.8		−	口縁部内外−横ナデ。底部内−横ナデ、外−ナデ。	〃	〃	にぶい黄褐色	13	
76	262-06	〃 椀	〃	〃 022 SD1	16.5		−	口縁部内外−横ナデ。内面螺旋状暗文。底部外−ヘラケズリ。脚張りつけナデの痕跡残る。	〃	〃	橙色	20	
77	262-09	〃 杯	〃	〃 021 SD1	12.5		2.5	口縁部内外−ロクロナデ。底部内−ロクロナデ、外−ヘラ切りの後ナデ。	〃	〃	浅黄橙色	13	ロクロ成形土師器
78	262-03	須恵器 杯	〃	〃 022 SD1	−	5.5	−	底部内外−ロクロナデ。張り付け高台。	〃	〃	灰色	25	
79	262-04	〃 皿	〃	〃 〃	15.4		−	口縁部内外−ロクロナデ。	〃	〃	明青灰色	13	
80	262-02	〃 盤	〃	〃 〃	27.6		−	〃	〃	〃	灰色	8	
81	262-05	灰釉陶器 椀	〃	〃 〃	16.7		−	口縁部内外−ロクロナデ。体部外下半−ロクロケズリ。	〃	〃	灰色	13	内面に厚い釉
82	262-01	〃 瓶	〃	〃 021 SD1	−		−	口縁部内外−ロクロナデ。	〃	〃	灰色	−	口縁部内面−自然釉
83	245-07	土師器 杯	SK1086	D6-5 J7 SK1	13.0		2.4	口縁部内外−横ナデ。底部内−ナデ、外−指オサエ	〃	〃	灰白色	70	
84	246-05	〃 〃	〃	〃	13.2		2.5	〃	〃	〃	灰白色	25	
85	246-03	〃 〃	〃	〃	13.4		2.5	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	30	
86	245-05	〃 〃	〃	〃	13.5		2.6	〃	〃	〃	灰白色	90	
87	246-04	〃 〃	〃	〃	13.3		2.5	〃	〃	〃	浅黄橙色	50	
88	247-03	〃 〃	〃	〃	13.0		2.8	〃	〃	〃	浅黄橙色	50	
89	245-06	〃 〃	〃	〃	13.4		2.7	〃	〃	〃	浅黄橙色	30	
90	245-08	〃 〃	〃	〃	14.4		2.8	〃	〃	〃	灰白色	30	
91	246-02	〃 〃	〃	〃	14.4		3.0	〃	〃	〃	灰白色	30	
92	246-01	〃 〃	〃	〃	15.0		3.0	〃	〃	〃	にぶい橙色	30	
93	246-09	〃 椀	〃	〃	16.0	−	−	口縁部内外−横ナデ。底部内外−ナデ。	〃	〃	にぶい黄橙色	30	高台剥離
94	246-10	〃 〃	〃	〃	16.0	−	−	〃	〃	〃	浅黄橙色	15	高台剥離
95	246-06	〃 皿	〃	〃	15.3		1.8	口縁部内外−横ナデ。底部内−ナデ、外−指オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	75	
96	246-08	〃 〃	〃	〃	15.8		1.8	〃	〃	〃	浅橙色	30	
97	246-07	〃 〃	〃	〃	16.3		1.7	〃	〃	〃	浅黄橙色	30	
98	247-01	〃 盤	〃	〃	39.6		−	口縁部内外−横ナデ。体部内−ハケメ、外−ナデ	〃	〃	浅黄橙色	25	
99	247-02	黒色土器 皿	〃	〃	16.6	6.1	2.8	口縁部内外−横ナデ。体部内−ヘラミガキ、外−ナデの後ヘラミガキ。	〃	〃	橙色	15	張りつけ高台 黒色土器A類
100	245-03	〃 杯	〃	〃	17.4		4.6	口縁部内外−横ナデ。内−ヘラミガキ、外−ヘラケズリの後口縁部ヘラミガキ。	密(砂粒ほとんど含まない)	〃	灰白色	50	黒色土器A類
101	245-01	灰釉陶器 瓶	〃	〃	4.2		−	口縁部内外−ロクロナデ。体部外下半−ロクロケズリ。	〃	〃	灰白色	50	口縁部内外・体部外−自然釉
102	247-05	〃 椀	〃	〃	13.4	7.2	4.1	口縁部内外−ロクロナデ。体部下半・底部外−ロクロケズリ。	〃	〃	灰白色	50	張りつけ高台。内面に厚い釉
103	256-07	土師器 杯	SK1008	D3-8 Q16 SK4	12.6		2.8	口縁部内外−横ナデ。底部内−ナデ、外−指オサエ+板ナデ。	良(1〜2mmの砂粒含む)	〃	浅黄橙色	25	
104	256-08	〃 〃	〃	〃	13.5		2.4	口縁部内外−横ナデ。底部内−ナデ、外−指オサエ。	〃	〃	灰白色	25	
105	256-09	〃 皿	〃	〃	14.0		1.8	〃	〃	〃	浅黄橙色	17	

第25表　遺物観察表・柘植川北部（3）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
106	256-10	土師器 皿	SK1008	D3-8 Q16 SK4	13.0		1.8	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ（木目残る）。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	橙色	17	
107	251-05	〃 椀	SK1009	D3-8 Q16 SK2 下	11.0		2.9	口縁部内外－横ナデ、外－ヘラミガキ。底部内外－ナデ。	〃	〃	淡橙色	50	
108	228-07	〃 杯	〃	〃 Q16 SK2	12.2		2.3	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	淡橙色	30	
109	227-06	〃 〃	〃	〃	13.2		2.3	〃	〃	〃	淡橙色	30	
110	227-05	〃 〃	〃	〃	12.2		2.8	〃	〃	〃	淡橙色	30	
111	228-02	〃 〃	〃	〃	12.8		2.7	〃	〃	〃	淡橙色	ほぼ完形	
112	228-04	〃 〃	〃	〃	11.8		2.7	〃	〃	〃	淡橙色	70	
113	228-01	〃 〃	〃	〃	12.4		3.3	〃	〃	〃	淡橙色	70	
114	228-05	〃 〃	〃	〃	12.8		3.0	〃	〃	〃	淡橙色	70	
115	228-06	〃 〃	〃	〃	12.9		2.8	〃	〃	〃	淡橙色	90	
116	228-03	〃 〃	〃	〃	14.2		2.9	〃	〃	〃	淡橙色	50	
117	251-08	〃 〃	〃	D3-8 Q17 SK2	12.2		2.3	〃	〃	〃	灰白色	25	
118	251-06	〃 〃	〃	〃 R16 SK2	14.2		2.4	〃	〃	〃	浅黄橙色	20	
119	251-07	〃 皿	〃	〃 Q17 SK2	12.0		1.8	口縁部内外－ロクロナデ。底部外面－糸切り。	〃	〃	灰白色	15	ロクロ成形土師器
120	227-08	〃 椀	〃	〃 Q16 SK2	12.9		3.7	口縁部内外－ロクロナデ。底部外面－ヘラ切り。	〃	〃	淡茶褐色	75	ロクロ成形土師器
121	251-03	〃 皿	〃	〃 Q16 SK2 下	13.8		1.4	口縁部内外－横ナデ。底部面－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	淡橙色	25	
122	227-09	〃 〃	〃	〃 Q16 SK2	14.4		2.1	〃	〃	〃	淡橙色	ほぼ完形	
123	251-01	〃 〃	〃	〃 Q17 SK2	15.0		1.8	〃	〃	〃	浅黄橙色	50	
124	251-02	〃 〃	〃	〃 R17 SK2	16.2		1.8	〃	〃	〃	浅橙色	25	
125	251-04	〃 〃	〃	〃 R16 SK2	20.8	15.8	2.7	〃 底部内面に螺旋状暗文1条。	〃	〃	淡橙色	15	
126	251-10	〃 甕	〃	〃 Q17 SK2	12.2		－	口縁部内外－横ナデ。体部上半－ハケメ・下半－不明、内－ハケメ。	〃	〃	灰白色	20	
127	256-06	須恵器 皿	〃	〃 Q16 SK2 下	15.4		2.0	口縁部内外－ロクロナデ。底部内外－ロクロナデ。	〃	〃	灰白色	20	
128	227-04	〃 〃	〃	〃 Q16 SK2 下	18.4		2.6	口縁部内外－ロクロナデ。底部外－ロクロケズリの後ナデ。	〃	〃	淡灰色	25	底部外面に墨書あるが、判読不明
129	256-01	〃 鉢	〃	〃 Q17 SK2	30.6		－	口縁部内外－ロクロナデ。	〃	〃	灰白色	5	
130	256-03	〃 蓋	〃	〃 Q17 SK3	10.5		－	口縁部内外－ロクロナデ。天井部外－ロクロケズリ。内－ロクロナデ。	密	〃	紫灰色	17	
131	256-04	〃 〃	〃	〃 Q17 SK2	16.8		－	口縁部内外－ロクロナデ。天井部外－ロクロケズリの後ロクロナデ。	良（1mmの砂粒少し含む）	〃	明青灰色	13	内面磨滅－転用硯か
132	256-05	〃 〃	〃	〃 Q16 SK2 下	16.8		－	口縁部内外－ロクロナデ。天井部外－ロクロケズリの後ロクロナデ、内－ナデ。	良(1～2mmの砂粒含む)	〃	灰白色	17	
133	256-02	〃 短頸壺	〃	〃 Q16 SK2	13.8		－	口縁部内外－ロクロナデ。体部内外－タタキの後ロクロナデ。	〃	〃	明青灰色	13	
134	251-09	灰釉陶器 椀	〃	〃 Q17 SK2	－	7.3	－	内外－ロクロナデ。内面灰釉厚く掛かる。底部外－ロクロケズリ。張り付け高台。	〃	〃	灰白色	30	
135	227-07	〃 皿	〃	〃	15.4	7.4	3.0	内外－ロクロナデ、内面灰釉ハケ塗り。底部外－ロクロケズリ。張り付け高台。	〃	〃	淡灰色	80	口縁外面に墨書
136	263-01	土師器 杯	SD1029	D5-9 022 SD2	14.6		2.5	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	17	
137	263-03	須恵器 蓋	〃	〃 〃 〃	15.8		－	口縁部内外－ロクロナデ。天井部外－ロクロケズリ、内－ロクロナデ。	〃	〃	灰白色	10	
138	263-07	土師器 椀	SD1032	D5-9 P22 SD2	13.8		3.9	口縁部内外－ロクロナデ。底部外－ヘラ切り、内－ロクロナデ。	〃	〃	黄橙色	17	ロクロ成形土師器
139	263-05	〃 皿	SK1030	D5-9 021 SK4	15.2		－	口縁部内外－横ナデ。底部外－ナデ。	〃	〃	橙色	13	
140	263-04	〃 杯	〃	〃	15.8		3.9	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	50	

第26表　遺物観察表・柘植川北部（4）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
141	263-06	黒色土器 杯	SK1030	D5-9 O21 SK1	15.0		4.1	口縁部内外－横ナデ。体部外～底部外－ヘラケズリ、内－ヘラミガキ。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	にぶい黄橙色	10	黒色土器A類。口縁と底部接合せず
142	231-03	土師器 杯	SK1035	D5-9 P21 SK1	12.4		2.9	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	淡橙色	30	
143	233-05	〃 〃	〃	〃	12.6		2.8	〃	〃	〃	浅黄橙色	30	
144	231-07	〃 〃	〃	〃	12.8		3.0	〃	〃	〃	淡橙色	90	
145	231-04	〃 〃	〃	〃	12.8		2.8	〃	〃	〃	橙色	60	
146	233-04	〃 〃	〃	〃	12.8		3.3	〃	〃	〃	淡橙色	60	
147	231-05	〃 〃	〃	〃	12.5		2.8	〃	〃	〃	橙色	完形	
148	233-09	〃 〃	〃	〃	13.2		2.8	〃	〃	〃	浅黄橙色	40	
149	233-03	〃 〃	〃	〃	13.2		2.9	〃	〃	〃	淡橙色	60	
150	233-07	〃 〃	〃	〃	12.8		2.7	〃	〃	〃	にぶい橙色	50	
151	233-06	〃 〃	〃	〃	13.4		2.9	〃	〃	〃	浅黄橙色	40	
152	233-08	〃 〃	〃	〃	13.4		2.9	〃	〃	〃	灰白色	40	
153	233-02	〃 〃	〃	〃	13.4		3.1	〃	〃	〃	淡橙色	50	
154	231-06	〃 〃	〃	〃	13.6		2.9	〃	〃	〃	淡橙色	ほぼ完形	
155	232-02	〃 〃	〃	〃	13.4		3.3	〃	〃	〃	淡橙色	60	
156	232-05	〃 〃	〃	〃	14.5		2.8	〃	〃	〃	淡橙色	80	
157	233-01	〃 椀	〃	〃	16.2	7.2	5.4	口縁部内外－横ナデ。体部内下半～底部内－ハエの後ナデ、体部外下半～底部外－ナデ。	〃	〃	淡橙色	70	
158	232-01	〃 〃	〃	〃	16.2	7.4	5.0	内－横ナデ。口縁外～体部外－横ナデ。底部外－ナデ。	〃	〃	淡茶褐色	40	
159	232-04	〃 皿	〃	〃	14.6		2.0	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	淡橙色	90	
160	232-06	〃 〃	〃	〃	14.2		2.0	〃	〃	〃	淡橙色	60	
161	233-10	〃 〃	〃	〃	13.4		1.7	〃	〃	〃	橙色	30	
162	232-03	〃 〃	〃	〃	17.5	10.7	6.4	杯部内～口縁部外－ロクロナデ。体部外－ロクロケズリの後ロクロナデ。底部外－ヘラキリの後ナデ。脚部内外－ロクロナデ。	〃	〃	淡橙色	ほぼ完形	ロクロ成形土師器
163	232-07	〃 甕	〃	〃	12.8		－	口縁部内外－横ナデ。体部外－縦方向のヘラケズリ、内－ナデ。	〃	〃	浅黄橙色	30	
164	248-05	〃 〃	〃	〃	13.2		－	口縁部内外－横ナデ。体部外－ナデ、内－横ハケ(5本/1cm)	〃	〃	浅黄橙色	15	
165	248-04	〃 〃	〃	〃	21.3		－	口縁部内外－横ナデ。体部外－ハケの後ナデ、内－ナデ。	〃	〃	灰白色	15	
166	248-03	〃 〃	〃	〃	22.4		－	口縁部内外－横ナデ。体部内外－ナデ。	〃	〃	にぶい橙色	15	
167	230-08	黒色土器 杯	〃	〃	15.4		4.3	口縁部内外－横ナデ、内－横方向のヘラミガキ。体部外面～底部外－ヘラケズリの後ヘラミガキ	〃	〃	にぶい褐色	90	黒色土器A類。口縁部内面に暗文残る
168	230-09	〃 〃	〃	〃	15.8		4.2	〃	〃	〃	にぶい褐色	10	黒色土器A類。口縁部内面に暗文残る
169	230-06	〃 椀	〃	〃	14.8	9.0	4.3	口縁部内外－横ナデ。体部内外－ナデ、内－ヘラミガキ。張りつけ高台。	〃	〃	淡茶褐色	15	黒色土器A類
170	230-05	〃 〃	〃	〃	15.4	7.9	3.8	口縁部内外－横ナデ。体部外－ヘラケズリ。底部外－ナデ。内－ヘラミガキ。張りつけ高台	〃	〃	淡茶褐色	25	黒色土器A類
171	230-07	〃 〃	〃	〃	15.8	8.2	4.7	〃	〃	〃	淡茶褐色	10	黒色土器A類
172	231-01	〃 〃	〃	〃	－	9.7	－	体部、底部内外－ナデ。内－ヘラミガキ。張りつけ高台	〃	〃	淡茶褐色	25	黒色土器A類。口縁部内面に暗文残る
173	230-04	〃 皿	〃	〃	14.0	6.6	2.8	口縁部内外－横ナデ。体部～底部外－ナデ。内－ヘラミガキ。張りつけ高台。	〃	〃	淡茶褐色	完形	黒色土器A類。口縁部内面に暗文残る
174	230-03	〃 〃	〃	〃	14.6	7.4	2.7	〃	〃	〃	淡茶褐色	50	黒色土器A類。口縁部内面に暗文残る
175	230-02	〃 鉢	〃	〃	11.4		6.4	口縁部内外－横ナデ。体部～底部外－ヘラケズリの後ヘラミガキ、内－ヘラミガキ。	〃	〃	淡茶褐色	30	黒色土器A類

第27表　遺物観察表・柘植川北部（5）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
176	230-01	黒色土器 鉢	SK1035	D5-9 P21 SK1	12.2		7.1	口縁部内外－横ナデ。体部～底部外－ヘラケズリの後ヘラミガキ、内－ヘラミガキ。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	淡茶褐色	20	黒色土器A類
177	248-01	〃	〃	〃	17.2		－	口縁部内外－横ナデ。体部外－ヘラケズリの後ヘラミガキ、内－ヘラミガキ。	〃	〃	にぶい橙色	5	黒色土器A類
178	231-02	〃	〃	〃	－	13.6	－	体部外－ヘラケズリの後ヘラミガキ、内－ヘラミガキ。底部内－ヘラケズリ、外－ナデ。	〃	〃	淡茶褐色	20	黒色土器A類
179		須恵器 甕	〃	〃	－	－	－	体部内外－タタキ、内面のタタキ－車輪文。	〃	〃	灰色。	－	
180	248-02	灰釉陶器 Ⅲ	〃	〃	－		－	口縁部内外、ロクロナデ。底部内－ロクロナデ、外－ロクロケズリ。3足張り付け。	〃	〃	灰色	15	3足段Ⅲ。内面に厚い釉
181	260-05	土師器 杯	SK1018	D5-9 K21 SK1	13.0		2.5	口縁部内外－横ナデ。底部外－ナデ。	〃	〃	浅黄橙色	17	
182	260-04	〃 〃	〃	〃	13.6		2.8	〃	〃	〃	浅黄橙色	13	
183	260-03	〃 Ⅲ	〃	〃	15.0		－	〃	〃	〃	浅黄橙色	20	
184	260-01	〃 〃	〃	〃	17.8		1.8	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－ヘラケズリ。	〃	〃	浅黄橙色	17	
185	260-02	〃 甕	〃	〃	17.2		－	口縁部内外－横ナデ。体部内－横方向のハケメ、外－縦方向のハケメの後下半ヘラケズリ。	〃	〃	浅橙色	13	
186	261-05	土師器 杯	SK1023	D5-9 M21 SK1	11.5		2.3	口縁部内外－横ナデ。底部内外－ナデ。	〃	〃	黄橙色	13	
187	261-04	〃 椀	〃	〃 N21 〃	12.8		3.5	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－ヘラケズリ。	〃	〃	橙色	10	
188	260-08	〃 杯	〃	〃 M21 〃	12.8		2.3	口縁部内外－横ナデ。底部外－ナデ。	〃	〃	浅黄橙色	13	
189	260-10	〃 〃	〃	〃 L21 SK2	13.5		2.3	〃	〃	〃	浅黄橙色	25	
190	260-07	〃 〃	〃	〃 M21 SK1	15.0		2.6	〃	〃	〃	浅黄橙色	13	
191	260-11	〃 蓋	〃	〃 〃 〃	－		－	内外－ナデ。	〃	〃	浅黄橙色	－	
192	260-09	〃 Ⅲ	〃	〃 L21 SK2	14.8		1.5	口縁部内外－横ナデ。底部外－ナデ。	〃	〃	にぶい橙色	13	
193	260-06	〃 〃	〃	〃 M21 SK1	17.8		1.6	口縁部内外－横ナデ。底部内外－ナデ。	〃	〃	浅黄橙色	25	
194	261-03	〃 甕	〃	〃	14.2		－	口縁部内外－横ナデ。体部内－ナデ。	〃	〃	浅黄橙色	13	
195	261-06	黒色土器 椀	〃	〃	18.8	－	－	口縁部内－横ナデの後ヘラミガキ、外－ヘラケズリの後ヘラミガキ。	〃	〃	浅黄橙色	17	黒色土器A類
196	261-02	灰釉陶器 Ⅲ	〃	〃	－	6.4	－	底部内面－ロクロナデ、外－ロクロケズリ。張り付け高台。	〃	〃	灰白色	底50	灰釉－刷毛塗り
197	261-01	須恵器 甕	〃	〃	45.0		－	口縁部内外－ロクロナデ。体部内－タタキの後ロクロナデ、外－タタキの後カキメ。	〃	〃	灰白色	17	
198	254-06	土師器 杯	SK1033	D5-9 P21 Pit2	12.1		2.3	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	淡橙色	20	
199	254-05	〃 Ⅲ	〃	〃	13.8		2.1	〃	〃	〃	淡橙色	20	
200	254-02	〃 椀	〃	〃	13.2		3.5	口縁部内外－ロクロナデ。底部内－ロクロナデ、外－ロクロケズリの後ナデ。	〃	〃	灰白色	70	ロクロ成形土師器
201	254-01	〃 〃	〃	〃	15.0	8.8	4.3	口縁部内外－ロクロナデ。底面内－ロクロナデ、外－ヘラ切りの後ナデ。張り付け高台。	〃	〃	橙色	40	ロクロ成形土師器
202	254-03	土師器 鉢	〃	〃	22.4		－	内外－横ナデ（ロクロナデか）。	〃	〃	橙色	20	ロクロ成形土師器か
203	254-04	黒色土器 椀	〃	〃	18.0	8.6	5.8	口縁部内外－横ナデ、内－ヘラミガキ。底部～体部外－ナデ。	〃	〃	にぶい橙色	口縁25 底部90	黒色土器A類
204	252-09	土師器 杯	SK1012	D5-5 E21 SK1	11.0		2.1	口縁部内外－横ナデ。底部外－ナデ。	〃	〃	にぶい橙色	13	
205	252-07	〃 椀	〃	〃 G21 〃	11.7		－	〃	〃	〃	浅黄橙色	20	
206	252-10	〃 〃	〃	〃 F21 〃	11.9		3.0	〃	〃	〃	浅黄橙色	13	
207	252-08	〃 〃	〃	〃 〃 〃	12.5		2.9	〃	〃	〃	にぶい黄褐色	10	
208	252-11	〃 杯	〃	〃 E21 〃	13.0		3.4	〃	〃	〃	浅黄橙色	17	
209	237-01	〃 〃	〃	〃 G21 〃	12.4		3.0	〃	〃	〃	浅黄橙色	80	
210	239-02	〃 〃	〃	〃 P21 〃	12.8		2.6	〃	〃	〃	浅黄橙色	30	

第28表　遺物観察表・柘植川北部（6）

No.	登録No.	器種	遺構		法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
211	239-03	土師器 杯	SK1012	D5-5 E21 SK1	13.0		2.5	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	浅黄橙色	40	
212	237-05	〃 〃	〃	〃 〃 〃	13.2		2.4	〃	〃	〃	橙色	80	
213	239-01	〃 〃	〃	〃 〃 SK2	13.0		3.0	〃	〃	〃	浅黄橙色	60	
214	252-12	〃 Ⅲ	〃	〃 〃 SK1	13.2		1.5	〃	〃	〃	にぶい橙色	17	
215	252-05	〃 〃	〃	〃 G22 〃	15.0		1.6	〃	〃	〃	浅黄橙色	25	
216	252-04	〃 〃	〃	〃 〃 〃	15.4		1.8	〃	〃	〃	浅黄橙色	50	
217	252-03	〃 〃	〃	〃 E21 〃	16.2		1.3	〃	〃	〃	淡橙色	25	
218	237-04	〃 椀	〃	〃 〃 〃	16.4	8.0	5.1	口縁部内外・底部内－横ナデ。底部外－ヘラケズリ。張り付け高台。	〃	〃	橙色	30	
219	265-05	〃 甕	〃	〃 G21 SK2	14.2		－	口縁部内外－横ナデ。体部内－ナデ、外－縦方向のハケメ。	〃	〃	にぶい橙色	13	
220	265-06	〃 甕	〃	〃 〃 SK1	22.0		－	口縁部内外－横ナデ。体部内－横方向のハケメ、外－縦方向のハケ。	〃	〃	浅黄橙色	10	
221	265-07	〃 盤	〃	〃 F21 〃	－	21.2	－	脚部内－横方向のハケメ。外－横ナデ。方形透かし間に刺突残る。	〃	〃	にぶい橙色	13	壷の脚か
222	265-02	黒色土器 杯	〃	〃 〃 〃	12.6		－	口縁部内外－横ナデ。体部外－ヘラケズリ。内面ヘラミガキ	〃	〃	にぶい黄褐色	13	黒色土器A類
223	237-07	〃 Ⅲ	〃	〃 E21 〃	13.0	5.8	2.5	口縁部内外－横ナデ。体部～底部外－ナデ、内面ヘラミガキ。張り付け高台。	〃	〃	灰白色	30	黒色土器A類
224	237-08	〃 椀	〃	〃 〃 〃	13.8	5.4	3.8	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	25	黒色土器A類
225	239-08	〃 〃	〃	〃 F21 〃	12.2	6.4	5.1	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	口20 底50	黒色土器A類
226	265-01	〃 〃	〃	〃 〃 〃	－	7.5	－	底部内－板ナデ。外－ナデ。張り付け高台。	〃	〃	にぶい黄橙色	底75	黒色土器A類 内面ミガキなし
227	265-03	〃 〃	〃	〃 G21 〃	－	6.4	－	〃	〃	〃	にぶい橙色	底100	黒色土器A類。ミガキなし
228	265-04	〃 鉢	〃	〃 〃 〃	－	14.8	－	底部内－ナデの後ヘラミガキ、外－横ナデ。	〃	〃	—	10	黒色土器B類
229	239-04	灰釉陶器 Ⅲ	〃	〃 E21 〃	14.6		－	口縁部内外－ロクロナデ。底部外－ロクロケズリ。灰釉ツケ掛け。	〃	〃	灰白色	30	
230	239-05	〃 〃	〃	〃 F21 〃	15.6	7.8	3.6	口縁部内外－ロクロナデ。灰釉ハケ塗り。張り付け高台。	〃	〃	灰白色	20	
231	239-06	〃 耳Ⅲ	〃	〃 〃 〃	10.7	4.7	2.0	口縁部内外－ロクロナデ。底部外－糸切り。	〃	〃	灰白色	50	
232	267-12	土師器 杯	SD1081	D5-10 S16 SD1	12.9		－	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	淡黄色	10	
233	267-05	〃 〃	〃	〃	12.2		2.7	〃	〃	〃	にぶい橙色	40	
234	267-01	〃 〃	〃	〃	12.8		3.0	〃	〃	〃	浅黄橙色	70	
235	267-04	〃 〃	〃	〃	13.8		2.7	〃	〃	〃	灰白色	13	
236	267-06	〃 〃	〃	〃	14.0		3.2	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	8	
237	267-03	〃 〃	〃	〃	15.8		3.5	〃	〃	〃	浅黄橙色	10	
238	267-02	〃 〃	〃	〃	13.3		3.3	口縁部内外－ロクロナデ。底面外－ヘラ切り。	〃	〃	浅黄橙色	40	ロクロ成形土師器
239	267-11	〃 Ⅲ	〃	〃	11.5		(2)	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	10	
240	267-08	〃 〃	〃	〃	12.2		2.2	〃	〃	〃	にぶい橙色	20	
241	267-09	〃 〃	〃	〃	12.8		1.7	〃	〃	〃	にぶい橙色	5	
242	267-10	〃 〃	〃	〃	－	11.6	－	底部内外－ナデ。張り付け高台。	〃	〃	浅黄橙色	底60	
243	257-13	黒色土器 椀	〃	〃	－	8.5	－	底部内－板ナデ。外－ナデ。張り付け高台。	〃	〃	にぶい褐色	底25	黒色土器A類
244	267-14	〃 〃	〃	〃	－	9.0	－	底部外－ナデ。張り付け高台。	〃	〃	橙色	底25	黒色土器A類
245	267-07	〃 〃	〃	〃	13.0	8.0	4.0	口縁部内外－横ナデ。体部外－板ナデ、内－ヘラミガキ。	〃	〃	浅黄橙色	13	黒色土器A類

第29表　遺物観察表・柘植川北部（7）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
246	267-15	黒色土器 椀	SD1081	D5-10 S16 SD1	13.8			口縁部内外－横ナデ。体部外－ヘラケズリ、内－ヘラミガキ、暗文一部残る。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	—	8	黒色土器B類。
247	243-16	土師器 杯	SK1077	D5-9 O16 SK3	10.7		1.9	口縁部内外－横ナデ。底部内－ハケメ、外－指オサエ。	〃	〃	橙色	30	
248	240-07	〃 〃	〃	〃	10.8		2.2	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	40	
249	240-09	〃 〃	〃	〃	11.1		2.2	〃	〃	〃	浅黄橙色	25	
250	240-06	〃 〃	〃	〃	11.4		2.3	〃	〃	〃	灰白色	30	
251	244-01	〃 椀	〃	〃	12.1		2.5	〃	〃	〃	にぶい橙色	60	
252	242-06	〃 〃	〃	〃	11.8		2.9	〃	〃	〃	浅黄色	完形	
253	240-08	〃 〃	〃	〃	12.2		3.3	〃	〃	〃	淡橙色	25	
254	240-17	〃 〃	〃	〃	13.8		4.0	〃	〃	〃	にぶい橙色	20	
255	240-05	〃 皿	〃	〃	13.8		1.9	〃	〃	〃	灰白色	15	
256	241-08	黒色土器 椀	〃	〃	14.4	8.0	4.6	口縁部内外－横ナデ。体部外－ナデ。張り付け高台。内面のミガキ不明。	良（1～3mmの砂粒含む）	〃	橙色	70	黒色土器A類
257	240-04	〃 〃	〃	〃	15.4	7.8	4.5	口縁部内外－横ナデ。体部外－ナデ。張り付け高台。内－ヘラミガキ	良(1～2mmの砂粒含む)	〃	にぶい黄褐色	20	〃
258	242-02	〃 〃	〃	〃	14.8	7.6	4.1	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	40	〃
259	240-03	〃 〃	〃	〃	16.1	9.0	5.8	口縁部内外－横ナデ。体部外－ケズリの後ヘラミガキ。張り付け高台。内－ヘラミガキ。	〃	〃	浅黄橙色	口10 底80	〃
260	242-08	〃 〃	〃	〃	23.8	13.8	7.5	口縁部内外－横ナデ。体部外－ナデ、内－板ナデ、張り付け高台。内面ヘラミガキなし。	〃	〃	灰白色	口10 底25	〃
261	255-12	土師器 皿	SD1082	D5-10 T16 SD1	9.7		1.5	口縁部内外－横ナデ。体部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい橙色	15	
262	255-10	〃 〃	〃	〃	10.2		1.8	〃	〃	〃	淡橙色	15	
263	255-11	〃 〃	〃	〃	10.8		1.8	〃	〃	〃	にぶい橙色	15	
264	255-16	〃 椀	〃	〃	12.2		3.2	〃	〃	〃	浅黄橙色	25	
265	255-09	〃 〃	〃	〃	11.8		3.0	〃	〃	〃	にぶい橙色	25	
266	255-14	黒色土器 杯	〃	〃	14.0	0	3.9	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。内面のミガキ不明。	〃	〃	淡橙色	20	黒色土器A類
267	255-15	〃 椀	〃	〃	—	8.0	—	底部内－ナデ、外－指オサエ。内－ヘラミガキ。張り付け高台。	〃	〃	橙色	30	〃 暗文一部残る
268	255-13	〃 〃	〃	〃	15.2	8.0	4.8	口縁部内外－横ナデ。体部外－ヘラケズリ。底部内外－ナデ。内面ヘラミガキ。張り付け高台	〃	〃	にぶい黄橙色	20	〃
269	253-03	土師器 皿	SK1017	D5-9 122 SK1	11.0		1.7	口縁部内外－横ナデ。体部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	橙色	ほぼ完形	
270	253-05	〃 杯	〃	〃	10.3		1.8	〃	〃	〃	橙色	50	
271	253-07	〃 〃	〃	〃	10.8		2.0	〃	〃	〃	にぶい橙色	25	
272	253-04	〃 〃	〃	〃	11.2		2.2	〃	〃	〃	にぶい橙色	75	
273	253-06	〃 〃	〃	〃	11.2		2.3	〃	〃	〃	にぶい橙色	50	
274	253-01	〃 〃	〃	〃	11.5		1.9	〃	〃	〃	橙色	ほぼ完形	
275	253-02	〃 〃	〃	〃	11.5		1.9	〃	〃	〃	橙色	80	
276	253-11	〃 〃	〃	〃	11.9		1.8	〃	〃	〃	橙色	20	
277	253-09	〃 椀	〃	〃	12.0		2.3	〃	〃	〃	にぶい橙色	15	
278	253-13	〃 杯	〃	〃	12.4		2.3	〃	〃	〃	淡橙色	25	
279	253-14	〃 〃	〃	〃	13.4		2.5	〃	〃	〃	浅黄橙色	25	
280	253-12	〃 〃	〃	〃	14.2		2.8	〃	〃	〃	浅黄橙色	30	

第30表　遺物観察表・柘植川北部（８）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
281	234-02	土師器 皿	SK1017	D5-9 J21 SK1	15.6		1.8	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	淡橙色	50	
282	253-17	黒色土器 椀	〃	〃	14.0	7.0	4.3	口縁部内外－横ナデ。体部内－ナデ、外－指オサエ。内面のミガキ不明。張り付け高台。	〃	〃	にぶい橙色	25	黒色土器A類
283	253-19	〃 〃	〃	〃	14.0	8.4	4.2	口縁部内外－横ナデ。体部内－ナデ、外－指オサエ。内面のミガキなし。張り付け高台。	〃	〃	にぶい橙色	40	〃
284	253-18	〃 皿	〃	〃	15.2	－	－	口縁部内外－横ナデ。体部外－ヘラケズリ、内－ヘラミガキ	〃	〃	にぶい橙色	30	〃
285	253-20	〃 甕	〃	〃	13.4		－	口縁部内外－横ナデ。体部内－板ナデ、外－ナデ。	〃	〃	にぶい橙色	30	〃
286	234-01	〃 鉢	〃	〃	19.4		13.6	口縁部内外－横ナデ。内－ヘラミガキ。体部外－ヘラケズリ、内－板ナデの後ヘラミガキ。	〃	〃	にぶい橙色	70	〃
287	264-01	土師器 椀	SD1050	D5-11 Y22 SD1	10.6		2.5	口縁部内外－横ナデ。底部外－ナデ。	〃	〃	浅黄橙色	13	
288	264-02	〃 〃	〃	〃	10.6		－	〃	〃	〃	黄橙色	11	
289	264-03	〃 皿	〃	〃	8.6		－	口縁部内外－横ナデ。底部外－指オサエ。	〃	〃	橙色	13	
290	264-05	黒色土器 椀	〃	〃	13.8	－	－	口縁部内外－横ナデ。体部外－ナデ。内面ヘラミガキ。	〃	〃	橙色	13	黒色土器A類
291	264-04	灰釉陶器 瓶	〃	〃	－	11.6	－	体部内外－ロクロナデ。底部外－糸切り。	〃	〃	青灰色	底8	
292	243-02	土師器 杯	整地土	D5-9 O16 SK1	10.0		2.6	口縁部内外－横ナデ。底部内－板ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい橙色	完形	
293	243-03	〃 〃	〃	〃	10.2		2.3	〃	〃	〃	淡橙色	完形	
294	243-06	〃 〃	〃	〃	10.6		2.5	〃	〃	〃	にぶい橙色	完形	
295	243-11	〃 〃	〃	〃	10.6		2.5	〃	〃	〃	にぶい橙色	80	
296	243-13	〃 〃	〃	〃	10.6		2.1	〃	〃	〃	にぶい橙色	60	
297	243-15	〃 〃	〃	〃	10.7		2.3	〃	〃	〃	橙色	70	
298	243-05	〃 〃	〃	〃	10.8		1.8	〃	〃	〃	淡橙色	完形	
299	244-03	〃 〃	〃	〃	10.9		2.1	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい橙色	90	
300	243-04	〃 〃	〃	〃	11.2		2.4	口縁部内外－横ナデ。底部内－板ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	淡橙色	完形	
301	243-10	〃 〃	〃	〃	11.2		2.5	〃	粗(1～2mmの砂粒多く含む)	〃	にぶい橙色	90	
302	244-02	〃 〃	〃	〃	12.8	6.0	3.3	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。張り付け高台。	良(1～2mmの砂粒含む)	〃	浅黄橙色	25	
303	243-14	〃 〃	〃	〃	9.7		2.1	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい橙色	30	
304	243-09	〃 〃	〃	〃	9.8		2.4	口縁部内外－横ナデ。底部内－板ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	灰白色	完形	
305	243-12	〃 〃	〃	〃	10.5		2.5	〃	〃	〃	淡橙色	50	
306	243-07	〃 〃	〃	〃	9.3		1.9	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	完形	
307	243-08	〃 〃	〃	〃	10.4		2.3	〃	〃	〃	にぶい橙色	完形	
308	244-06	〃 皿	〃	〃	8.4		1.1	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	30	
309	243-01	〃 〃	〃	〃	8.4		1.3	口縁部内外－ロクロナデ。底部内－ナデ、外－ロクロケズリ。	〃	〃	にぶい橙色	完形	ロクロ成形土師器
310	244-07	〃 〃	〃	〃	9.0		1.2	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい黄橙色	30	
311	244-04	〃 〃	〃	〃	10.5		1.2	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	25	
312	244-05	〃 〃	〃	〃	10.8		1.6	〃	〃	〃	にぶい橙色	25	
313	244-08	〃 〃	〃	〃	11.6	－	－	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。張り付け高台	〃	〃	橙色	40	
314	241-01	黒色土器 椀	〃	〃	13.4	8.0	4.2	口縁部内外－横ナデ。底部内外－ナデ。張り付け高台。	〃	〃	浅黄橙色	60	黒色土器A類 ミガキなし
315	241-02	〃 〃	〃	〃	13.8	5.8	4.7	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	20	〃 ミガキ不明

第31表　遺物観察表・柘植川北部（９）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
316	242-04	黒色土器 椀	整地土	D5-9 N16 SK1	14.4	7.8	4.7	口縁部内外－横ナデ。底部内外－ナデ。張り付け高台。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	にぶい橙色	40	黒色土器A類 内面ヘラミガキ不明
317	242-01	〃 〃	〃	〃 O16 SK1	14.4	7.6	5.1	〃	〃	〃	浅橙色	60	〃 内面ヘラミガキ不明
318	240-01	〃 〃	〃	〃	16.4	8.6	6.3	〃	〃	〃	灰白色	口縁10 底縁90	〃 内面ヘラミガキ不明
319	241-03	〃 〃	〃	〃	13.2	7.0	3.6	〃	〃	〃	にぶい橙色	30	〃 内面ヘラミガキ
320	241-06	〃 〃	〃	〃	14.7	7.8	4.0	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	30	〃 内面粗いヘラミガキ
321	241-04	〃 〃	〃	〃	13.6	6.3	5.1	〃	〃	〃	にぶい橙色	30	〃 内面粗いヘラミガキ
322	241-05	〃 〃	〃	〃	14.6	7.0	4.9	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	60	〃 口縁内面楕円状に荒くミガキ
323	240-02	〃 〃	〃	〃	15.3	－	－	口縁部内外－横ナデ。底部内外－ナデ。張り付け高台。	〃	〃	浅黄色	40	〃 内面粗いヘラミガキ
324	241-07	〃 〃	〃	〃	16.8	－	－	口縁部内外－横ナデ。底部内外－ナデ。張り付け高台。	〃	〃	淡黄色	30	〃 内面粗いヘラミガキ
325	244-09	〃 甕	〃	〃	13.2		－	口縁部内外－横ナデ。体部内外－ナデ。	〃	〃	にぶい橙色	15	〃
326	236-15	土師器 杯	SK1054	D5-6 F16 SK1	7.8		2.3	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	灰白色	完形	
327	236-02	〃 〃	〃	〃 E17 〃	8.6		1.9	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	40	
328	235-08	〃 〃	〃	〃 〃 〃	9.3		2.0	口縁部内外・底部内－横ナデ、底部外－指オサエ。	〃	〃	にぶい黄橙色	75	
329	236-01	〃 〃	〃	〃 F16 〃	9.4		1.6	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい橙色	40	
330	236-10	〃 〃	〃	〃 F17 〃	10.6		2.3	口縁部内外・底部内－横ナデ。底部外－指オサエ。	〃	〃	橙色	完形	
331	236-13	〃 〃	〃	〃 E16 〃	10.2		2.2	口縁部内外－横ナデ。底部内－板ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい橙色	70	
332	236-11	〃 〃	〃	〃 E17 〃	10.4		2.2	〃	〃	〃	にぶい橙色	90	
333	236-12	〃 〃	〃	〃 E16 〃	10.4		2.2	〃	〃	〃	橙色	80	
334	235-07	〃 〃	〃	〃 〃 〃	10.8		2.2	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	60	
335	235-05	〃 〃	〃	〃 E17 〃	11.2		2.2	口縁部内外－横ナデ。底部内－板ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	浅黄褐色	70	
336	236-09	〃 皿	〃	〃 E16 〃	7.8		1.2	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい黄橙色	40	
337	236-03	〃 〃	〃	〃 F16 〃	10.2		1.5	〃	〃	〃	橙色	60	
338	236-06	〃 〃	〃	〃 F17 〃	11.2		1.6	口縁部内外－横ナデ。底部内－板ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	橙色	50	
339	236-05	〃 杯	〃	〃 F16/17 〃	11.4		2.0	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	50	
340	236-08	〃 〃	〃	〃 E16 〃	11.4		2.1	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	橙色	40	
341	259-08	〃 皿	〃	〃 E17 〃	7.8		1.5	〃	〃	〃	浅黄橙色	16	
342	259-07	〃 〃	〃	〃 F17 〃	8.6		0.9	〃	〃	〃	にぶい橙色	20	
343	259-09	〃 〃	〃	〃 F16 〃	9.4		1.2	〃	〃	〃	浅黄橙色	16	
344	259-06	〃 〃	〃	〃 〃 〃	10.2		1.2	〃	〃	〃	にぶい橙色	13	
345	236-14	〃 〃	〃	〃 〃 〃	8.6	5.2	2.3	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。張り付け高台。	〃	〃	にぶい橙色	40	
346	235-04	〃 杯	〃	〃 E17 〃	10.8		2.4	口縁部内外－ロクロナデ。底部内－ナデ、外－ヘラ切り。	〃	〃	淡橙色	60	ロクロ成形土師器 口縁部に油煙2ケ所
347	259-10	〃 皿	〃	〃 F16 〃	－	5.2	－	口縁部内外－ロクロナデ。底部内－ナデ、外－ヘラケズリ	〃	〃	浅黄色	底50	ロクロ成形土師器
348	259-02	〃 杯	〃	〃	14.0		－	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	灰白色	25	
349	259-05	〃 〃	〃	〃	15.0		3.4	〃	〃	〃	浅黄橙色	10	
350	259-04	〃 〃	〃	〃	15.2		－	〃	〃	〃	浅黄橙色	10	

第32表　遺物観察表・柘植川北部（10）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
351	259-01	土師器 鉢	SK1054	D5-6 F16 SK1	24.2		—	口縁部内外－横ナデ。体部内－板ナデ、外－オサエ。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	浅黄橙色	13	
352	259-11	〃 〃	〃	〃 F17	24.8		—	〃	〃	〃	橙色	5	
353	259-3	瓦器 椀	〃	〃 F16	—	7.5	—	体部～底部内－ナデ、外－オサエ。 張り付け高台。	〃	〃	—	13	ミガキ不明
354	235-06	黒色土器 椀	〃	〃 E17	13.4	7.6	4.8	口縁部内外－横ナデ。体部～底部内－板ナデ。外－ナデ。張り付け高台。内面ミガキなし。	〃	〃	にぶい橙色	40	黒色土器A類
355	235-01	〃 〃	〃	〃 〃	14.8	7.3	5.2	口縁部内外－横ナデ。体部～底部内－ナデ。張り付け高台。内－ヘラミガキ。	〃	〃	にぶい橙色	50	〃
356	236-04	〃 〃	〃	〃 〃	15.9	6.4	4.3	〃	〃	〃	浅黄橙色	20	黒色土器A類か。内面の黒色化はなし
357	235-02	〃 〃	〃	〃 E16	17.8	—	—	口縁部内外－横ナデ。体部外－ヘラケズリ。底部外－ナデ。張り付け高台。内－ヘラミガキ。	〃	〃	にぶい橙色	15	黒色土器A類 口縁内面楕円状に磨く
358	235-03	〃 〃	〃	〃 〃	15.8	7.3	6.3	口縁部内外－横ナデ。体部～底部内、ナデ。外－ナデ。張り付け高台。内面ミガキなし	〃	〃	灰白色	30	〃
359	255-06	土師器 Ⅲ	SK1064	D5-8 J16 SK1	8.8		1.0	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい黄橙色	15	
360	255-08	〃 〃	〃	〃	9.5		—	〃	〃	〃	浅黄橙色	10	
361	255-05	〃 〃	〃	〃	9.8		1.1	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	15	
362	255-04	〃 〃	〃	〃	10.9		1.2	〃	〃	〃	褐白色	20	
363	255-02	〃 〃	〃	〃	9.8	5.0	1.7	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。張り付け高台	〃	〃	にぶい黄橙色	15	
364	255-03	〃 〃		〃	9.8	5.2	2.1	口縁部内外－ロクロナデ。底部外－ヘラケズリ。	〃	〃	淡黄色	15	ロクロ成形土師器
365	255-01	〃 杯	〃	〃	13.2		2.6	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	60	
366	255-07	〃 Ⅲ	〃	〃	13.8	—	—	〃	〃	〃	浅黄橙色	8	
367	220-04	黒色土器 椀	〃	〃	—	—	—	底部内－ナデ、外－ナデ。張り付け高台剝離。	〃	〃	灰黄褐色	25	黒色土器A類。内面に刻線
368	266-03	土師器 Ⅲ	SD1069	D5-8 L17 SD1	9.4		1.5	口縁部内外－横ナデ。底部内－板ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい黄橙色	13	
369	266-11	〃 〃	〃	〃 K17 SD1	9.0		1.2	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい橙色	25	
370	266-07	〃 〃	〃	〃 〃 SD1	9.2		1.1	〃	〃	〃	〃	40	
371	266-12	〃 〃	〃	〃 〃 SD1	7.9		0.8	口縁部内外－ロクロナデ。底部外－ロクロケズリか。	〃	〃	浅黄橙色	13	ロクロ成形土師器
372	266-08	〃 〃	〃	〃 K18 SD1	8.4		1.5	口縁部内外－ロクロナデ。底部外－ヘラ切り。	〃	〃	黄橙色	70	ロクロ成形土師器
373	266-02	〃 〃	〃	〃 L17 SD1	9.4		1.5	口縁部内外－ロクロナデ。底部外－ロクロケズリ。	〃	〃	灰白色	13	ロクロ成形土師器
374	266-10	〃 〃	〃	〃 K17 SD1	—	4.2	—	口縁部内外－ロクロナデ。底部外－糸切り。	〃	〃	橙色	底100	ロクロ成形土師器
375	266-04	〃 杯	〃	〃 L17 SD1	15.2		—	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい橙色	10	
376	266-01	〃 〃	〃	〃 〃 SD1	15.6		—	〃	〃	〃	浅黄橙色	17	
377	266-09	〃 椀	〃	〃 K17 SD1	—	7.2	—	内外－ナデ。張りつけ高台。	〃	〃	灰白色	30	
378	266-06	黒色土器 〃	〃	〃 L17 SD1	12.2	—	—	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい褐色	13	黒色土器A類 内面ミガキなし
379	265-09	土師器 Ⅲ	SK1014	〃 G22 SK2	8.4		1.2	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	17	
380	239-09	〃 〃	〃	〃 G22 SK2	9.8		1.6	口縁部内外・底部内－ロクロナデ。底部外－ヘラ切り。	〃	〃	浅黄橙色	完形	ロクロ成形土師器
381	237-03	黒色土器 椀	〃	〃 G22 SK2/Pit5	15.2	7.0	5.2	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－オサエ。	〃	〃	にぶい黄橙色	80	黒色土器A類 内面ミガキなし
382	237-02	〃 〃	〃	〃 G22 SK2	15.4	7.2	6.8	〃	〃	〃	灰黄褐色	60	黒色土器A類 内面ミガキ不明
383	265-08	土師器 鍋	SK1013	〃 G21 SK3	16.6		—	内外－横ナデ。	〃	〃	浅黄橙色	13	
384	219-01	〃 椀	SB1070	D5-8 L17 Pit9	11.8		3.6	口縁部内外－横ナデ、外－ヘラミガキ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	淡橙色	完形	
385	219-03	〃 〃	〃	〃	11.9		3.1	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	完形	

第33表　遺物観察表・柘植川北部（11）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
386	219-06	土師器 椀	SB1070	D5-8 L17 Pit9	12.0		3.4	口縁部内外－横ナデ、外－ヘラミガキ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	淡橙色	完形	
387	219-05	〃 〃	〃	〃	12.2		3.5	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	淡橙色	完形	
388	219-04	〃 〃	〃	〃	12.2		3.5	〃	〃	〃	浅黄橙色	完形	
389	219-02	〃 〃	〃	〃	12.4		3.5	〃	〃	〃	淡橙色	完形	
390	220-01	〃 〃	〃	D5-8 M17 Pit4	11.1		3.7	口縁部内外－横ナデ、外－ヘラミガキ。底部内－ナデ・螺旋状暗文、外－指オサエ。	〃	〃	橙色	70	
391	220-02	〃 〃	〃	〃	14.0		3.2	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	完形	
392	220-03	〃 皿	〃	D5-8 M17 Pit5	13.6		1.5	〃	〃	〃	淡橙色	30	底部内面螺旋暗文残るが、朱が付着しているため不鮮明
393	223-01	〃 杯	SB1015	D5-5 E21 Pit4	14.0		2.7	〃	〃	〃	浅黄橙色	50	
394	223-02	〃 椀	〃	D5-5 D21 Pit2	10.4		－	口縁部内－横ナデ、外－ヘラケズリの後ヘラミガキ	〃	〃	淡黄色	15	
395	222-06	〃 杯	SB1084	D6-4 H8 Pit3	12.8		2.2	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	橙色	10	
396	222-03	〃 椀	〃	D6-4 H8 Pit8	12.4		3.1	〃	〃	〃	淡橙色	25	
397	225-05	須恵器 杯蓋	〃	D6-4 H8 Pit3	14.0		－	口縁部内外－ロクロナデ。天井部外－ロクロケズリ。	〃	〃	明青灰色	15	
398	222-02	土師器 椀	SB1085	D6-6 M8 Pit12	11.8		3.2	口縁部内外－横ナデ。底部外－ヘラケズリ。	〃	〃	浅黄橙色	25	
399	222-08	〃 〃	〃	D6-6 M9 Pit1	12.4		2.8	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい橙色	40	
400	222-07	〃 〃	〃	〃	13.0		3.2	〃	〃	〃	にぶい橙色	ほぼ完形	
401	222-09	黒色土器 椀	〃	D6-6 M8 Pit1	15.2	8.0	4.8	口縁部内外－横ナデ。体部外－ナデ、内－ヘラミガキ。張りつけ高台。	〃	〃	浅黄橙色	50	黒色土器A類
402	222-01	須恵器 杯	〃	D6-6 M8 Pit11	11.6		3.7	口縁部内外－ロクロナデ。底部内－ロクロナデ、外－ヘラ切り。	〃	〃	灰色	ほぼ完形	底部外面墨書残る
403	219-10	土師器 皿	SB1071	D5-8 L17 Pit6	8.2		1.6	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、指オサエ。	〃	〃	にぶい橙色	75	
404	219-09	〃 〃	〃	〃	8.4		1.4	〃	〃	〃	にぶい橙色	30	
405	219-11	〃 杯	〃	D5-8 L17 Pit3	10.7		2.1	口縁部内外－横ナデ。底部内－板ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい黄橙色	完形	口縁部に油煙1ケ所付着
406	219-07	〃 〃	〃	〃	9.8		2.2	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい橙色	25	
407	219-08	〃 椀	〃	D5-8 L17 Pit6	14.2	6.4	4.4	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。張り付け高台。	〃	〃	にぶい橙色	20	
408	221-04	〃 杯	P1074	D5-9 O16 Pit9	9.7		1.8	口縁部内外－横ナデ。底部内－板ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい黄橙色	完形	
409	221-05	〃 〃	〃	〃	10.1		1.9	〃	〃	〃	浅黄橙色	30	
410	221-03	〃 〃	〃	〃	10.0		2.0	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい黄橙色	完形	
411	221-01	黒色土器 椀	〃	〃	10.2	6.1	4.1	口縁部内外－横ナデ。体部～底部外－ナデ。張り付け高台。内－ヘラミガキ。	〃	〃	橙色	完形	黒色土器A類
412	221-02	〃 〃	〃	〃	10.0	5.2	3.7	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	40	〃
413	221-06	土師器 椀	P1078	D5-9 016 Pit2	13.6	6.6	3.7	口縁部内外－ロクロナデ。底部内－ナデ、外－ヘラ切りの後ロクロナデ。張り付け高台。	〃	〃	にぶい黄橙色	60	ロクロ成形土師器
414	221-07	〃 〃	〃	〃	14.7	6.9	4.7	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－ナデ。張り付け高台。	〃	〃	浅黄橙色	80	
415	224-01	〃 杯	P1026	D5-9 E-2 Pit6	11.0		2.1	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	完形	
416	224-04	黒色土器 椀	〃	〃	16.0	8.8	4.6	口縁部内外－横ナデ。体部内－板ナデ、外－ナデ。張り付け高台。内面ヘラミガキなし。	〃	〃	にぶい橙色	50	黒色土器A類
417	224-03	〃 〃	〃	〃	14.7	7.8	4.2	口縁部内外－横ナデ。体部～底部外－ナデ。張り付け高台。内・口縁外－ヘラミガキ。	〃	〃	浅黄橙色	完形	黒色土器A類
418	224-02	〃 甕	〃	〃	12.4		－	口縁部内外－横ナデ。体部内－板ナデ、外－ナデ。	〃	〃	褐色	30	黒色土器A類
419	223-09	土師器 皿	SB1090	D6-6 M8 Pit14	7.9		1.3	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい橙色	50	
420	223-12	〃 〃	〃	D6-6 N8 Pit1	8.0		1.8	〃	〃	〃	浅黄橙色	25	

第34表　遺物観察表・柘植川北部（12）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
421	221-12	土師器 皿	SB1090	D6-6 L8 Pit1	9.0		1.6	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	橙色	ほぼ完形	
422	221-11	〃 〃	〃	D6-6 M8 Pit7	10.0		1.5	口縁部内外－横ナデ。底部内－板ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	浅黄橙色	70	
423	223-05	〃 〃	〃	D6-6 L8 Pit1	10.6		1.8	〃	〃	〃	橙色	30	
424	223-04	〃 〃	〃	D6-5 K8 Pit3	10.4		1.8	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	淡橙色	25	
425	221-13	〃 〃	〃	D6-6 N9 Pit1	10.2	4.4	2.5	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。張り付け高台。	〃	〃	にぶい橙色	50	
426	221-10	〃 〃	〃	D6-5 K8 Pit3	9.0		1.1	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい黄橙色	30	
427	223-07	〃 〃	〃	D6-6 L8 Pit1	9.6		1.1	〃	〃	〃	浅黄橙色	30	
428	223-14	〃 〃	〃	D6-6 L8 Pit1	8.8		1.1	口縁部内外・底部内－ロクロナデ。底部外－ヘラ切り。	〃	〃	浅黄橙色	20	ロクロ成形土師器
429	221-09	〃 〃	〃	D6-5 K8 Pit3	9.1		1.0	〃	〃	〃	浅黄橙色	50	〃
430	223-08	〃 椀	〃	D6-6 N8 Pit1	－	7.6	－	底部内－ロクロナデ、外－ロクロケズリ。	〃	〃	にぶい黄橙色	底部50	〃
431	223-11	黒色土器 椀	〃	〃	－	4.5	－	底部内外－ナデ。張り付け高台。ミガキ不明。	〃	〃	黒色	底部完形	黒色土器B類
432	223-10	土師器 杯	〃	D6-6 L8 Pit1	13.8		2.4	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい黄橙色	10	
433	223-03	〃 〃	〃	D6-5 K8 Pit3	14.8		－	〃	〃	〃	浅黄橙色	15	
434	223-06	〃 〃	〃	D6-6 L8 Pit1	15.0		2.1	〃	〃	〃	浅黄橙色	10	
435	221-08	〃 〃	〃	D6-5 K8 Pit3	16.4		2.8	〃	〃	〃	にぶい黄橙色	25	
436	223-13	〃 〃	〃	D6-6 N8 Pit1	15.4	－	－	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。張り付け高台。	〃	〃	橙色	15	
437	201-07	須恵器 円面硯		D3-8 排土	－	19.8	－	内外－ロクロナデ。長方形透かし12ケ所。透かし幅不明。	〃	〃	灰色	20	脚部。陸部欠
438	201-02	〃 〃	SK1034	D5-9 N21 SK3	18.8	21.0	7.9	内外－ロクロナデ。陸部内－自然釉付着。長方形透かし14ケ所。	〃	〃	灰色	30	
					同一固体			D5-9 N21 (脚部) 包含層					
439	202-03	〃 〃		E3-8 1-2 包含層	－	－	－	内外－ロクロナデ。透かしは不明。	〃	〃	灰色		脚部欠。使用痕残る
440	202-01	〃 〃		D5-9 E-4 包含層	18.8	(23)	(9)	内外－ロクロナデ。脚部外に自然釉付着。長方形透かし16ケ所。	〃	〃	明青灰色		硯部。D6-5 J-8と接合
					同一固体			D6-5 J-8 (脚部) 包含層 / D6-6 N-8 (脚部) 包含層	D5-6 (脚部) 排土				
441	201-03	〃 〃		D3-8 R16 SK3	－	27.6	－	内外－ロクロナデ。透かし幅不明。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	青灰色		脚部
					同一固体			D3-8 N1 (脚部) 包含層 / D5-8 I-15 (脚部) 包含層	D6-5 J-7 (脚部) SK1 (SK1086)				
442	201-06	〃 〃		B4-7 包含層	－	－	－	内外－ロクロナデ。内面－自然釉付着。十字型透かし8ケ所。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	明青灰色		
443	201-05	〃 〃		D6-4 G8 包含層	－	17.4	－	内外－ロクロナデ。内面－自然釉付着。長方形透かし36ケ所。	〃	〃	明青灰色		
444	201-04	〃 〃		D5-8 J16 包含層	14.2	－	－	内外－ロクロナデ。内面－自然釉付着。透かしは不明	〃	〃	明青灰色		使用痕残る
445	203-05	〃 〃		D5-8 I16 包含層	－	15.7	－	内外－ロクロナデ。長方形透かし20ケ所。	〃	〃	明青灰色	5	
					同一固体			D5-8 J18 (脚部) 包含層 / D6-5 K-9 (脚部) Pit1					
446	202-02	〃 〃		D5-9 P16 包含層	21.9	－	－	内外－ロクロナデ。方形透かし22ケ所。	〃	〃	青灰色		
					同一固体			D6-5 J7 (硯部) SK1 (SK1086)					
447	201-01	〃 〃		D6-6 M8 Pit7	20.3	27.2	(10)	内外－ロクロナデ。長方形透かし20ケ所。	〃	〃	淡青灰色		使用痕残る
					同一固体			D5-5 E21 (脚部) SK1 (SK1012) / D5-6E-17 (脚部) SK1 (SK1054)	D5-9 G16 (脚部) 包含層		D5-6 E15 (脚部) 包含層		D5-6 E15 (脚部) Pit3
448	203-03	〃 〃		D6-5 J8 SD2	－	24.0	－	内外－ロクロナデ。透かし不明。	良(1～2mmの砂粒含む)	良	明青灰色	5	脚部
－	－	〃 〃		D5-5 G21 包含層	－	－	－		〃	〃			脚部小片

第35表　遺物観察表・柘植川北部（13）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
—	—	須恵器 円面硯		D6-6 M8 Pit12	—	—	—		良(1～2mmの砂粒含む)	良			脚部小片
—	—	〃 〃	SD2020	E5-2 1 SD1	—	—	—		〃	〃			〃
449	203-01	黒色土器 風字硯	SK1035	D5-9 P21 SK1				内外－ヘラミガキ。円柱状の脚を張り付け。内面縁に沈線1条。	〃	〃			黒色土器B類
450	204-01	〃 〃		D5-9 K21 包含層				内－ヘラミガキ。外－ヘラケズリの後ヘラミガキ。内面に三日月状の堤痕残る。円柱状の脚を張り付け。	〃	〃			黒色土器B類
451	245-04	〃 〃	SK1086	D6-5 J7 SK1				内－ヘラミガキ。底部外－ヘラケズリの後ヘラミガキ。	〃	〃			黒色土器B類
452	203-02	〃 〃	SK1023	D5-9 M21 SK1				外－ヘラミガキ。板状の面取りした脚を張り付け。内面縁に沈線1条。	〃	〃			黒色土器B類。右脚部
453	203-04	〃 〃	〃	〃				内外－ヘラミガキ。内面縁に沈線1条。脚部の剥離した痕跡の残る。	〃	〃			黒色土器B類。右脚部か
454	202-05	灰釉陶器 風字硯	SK1009	D3-8 R17 SK2				外－ナデ。縁部－ヘラケズリ。7角形の脚の剥離した痕跡の残る。	〃	〃	青灰色		
455	252-01	須恵器 猿面硯	SK1012	D5-5 E21 SK1				内－ナデ。外－タタキの後ナデ。焼成後面取りを行う。	〃	〃	灰色	40	
456	202-04	〃 〃		E2-5 包含層				〃	〃	〃	明青灰色	20	使用痕残る
457	204-02	〃 甕	SK1011	D3-8 R16 SD1	—	—	—	内－タタキ。硯部、使用のため磨滅。外－タタキの後カキメ。	〃	〃	淡灰色		転用硯 使用痕残る
458	205-08	石硯		D3-6 包含層	長 —	幅 5.8	高 1.7		〃	〃			使用痕残る
459	205-05	須恵器 杯蓋		D6-6 J8 包含層	13.0		—	内外－ロクロナデ。天井部外－ヘラケズリ。	〃	〃	灰色	15	転用硯。内面に朱の痕跡、使用のため磨滅
460	205-01	〃 〃		D6-6 M8 包含層	14.7		1.7	内外－ロクロナデ。	〃	〃	淡灰色	25	転用硯。内面使用のため磨滅
461	205-03	〃 〃		〃	14.6		—	内外－ロクロナデ。天井部外－ロクロケズリ。	〃	〃	淡灰色	50	転用硯。内面使用のため磨滅
462	205-02	〃 〃		〃	15.8		2.2	〃	〃	〃	淡灰色	50	転用硯。内面使用のため磨滅
463	007-05	緑釉陶器 椀		D3-8 M1 包含層	—	4.0	—	底部外－糸切り。底部内－ロクロナデ。	〃	硬質	灰白色（淡黄色）	50	京都産
464	218-01	〃 〃		〃 Q16 包含層	—	6.2	—	底部外－ロクロケズリ（輪高台）。	〃	硬質	灰色（オリーブ灰色）	30	京都産。底部外面以外に釉掛かる
465	217-03	〃 〃	SK1035	D5-9 P21 SK1	15.0	6.4	—	底部外－ロクロケズリ(蛇の目高台)。内・口縁部外－ロクロナデ。底部内－一定方向のヘラミガキ。	〃	軟質	浅黄橙色（浅黄色）	口20 底20	京都産 釉全面
466	017-02	〃 〃		D3-8 H11 包含層	—	6.0	—	底部外－ロクロケズリ(蛇の目高台)、内・口縁外面－ロクロナデ。	〃	軟質			京都産。 釉全面。
467	215-04	〃 〃	SK1012	D5-5 E21 SK1	11.4	5.0	3.6	体部～底部外－ロクロケズリ、内・口縁部外－ロクロナデ。口縁部内－横方向のヘラミガキ。底部内－一定方向のヘラミガキ。	〃	軟質	灰白色（浅黄色）	口20 底100	京都産。底部外面トチン痕4ケ所。釉全面 輪花一部残る
468	218-03	〃 〃		D5-9 D2 包含層	—	6.0	—	底部外－ロクロケズリ。内外－ロクロナデ。口縁部内外－横方向のヘラミガキ。底部内－一定方向のヘラミガキ	〃	硬質	明青灰色	底50	京都産 無釉
469	217-06	〃 〃	SK1009	D3-8 Q16 SK2	16.6	—	—	内外－ロクロナデ。内－横方向のヘラミガキ。	〃	軟質	灰白色（淡黄色）	25	京都産
470	217-07	〃 〃	SK1035	D5-9 P21 SK1	17.8	—	—	〃	〃	軟質	淡黄色（浅黄色）	10	京都産
471	216-03	〃 〃		D5-5 D22 包含層	20.6	—	—	〃	〃	硬質	青灰色（オリーブ灰色）	15	京都産
472	217-04	〃 〃	SK1012	D5-5 G21 SK1	—	8.8	—	底部外－ロクロケズリ。(輪高台)。内外－ロクロナデの後、口縁部内－横方向のヘラミガキ。底部内－一定方向のヘラミガキ	〃	軟質	灰白色（淡黄色）	35	京都産 釉全面
473	214-04	〃 〃		D5-9 P21 包含層	16.8	—	—	内外－ロクロナデ。	〃	軟質	灰白色（淡緑色）	25	京都産
474	214-03	〃 〃	SK1023	D5-9 M21 SK1	16.8	7.1	6.4	底部外－ロクロケズリ(輪高台)。内外－ロクロナデの後、口縁部内－横方向のヘラミガキ。底部内－一定方向のヘラミガキ	〃	硬質	青灰色（オリーブ灰色）	口10 底30	京都産 底部外面に薄い釉掛かる
475	217-05	〃 〃		D5-9 B2 SD3	13.6	6.2	4.3	底部外－ロクロケズリ(輪高台)。内・口縁部外－ロクロナデ。	〃	軟質	灰白色（浅黄色）	口5 底35	京都産 釉全面
476	216-01	〃 皿	SK1035	D5-9 P21 SK1	16.5	7.0	3.1	底部外－ロクロケズリ(輪高台)。内・口縁部外－ロクロナデの後横方向のヘラミガキ。底部内－一定方向のヘラミガキ。	〃	軟質	灰白色（淡黄色）	25	京都産 釉全面に掛かる
477	216-02	〃 〃	〃	〃	13.9	—	—	口縁部内外－ロクロナデ。口縁部下半－ロクロケズリ	〃	硬質	明青灰色（オリーブ灰色）	18	京都産 濃緑色の薄い釉内外に掛かる
478	214-05	〃 〃		D5-9 B/C4 包含層	15.3	6.4	3.6	底部外－ロクロケズリ(蛇の目)。内・口縁部外。－ロクロナデ。口縁部下半－ロクロケズリ。口縁部内外－横方向のヘラミガキ。底部内－一定方向のヘラミガキ。	〃	硬質	明青灰色（オリーブ灰色）	50	京都産 内面に重ね焼きの痕跡残る 濃緑色の薄い釉底部以外に掛かる

第36表　遺物観察表・柘植川北部（14）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
479	214-02	緑釉陶器 Ⅲ	SK1023	D5-9 M21 SK1	14.8	7.0	2.3	底部外－ロクロケズリ。口縁部内外－ロクロナデ、下半ロクロケズリのあとロクロナデ。口縁部内－横方向のヘラミガキ。底部内－一定方向のヘラミガキ。張り付け高台。	良(1～2mmの砂粒含む)	硬質	灰白色（浅黄色）	口50 底100	猿投産 底部外面N字形のヘラ記号
480	004-02	〃 〃		D3-8 M11 包含層	13.8	5.4	2.5	内外－ロクロナデ。張り付け高台。	〃	硬質	青灰色（濃緑色）	25	東濃窯 輪花一部残る
481	215-03	〃 〃		D5-9 東 排土	11.6	6.0	2.8	内・口縁部外－ロクロナデ。底部外－糸切り。張り付け高台。	〃	軟質	灰白色（緑色）	25	近江産 底部外面以外に釉
482	217-08	〃 椀	SK1057	D5-6 F15 SK1	－	6.4	－	底部外－糸切り、内・口縁部外－ロクロナデ。張り付け高台。底部内面に沈線1条。	〃	軟質	灰白色（緑色）	25	近江産 底部外面以外に釉
483	216-06	〃 〃	SD1038	D5-3 L31 南北溝	13.4	7.0	4.7	〃	〃	硬質	灰色（暗オリーブ色）	30	東濃産。内面にトチン痕残る 底部外面以外に釉
484	218-04	〃 〃		D5-9 O16 包含層	－	8.4	－	〃	〃	軟質	灰白色（緑色）	50	近江産。内面トチン痕残る 全面に釉
485	215-02	〃 〃		D5-9 西 排土	16.0	7.4	5.9	〃	〃	軟質	浅黄橙色（オリーブ色）	口7 底30	近江産。底部内面・高台内面にトチン痕残る。底部外面以外に釉
486	214-01	〃 唾壺	SK1030	D5-9 022 SK4	－	6.8	－	底部外－ロクロケズリ。張り付け高台。体部外－ロクロケズリの後ロクロナデ、内－ロクロナデ。体部外・口縁部内外－横方向のヘラミガキ。	〃		灰白色（淡黄色）	口縁以外完形	猿投産。 釉全面
487	218-02	〃 壺		D3-8 P17 包含層	－	7.8	－	内、体部外－ロクロナデ。底部外－ロクロケズリ。張り付け高台。	〃	軟質	灰白色（緑色）	25	釉内外に掛かる
488	215-05	〃 蓋	SK1017	D5-9 I22 SK1	(37)	－	－	内外－ロクロナデ。内－横方向のヘラミガキ。外面に凸帯1条	〃		灰白色（オリーブ黄色）	小片	釉内外に掛かる
489	216-05	〃 椀		D5-9 K25 包含層	－	6.8	－	内外－ロクロナデ。張り付け高台。	〃		灰白色（オリーブ黄色）	－	陰刻花文。猿投産 内外に釉
490	215-01	〃 〃		D5-9 J22 SD4	－	6.7	－	〃	〃		灰白色（浅黄色）	－	陰刻花文。猿投産 内外に釉
491	217-02	〃 〃		D5-9 B2 包含層	－	6.8	－	〃	〃		灰白色（オリーブ黄色）	－	陰刻花文。猿投産 内外に釉
492	214-06	〃 〃		D5-9 B1 包含層	－	4.8	－	外－ロクロケズリ（蛇の目）。内－ロクロナデの後一定方向のヘラミガキ。	〃	軟質	灰白色（灰オリーブ色）	－	陰刻花文。京都産 内外に釉
493	216-04	〃 壺		D5-8 K16 包含層	19.8	－	－	口縁部内外－ロクロナデ。	〃	軟質	浅黄色	小片	二彩（緑色と黄緑色） 内面の釉剝落
494	216-07	〃		D5-9 K23 包含層	－	－	－	内－ロクロナデ。3本の粘土を張り合わせ把手とする。	〃		淡黄色（黄色）		水注の把手 釉外面のみ
495	211-01	灰釉陶器 椀		D5-9 B/D4 包含層	18.6	－	－	内・口縁部外－ロクロナデ。口縁部外下半－ロクロケズリ。	〃	良	灰白色	15	陰刻花文。D3-5 R29 Pit1より同一固体
496	213-01	青磁 椀		D3-8 Q17 包含層	19.8		－	内外－ロクロナデ。	〃	〃	灰オリーブ	5	
497	213-02	〃 〃		D3-8 R17 包含層	－	5.4	－	外－ロクロケズリ。内－ロクロナデ。	〃	〃	灰オリーブ	40	底部外以外に釉
498	213-04	〃 〃	SD1048	D5-10 16 SD1	－	9.6	－	底部外－ロクロケズリ。	〃	〃	灰白色（オリーブ灰色）	40	底部外面以外に釉
499	205-10	土師器 土馬		D5-9 C5 包含層				全面ナデ。脚の剝離痕残る。	〃	〃	橙色	－	胴部
500	016-01	〃 〃		D5-11 X18 包含層				ナデ。	〃	〃	橙色	－	右脚部
501	205-09	灰釉陶器 陶馬		E3-2 北				全面ナデ。目は竹管による刺突で表現。自然釉掛かる。	〃	〃	灰白色	－	
502	021-01	土師器 Ⅲ		D5-8 G18 包含層	16.8		2.1	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	にぶい褐色	30	底部外面「姉」の墨書
503	021-02	〃 〃		D5-8 G18 Pit4	16.2		1.8	〃	〃	〃	橙色	25	底部外面「□寺」の墨書
504	210-01	須恵器 杯		E3-6 排土	12.2		2.1	口縁部内外－ロクロナデ。底部内－ナデ、外－ロクロケズリの後ナデ。	〃	〃	灰白色	30	底部外面に墨書
505	210-02	〃 〃		〃	－		－	〃	〃	〃	灰白色	25	底部外面「の」の墨書
506	212-03	〃 杯蓋		D6-6 N8 包含層	－		－	内外－ロクロナデ。	〃	〃	灰白色	小片	底部外面に墨書
507	028-22	土師器 杯		D5-9 K24 包含層	9.8		2.5	口縁部内外－横ナデ。底部内－ナデ、外－指オサエ。	〃	〃	黄橙色	完形	底部内面に漆付着
508	-45	製塩土器		D5-3 L27 Pit1	17.0		－	内外－指オサエ。	やや粗(1mmの砂粒多く含む)	〃	橙色	5	
509	212-04	土師器 鍋		D6-6 N8 SD9	－		－	内－ハケメ（6本/1.4cm）。獣足は全面ナデ、脚先端に5本刻みをいれ指を表現。	良(1～2mmの砂粒含む)	〃	灰白色	－	
510	239-07	黒色土器 耳 Ⅲ		D5-5 G22 包含層	11.4		2.2	口縁部内外・底部内外－ヘラミガキ。張り付け高台。	〃	〃	にぶい黄橙色	60	黒色土器A類
511	206-01	円筒埴輪		D3-6 B4 包含層	29.6			外上半－縦方向のハケメ・下半－横方向のハケメ。内－縦方向のハケメの後ナデ。	やや粗(1mmの砂粒多く含む)	〃	淡黄色	17	

第37表　遺物観察表・柘植川北部（15）

No.	登録No.	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考
512	211-04	土製品 紡錘車		D3-6 D3 包含層			2.4	上径3.5cm。下径4.7cm。 全面ナデ	良(1～2mmの砂粒含む)	良	にぶい橙色	完形	
513	209-01	〃 土符		D5-9 D3 包含層	5.5	3.8	0.9	全面ナデ。上部に2穴穿つ。	2～4mmの砂少し含む。	〃	浅橙色		表－かすかに墨痕残る 裏－ヘラによる花押と文字
514	207-02	丸瓦		E3-8 1-3 包含層	－			内面、布目痕。外－縄目のちナデ。内面縁部－ヘラケズリ。	粗	〃	青灰色	－	
515	208-02	平瓦		C1-11 包含層	－			内面、布目痕。外－格子状のタタキ。周縁部－ヘラケズリ。	粗	〃	灰白色	－	
516	208-01	〃		C1-4 包含層	－			〃	粗	〃	灰白色	－	
517	206-02	〃		D5-9 B4 SD1	－			内面－布目痕。外－縄目状のタタキ。周縁部－ヘラケズリ。	粗	〃	褐灰色	－	
518	206-03	〃		E 2-6 包含層				内面－布目痕の後ナデ。外－縄目の後ナデ。周縁部－ヘラケズリ。	粗	〃	灰白色	－	
519	207-04	金属製品 銭		C1-11 包含層	2.3								景徳元宝 (1004)
520	207-03	〃 〃		〃	2.3								嘉祐通宝 (1056)
521	207-05	〃 〃		〃	2.3								紹聖元宝 (1094)
522	207-06	〃 〃		〃	2.3								聖来元宝 (1101)
523	211-05	石製品 碁石		D5-9 B2 Pit6	1.3		0.7						
524	213-03	〃 砥石		D3-8 包含層									両面に使用痕跡残る
525	004-04	〃 〃		D3-8 J11 包含層									四面使用痕跡残る
526	004-05	〃 〃		D3-8 I11 包含層									二面使用痕跡残る
527	004-06	〃 〃		D3-8 L11 包含層									二面使用痕跡残る
528	111-01	〃 子持ち勾玉	SD4	C1-4 SD1	7.9	2.7	2.2	石材：滑石					
529	225-03	土製品 土錘	SK1035	D5-9 P21 SK1	2.5	1.2		3.3g	良(1～2mmの砂粒含む)	良	褐灰色	完形	
530	225-13	〃 〃		D5-3 S31 P3	2.2	1.3		3.6g	〃	〃	にぶい黄橙色	完形	
531	225-01	〃 〃	SK1023	D5-9 M21 P3	4.2	1.7		9.3g	〃	〃	浅黄橙色	完形	
532	226-06	〃 〃	SK	E2-6 SK1	4.9	1.2		6.6g	〃	〃	灰白色	完形	
533	225-07	〃 〃		D5-9 東 包含層	5.4	1.3		8.7g	〃	〃	にぶい橙色	完形	
534	226-01	〃 〃	SK1046	D5-3 S32 SK1	5.7	2.0		21.1g	〃	〃	灰白色	ほぼ完形	
535	225-12	〃 〃	SD1041	D5-3 S27 SD1	5.9	2.0		21.9g	〃	〃	灰白色	ほぼ完形	
536	226-03	〃 〃		D3-6 包含層	4.5	2.4		22.1g	〃	〃	灰白色	完形	
537	225-05	〃 〃		D5-9 B2 包含層	5.6	3.1		51.4g		〃	灰白色	完形	

第38表　遺物観察表・柘植川北部（16）

No.	登録No.	名　称	遺構	出土位置	法　量（cm）			木 取 り	樹　種	特　徴	備　考
					長辺	短辺	厚さ				
538	122-01	木製品　木簡	SD4	C1-4 SD1	(10.0)	2.4	0.4	板目		墨書	
539	122-02	〃　〃	〃		13.6	2.4	0.4	板目		墨書	
540	120-02	〃　〃	〃		(12.0)	2.5	0.4	板目			
541	121-01	〃　〃	〃		(9.0)	2.1	0.3	板目			
542	120-03	〃　〃	〃		(13.0)	1.7	0.4	板目			
543	120-01	〃　〃	〃		(10.0)	2.1	0.2	板目			
544	118-02	〃　〃	〃		16.2	3.0	0.3	板目			
545	118-03	〃　〃	〃		16.6	2.8	0.5	板目			
546	119-01	〃　〃	〃		(18.0)	3.8	0.5	板目			
547	119-02	〃　〃	〃		(11.0)	3.3	0.6	板目			
548	134-02	〃　下駄		E3-1 包含層	23.8	11.7	1.5～3.1	板目			
549	134-01	〃　曲物		〃	31.0		0.7	板目			
550	132-01	〃　建築部材	SD8	C1－11－8 SD 3	(202)	24.0	5.2	板目		手斧による削り。	柱間1.4m、その間６ケ所梁を結穴を穿つ（間隔は23cm～24cm）
551	129-02	木製品　建築部材	〃	〃	96.4	9.2	4.0	板目		手斧による削り。端を手斧により削り、尖らす。	板材を杭に転用
552	132-01	〃　〃	〃	〃	98.0	10.3	3.6	板目		手斧による削り。端を手斧により削り、尖らす。	板材を杭に転用
553	130-01	〃　〃	〃	〃	69.4	7.6	1.4	板目		手斧による削り。端を手斧により削り、尖らす。端部にほぞ穴残る。	板材を杭に転用
554	128-01	〃　〃	〃	〃	(102)	8.0	6.4	辺材		角材。抉りを互い違いに入れる。	
555	132-02	〃　〃	〃	〃	(106)	10.3	3.0～4.8	辺材		手斧による削り。ほぞ穴両端に残る。	
556	131-03	〃　〃	〃	〃	(126)	8.6	7.2	辺材		角材。手斧による削り。抉り中央に残る。	
557	128-02	〃　〃	〃	〃				辺材		556と同じものか	
558	133-01	衣笠伏木製品	〃	〃	径63～67	高さ37.8		芯材		残り悪く、調整不明。くびれ部径27.6cm。上径29.6cm	
559		木製品　桂根	SB2015	E3-8　2-2 P5	(53)	26.5		樹幹		10角形に荒く面取る。手斧による削り。ほぞ穴残る。	
560		〃　〃	SB1075	D6-5　H8 P2	(82)	42.0～47.2		樹幹		外面、底面。手斧による削り。	

第39表　遺物観察表・柘植川北部（17）木製品

Ⅳ. 結　　語

昭和63年度から平成３年度までの４次の調査で、伊賀国府の位置及び政庁について推定することが可能となった。国府が柘植川北部の国町地区を中心とする地域であることは、調査結果から間違いのないところである。伊賀国は国の等級では下国で、全国の下国の中で、発掘調査において初めて国庁の位置および政庁部が判明した。

政庁域

政庁域では幾度にもわたる掘立柱建物の重複が見られ、初現の時期である８世紀後半から終末期の11世紀前半まで、おおまかな変遷を追うことが可能となった。政庁域の範囲は、初現の時期が推定できるだけだが、その範囲は南北約44ｍ、東西41ｍと非常に狭いものである。後に塀や脇殿が南に拡張されてはいるが、最大範囲は約50ｍ四方程度に復原されるに過ぎない。これまで範囲が確認された国府が大国・上国などの例のみであることを考えると、国の等級により規模が異なるという１例である。

国庁範囲

北側は、丘陵が迫るという地形的な制約を受ける。岩坂地区は、検出した掘立柱建物や硯などから国庁の範囲に入る可能性は残る。

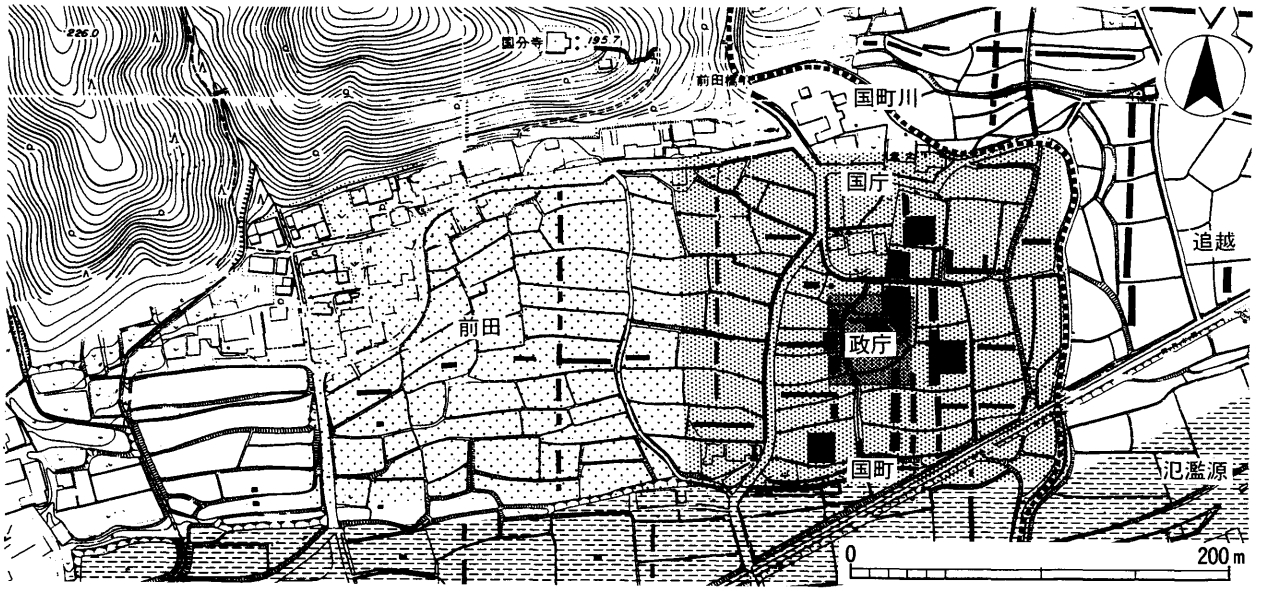
東側の追越地区では、奈良・平安時代以前の建物は確認されているものの、平安時代の国庁の範囲に入る可能性は薄い。

西側の前田地区では、奈良・平安時代の明確な遺構は確認されいないが、中央部付近に緑釉陶器の出土が集中していることなど国庁の範囲についての確定を困難にしている。

段丘下の南の水田部分ではトレンチ調査の結果で遺構は確認されず、水田の耕作土・床土直下は砂礫層であったために柘植川の氾濫原であったと思われる。遺構が削平されている可能性があるものの、柘植川がこれまで幾度となく氾濫を繰り返していることを考えると、不安定な立地に国庁に関係する施設を建造した可能性は低いものと思われる。

国庁域は、東限を人工的な付け替えを呈する国町川と見ることができる。西限は調査で断定できなかったが、政庁を左右対象として捉えるならば、政庁の中心軸から東限までの距離を折り返した南北約180ｍ、東西約200ｍの範囲を国庁域と推定することができる。また、調査結果や地形からみると、国町・前田地区の平坦部の南北約180ｍ、東西約400ｍを最大の国庁域と考えることもでき、国町地区の北部と西の岩坂・追越地区を含む範囲も立地する位置から、奈良・平安時代の遺構が少ないものの、範囲に含まれる可能性も残している。

この範囲内に全ての施設が存在したかどうかは確



第66図　国庁域範囲概念図（１：4,000）

定できないが、国府域を他に求めようとすれば、地形の制約を受け、国町・前田地区のさらに西の東条・西条地区、または追越地区のさらに東の綾之森・大坪地区に分散せざる得ない。このことは方八町といわれるような国府のプランを否定するもので、隣接する地域の内容は不明だが、柘植川北部を通っていたと推定される海道に沿って東西に広がる平坦な段丘上の地形を利用し、諸施設を配置した国府像が浮かび上がる。

また、出土した遺物は多量で、これまで空白であった伊賀地域の平安時代の土器の変遷に付いても大まかに追うことが可能となった。以下、政庁の変遷と平安時代の土器について記述する。

1．平安時代の土師器について

出土した遺物のうち、他地域でおおむね年代のおさえられる須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器等の出土は1割にも満たない量である。転用硯として使用された須恵器杯蓋の中には奈良時代後半まで遡るもあるが遺構に伴う須恵器は少ない。また、円面硯など奈良時代前半まで遡るものが見られるが、当該期の遺構は確認されていない。遺物の中で最も量的に多い土師器は平安時代を中心とした資料であり、伊賀地域ではまとまった出土例が少ないため、この時期の良好な資料と言える。ここでは灰釉陶器、緑釉陶器などの資料を参考とし、9～11世紀前半の当遺跡の土師器、黒色土器の流れを見ることとする[1]。

土器の器種構成としては、本文遺物の遺構別の器種構成表のように土師器が8割近くを占め、黒色土器が隆盛するするようになると、土師器と黒色土器で9割近くを占めるようになる。これらはいずれも供膳具である杯・皿が中心で、煮沸具である甕などの比率は極めて低い。県内では他地域の一般集落と比較する資料がないが、明和町にある斎宮跡の9世紀後半のＳＫ2650の資料[2]がこの割合に近い。国の出先機関であった斎宮跡と同様、この傾向が伊賀国府の特色といえる。

1）土師器について

奈良時代後半～平安時代初期

◎出現期である奈良時代後半から平安時代初期の資料は良好なものが少なく、ＳＤ1010・ＳＫ1011の出土例のみで、時期的にも新しい様相が多い。掘立柱建物出土の遺物には8世紀末～9世紀初頭に位置付けられる平安京Ⅰ期中段階に類似するものがあり、初現の年代の一端を示している。

杯は底部ｅ手法で、ヘラミガキを施すものはない。法量から口径14.6cm・器高2.9cmのＡⅠ、口径13.0・器高2.8cmのＡⅡに分れる。皿はＳＫ1011のものに底部外面ヘラケズリで内面には暗文を施すものが見られ、法量から口径20.1cm・器高2.0cmのＡⅠ、口径16.5cm・器高1.8cmのＡⅡに分れる。ＡⅡの中でも口径14.4cmの小形のものがある。

同時期の建物ＳＢ1070から出土したものに椀Ａが見られる。椀Ａは、口径12.0cm・器高3.5cmほどの小形で、外面にヘラミガキや、内面に暗文の残るものもある。底部ｅ手法で、口縁部が直線的に外上方に延び、端部内面に面を持つものである。中期以降に見られる、内湾しながら外上方に延びる口縁部で、端部が外反する椀Ａとは形態が異なる。

椀Ｂは口径16.5cm、器高5.5cmで、口縁部下半ヘラケズリを施すものである。

平安時代前期

◎9世紀前半の猿投窯黒笹14号窯期に相当するものには、ＳＫ1086の資料がある。黒色土器杯を見るとＳＫ1011とほぼ同様なものが出土しており、時期的にそう隔たりはない。

杯は底部ｅ手法で、ヘラミガキを施すものはない。法量から口径14.6cm・器高2.9cmのＡⅠ、口径13.0・器高2.8cmのＡⅡに分れる。

皿はＡⅡのみがある。内面の暗文・外面のヘラミガキは施されない。

椀Ｂは、口径16.0cm・器高は高台が剝離しているが推定すると5.0～5.5cm程になると思われる。

◎9世紀後半の猿投窯黒笹90窯期に相当するものに、ＳＫ1035の資料がある。

杯はＡⅠ・ＡⅡがあるが、大半はＡⅡである。口径13.0cm・器高2.9cmで、前期前半のものと法量的にあまり差はない。

皿は口径14.4cm・器高2.0cmのＡⅡがある。ＡⅡのなかでも口径13.4cm・器高1.7cmの小形のものがあり、皿は相対的に口径が小さくなる傾向である。口径が20cm以上あるＡⅠはなく、後半には消滅すると思われる。

*椀Ｂ*は、口径16.2cm・器高5.0cmと5.4cmの２個体が出土しており、前期前半のものと余り変化はないが、器高が減少する傾向と思われる。

また、ロクロ成形土師器もこの時期から見られ、ＳＫ1009・1033・1035などから出土しているが量的には少ない。

平安時代中期

◎９世紀末から10世紀初頭に位置付けられる資料には、ＳＫ1012のものがある。

杯はＡⅡが中心で、法量的にはＳＫ1035の杯とあまり差はない。

皿は前期同様口径15～16cm・器高1.2～1.8cmのＡⅡと、口径13.2cmの小形のものがある。

椀Ｂもこの時期まで残るようである。新しい様相として、口縁部の外反する椀Ａや杯でも小形のものが出現する。前期から続く土師器杯・皿・椀は減少し、消滅する傾向であるといえる。

◎10世紀前半の資料には、ＳＫ1077・ＳＤ1081・1082のものがある。ＳＤ1082の杯は口径10cmと小形化するもので新しい要素が多い。

器種としては杯Ａと椀Ａ・皿Ａがある。

杯Ａは器壁が薄く、口径11cm前後・器高２cmと小形化し、大形のものはない。

椀Ａは口径12cm前後・器高２cm前後で、ＳＤ1081・1082に類例が見られる。他に口径の大きなものがあるが、個体数が少ないため分類はしていない。大形というものの口径は14cm以下で、いわゆる小形食器といえるものである。

皿Ａは口径が14cm程で底部は丸みを持ち、前期から続く皿は消滅する。この皿としたものは、10世紀後半に相当する平城京左京六条三坊十三坪跡[3]のＳＫ21の杯に形態的に類似するが、ここでは皿とした。形態的に皿と杯との区別が無くなっていく時期であろう。

◎10世紀後半の資料には、整地層・ＳＫ1017などがある。

土師器は椀・杯の区別がほとんど無くなり、ここでは杯と称した。皿は京都系の「て」字皿が出現し、口縁部が短く外反する小形の皿が出現する。この皿の形態は、ロクロで成形するものに多く見られる。

ＳＫ1017の杯は、口径11.2cm・器高1.8cmと森脇遺跡ＳＺ301[4]のものに類似し、10世紀後半でも古い時期に位置付けられる。整地層出土の杯は口径10.4cm・器高2.3cmと小形化する。口縁部の形態が様々で、細分が可能なものかも知れない。森脇遺跡ＳＺ303[5]、奈良の薬師寺西僧坊[6]のものに類似し、「て」字皿から平安京のⅢ期中段階で、10世紀後半でも新しい時期に比定される。

平安時代後期

◎11世紀の資料には、ＳＫ1054・1064のものがある。

土師器は杯・皿が中心で、新たに杯Ｎが出現する。杯Ｎは数が少なく、その系譜は平安京Ⅲ期新段階[7]に出現するいわゆる２段ナデ口縁をもつ杯Ｎ・皿Ｎに求められるかもしれない。

皿には「て」字皿や端部を折り曲げる皿がある。前者の中に口径９cm前後と平安京Ⅲ期新段階より新しい要素が見られ、後者は三反田遺跡ＳＫ１[8]のように瓦器に伴う遺構から出土しており、ＳＫ1054から瓦器が１点出土していることを考えると、平安京Ⅲ期新～Ⅳ期古段階の概ね11世紀前半から中葉とするのが妥当である。

浮田遺跡[9]の報告文中に11世紀から15世紀までの土師器の変遷に付いてに記述されているが、今回杯Ｎとしたものは大形土師皿Ｂ系に、杯としたものは同小形土師皿Ｂ系、皿Ａとしたものは小形土師器皿Ａ系に各々つながっていくものである。

２）黒色土器について

黒色土器の出現は平安時代前期前半で、以後瓦器の出現する11世紀中頃[10]まで、内面黒色化のＡ類が中心に存在する。

平安時代前期前半の器種には、杯・皿・風字硯がある。杯は器壁のやや厚いもので、外面ヘラケズリの後、口縁部のみヘラミガキを施すものである。皿も器壁の厚いもので、これらの出土点数はわずかで、すべて搬入品と思われる。

前期後半になると、杯・椀Ａ・皿・鉢Ａ・鉢Ｂ・

風字硯等と器種が最も豊富となる。杯・鉢Ａともに器壁が薄く、丁寧な作りのものである。椀Ａは口径15.3cm、器高4.3cm、底径約8cmほどのＡⅡと、口縁部を欠するが底径10cmの深椀タイプのＡⅠがある。皿は口径14.3cm、器高2.7cmで内面に暗文が施される。

中期は椀Ａが中心で、皿は少なくなる。椀は口径により、ＡⅠ・ＡⅡ・ＡⅢに分類される。一部黒色土器Ｂ類が出土するが、点数はわずかで搬入品の可能性が高い。ＳＫ1012出土の227は器形的に土師器椀Ｂの脚になるもので、類例がなく土師器製作集団が作ったものと考えられ、黒色土器Ａ類の在地生産が開始されている可能性が高い。

中期後半では椀のみとなる。作りが悪いものが多くなり、ヘラミガキも粗雑化し、施されないものも増え、規格性の失われていく時期である。ヘラミガキの施されないものは器壁が厚く、作りが悪く在地で生産されたと考えて間違いない。ＳＰ1076から出土した黒色土器は森脇遺跡ＳＤ303[11]と法量的にも同じものである。

最終末である11世紀前半では黒色土器は減少し、消滅する。

位置的に大和に接するため、黒色土器Ａ類→同Ｂ類→瓦器の変遷が伊賀でもたどれると考えられていた。しかし、伊賀地域での黒色土器の分布はＡ類が中心で、搬入品として９世紀前半に出現し、在地での生産の開始は不明であるが11世紀前半までその生産は続く。伊賀国府出土の黒色土器の中心はＡ類で、Ｂ類は数点しかなく、Ｂ類の在地での生産に関しては疑問視される。

２．政庁域の変遷について

伊賀国府の初現については、重複が著しいためにその時期を確定することは出来なかったが、北を区画する東西溝ＳＤ1010が平安時代初期に埋没していること、出土した遺物の中には奈良時代まで遡るものがあることなどを考えると奈良時代の範疇に成立したことは確実である。しかし、奈良時代前半に比定される円面硯なども出土しているが、その出土量は多くなく、遺構も未確認であるために、奈良時代でも後半代と考えられる。

重複しているために未確認の可能性が残るものの、当地域での初現を奈良時代前半まで遡らせる可能性は低いが、前田地区の飛鳥時代の遺構、東に位置する外山大坪遺跡[12]の飛鳥時代から奈良時代までの遺構など、奈良時代前半以前の国府については他地域に存在する可能性は残っている。

廃絶期は、遺構から出土する瓦器が微量であることから、伊賀地域で瓦器が出現するまでの11世紀前半である。以下、奈良時代後半から平安時時後期までの政庁域の変遷について見ることにする。

○奈良時代後半から平安時代前期前半

伊賀国府の成立期である。建物の存続時期としてはＳＢ1070出土の遺物に８世紀末から９世紀初頭のものが含まれ、その年代の一端を示しているが、存続時期は断定できない。その廃絶時期は平安時代前期前半まで遡る可能性も若干残っている。正殿ＳＢ1056は５間×３間、前殿ＳＢ1065は３間×２間の東西棟で、西脇殿は北に２間×２間のＳＢ1084とその南に４間×２間のＳＢ1085、東脇殿も同様に北にＳＢ1070、その南にＳＢ1075が位置する。これらを取り囲む塀ＳＡ1052・1091とその更に北には東西溝ＳＤ1010が存在する。建物の方向は真北か北で東に1°振れるものである。なお、東脇殿については、正殿、前殿の建物中軸線から折り返した位置で想定したもので、本文中で触れたように未検出の柱穴など問題が残るものである。

東側の南北方向の掘立柱塀は平成元年度の調査で確認したものが可能性が高く、この位置と西の掘立柱塀ＳＡ1091との距離は41.4ｍであり、これは140尺に相当する。

西側南北塀ＳＡ1091の外側には南北溝ＳＤ1087があり、西の雨落ち溝の可能性もあるが、東では確認していない。北は東西塀ＳＡ1052の北には溝はなく、南に位置するＳＤ1053が内側の排水溝に当たる可能性が強い。

南では、西脇殿ＳＢ1085の南4.4ｍにある東西溝ＳＤ1098が、方向・時期を同じくする。東脇殿前面のＤ５－９中央トレンチのＳＫ1076としたものはＳＤ1098の延長上にあるもので、一連の溝の可能性が高

い。正殿の北側柱から掘立柱塀ＳＡ1052までの距離は約4.4ｍで、西脇殿ＳＢ1075の南柱穴から東西溝ＳＤ1098の北肩までの距離とほぼ等しく、南を画する東西溝の可能性が高いものである。

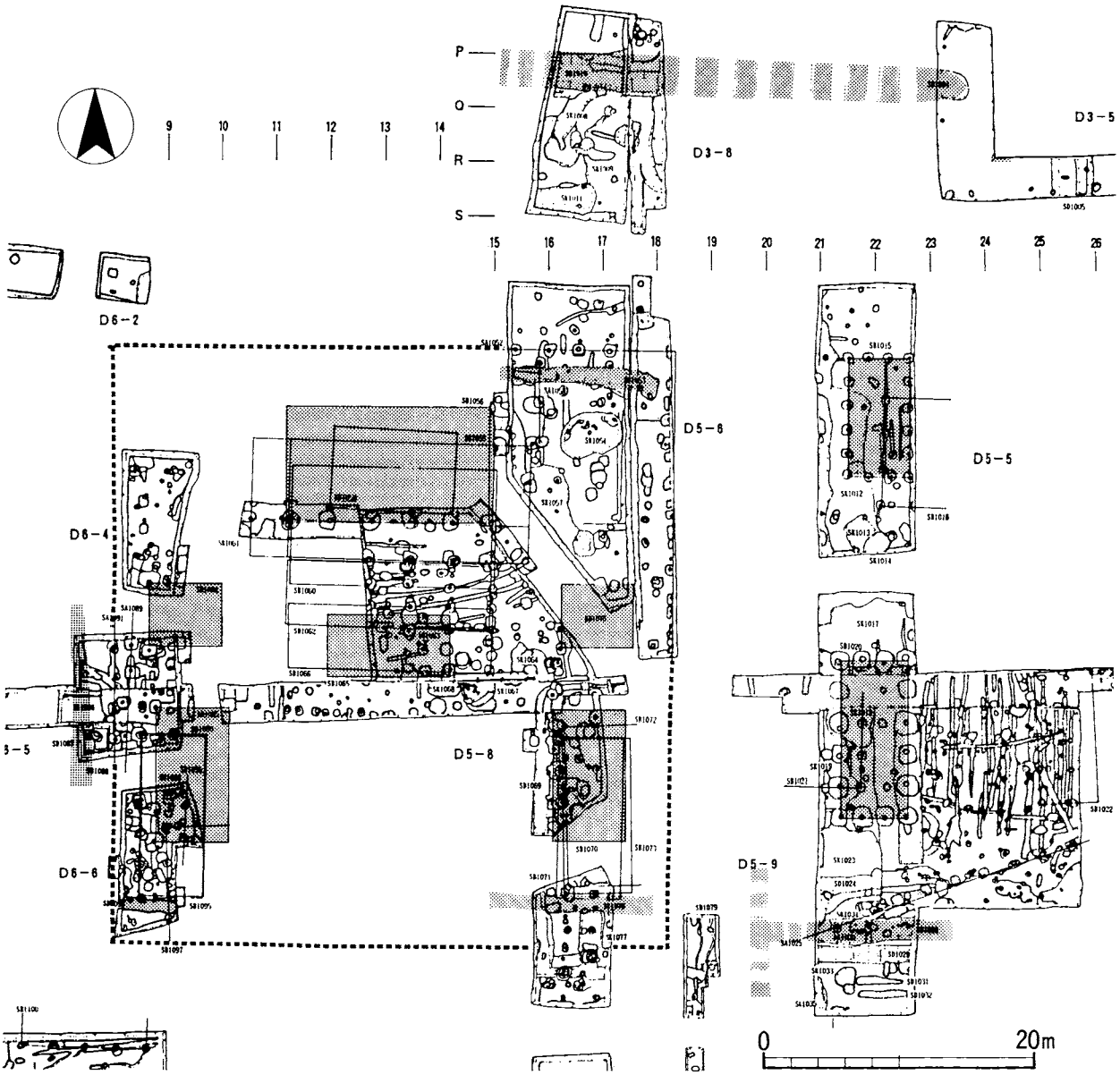
北の溝は内側にあり南も内側とすると南北の塀は20間以上(44.4ｍ)となり、Ｄ５－９中央トレンチのＳＤ1069やＳＫ1077の底にある若干のくぼみが掘立柱塀の痕跡にあたる可能性も考えられる。このように考えることが可能なら掘立柱塀に囲まれた南北20間(１間＝7.5尺：150尺)、東西18間(１間＝7.75尺：140尺)の政庁域を復原することができる。

東の南北溝は確認していないが、後述する平安時代前期の東西溝ＳＤ1029は当該期にも存在した可能性は充分に考えられ、東の官衙群とを画する南北溝の存在する可能性は高い。

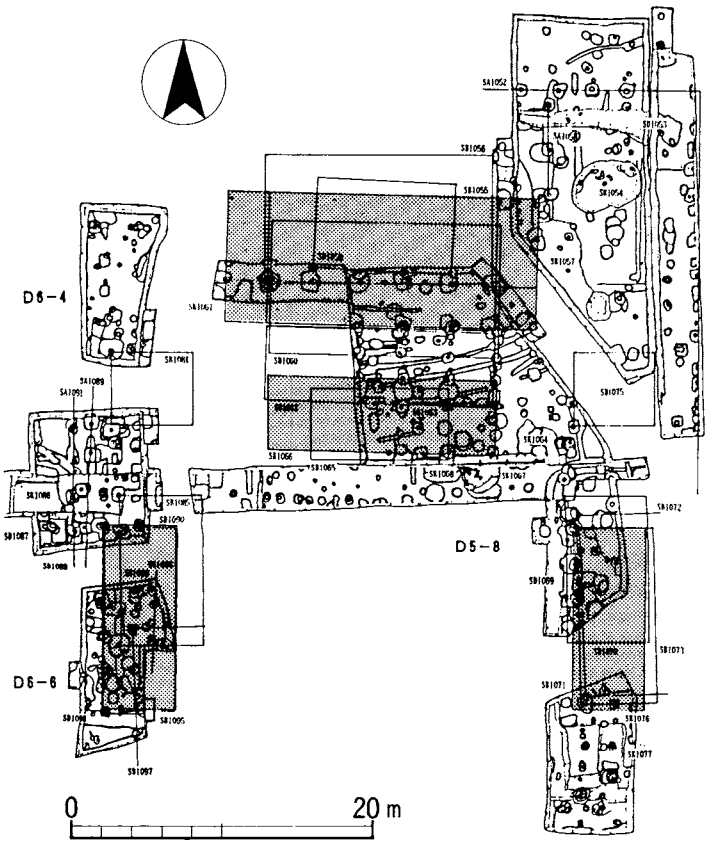
○平安時代前期

正殿ＳＢ1055は７間×３間の三面廂付建物、前殿ＳＢ1066は５間×２間と各々規模を大きくして、ほぼ同じ位置で建て替えられる。また、西脇殿ＳＢ1095、東脇殿ＳＢ1073の両脇殿は位置を南にずらして５間×２間の規模で建て替えられる。建物の方向は前代と同じく、北で０～１°東に振れるものである。

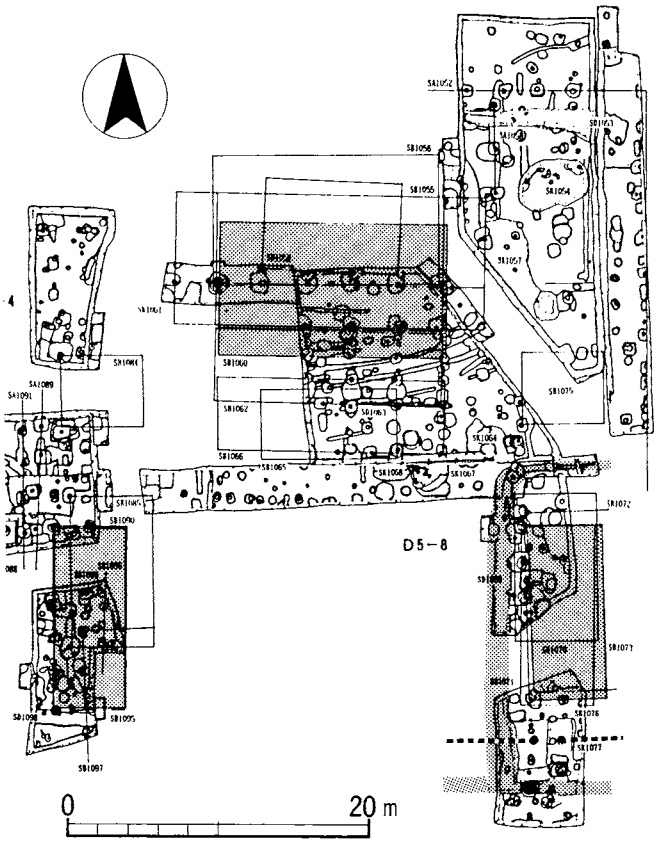
時期的には黒笹14号窯期から黒笹90号窯期までの約100年間と想定され、建物の耐用年数から建て替えが考えられるが、現状で確認していないために時期の細分はしていない。建物にはならない柱穴が幾つ



第67図　政庁建物配置図　奈良時代後半～平安時代前期前半



第68図　政庁建物配置図　平安時代前期（１：500）



第69図　政庁建物配置図　平安時代中期（１：500）

か確認されていること、遺構検出が非常に困難なため見落としの柱穴があることが予想され、今後の問題点のひとつとしておく。

塀、溝など周辺を区画する施設は確認していない。平安時代中期に想定される塀の下限が10世紀前半代であることから、存続時期を当該期までさかのぼらせる可能性も考えられる。また、東のＤ５－９東調査区南側で平安時代前期前半の東西溝ＳＤ1028、前期後半の東西溝ＳＤ1029があり、さらに西に延びるものであるが政庁域の東南部では確認していない。このため政庁域東南部とこの間の未調査区で政庁域の東を画する南北溝に取り付くものと考えられる。

○平安時代中期

正殿ＳＢ1060は５間×３間、脇殿は西脇殿ＳＢ1090、東脇殿ＳＢ1071ともに５間×２間の礎石建物となり、ほぼ同じ位置で建て替えられる。礎石の抜き取り痕跡から出土する遺物は10世紀末から11世紀に入るものが出土しているが、Ｄ５－９中央トレンチ南辺の整地土層に見られるように10世紀後半代に大規模な整地が想定され、礎石建物の礎石ははこのときに抜かれたものと思われる。このため、出土する遺物から、これらの建物は10世紀代以前としか判断が出来ない。建物の方向は北で東に１°振れる。10世紀後半代の整地は、その出土した遺物から薬師寺西僧坊のものに近く、10世紀の第４四半期の年代が与えられ、この整地に伴う建物については確定できない。可能性としては平安時代後期としたものが一部入るかも知れない。

周辺を区画する施設は確認していないが、Ｄ５－９中央トレンチのＰ1074は10世紀前半代に下限がおさえられるもので、、東にも同規模の柱穴が存在することから、南を画する掘立柱塀の柱穴になる可能性もある。南の調査区では遺構密度が薄いことを考えると南限をこの付近とすることが出来る。

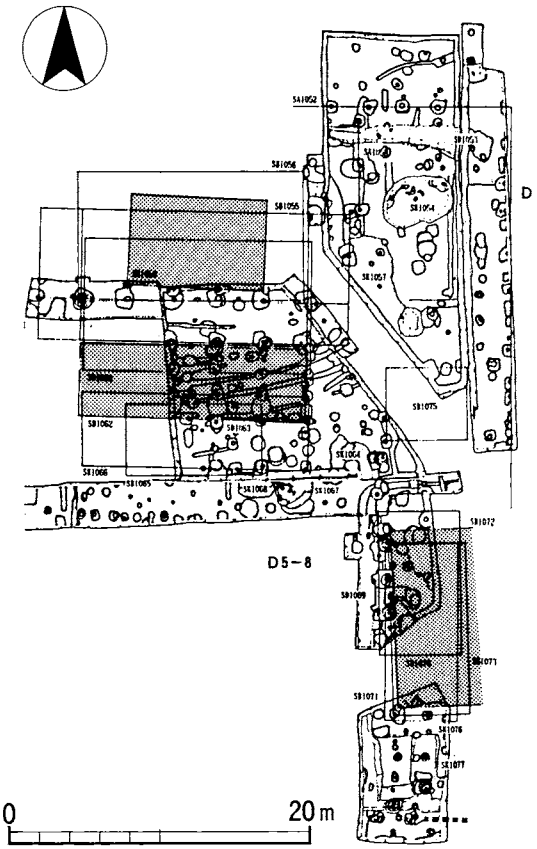
○平安時代後期

平安時代中期まで正殿の位置をほぼ同位置で踏襲していたが、正殿の位置、建物の配置が崩れていく最終末の時期である。

正殿ＳＢ1062は５間×２間の東西棟で、政庁域のほぼ中央に位置する。方位は東で南に２°振れる。東脇殿ＳＢ1072は建物位置を踏襲するもので、方位は北で西に振れ正殿とは逆のものである。西脇殿は不明であるが、規模、時期不明であるＳＢ1096など、その可能性の高いものはある。

ＳＢ1062より新しいものには、３間×２間と推定される正殿ＳＢ1059がある。また、建物に附属する施設として、その南約30尺の位置に東西溝ＳＤ1063がある。この溝底には無数の小穴が見られ、杭などを打ち込んだ簡単な目隠し塀的な施設であったと思われる。建物、東西溝の方位は東で南に３°振れる。柱穴及び溝から出土した遺物の中に、瓦器の小片がある。混入した可能性が残るものの、遺構の周辺では瓦器の出土が少ないことから、その廃絶の時期を伊賀で瓦器が出現する前後の11世紀中頃に置くことが出来る。

周辺を区画する施設としては、前代同様にＤ５－９中央トレンチ南端で、塀になると思われる柱列が２条ほど想定できる。平安時代中期のＳＰ1074よりさらに南の位置で、東西に１間分で２列分想定することが可能である。このうち、北側のものは重複しており、南面を画する塀として３回の建て替えが行われていたことが窺える。すべてが平安時代後期に存在していたかは問題であるが、１間分ということもあり周辺の調査状況の進展を待つということで、ここでは南面を画する塀が数回にわたり建て替えられて存在していた可能性があるという指摘のみにとどめておく。



第70図　政庁建物配置図 平安時代後期（１：500）

このような変遷を辿るものと考えられるが、一部が解明できただけで、多くの課題が残っている。政庁域では問題の残る両脇殿・塀、未検出であった南門の確認や官衙域・国府域の確認など検討すべきことは多い。また、最終末の正殿としたものは政庁の正殿としては規模的に小さく、他の施設の可能性も残っている。国分寺の衰退期とほぼ同時期であり、勢力基盤の変化が建物配置に表れているのかも知れない。

伊賀国府については、４次に渡る範囲確認調査で所在地をほぼ確定できる成果を得たが、なお多くの課題が山積しており、今後の調査により全体像が早急に解明されることを期待したい。

註

1、平安時代の土師器の年代に付いては「平安京右京三条三坊」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1990を参考とした。

2、「第44次調査」『史跡斎宮跡発掘調査概要』三重県斎宮跡調査事務所、1983.3

3、「平城京左京六条三坊十三坪」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和58年度』奈良市教育委員会、1984

4、森川常厚『森脇遺跡(第三次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1991.3

5、４と同じ

6、『薬師寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所、1987

7、１と同じ

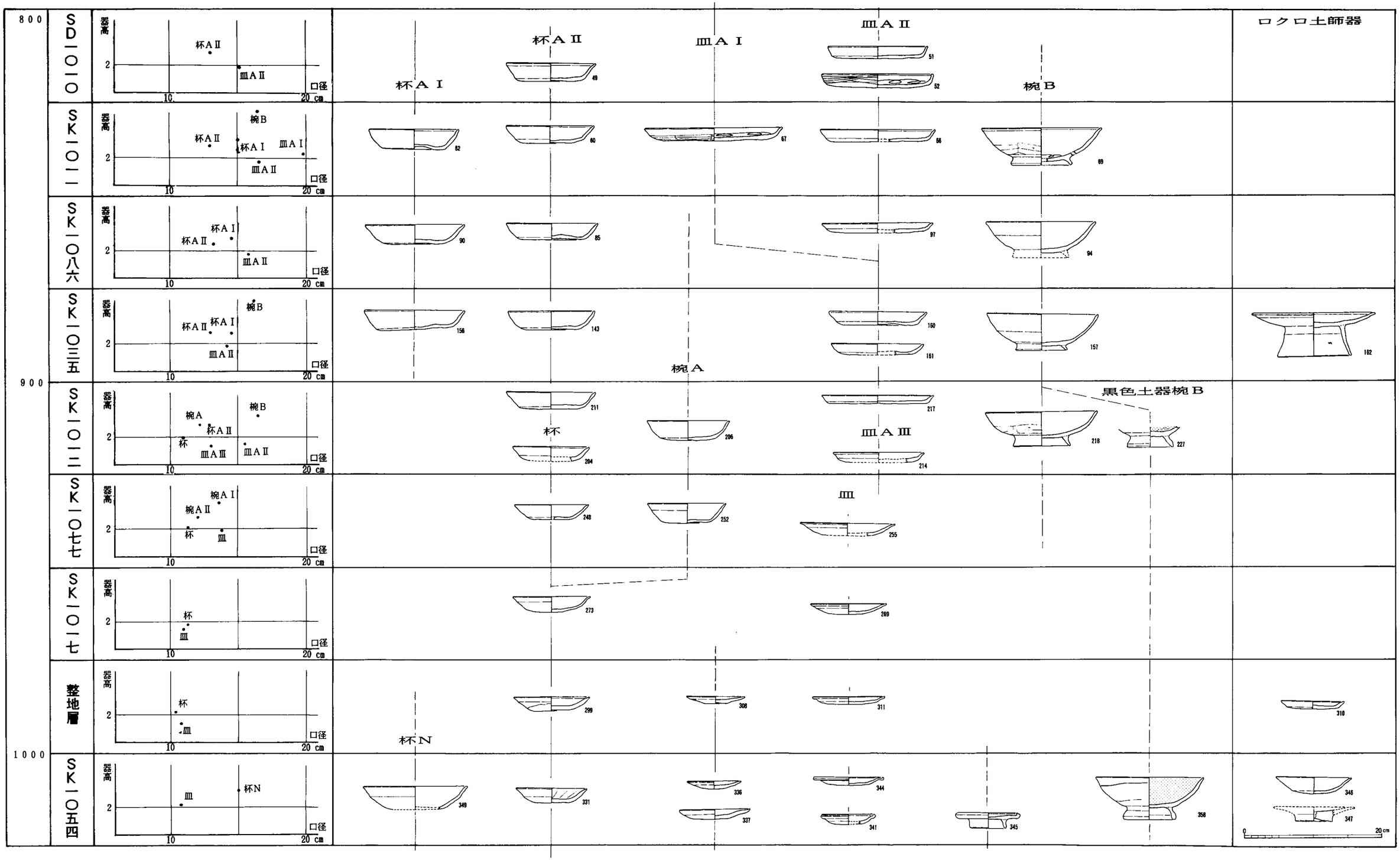
8、東山　則幸『三反田遺跡発掘調査報告書』上野市教育委員会、1992

9、倉田　直純「浮田遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊』三重県埋蔵文化財センター、1990．3

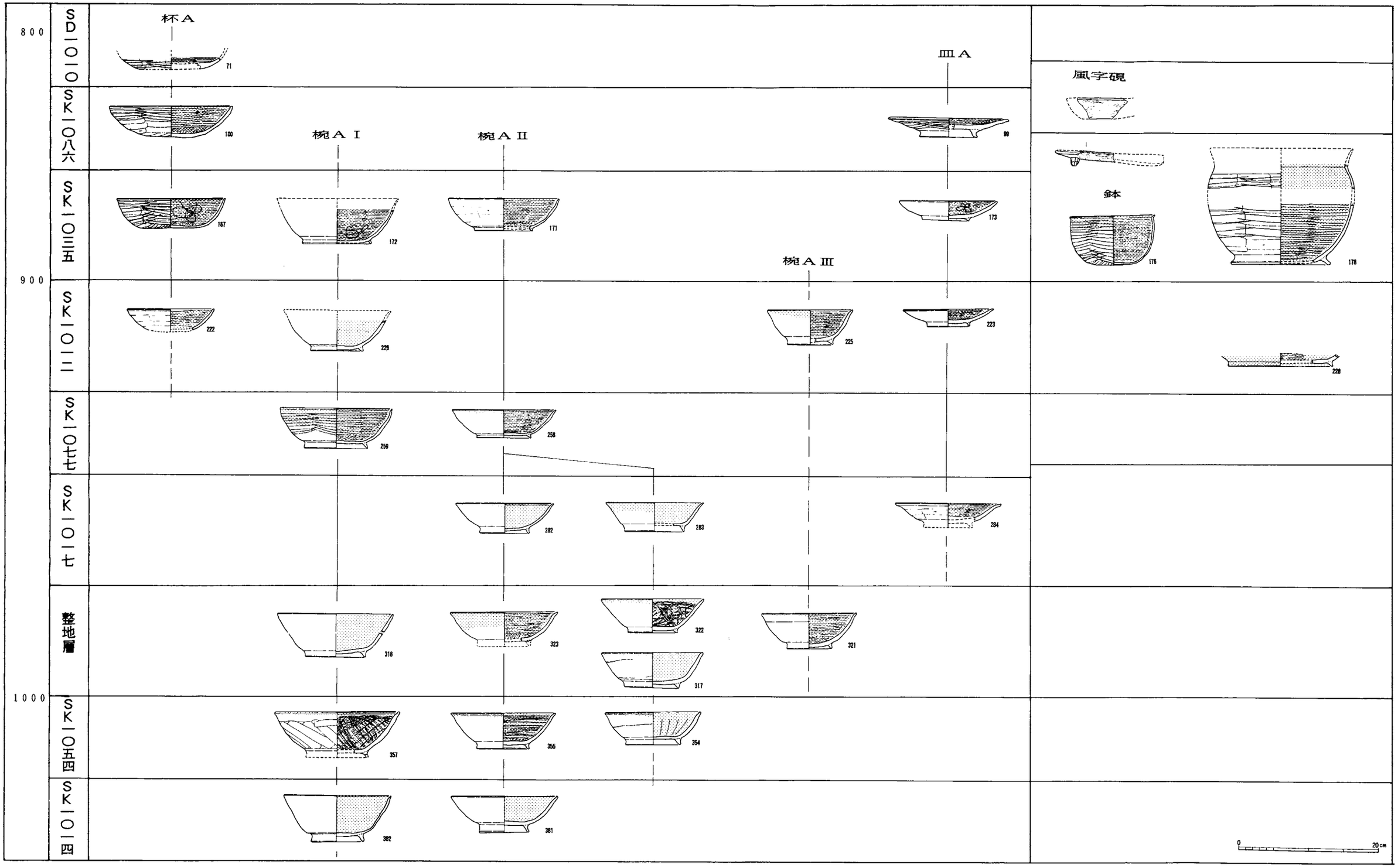
10、森　隆「西日本の黒色土器生産(上)(中)(下)」『考古学研究第37－2～4号』考古学研究会1990・1991

11、４と同じ

12、川戸　達也「外山大坪遺跡」『平成３年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊』三重県埋蔵文化財センター、1992．3


800
900
1000
SD一〇一〇
SK一〇一一
SK一〇八六
SK一〇三五
SK一〇二二
SK一〇七七
SK一〇二七
整地層
SK一〇五四
高器
口径
10
20 cm
杯AⅠ
杯AⅡ
皿AⅠ
皿AⅡ
皿AⅢ
椀A
椀B
杯
皿
杯N
ロクロ土師器
黒色土器椀B
0
20cm

第71図　土師器変遷図



第72図　黒色土器変遷図

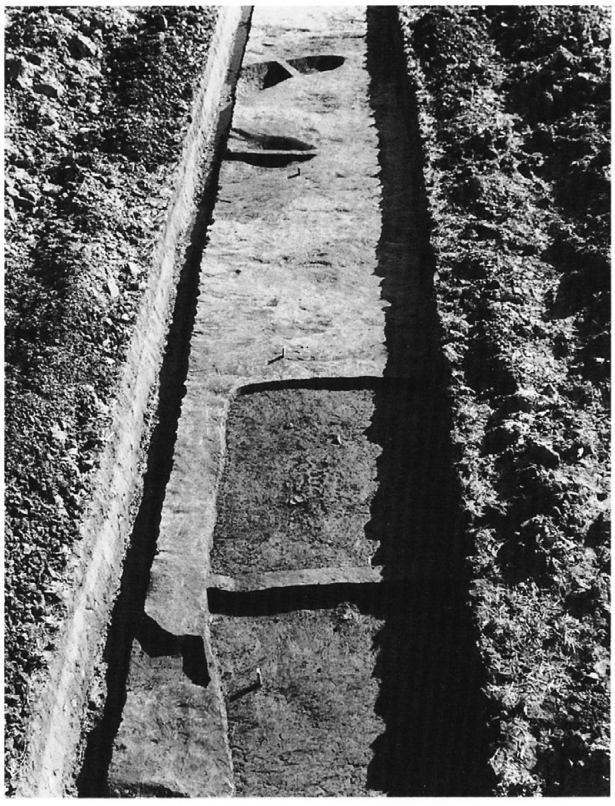
柘植川南部　航空写真（南から）

ＳＢ３（東から）

ＳＢ５（北から）

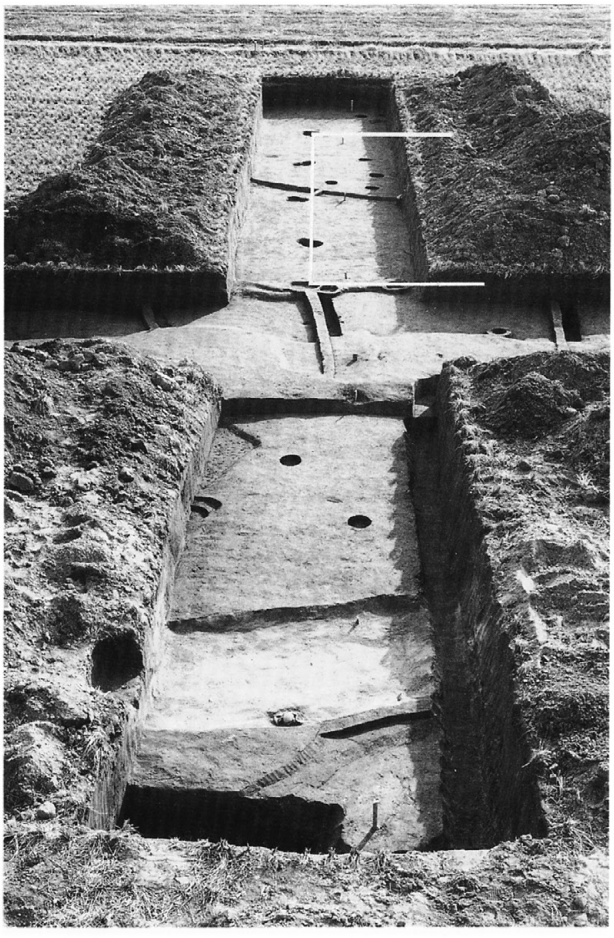
ＰＬ２　柘植川南部

ＳＤ２（東から）



ＳＢ１（西から）

ＳＸ７（西から）



ＳＢ９（北から）

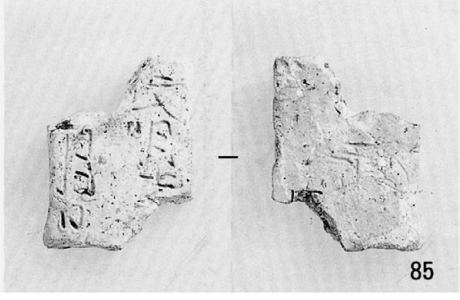
13

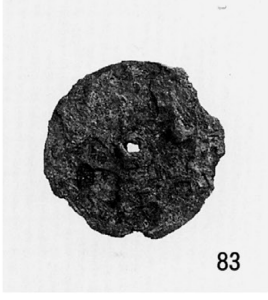
23

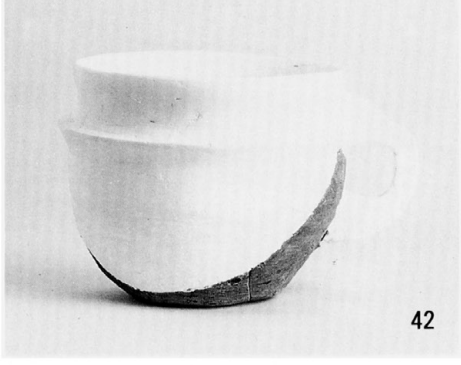
21

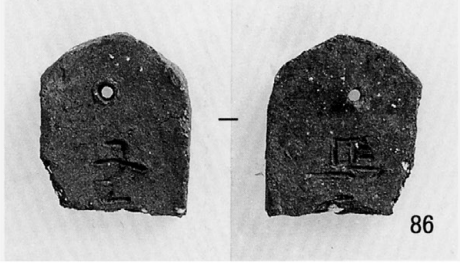
41

32


85


83


42


86

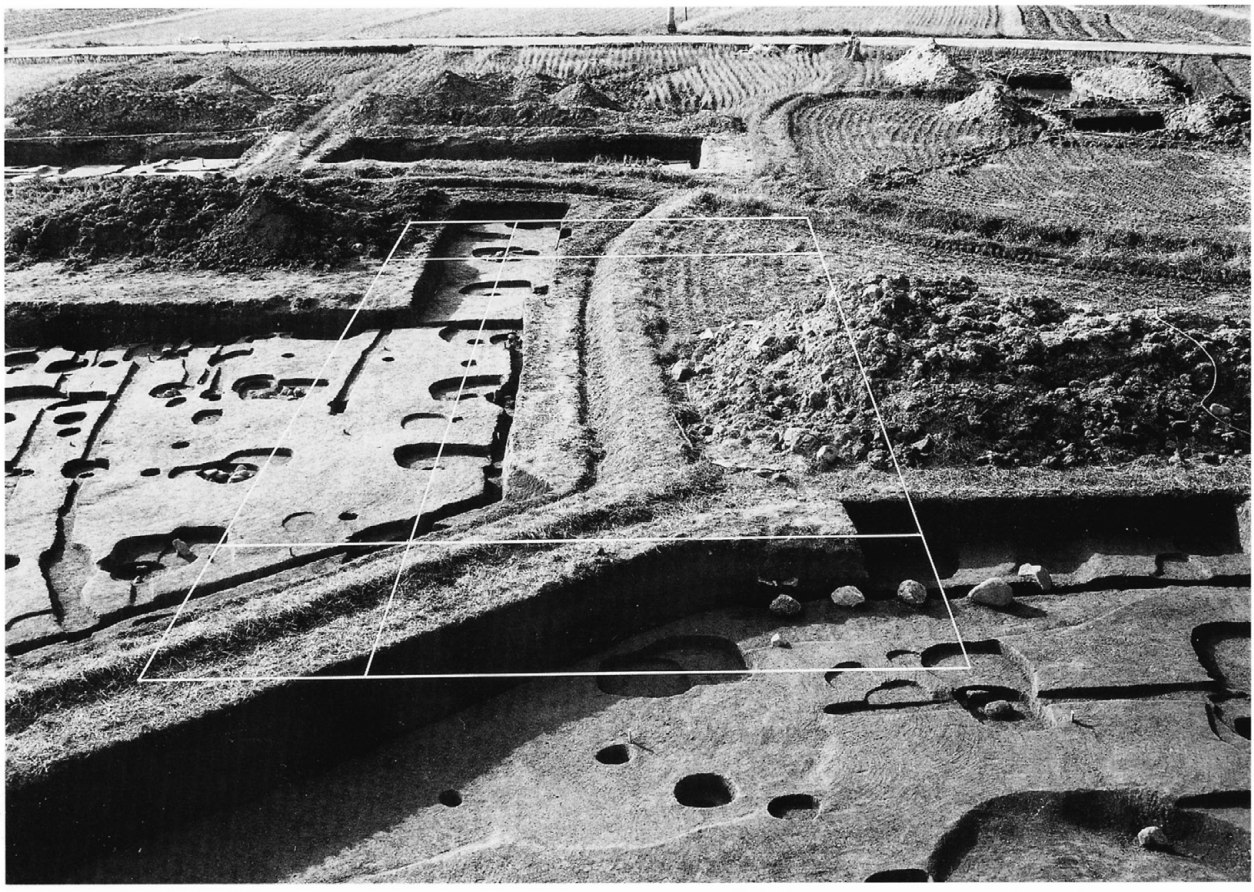
87

（83、85、86、87は１：２）

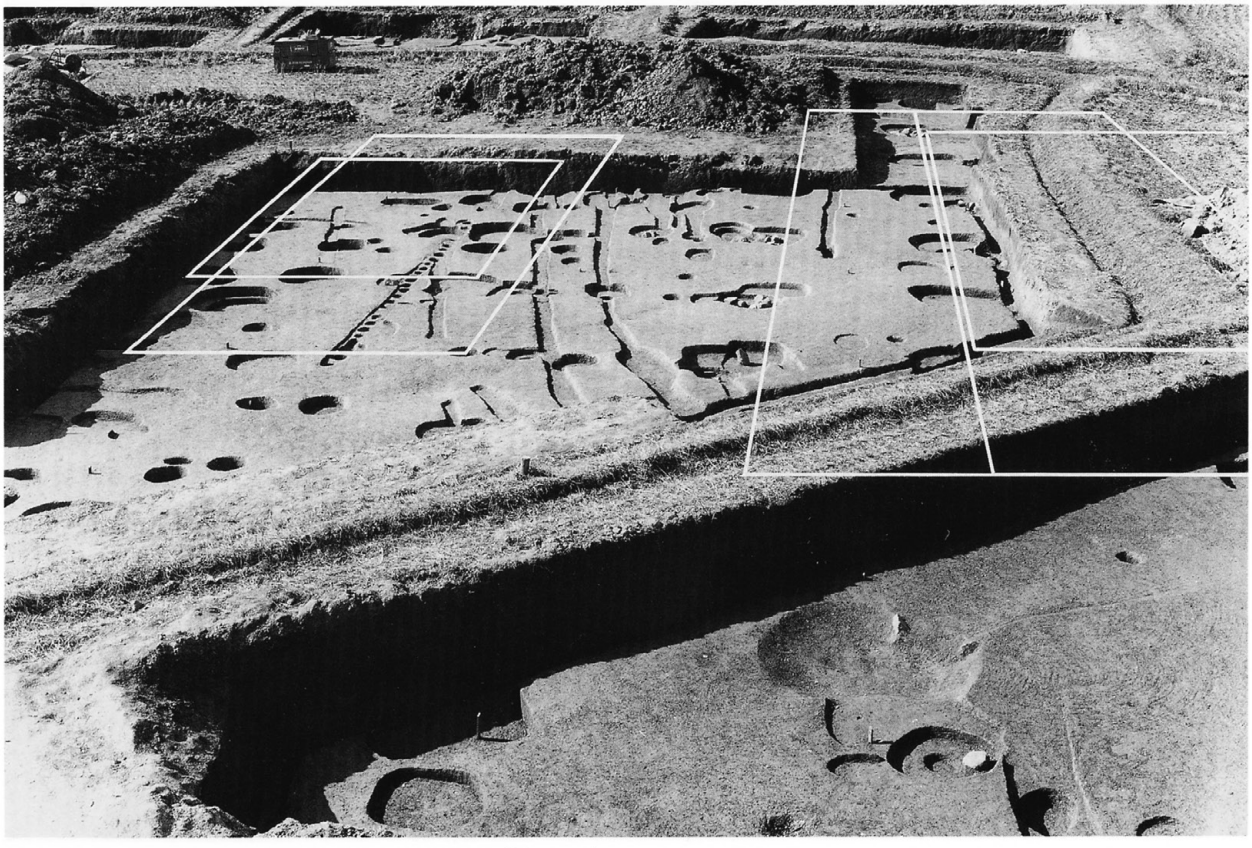
ＰＬ４　柘植川北部・国町地区

柘植川北部　航空写真（西から）

国町地区　航空写真（北から）

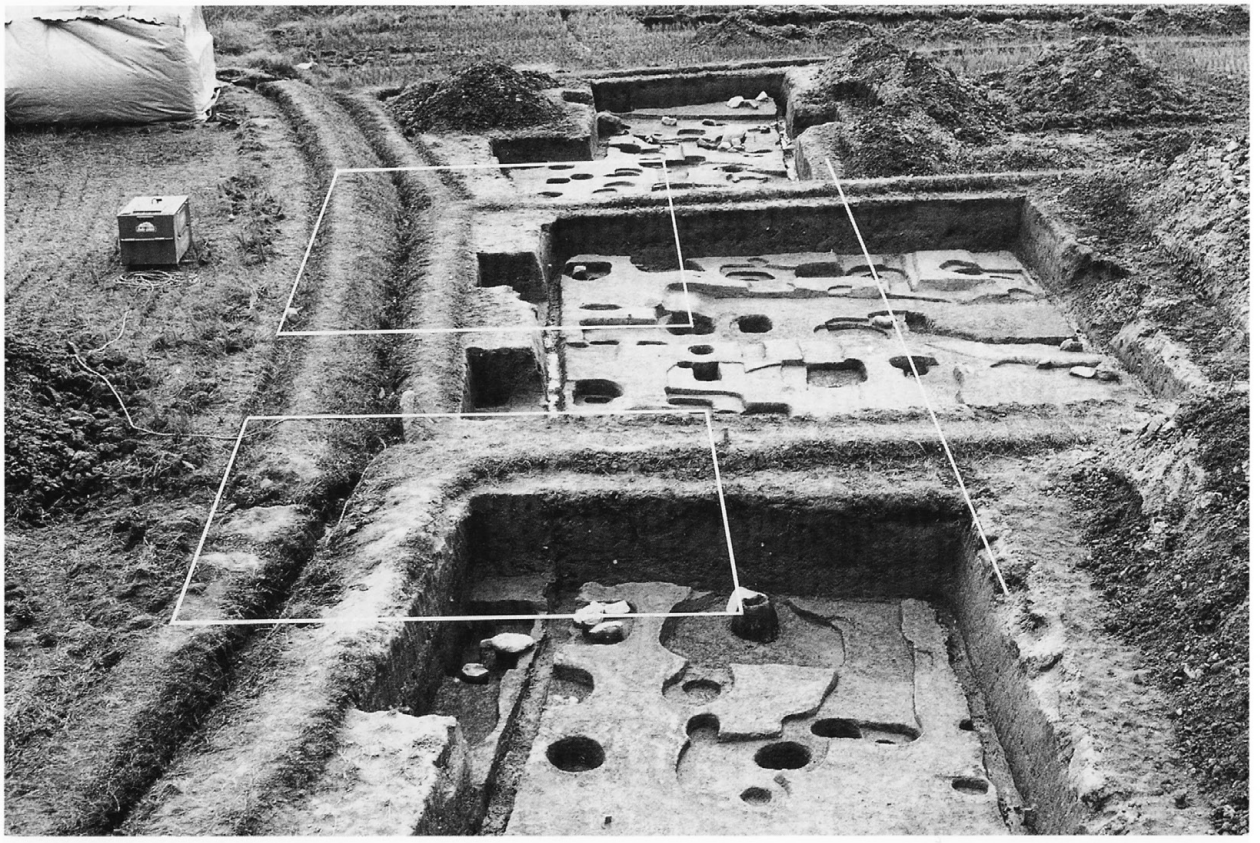


正殿ＳＢ1055（東から）

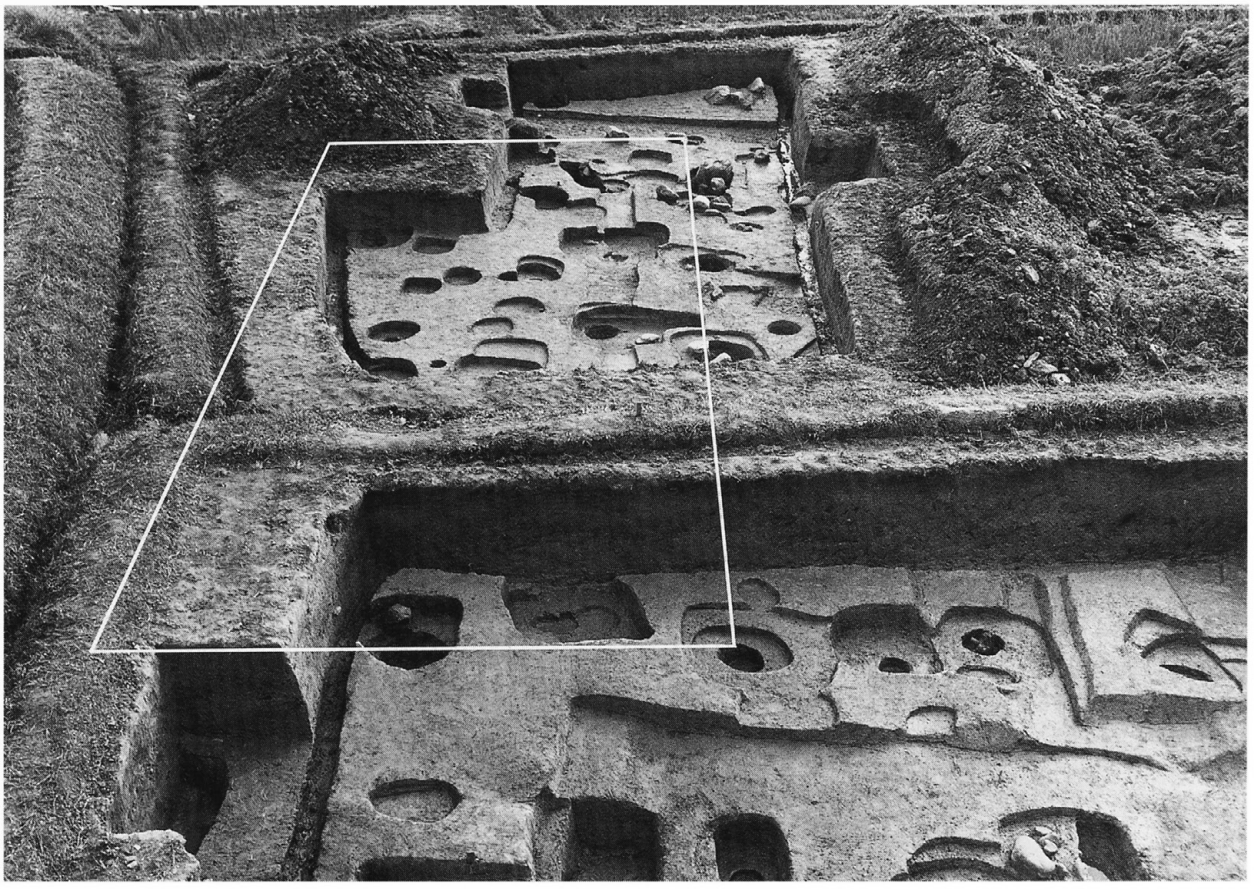


正殿ＳＢ1055・1056・前殿ＳＢ1065・1066（東から）

ＰＬ６　柘植川北部・国町地区

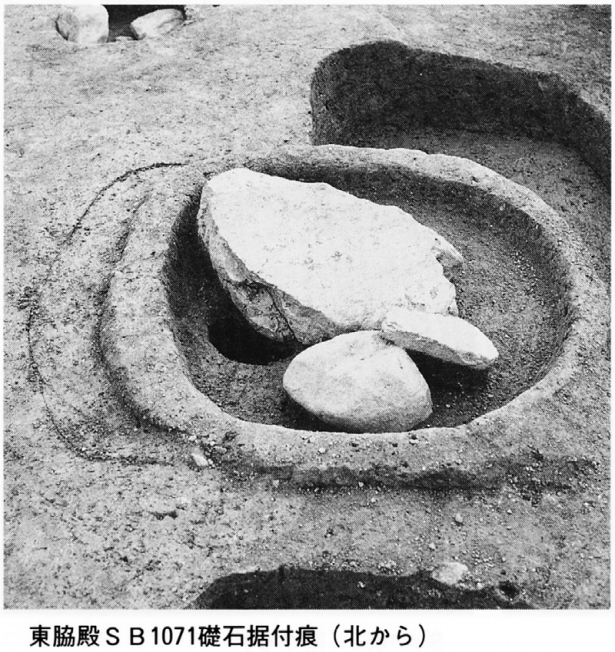


西脇殿ＳＢ1084・1085・ＳＡ1091（北から）

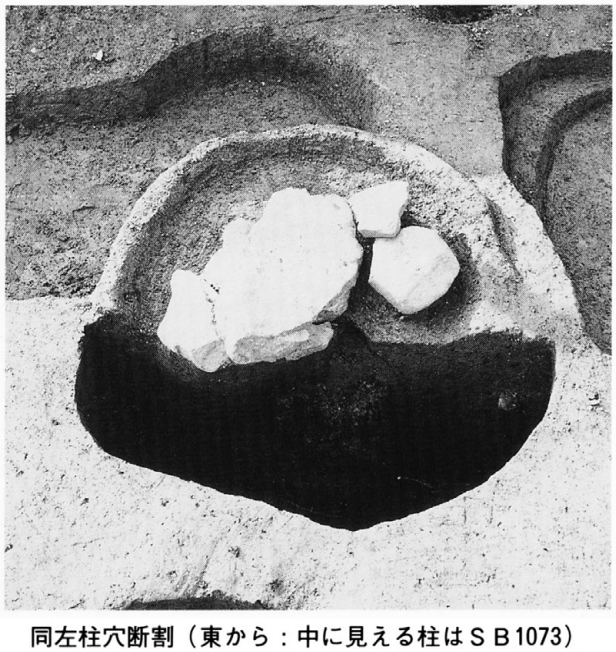


西脇殿ＳＢ1085・1090（北から）

Ｄ５－６調査区東南部（東脇殿）



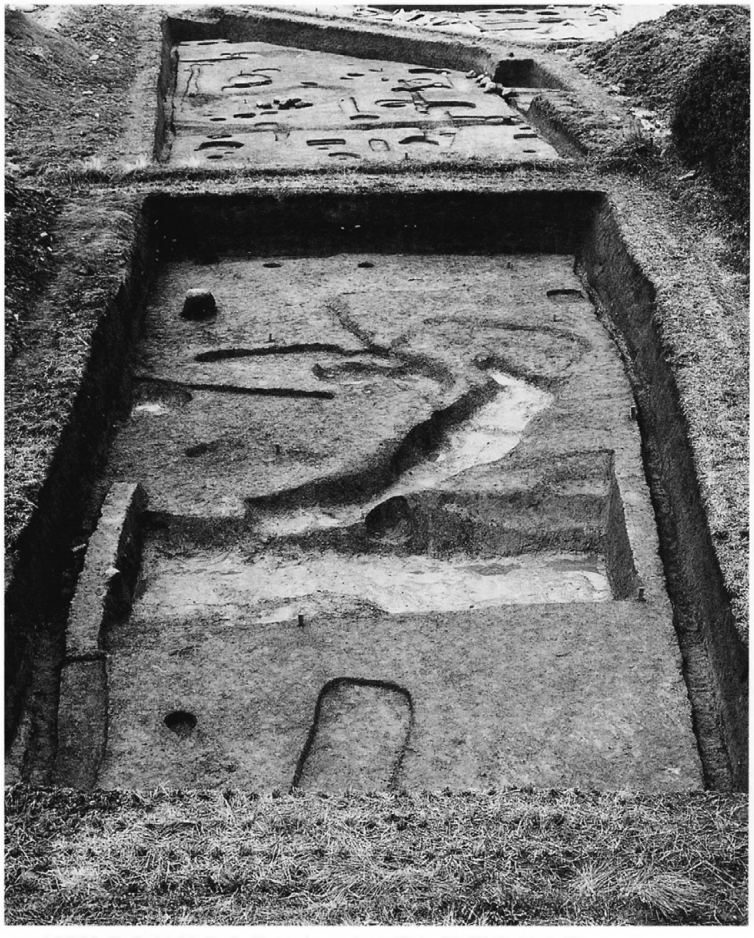
東脇殿ＳＢ1071礎石据付痕（北から）



同左柱穴断割（東から：中に見える柱はＳＢ1073）

ＰＬ８　柘植川北部・国町地区

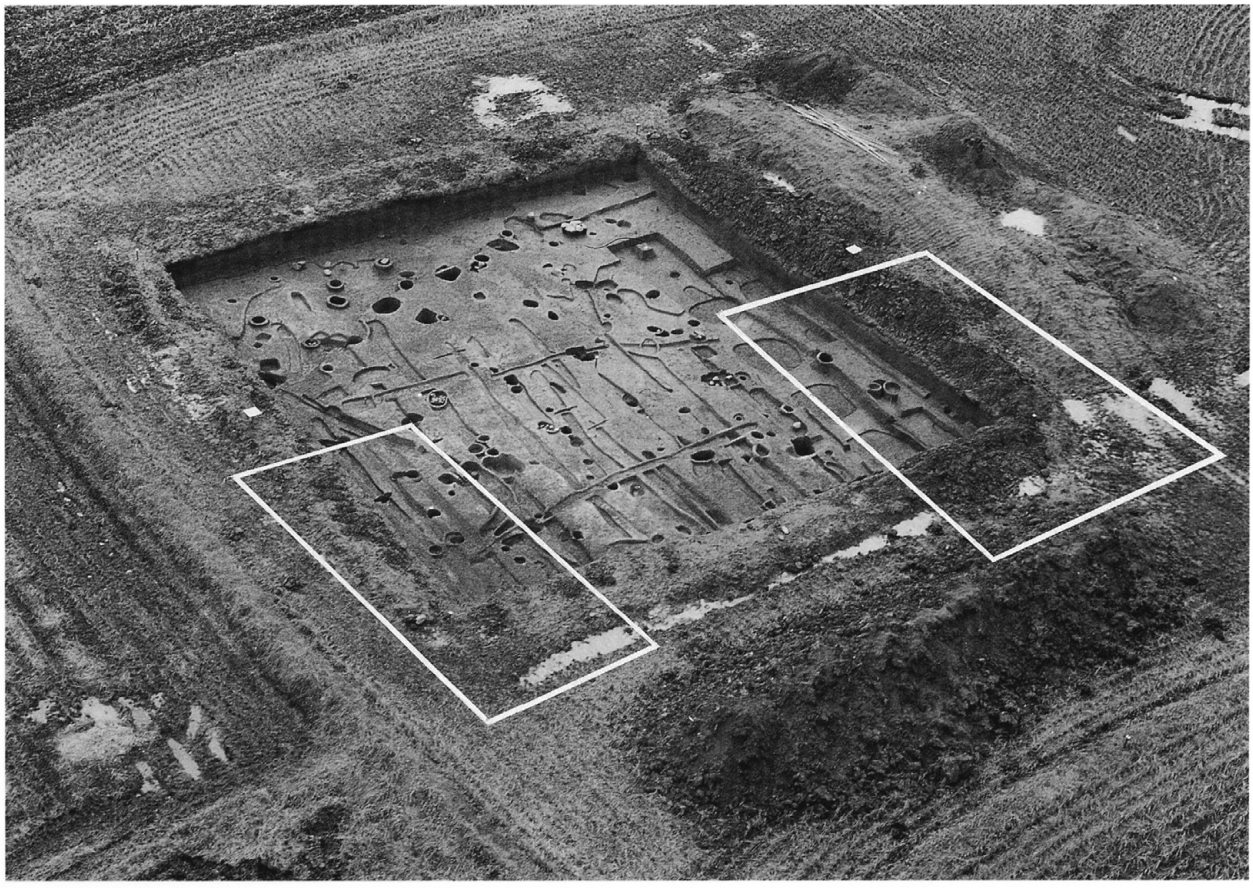
ＳＡ1052（東北から）



ＳＤ1010（北から）

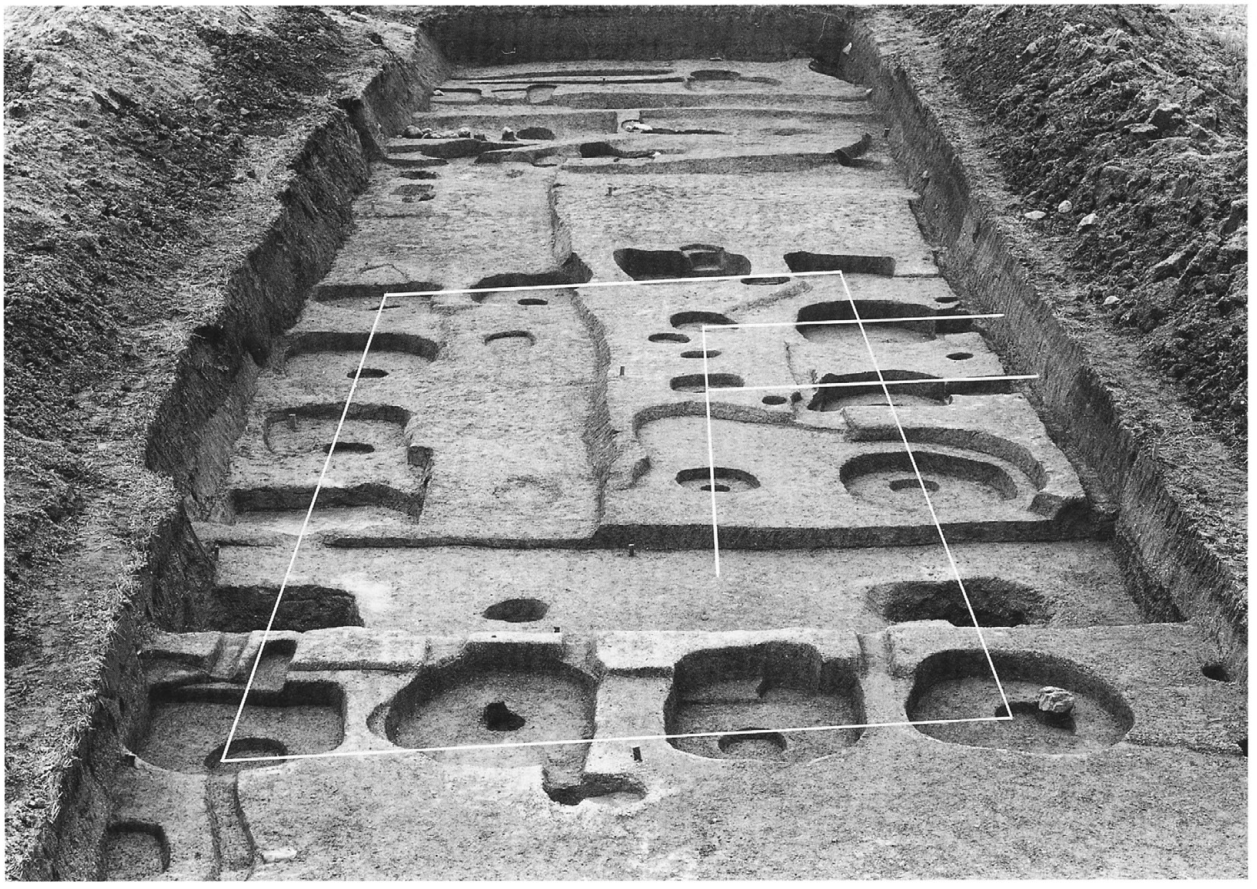
ＳＡ1052（南から）

ＳＢ1105（東から）

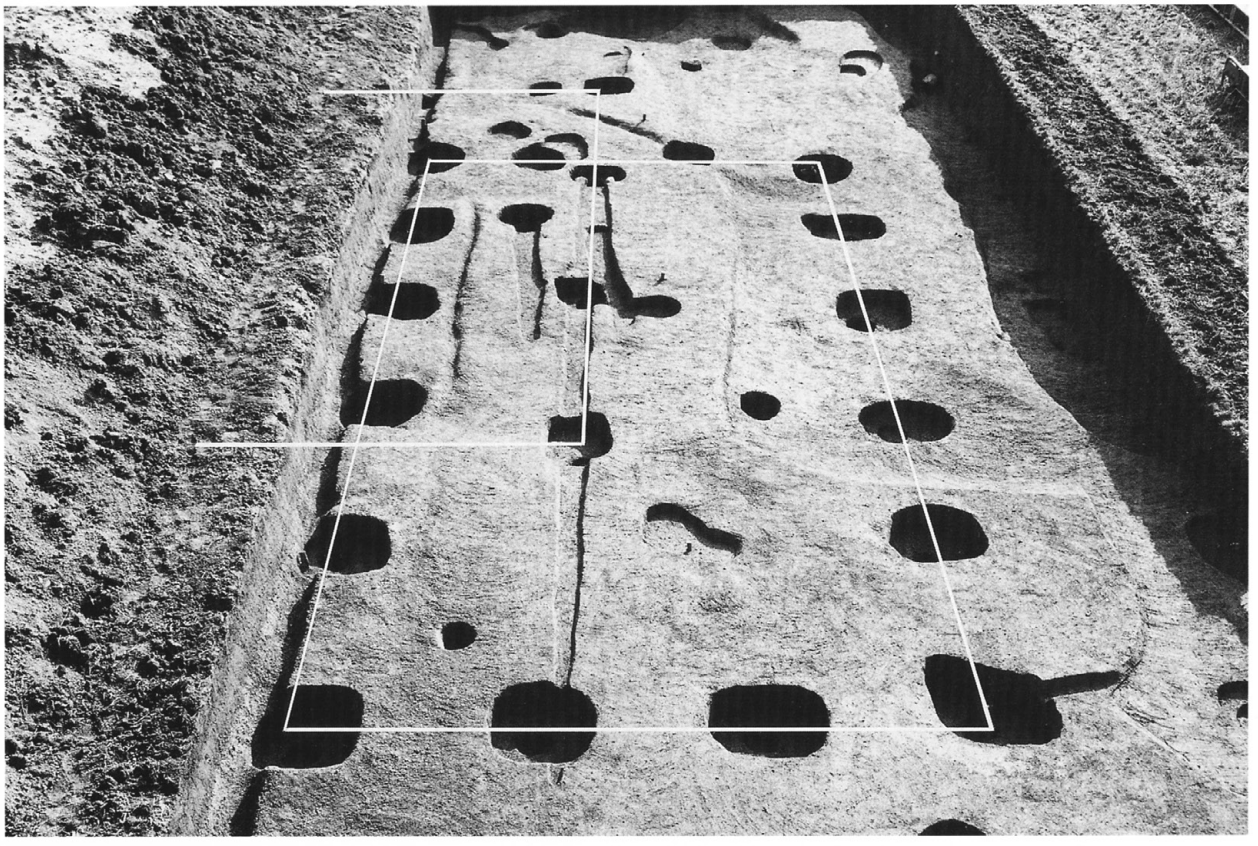


ＳＢ1020・1022（東北から：航空写真）

ＰＬ10　柘植川北部・国町地区

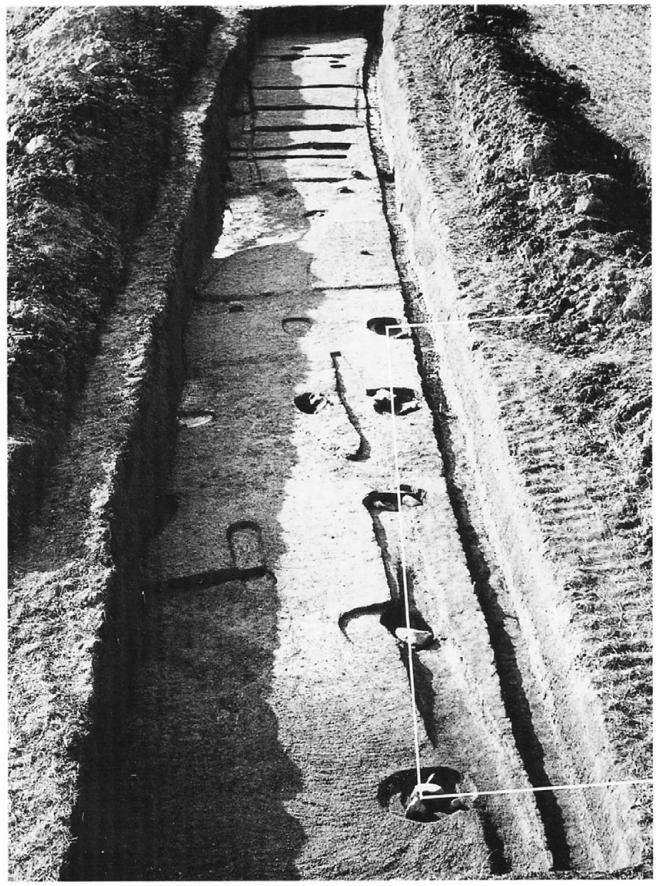


ＳＢ1020・1021（北から）

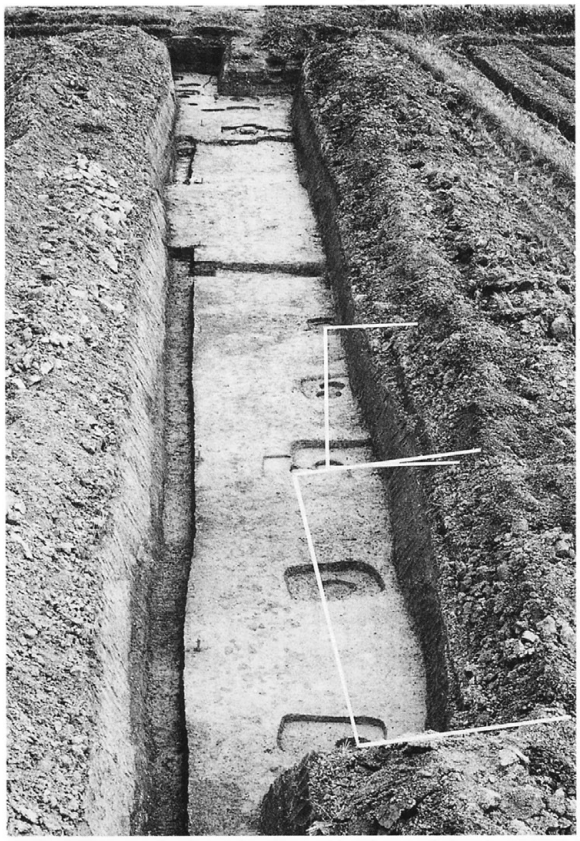


ＳＢ1015・1016（北から）

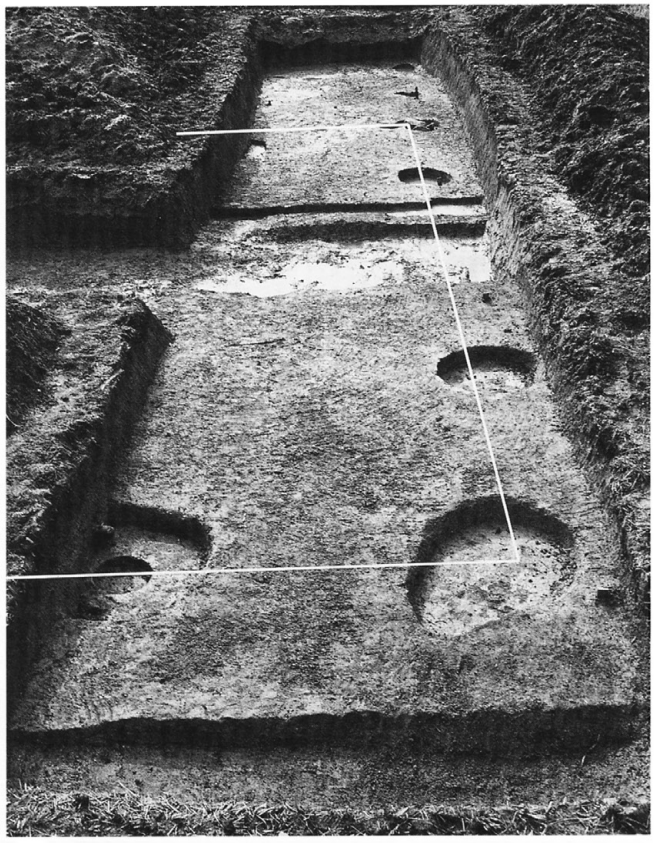
ＳＢ1001（北から）



ＳＢ1100（東から）



ＳＢ1093・1094（西から）



ＳＢ1047（北から）

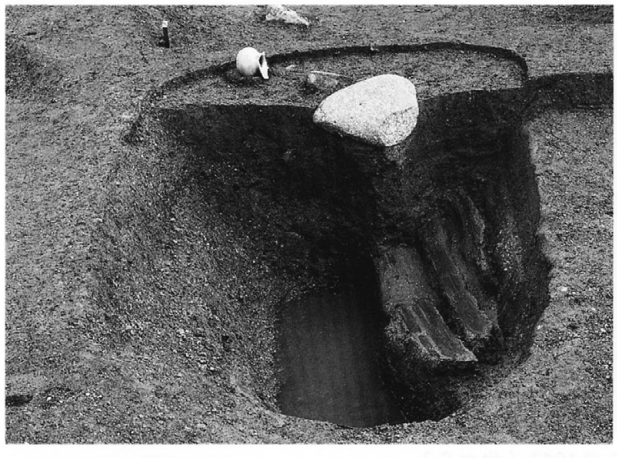
ＰＬ12　柘植川北部・国町地区

Ｄ５－９西調査区（北から）

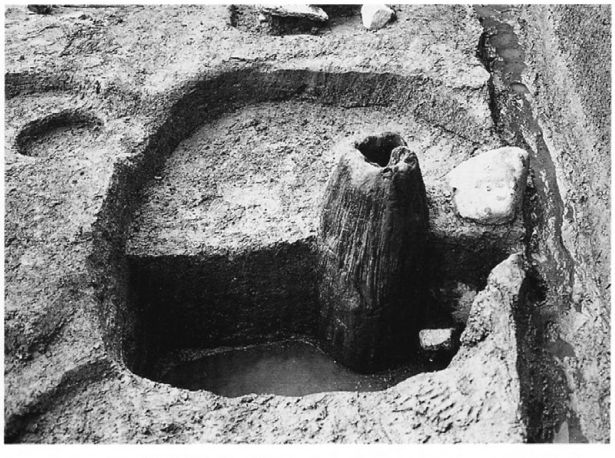
ＳＤ1079（北から）

Ｄ５－３調査区（西から）

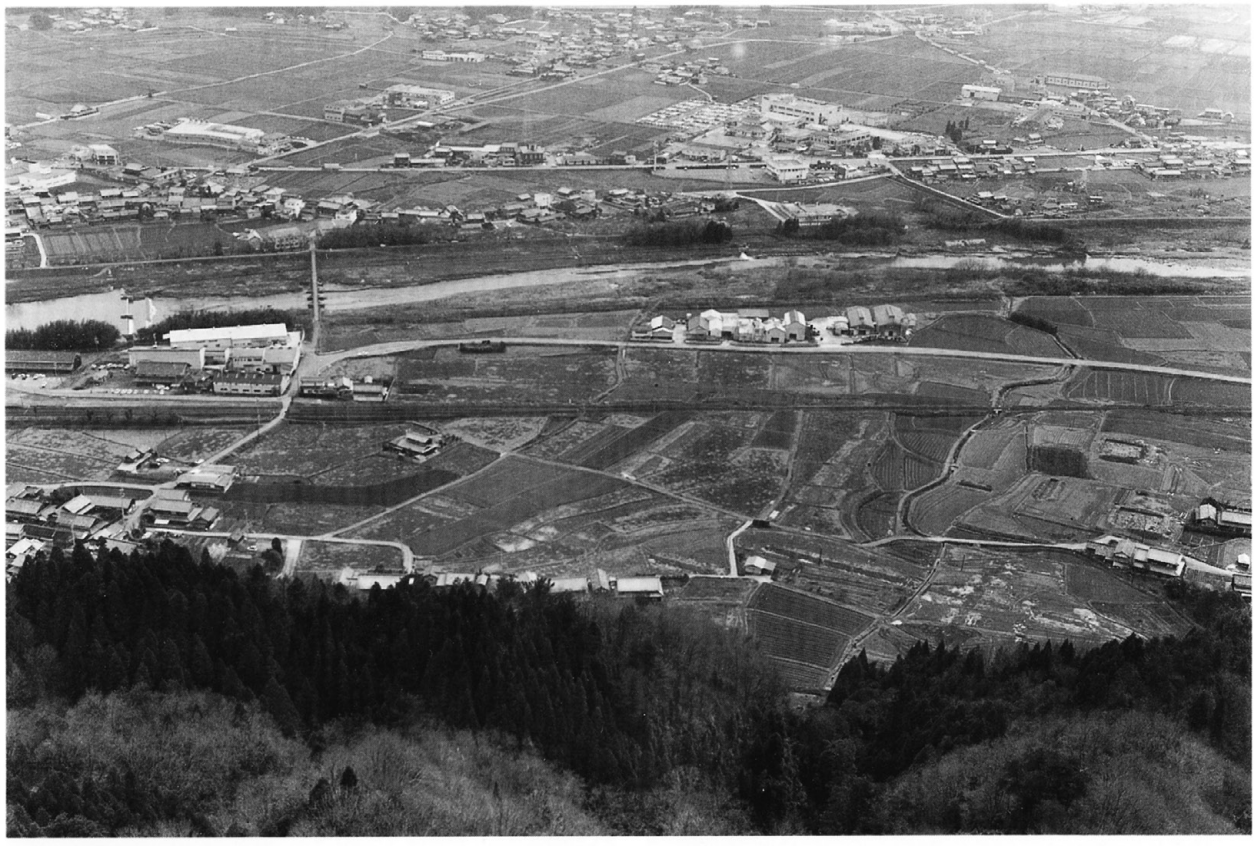
ＳＤ1080（南から）



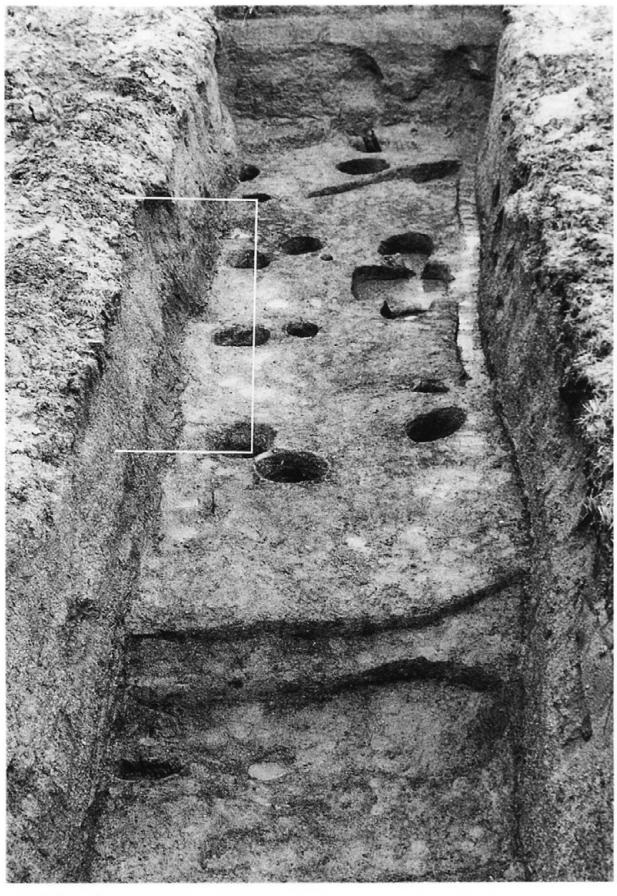
ＳＫ1030（西から）



ＳＢ1084柱穴断割（西から）



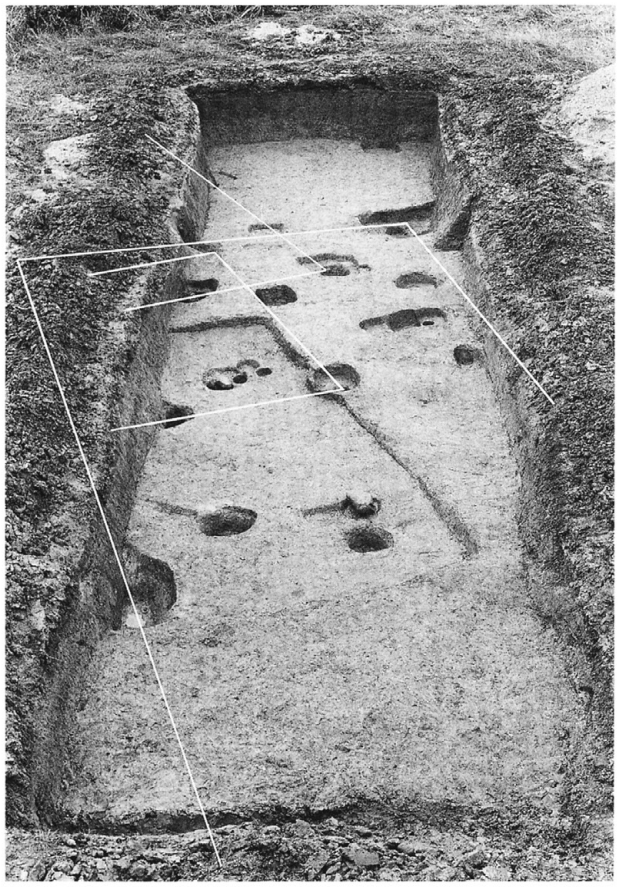
追越地区　航空写真（北から）



岩坂地区ＳＢ１（西から）

追越地区ＳＤ４（北から）

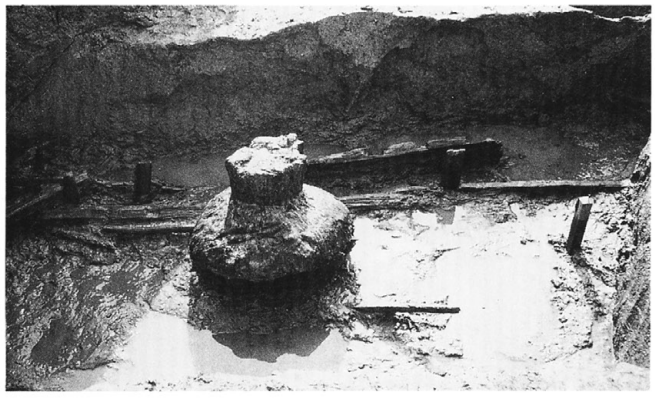
ＰＬ14　柘植川北部・追越地区



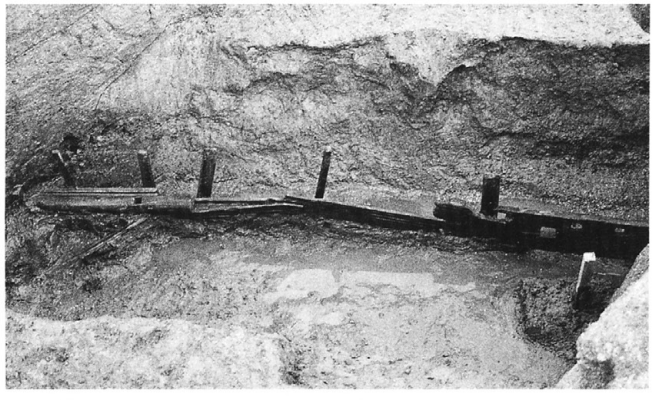
ＳＨ９・ＳＢ10～12（北から）

ＳＢ６（北から）

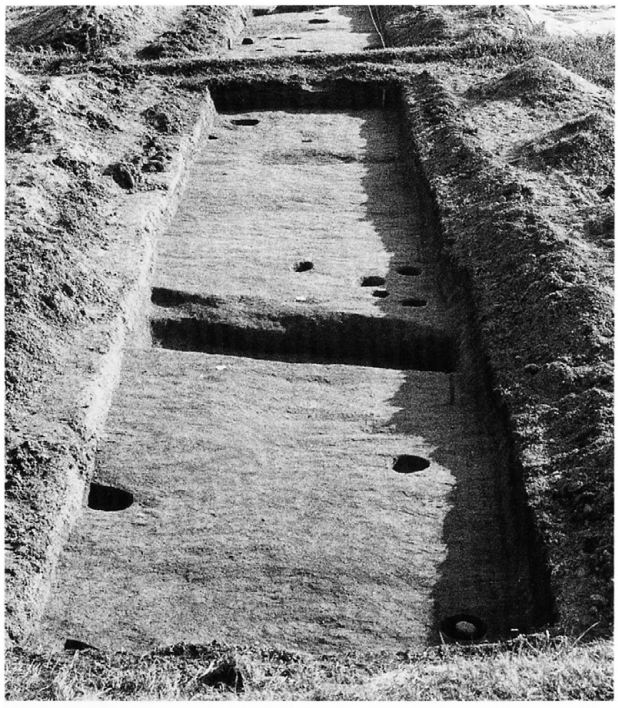
ＳＤ８（南から）



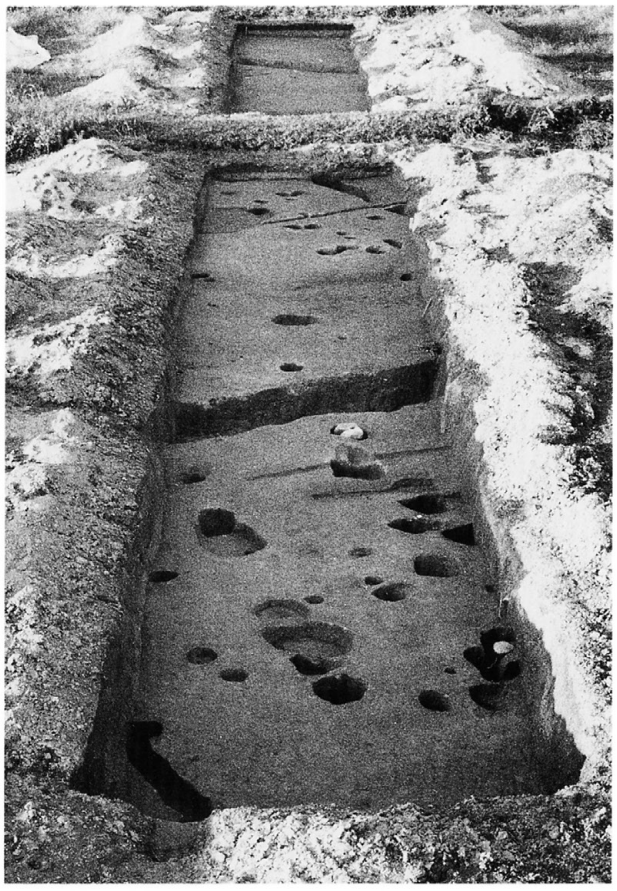
ＳＤ８木製遺物出土状況（北から）



ＳＤ８矢板出土状況（北から）



ＳＤ13（北から）



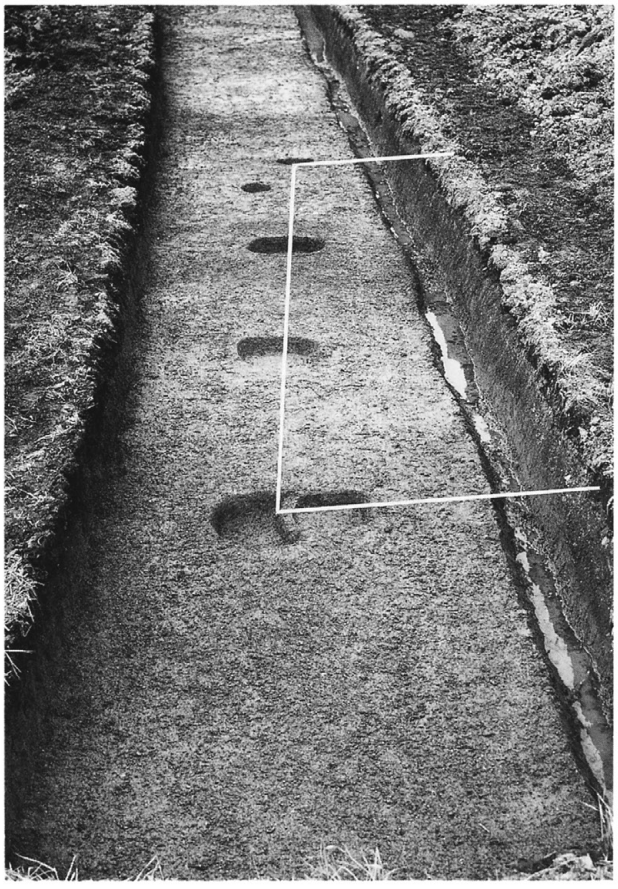
ＳＤ16（南から）

ＳＢ18（南東から）

ＳＡ27（北から）

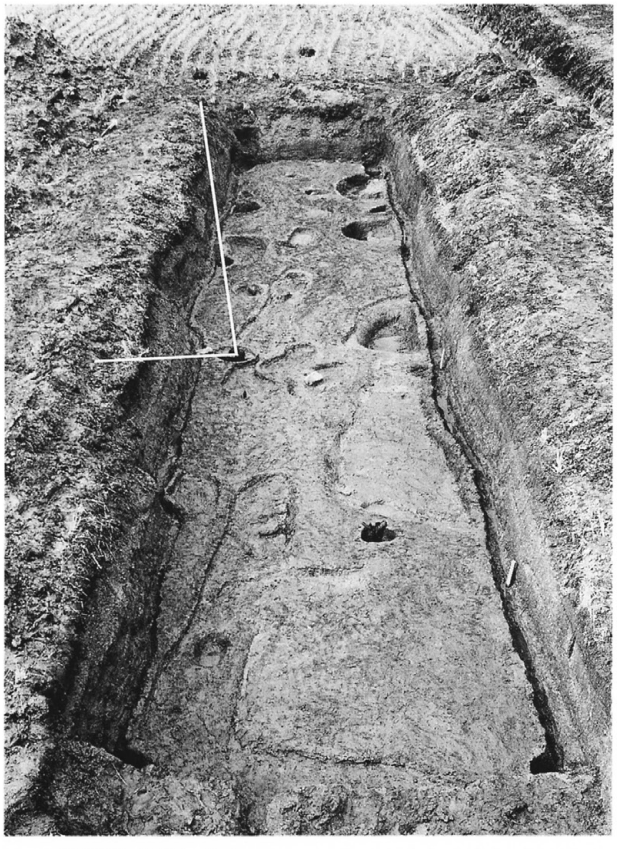
ＳＢ20（南から）

ＰＬ16　柘植川北部・前田地区

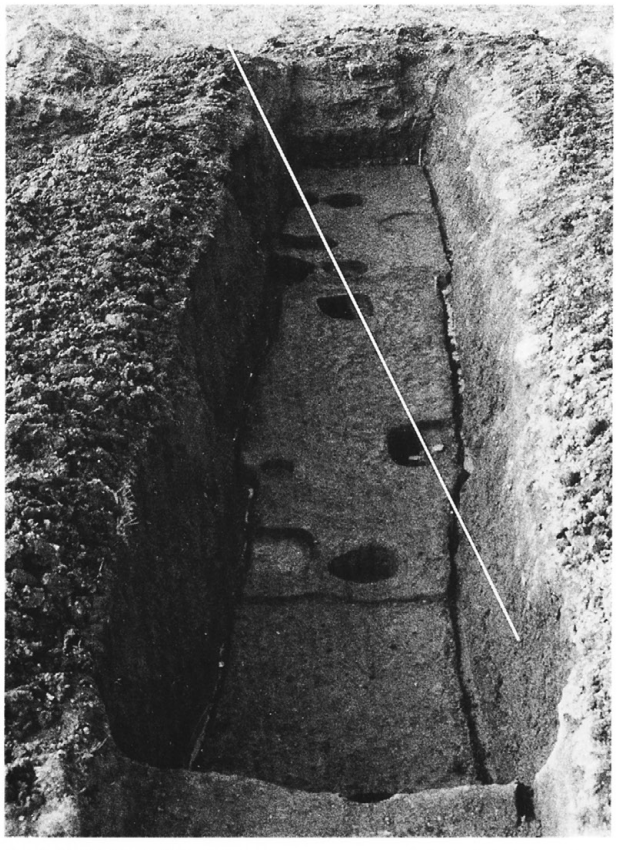


ＳＢ2001（東から）

ＳＢ2004（北から）



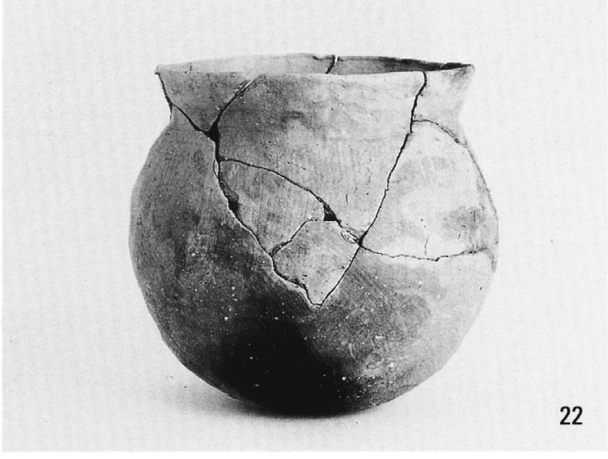
ＳＢ2015（東から）

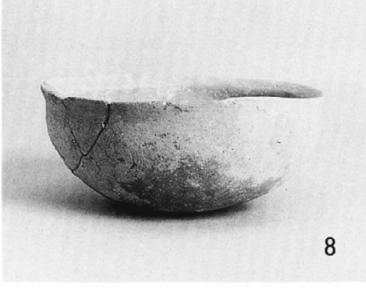


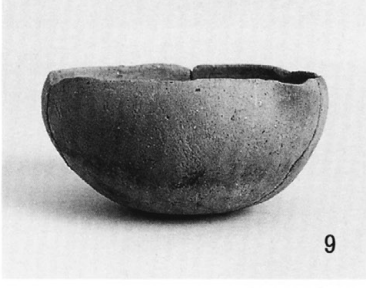
ＳＢ2022（東から）

4

21


22

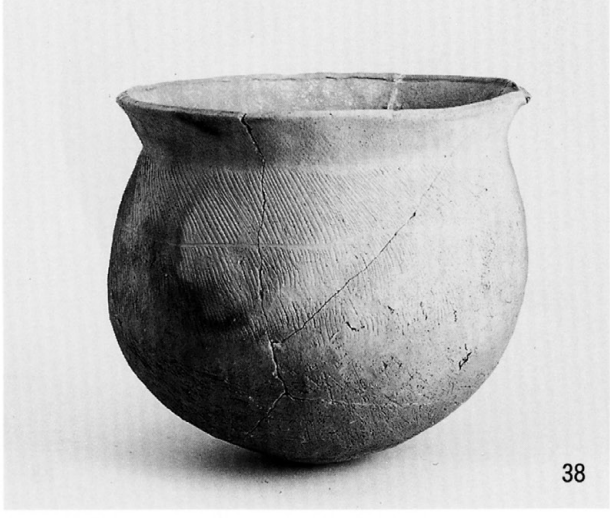

8


9

18

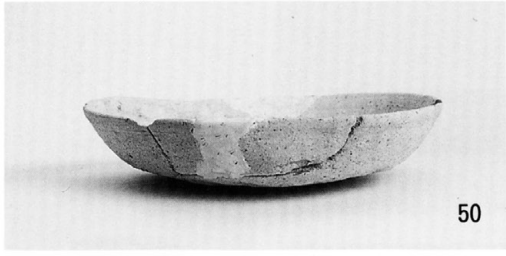
23

ＰＬ18　柘植川北部・遺物

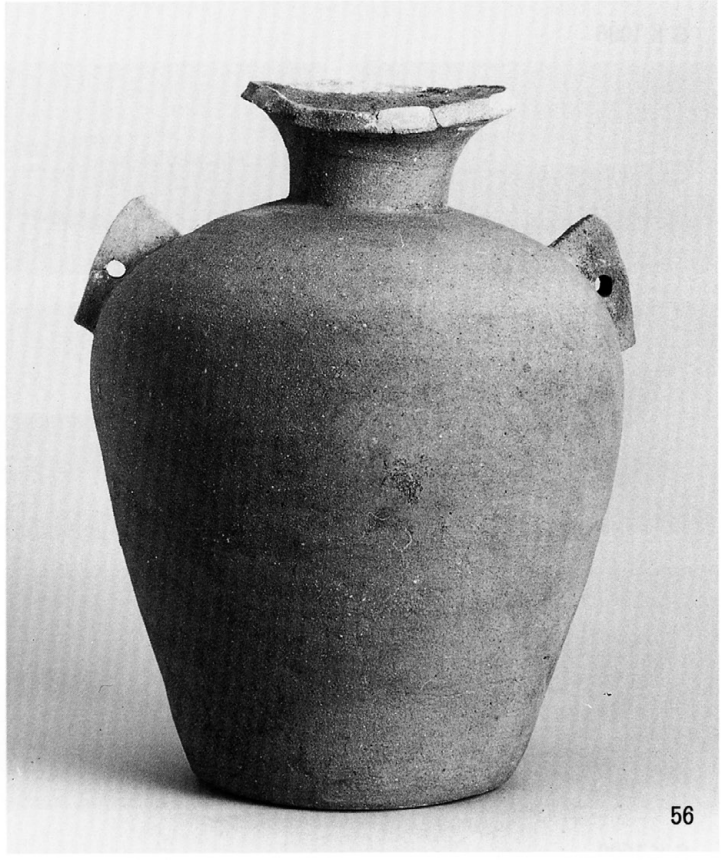


ＳＤ1010

49


50

52


56

55

57

ＳＫ1011

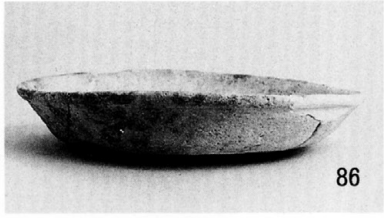
66

67

ＰＬ20　柘植川北部・遺物

ＳＫ1086

83


86

89

93

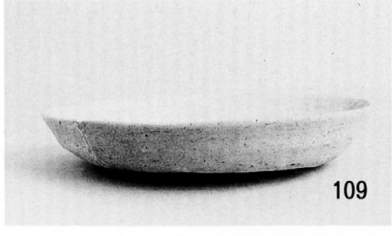
95

100

102

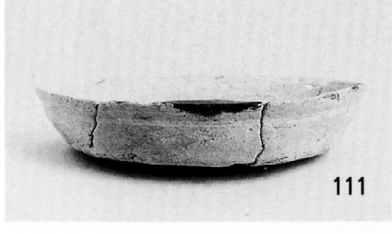
101

ＳＫ1009


109

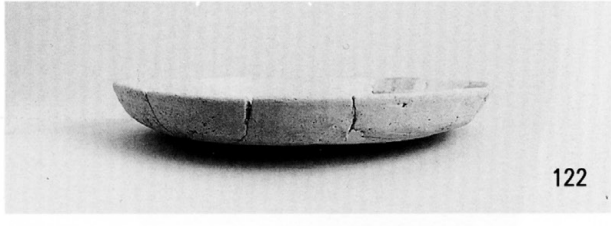
110

114

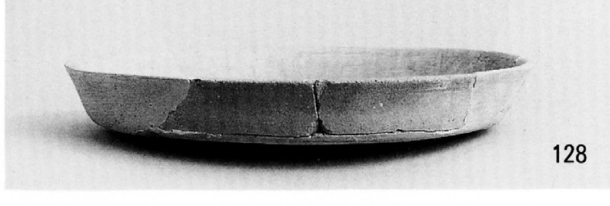

111

112

115


122

120


128

135

ＳＫ1035

144

149

157

146

154

158

147

155

167

159

163

170

160

162

173

174

176

ＳＫ1012

209

211

218

210

213

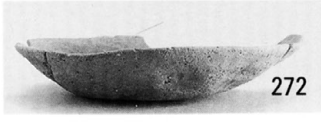
224

ＰＬ22　柘植川北部・遺物

ＳＫ1017

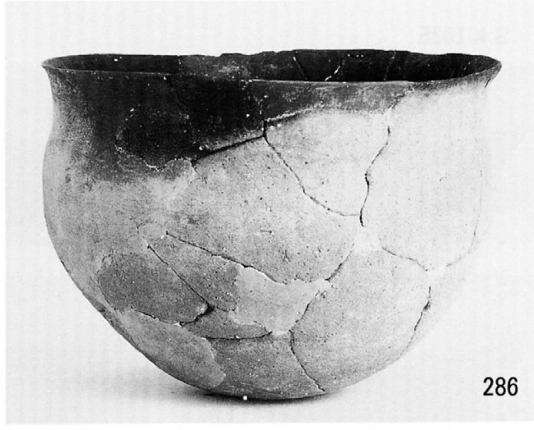
269

274


272

275

281


286

整地層

292

293

300

302

306

307

308

309

312

314

317

322

ＳＫ1054

326

329

330

332

333

335

337

338

339

345

354

355

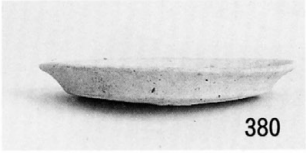
358

ＳＤ1069

371

372

ＳＫ1014


380

381

382

ＳＢ1070

384

387

390

385

388

391

386

389

ＳＢ1085

400

402

ＳＢ1071

403

406

Ｐ1078

413

414

Ｐ1074

408

410

411

412

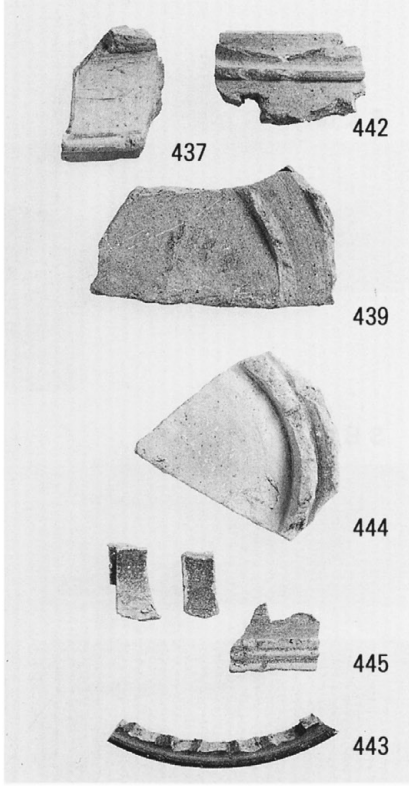
Ｐ1026

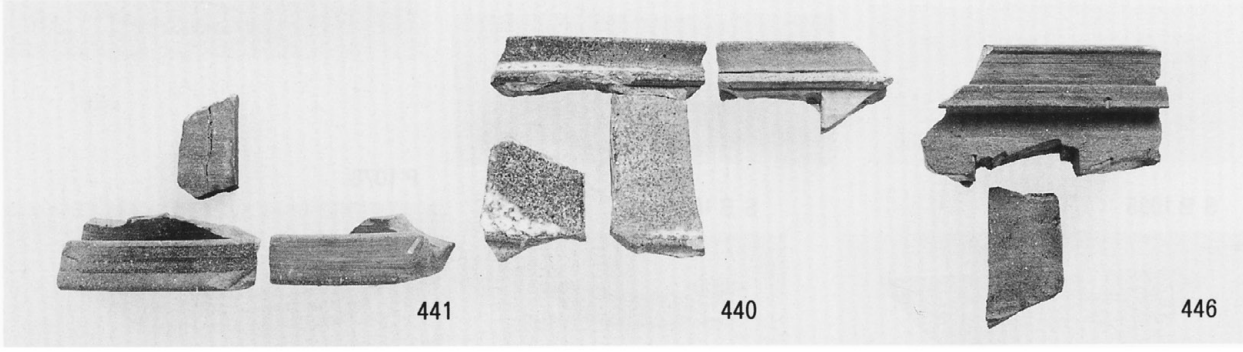
415

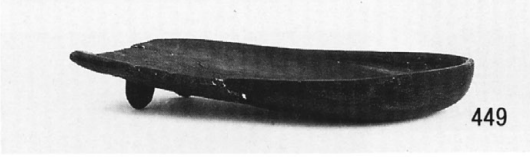
416

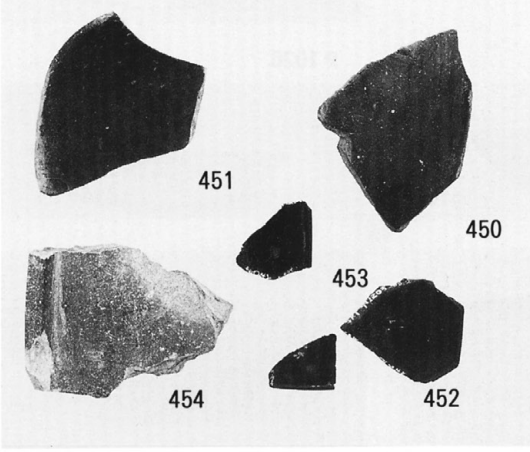
ＰＬ24　柘植川北部・遺物

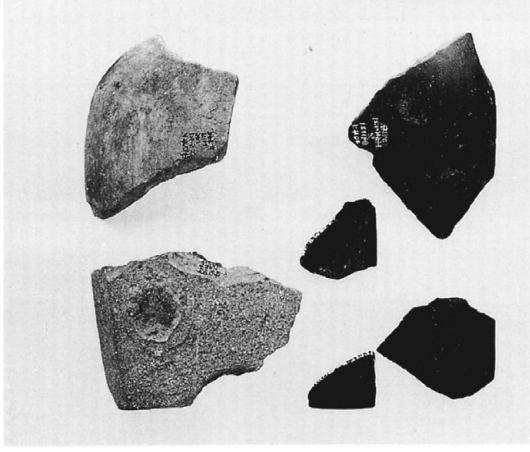
円面硯、風字硯



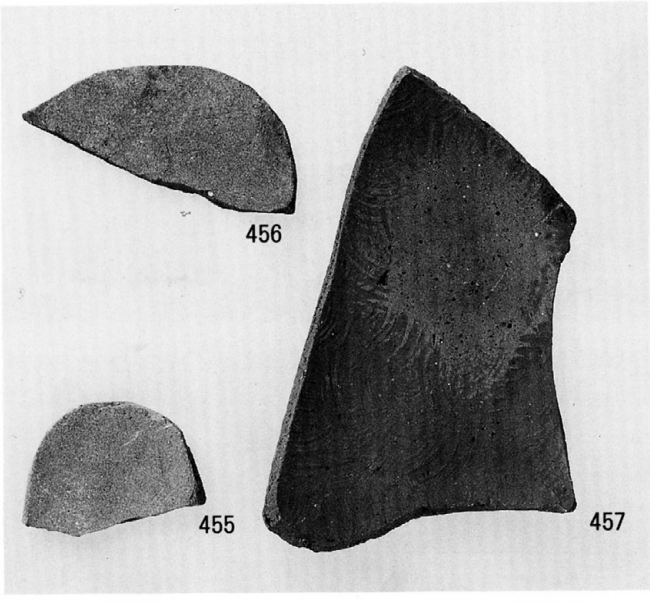


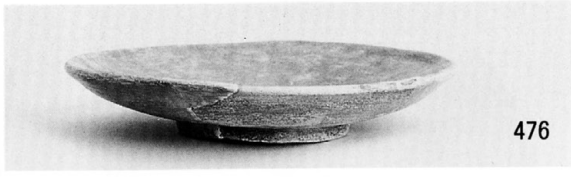


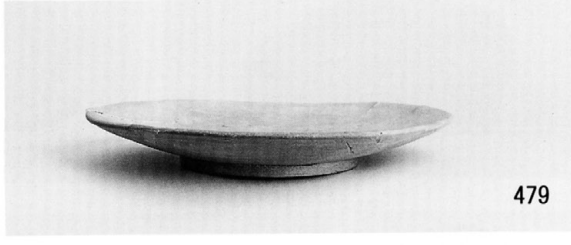


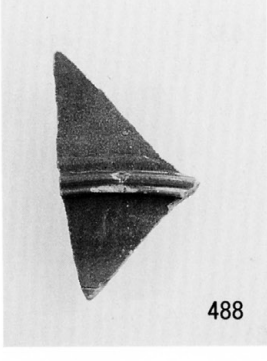


猿面硯、緑釉陶器など

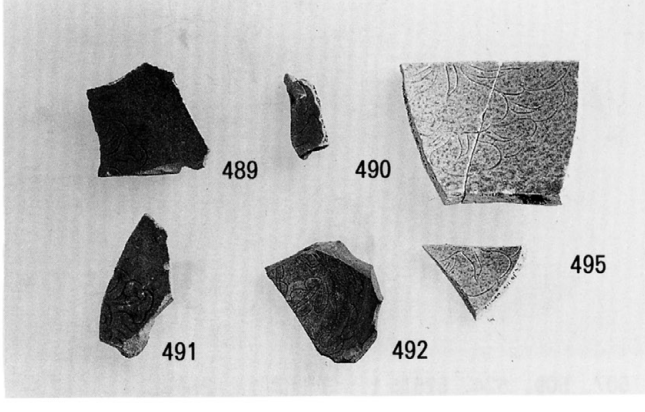






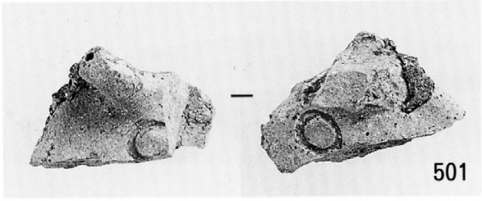


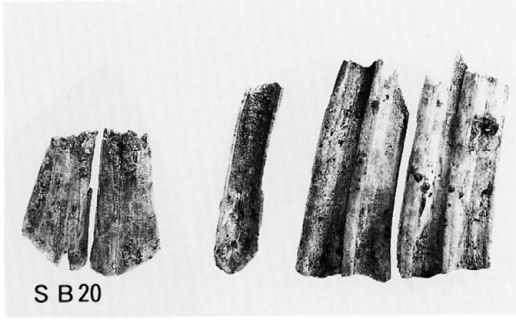
494は１：２

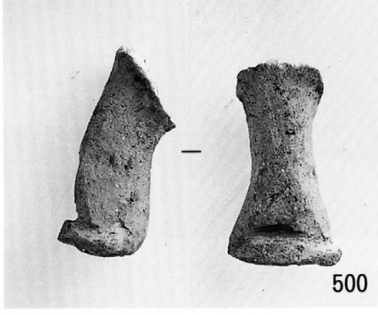


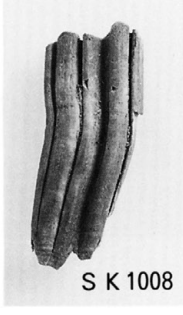
ＰＬ26　柘植川北部・遺物

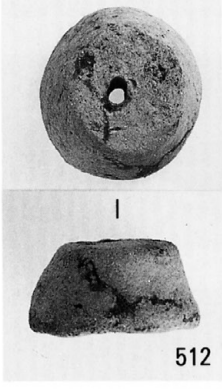
土馬、馬歯、土製品、石製品など

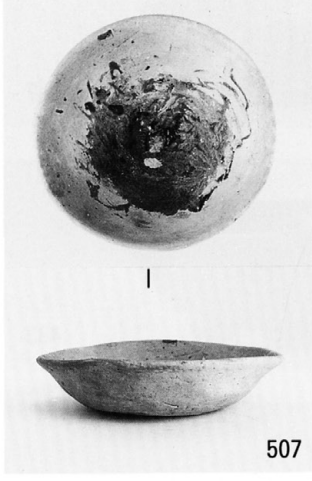


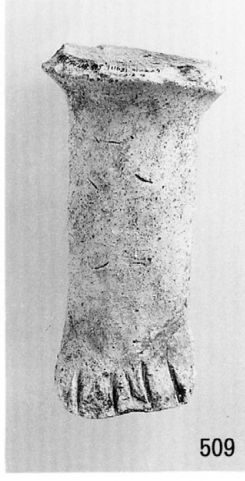


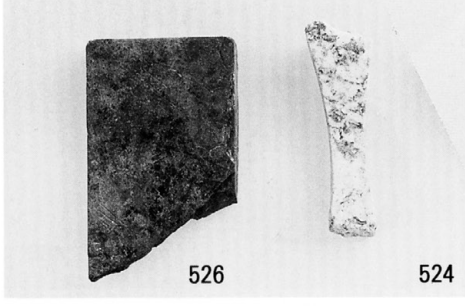


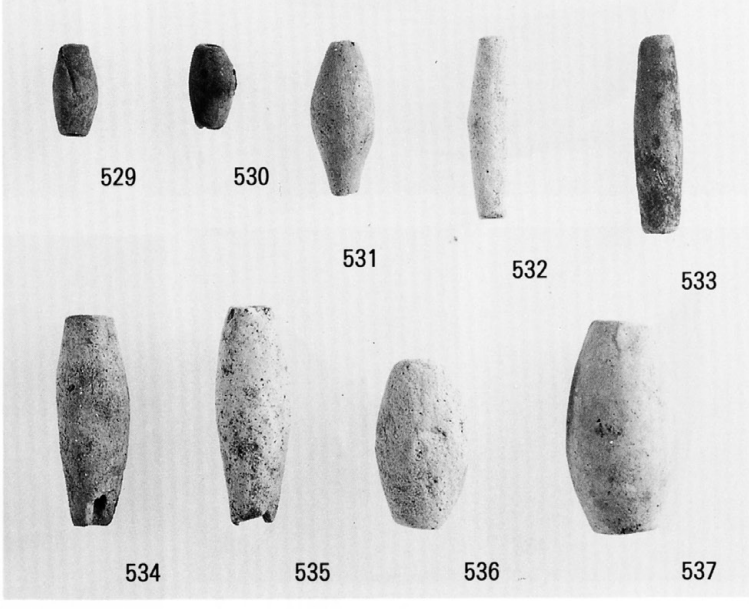






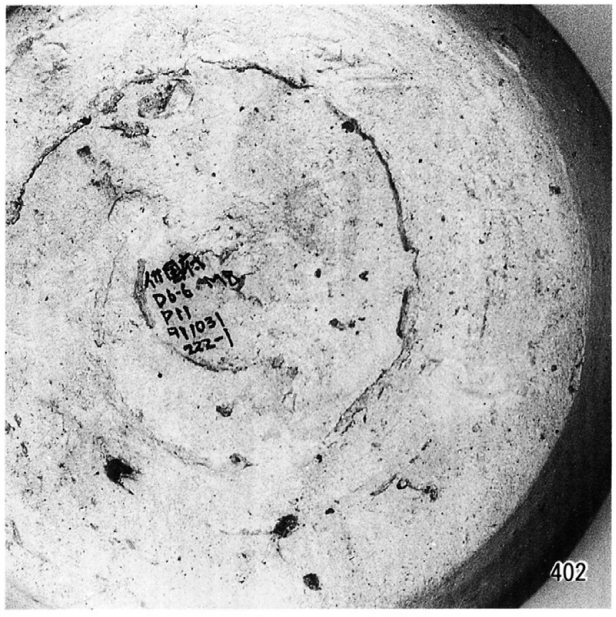


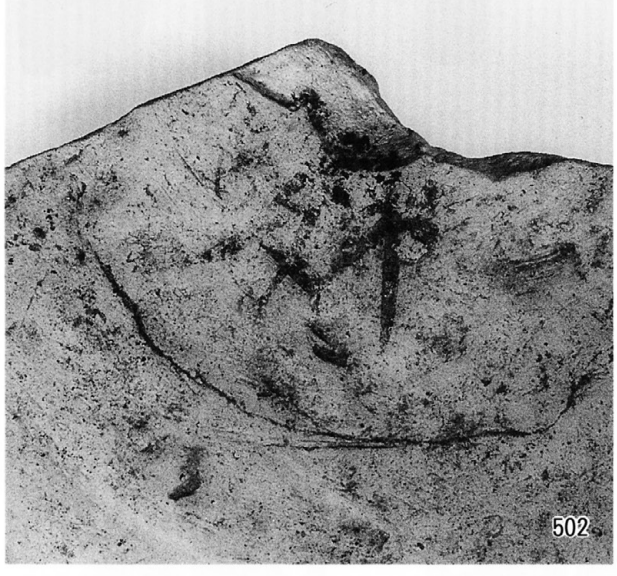


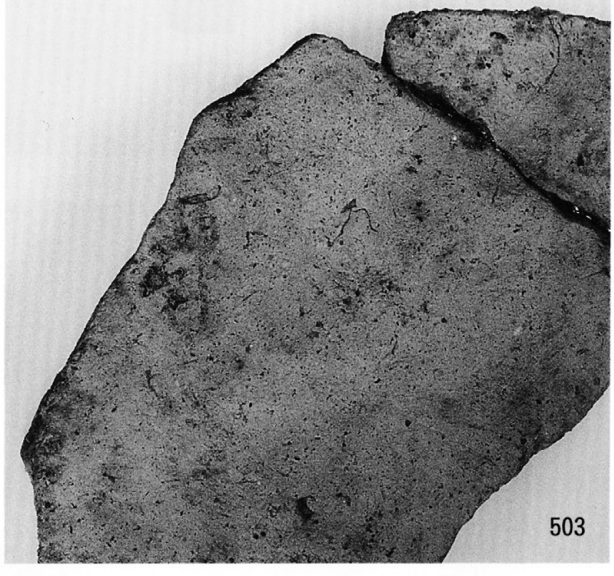


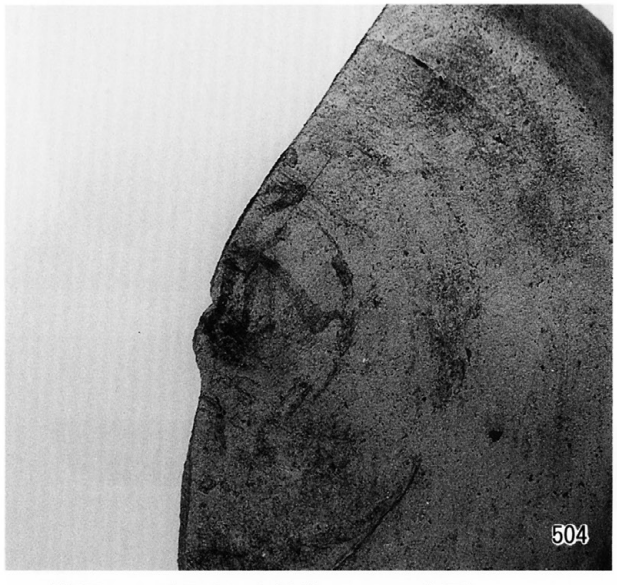
507、509、524、526は１：３他は１：２

墨書土器





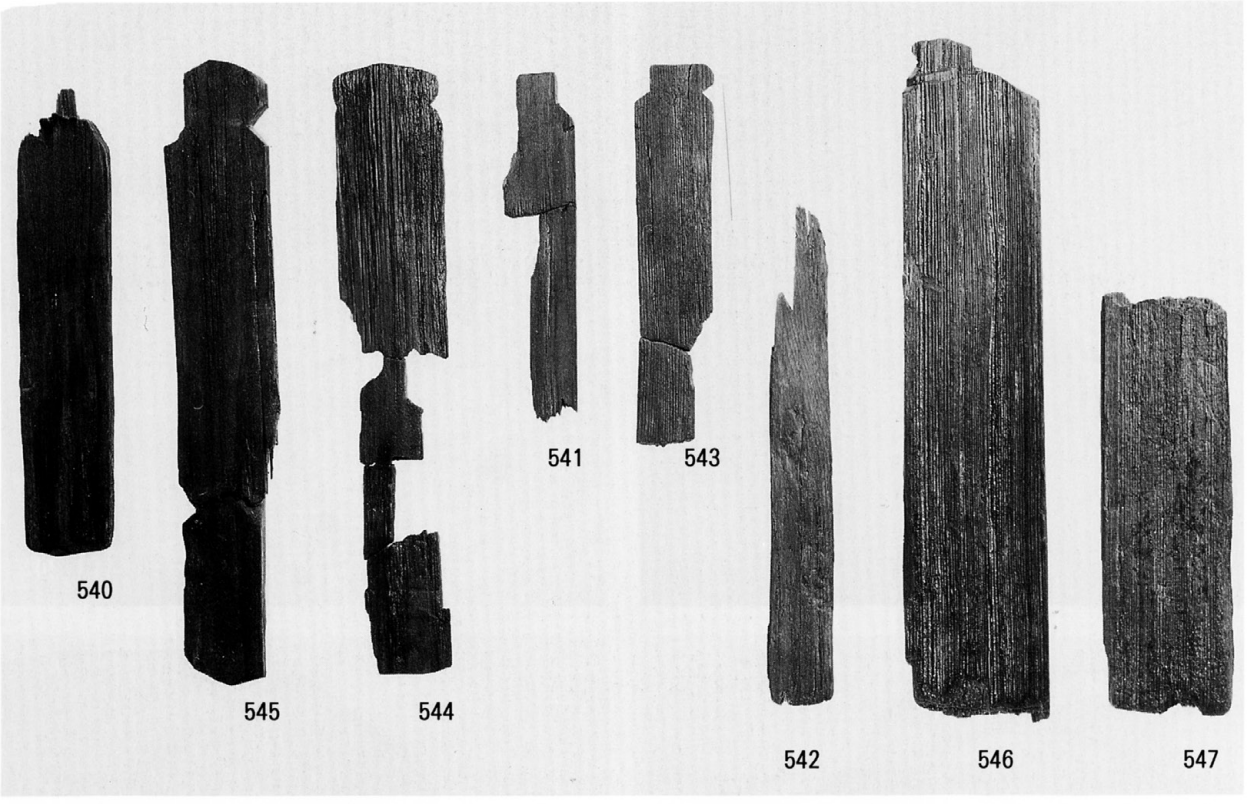


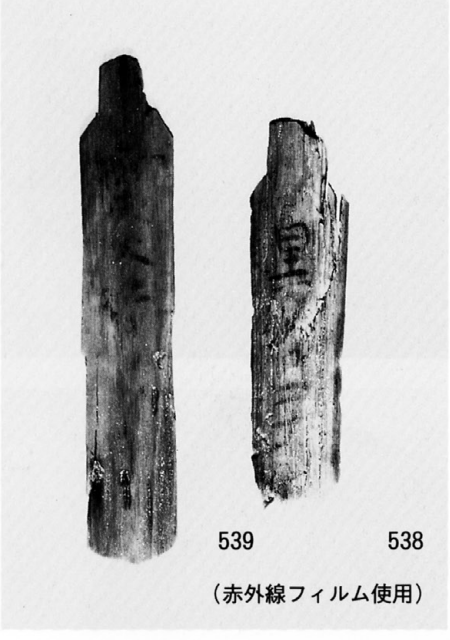


（縮尺はほぼ原寸、赤外線フィルム使用）

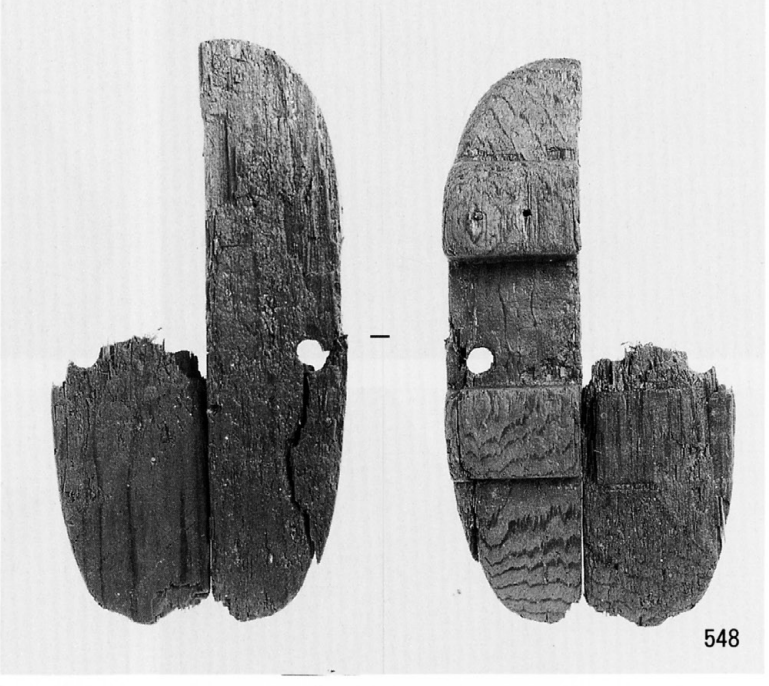
ＰＬ28　柘植川北部・遺物

木製品（木簡・下駄・曲物）





（赤外線フィルム使用）

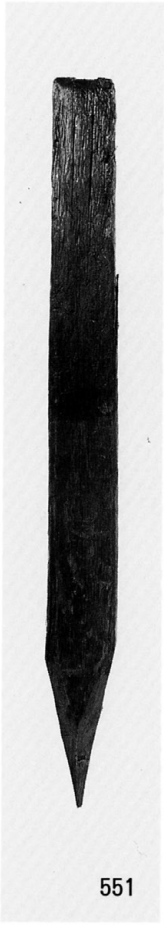


縮尺：上・中左は１：２

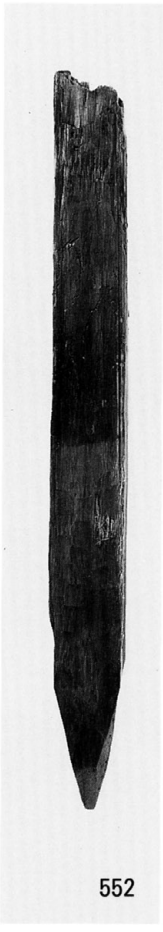
下・中右は１：３

ＳＤ８出土木製品

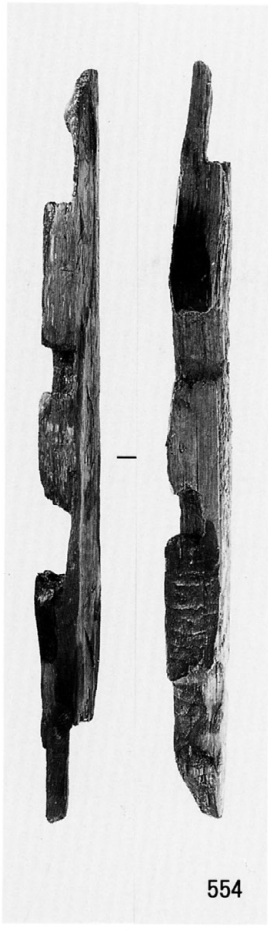
550



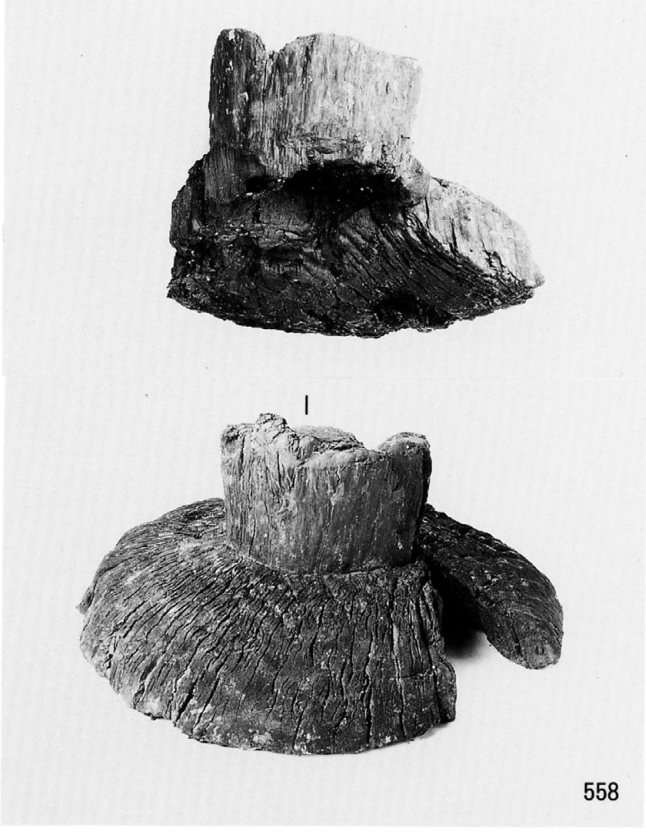
551



552



554



558

（縮尺は１：10）

報告書抄録

ふりがな	いがこくふあと
書名	伊賀国府跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	99－4
編著者名	服部久士・泉雄二
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－03　三重県多気郡明和町竹川503
発行年月日	西暦　1992年3月31日

ふりがな 収録遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
印代東方遺跡他 (イジロトウホウイセキ)	三重県上野市東条ほか (ミエケンウエノシトウジョウ)	24206	0950	34度 47分 00秒	136度 09分 10秒	19881001～ 19890113 19891002～ 19891222	5,000 2,030	県営ほ場整備事業に伴う発掘調査
伊賀国府跡 (イガコクフアト)	三重県上野市坂之下字国町・前田・追越・岩坂 (ミエケンウエノシサカノシタアザクニマチ・マエダ・オイコシ・イワサカ)	24206	0938	34度 48分 00秒	136度 09分 30秒	19891002～ 19891222 19900905～ 19910208 19911014～ 19920226	570 3,000 3,000	県営ほ場整備事業に伴う発掘調査

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
印代東方遺跡他	集落	弥生時代後期～古墳時代 中世	竪穴住居、土抗、溝、ピット	弥生土器、須恵器、土師器、木製品	伊賀国府が置かれていたという説が有力であったが、弥生・古墳時代と中世の遺構が中心であることが判明。
伊賀国府跡	集落	弥生時代	溝(1)	弥生土器	弥生時代と古墳時代の遺構は主に東の追越地区で検出。
		古墳時代から飛鳥時代	竪穴住居(1)、溝(4)、掘立柱建物(9)	須恵器、土師器、木製品、石製品	
	官衙	奈良時代後半～平安時代初	掘立柱建物(10)・塀(2) 溝(4)、土抗(2)	須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、瓦、円面硯、風字硯（黒色土器・灰釉陶器）猿面硯、転用硯、緑釉陶器、二彩陶器、灰釉陶器、土馬、墨書土器、土錘、製塩土器、木製品	伊賀国府の政庁を国町地区で確認。在続時期は奈良時代後半から平安時代後期。
		平安時代前期	掘立柱建物(9)・塀(2) 溝(7)、土抗(11)		
		平安時代中期	掘立柱建物(6) 溝(8)、土抗(12)		
		平安時代後期	掘立柱建物(3) 溝(8)、土抗(7)		

三重県埋蔵文化財調査報告　99－4

伊賀国府跡（第4次）発掘調査報告

1992年3月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　光出版印刷株式会社

国町地区遺構平面図（1：200）